

983-cD72h-Nm



*00238815 *

ドストイエフスキイ

白痴

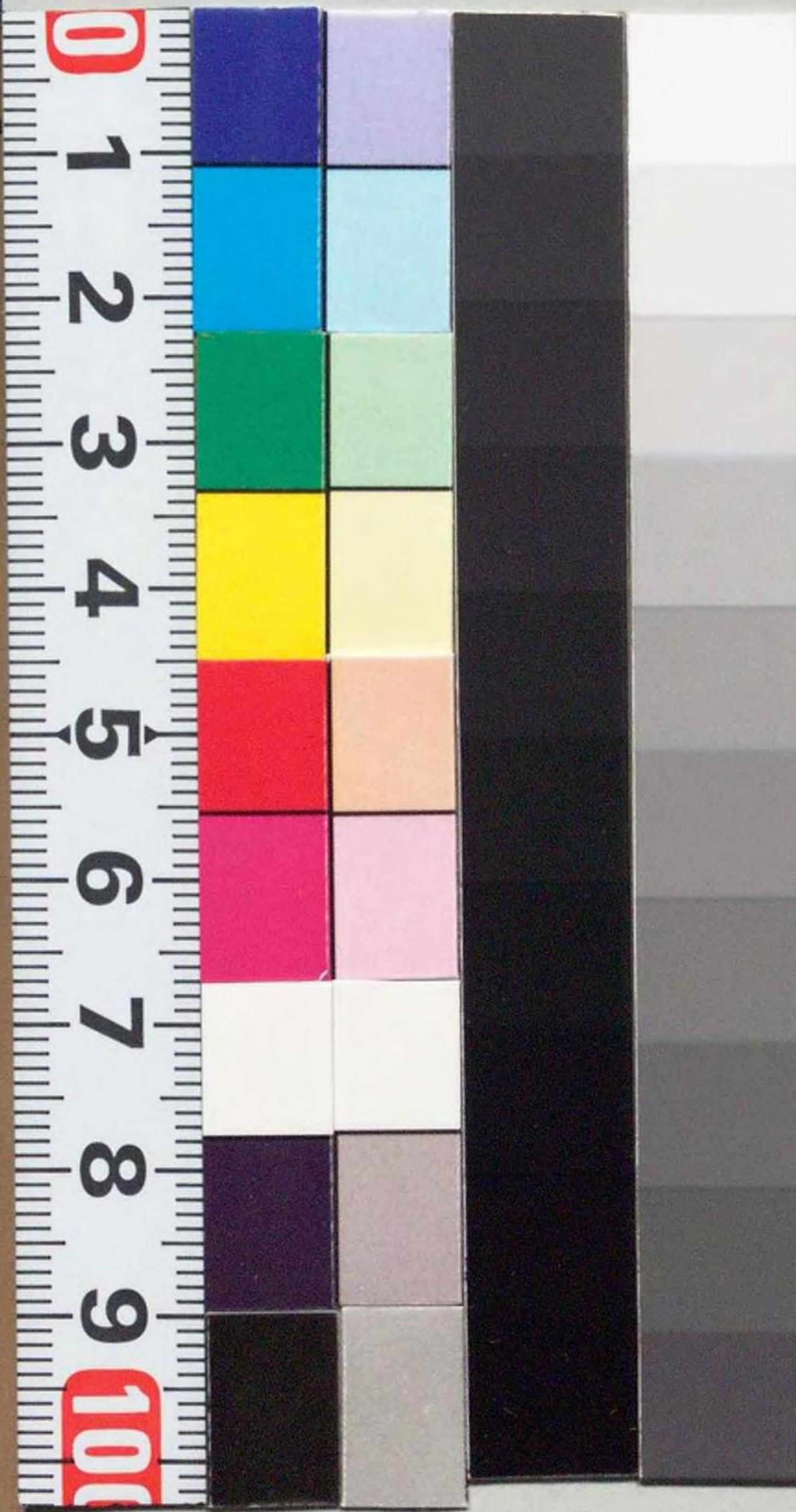
★★★★

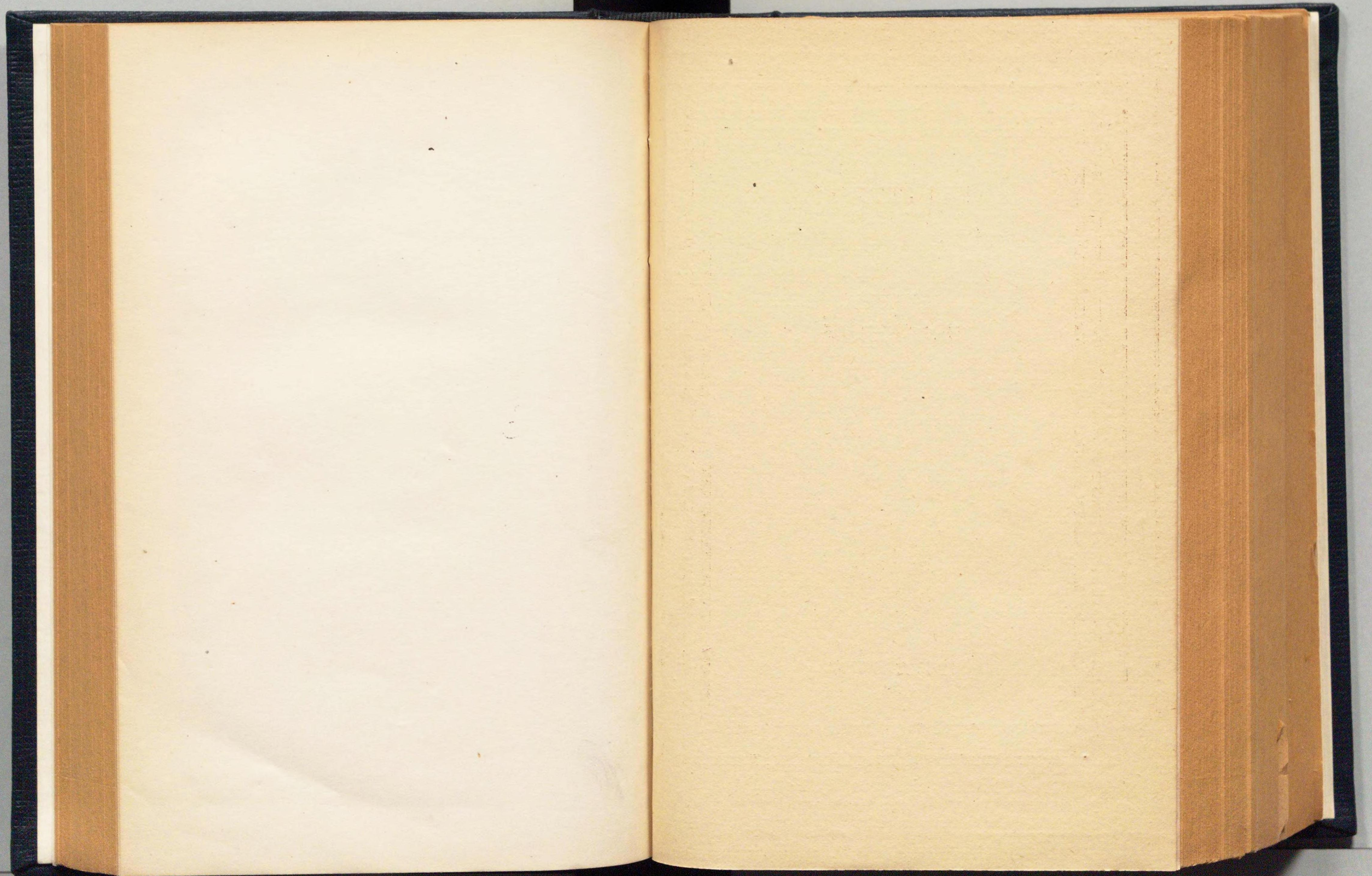
中山省三郎譯

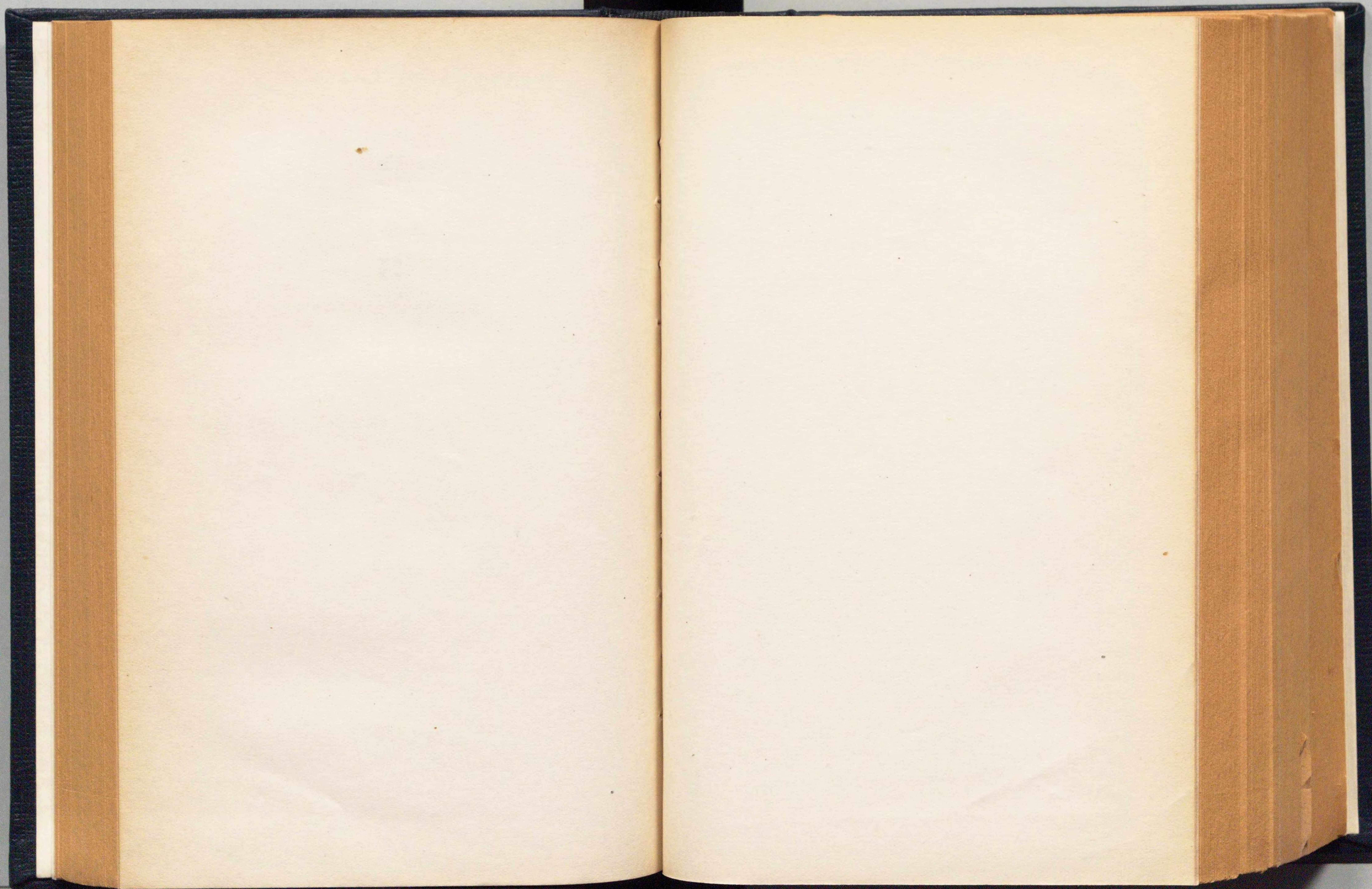


世界文學選書

89







白

痴

★★

★★

ドストイェフスキイ作

中山省三郎譯

白痴

第四卷



世界文學選書

89

三笠書房

The Title:

“ИДИОТЪ”

The Author:

ДОСТОЕВСКИЙ

The Date:

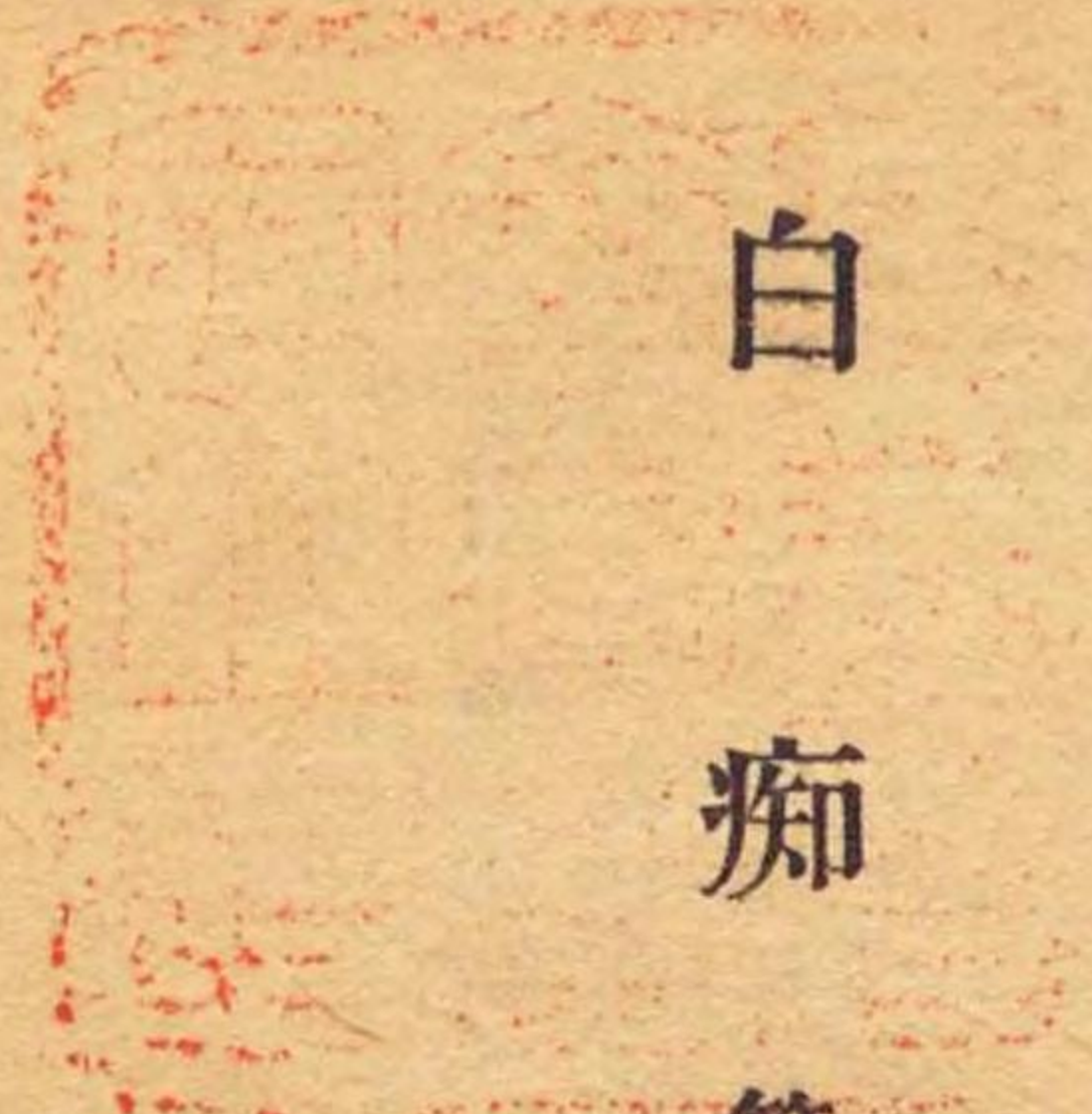
1868

9830D72hNm

白

痴

第四卷



238815



この小説の二人の人物が、縁いろのベンチであいびきしてこのかた、一週間はど經つた。或るうららかな朝の十時半ごろ、知り合ひの誰かのところへ訪問に出かけたワルワラ・アルダリオ・ブチーツイナは、ひどく悲しげに物思いに沈んで、家に歸つて來た。

世には、一般に餘すところなく、最も典型的で特色のあるところを、言い切ることのむずかしい人たちがあつたものである。これは普通に、『普通』人とか『大多數』とか呼ばれていて、事實においては凡ゆる社會の絶對多數を成している人たちである。作家というものは概して、その小説や物語において、社會の典型をとらえて、それを生き生きと、藝術的に再現しようと努めるものである。——その典型を、全くそのままに、現實において見ることは極めて稀れである。にも拘わらず、それは殆んど現實そのものよりは、つと現實的なものである。ポドカリヨ・シンはその典型的な點においては、

*ポドカリヨ・シンの『結婚』の主人公。(讀者註)

か、或いは誰か知らむ、蜜月の後どころか、結婚の翌くる日にさへも。

さて、これ以上眞面目な議論にわたるのを避けて、ここにはただ、——現實においては、人物の典型的な性質が恰も水で薄められているかのやうに、そうして、かようなジョルジ・ダンダンも、ポドカリヨ・シンの悉く現實に存在しているが、いささか稀薄な状態にあるかのやうに思われる——ということを言つておきたい。結局、説明を完璧ならしめるために、モリエールが創つたそのままのジョルジ・ダンダンは、稀れにはあるが、やはり現實の世界に見つけられるものであるというのを断つておいて、雑誌の評論めいて來たこの考察を終ることしよう。それにしても、われわれの前に依然として、疑問は残つてゐる、すなわち、小説家は平凡な、あくまでも『普通』の人たちを、どんな風に取扱つたらよいか、また、いかにして、かような人たちのいささかなりとも興味のあるやうに讀者の前に示して見せるか? という問題である。小説において、彼らを素通りしてしまふということは絶對に不可能なことである、というのは、平凡な人間はつねに、大抵の場合に、浮世の出來事を引き出すとき、必要欲くべからざる絆となるからである。従つて、彼らを見ずしては、眞實らしさを失ふことになる。小説を、典型的な性格や、或いはまた單に興味のために、奇怪な、架空の人物のみによつて充たすのは嘘らしくもなり、しかも恐らくは、面白くもなくなるであらう。われわれの見るところでは作家にとつては平凡人の間にさへも、興味のある、教訓的な

恐らくは誇張でさへもあるかも知れぬ、しかしながら、決して架空の人物ではないのである。いかばかり多くの聰明な人たちが、ゴゴリによつて、ポドカリヨ・シンのことを知るに及んで、自分たちの氣立てのよい知り合ひや友だちの何十人、何百人がポドカリヨ・シンの酷似していることに氣づきだしたことであらう。彼らは、ゴゴリ以前にすでに氣づき友だちがポドカリヨ・シンのやうな人間であるとは、承知していたもので、こゝろいふ名前を持つていようとは、未だに知らなかつたのである。事實において、花婿が結婚式の前に、窓から飛び出すなどということは、滅多にあるものではない。といふのは、ほかのことはどうあろうとも、むしろ厄介なことだからである。それにしても、多くの花婿は、たとえ立派な聰明な人たちであらうとも、結婚の間に吐の底では、潔くポドカリヨ・シンのことを自認していることであらう。

また、あらゆる良人がどこへ行つても、*"Tu l'as voulu, Georges Dandin"* (君のお望みどおりだよ、) と叫ぶとは限らないであらう。ああ、しかし、蜜月のこの心からの叫びは、全世界の良人によつて幾百萬遍、幾千萬遍くり返されたこと*ジョルジ・ダンダンの『モリエールのジョルジ・ダンダン』に出づ。(讀者註)

ニュアンスをさがし求めることが必要である。たとへば、あの種の平凡な人物の本質が、日頃の、相も變らぬ凡庸性に含まれてゐる時とか、更に進んでは、このやうな人物がいかなる犠牲を拂つても日常性や舊套を破ろうと異常な努力を傾注してゐるのにもかかわらず、しかもなお依然として相も變らず元の木阿彌になるといふやうな時、かような人物は一種の獨自な、典型的性質を帯びてくる。つまり、これは、獨自性をうるだけのいささかの素質もないのに、全く自分自身たることを欲せず、いかなることがあろうとも獨自な、獨創的なものたろうとする凡庸性に等しいものである。

かような『普通の』、すなわち、平凡な人間の部類に、今まで(正直にいうと)讀者にあまりはつきりと説明はしてゐないこの小説の二三の人物も屬するものである。ワルワラ・アルダリオ・ブチーツイナ、その夫のブチーツイン氏その兄のガヴリーラ・アルダリオ・キッチ・(イヴォルギン)等がすなわちそれである。事實において、例えは、裕福で、家柄も相當で、風采も悪くなく、教育も低くなく、馬鹿でもなく、むしろ氣だての好い方でありながら、全く何らの才能もなく、これという特質もなく、奇行さえもなくただ一つの自身の思想もなく、全く『十人並』の人間であるくらい忌々しいことはない。財産はある。しかし、ロスタイルドの富には比ぶべくもない。家柄はきちんとしているが、未だ會て名をあげたやうな人は一人もない。風采も相當なものではあるが、至つて表情に乏しい。教育もかなりにありながら、使い道が分からない。

分別はあるが、自分自身の思想をもつていない。情はあるが、鷹揚なところがなく、等々、萬事がこの調子である。こういう人たちは、實に夥しく、むしろ想像しているよりは遙かに多いのである。彼らは凡ゆる人々と同じように主として二つの種類に大別される。一つは偏狭で、一つはこれよりは『ずつと聰明である。』前者は後者よりは幸福である。偏狭な平凡人にとつては、例えば自分こそ非凡な獨創的人間であると思ひこんで、何らの動搖もなしにそれを快よしとするほど樂なことではない。この國の令嬢たちの或る者には斷髪をして、青い眼鏡をかけて、ニヒリストと名乗りさえすれば、すぐに自分自身の『信念』を得たと信ずることができるのである。また或る者は、心の中に何か人類共通の善良な氣持を、ほんの露ほこでも感ずれば、社會發展の先頭に立つていようという感じは自分以外の人には分かるまいと、すぐに思ひ込んでしまふ。また、何かの思想をほんの一寸でも聞きかじるとか、何かの本の一面でもほんの一寸めくつて見るとかすれば、もうこれは『自分自身』の思想であつて、まぎれもなく、自分自身の頭のなかに生れたのだと早速、信じてしまふ。若しもこんなことがいえるものならば、無邪氣の圖々しさというものは、かような場合に、驚ろくべき程度に達する。こんなことはみな有りそうにもないことではあるが、絶えず自撃する事實である。この無邪氣の圖々しさ、この愚かしい人間の自己および自己の才能に對する思ひ過ごしは、ゴッゴリによつてピロゴフ中尉なる驚嘆すべき典型のうちに見事に表現され

ピロゴフ中尉……ゴッゴリの『無邪氣の圖々しさ』の中の人物。(譯者註)

やはり、『ずつと聰明な』人間の部類に入る。とはいへ、この部類は前にも述べたように、第一の方よりは遙かに不幸である。それはつまり、こつこつと譯である。聰明な普通人は、たとえ一寸の間、(おそろくは一生涯をも)自分を非常に獨創的な、天分のある人間と想像するようないふことがある。しかし、心の中に懷疑の蟲がひそんでいて、それが、どうするかすると、聰明な人間を絶望のどん底にまでも突きおとす。また、たとえ、それを諦めたとしても、心の奥に追ひ込まれている虚榮心に毒されてしまつていふ。それにしても、とにかく、私は極端な例を取りすぎたようである。この『聰明』な部類の大多數は、かような悲劇には遭わないでしまふ。せいぜい、死んでもいい年ごろになつて、多少とも肝臓を悪くするくらいのものである。しかも、やはり、諦めて、おとなしくなるまでには、かような人たちは非常に永いあいだ、若い時から相當の年輩に至るまで、時おり、實に馬鹿な眞似をつづけたりするものである。が、それというのも、全く獨創的たるうとする欲望から來るものである。また、奇妙な場合もある。中には、獨創を欲するために、潔白な人で、わざわざ下劣なことを敢えてしようとする者がある。ところが、そんなことをする不幸な人のなかには、ただ單に正直なばかりではなく、善良でさえもあり、自分の家庭では神のように崇められ、自分の勞苦によつて、自分の家族ばかりではなく、他人の生活までも與えてやつて、しかも、どうであらう、一生涯、心の安まる暇もない人がいる。本人にとつては、自分

ている。ピロゴフは自分が天才であり、あらゆる天才より以上のものであると思ひ込んで、疑いさえもしなかつた。そんなことがあつて、問題にならないほど信じ切つていた。尤も、問題などというものは、彼にとつては全く存在してないものである。偉大なる作家はついに、讀者の侮辱された道徳感情を満足せしむるために、彼をひどい目に合わせなければならなかつたが、この偉大な人物がただ身ぶるいをして、拷問に疲れた身體に勢いをつけるためにパイをべろりと平げたのを見ると、ひどく呆れて、手をひろげたまま、讀者の思ひのままに任せたのであつた。私はゴッゴリが偉大な人間ピロゴフをかような低い位置から取り上げたことをつねに残念に思つていふ。というのは、ピロゴフはあくまでも自惚れの強い人間であつて、彼には、自分が年とともに肩章の『筋』がふえて偉くなり、例えば、元帥にでもなるくらいのものであるというように想像することは、いとまたやすいことである。空想するだけではなく、將官に昇進する以上、元帥になれないという法があるか? と、そんなことは疑いもしなかつた筈だからである。こつこつと連中のいかばかりの多くの者が後に戰場に臨んで、怖るべき失敗をなしていることであるか? また、こつこつとしたピロゴフがこの國の文學者や傳道師の間に、どんなに多くいたことであらう。私は『いた』といつたが、しかも、勿論、今もなお『いる』のである……

この小説の人物ガヴリーラ・アルダリオ・キッチ・イヴォルギンは、今のところはちがつた種類に屬している。彼は頭

安心にもならず、慰藉にもならず、かえつてこの考えが心をいらいらさせたりするのである。そうして、『ああ、自分あつた!』こんなことが足手まといになつて、火藥の發見を妨げたのだ! これさえなかつたなら、必らずや火藥か、亜米利加を發見したのに相違ない。何をとは、はつきりいえないが、たしかに發見したのに相違ない!』という。こつこつ諸君にあつて、最も著しい特徴は、一體、何を發見しなくてはならないのか、また何を一生涯かかつて發見しようとしていふのか、——火藥か亜米利加か、——それを一生涯のあいだに、どうしても分らないといふところにある。しかも、發見せらるべきものに對する惱みや、思慕の念は、コロムブスとかガリレオのそれにも劣らないほどのものである。ガヴリーラもすなわち、かような道を辿り始めたのであつた。しかし、ようやく始めたばかりなのである。もつと永いこと、これからも馬鹿なことをしてゆかなくてはならない自分には才能がないという深刻な、絶ゆることのない自覺と、同時にまた、自分はきわめて獨立的な人間なのだと思ひよるとする抑えがたい要求は、殆んどまだ少年の頃からひどく彼の心を傷めてついていた。彼は義望の念が強く、猛烈な欲望をもち、生まれながらにしていらいらした神經をもつていふとさえも思われる青年であつた。欲望の猛烈なものを、彼は欲望の力だと思ひがちであつた。人にぬきんでようという情熱的な欲望によつて、彼はともすれば、無分別な飛躍を敢えてしようと思ふことがあつた。ところが、いざ無分別な飛躍

に及ぼすとすると、この主人公はいつもあまりにも聰明になり過ぎて、ついに決心が鈍るのであつた。それが彼を絶望におとし入れた。恐らく、彼をこの場合に、自分が空想していたことを幾分なりとも、實現しようとしては、極度に卑劣なことさえも敢えてしようと決心したかも知れぬ。しかし、いよいよ最後の一线にまで及ぶと、つねに、あまりにも潔白に過ぎて、極端に卑劣なことなどはできそうにもなくなるのであつた(そのくせ、少しくらい卑劣なことならば、いつもやり兼ねないのであつた)。自分の家の貧困と落魄を、彼は嫌悪の情をもつて眺つていた。母に對してすらも、自分の母の信望と性格とが、今のところ彼の榮達の主なる支柱を構成しているくらいのは、自分でもよくよく分かつてながら、高慢に、侮蔑的な扱い方をしていた。

エバンチン家へ入ると、彼は早速、『どうせ卑劣なことをするならば、よくよくのところまでやるべきだ、ただ自分が得をすることならば』と獨り言をいつたが、殆んど一度として、あくまでも卑劣なことをやり通した例しなかつた。それにしても、どういふ譯で、卑劣なことを是非ともやらなければならぬと想像したものか? あの時のアグライヤの一件で、あつさり度膽を抜かれたがこれですつかり見切りをつけたわけではなく、一縷の望みをかけて、相も變らず、ずるずるにしていたのであつた、さればといつて、アグライヤが自分のような身分の低い者のところへ來ようなどとは、未だ曾つて本氣になつて考えたこともないのである。その後ナスターシヤ、ワイリッポザナと話しがあつた頃には、彼は忽

目に話をつけることができた筈なのに、はつきりと納得するに至つた。後悔の念は彼の心に喰ひ入つた。そこで彼は職務をすて、悲哀と憂鬱とに沈むばかりであつた。

彼は父や母も一しよにブチーツインのところに居候をしていたがブチーツインのことを明けすけに侮蔑していた。尤も彼は同時に、ブチーツインの忠言を聴き容れて、いつも殆んどこちらから忠言を求めるほど抜け目ない人間であつた。ガブリラ・アルダリオノキッチは例えばブチーツインがロスチャイルドのような金満家になろうとも心がけず、それを目的ともしていないというように、これまで腹を立てていた。『どうせ高利貸なのなら、最後まで行かなけりや駄目だ。世間の奴らをうんと搾つて、奴らの膏血で金を鑄造するがいい。せいぜい氣骨を見せて、猶太の王様になることだ!』ブチーツインは内氣な、物しづかな男で、ただ微笑んでいるばかりであつた。ところが、或る時、ガーニヤにこのことを眞剣に言つて聞かせるのを必要なことだとまで考へて、彼は幾分の威厳さえも示して、實行したことがあつた。ガーニヤにむかつて、彼は、自分は決して不正なことはしていない、従つて、自分を猶太人などというのは、いわれないことだ。また、金がそんなに貴重なものであるうとも、これは自分の知つたことではない、自分は正當に、正直に、ありのままに仕事をしているのであり、ただ、『かような』業務の手先になつてゐるだけであると論證して、最後には、自分が業務の上で几帳面なために、一流の人たちにも、善い意味でよく知られ、自分の業務もいよいよ擴張しつつあると言つた。「ロスチャ

ちに、一切を獲得するものは——金の力によると想像したりした。

『どうせ卑劣なことをするならば、あくまでもやることだ。』と彼は得意になつて、しかも幾分の恐怖を交えながら、毎日のように心の中で繰り返していた。『どうせ卑劣のことをするならば、よくよくのところまでやることだ。』と絶えず自分に言い含めて、『こんな時に俗人どもはびくびくするが、おれたちは決してびくびくなどはない!』

アグライヤを失い、そのほか色んな事情に打ちのめされて彼はすつかり意氣沮喪して、あの氣のちがつた男が氣のちがつた女のところへ持つて行つて、その女があのととき自分の前へ叩きつけた金を、ほんとうに彼は公爵の手許へ届けてやつた。公爵にこの金を返したことを、後になつて彼は幾百遍となしに、後悔した。そのくせ彼はこのことを絶えず誇つてもいたのである。が、あのとときベテルブルグに公爵が残つてゐる間の三日間というものは、彼はほんとうに泣き通したが、しかもこの三日の間に、早くも公爵に對して憎惡の念を懷くようになつていた。というのは、あれだけの金を返すということは、『誰にも思ひきつてできるとは限らない』のに、それを敢えてした彼を公爵があまりにも頼りなげに同情の眼をもつて眺めすぎたからである。しかし、自分の心の憂えも要するに、絶えず蹂躪されてゐる虚榮心にすぎないのだという、高尚な自省心が湧いて來て、彼を苦しめるのであつた。それから長いこと経つて、よくよく吟味してみて、初めて、アグライヤのような無邪氣な、風変わりな女とは、いくらでも眞實

イルドにはならない、なつたつて仕方がないから。」と彼は笑いながら附け足した。「ただ、リテイナヤ通りに家を一軒、ひよつとしたら、二軒も手に入れて、それでお仕舞にする。」「また、事によつたら、三軒買えるかも知らん!」と心の中では考へたが、決してこの空想を口に出して言うようなことはなく、ひた隠しに隠していた。自然はかような人々を心から愛撫するものである。自然は必らずや、ブチーツインに三軒ではなく、四軒の家をもつて酬んであろう。すなわち、彼はいとけない子供の頃から、決してロスチャイルドにはならないといふことをよく承知していたからである。そのかわり、四軒以上は自然が授けてはくれまい。これで、ブチーツインの立身出世も終りであらう。

ワルワラ・アルダリオノザナは、これとはまるで異なる人間であつた。彼女もやはり強い欲望は持つていたが、それは猛烈というよりは、かえつて執拗なものであつた。問題が瀬戸際に及んだときにも、彼女にはかなりの常識が見られたが、この常識は、どたん場に至るまでも、失われぬものであつた。彼女もまた獨創性というものを空想する『普通の』人間の數に洩れなかつたことは事實である、がその代り彼女は極めて早く自身には自身の獨創性というよりなもの露ほどもないことを悟つて、あまりこのことを苦にはしなかつた。しかし、誰が知ろう、これさえも自分の一種のプライドから來ているかも知れないのである。ブチーツイン氏と結婚するにあつて、彼女は非常な決斷力をもつて實際的な第一歩を踏み出した。しかも結婚するとき、『どうせ卑劣なこと

をするのならばよくよくのところまでやるべきだ。ただ自分の目的さえ通るのなら。」などは夢にさえも思わなかつた。(ガヴリーラ・アルドリオノキッチならば、こんな場合に、決してこの文句を言い忘れる筈はなく全く、彼は兄として、彼女の決心に同意を表したとき、危うく彼女の前で、この文句を言おうとしたくらいであつた。全然反対といつてもよい位で、ワルワラ・アルドリオノヴナは未来の良人が遠慮がちな、氣持のよい、先ず先ず教育があるともいえるほどの人間で、どんなことがあろうとも大それた卑劣なことなど、とてもやりそうにもないというのを、根本的に確かめてから、ようやく結婚したのであつた。少しくらいの卑劣なことは、ワルワラも些細なこととして、取り上げはしなかつた。これ式の『些細なこと』というものは誰にもつき物だからである。理想に適つた人間は、決して見あたるものではない! そのうえに、彼女は、嫁に行けば、それによつて、父母兄弟に宿の工面もできるくらいのことによく承知していた。彼女は兄の不幸を見るに忍びず、以前に家内の者が途方に暮れたことなどは棚へ上げて、兄を援助しようと思ひ立つた。プーチンとはどうかすると、友だちらしく、ガーニヤをせき立てた。勿論、役に就けといふのである。「君は何だな將軍だの、將軍の位だのを輕蔑しているが、」と彼は時をり冗談まじりにいつていた。「氣をつけろよ、『世間の人たち』はみんな、そのうちに順番が来て、結局、將軍になる。待つて見ろ、その通りになるから。」だつて、僕が將軍だの、將軍の位だのを輕蔑してゐるなんて、どうしてそんなことにな

るものであつた。ただ一つ、時として自分に氣のつくことは彼女もまた恐らく、執念深く、心のなかに自負心と、殆んど壓迫された虚榮心ともいふべきものを、かなり多く有つてゐるといふことであつた。わけても、時おり、エンパンチン家からの歸りがけには、殆んどいつものように、このことに氣がつくのであつた。

さて、彼女は、いま同家から歸つて来たところで、前にも述べたように、ひどく悲しげに沈んでゐた。この物悲しい表情のかげには、何かしら、苦々しい嘲笑的なものが覗かれた。プーチンとはパブロフスクの、埃のひどい通りに面して立つてゐる不恰好な、しかも廣々した木造の家に住んでゐた。この家は間もなく彼の手に入る筈になつていたので、彼はもう誰かに賣り拂う算段にかかつてゐた。玄關の階段を昇りながら、ワルワラは一階でただごとならぬ騒しい音のするのに耳をとめて、兄と父親とがわめいてゐる聲を聞き分けた。客間へ入つて、兄が激怒のあまり眞つ蒼になつて、殆んど自分の髪の毛を引きちぎらんばかりの勢で、部屋の中をあちこち駆けまわつてゐるのを見ると、彼女は微かに苦い顔をして、疲れたような風をして、帽子もとらずに、長椅子へどつかと腰を下ろした。若しも、一分間ほど黙つていて、どうしてそんなに走り廻つてゐるのかと訊いてやらなかつたら、兄が必らず怒り出すに相違ないといふことをワルワラは實によく呑み込んでゐるので、遂に、彼女は質問の形で、大いそぎに口を出した。「やつぱり相變らずね?」

るだろ?」とガーニヤは肚の中で、皮肉なことを考へてゐた。ワルワラは兄を援けるために、自分の活動範圍を擴めようと決心して、エンパンチン家へもぐり込んだ。これには子供の頃の思い出が、大いに與かつて力があつた。彼女も、その兄も、まだ子供であつたころ、エンパンチン家の人たちと一緒に遊んだことがあるからである。ここで斷つておくが、若しも、ワルワラ・アルドリオノヴナがエンパンチン家を訪れるにあつて、何か並々ならぬ空想を追つてゐたとしたら恐らく彼女は自ら肩を並べていた連中のところから、一舉にして脱け出したと言へるであらう。しかし、彼女の追つて行つたのは空想ではなかつた。そこには、むしろ彼女としてのかなり根本的な考慮があつた。すなわち、彼女はこの家族の性質に基礎をおいたのである。アグライヤの性質については常に倦むことなしに研究してゐた。兄とアグライヤの二人の仲を元どおりにまとめるのが、彼女の役目であつた。多分、彼女は事實において、何らかの役目を果たしてある。また、恐らくは、當てにして、例えば、餘りに兄をあてにして、兄がどんなにしても與へることのできないものを、彼に期待するやうな誤謬に陥つてゐたかも知れない。それにしても、なお彼女はエンパンチン家では、かなり巧妙に立ち廻つた。何週間もの間、兄のことはおくびにも出さずに、極めて素朴な風をして、しかも品位を失わずに、いつも非常に誠實に、眞摯な態度を保つてゐた。心の奥はどうかといふに、省みて羨しいところがなかつたので、自らを咎めなければならぬといふことは少しもなかつた。これは彼女に力を添え

「何が相變らずだ!」とガーニヤは叫んだ。「相變らずだ!」と「何が、今どんなことが起きてるかおまえらにや分かるもんか! 相變らずどころじゃないんだ! 爺は氣ちがいのようになるし……お袋はがなるし。本當だよ、ワリーヤ、お前は何て思ひ知らんけれど、おれは親仁を追ひ出すか、……それともおれがここをおん出るかするんだ。」他人の家から誰を追ひ出すこともできないのに氣がついたと見えて、彼はこう附け足した。「大目に見てやらなくちやいけないわ。」とワリーヤは眩やいた。

「何のために大目に? 誰を?」とガーニヤはいきなり立つて、「親仁の下劣な仕打をか? 駄目だ、お前はどつ思つても、おれにはとても、できない! 駄目だ、駄目だ、駄目だ! 何ちゆう體たらくだ、手前が悪いくせに、よけいに威張りかえつて。『門へ入るのがいやだから、垣を毀せ!……』なんて無理なことを言つて……何だつてお前はそんなにじつとしてゐるんだ? いつもと違ふじやないか!」

「いつもと同じだわ。」ワリーヤは不機嫌そうに答へた。

「あすこへ行つたのか?」彼は不意に訊ねた。

「ええ。」

「ちよつと、また何かどなつてゐる! なんて恥つさらしだ。それにまた、こんな時に!」

ガーニヤは更に眼を見はつて、妹をじろじろと眺めていた。

「何か探り出したか？」と彼は訊いた。
「ええ、でも、別に意外なことなんか何もないのよ。あれはみんな本當だつてことが分かつただけなの。うちの人の方がわたしたち二人よりは眼がたしかだつたわ、あの人が初めつから占つていたよりになつてしまつたわ。どこにいるかしらあの人は？」

「留守だよ、どうなつたんだ？」

「公爵が正式のお婿さんなの、話はもうすつかり決まつたんですよ。姉さんたちが聞かしてくれたの。アグライヤさんも承知ですつてさ、今じや隠し立てもしなくなつたわ、(だつて今までの家では、いつも色んなことを秘密にしてたんですものね。)アグライヤさんの結婚式はね、二人の結婚式を一度に同じ日に擧げることになつて、また延びるんですつて。ほんとに詩的だわ！ まるで詩のようだわね！ そんなに用もないのに部屋を駆け廻るよりは、結婚祝いの詩でも作つた方がしやれてるわよ。今晚、あすこへベラコンスカヤ夫人が来るつて。折よくやつて来たものね。ほかにお客さんもあるんだつて、公爵は前からの知り合いなんだそうだけど、あらためてベラコンスカヤにあの人を紹介するつて、多分、公けに披露するんでしょうよ。あの家の人たちはね、公爵がお客様のいる部屋へ入るとき、何か物をおとして、こわすとか、自分でぼつたり倒れるとか、そんなことがなければいいかと、それだけを氣づかつているの。やりかねないことだから。」

ガーニヤはかなりに注意ぶかく聞き終つた、しかし、彼に

分らないの。」

「今度はお前たち夫婦は、おれをせき立てて、勤めに出来るとかかかるとだ。堅忍不拔と意志の力だの、小さいことでもおろそかにするのだの、何のかんのと、説教するんだらう。」

そんなことは、暗で覺えてるよ。」

「この人は何か新しいことを考へてるわ。」とワーリヤは心の中を考へた。

「一體、あそこじや、どうなんだ、喜んでるのか、親たちが？」いきなりガーニヤは問いかけた。

「い、いいえ、そうじやないらしいの。尤も、あなた御自分で察しがつくでしょう。旦那様は喜んでるの、でも、お母さんは心配してるわ。前から、あの人の婿としては厭やがつたんですよ、お母さんは、知つての通り。」

「おれは、そんなことはどうでもいい。婿としては無理で、考へる方が間違つてるんだ、これはもう分かり切つたことだ。おれは今のことを訊いてるんだ。今、あすこの連中はどうなんだ？ 正式に承諾を與えたのか？」

「それわね、アグライヤさんが今まで『否』といわなかつたつて、——ただそれだけのことなの。でも、あの人としてはそれよりほかに仕方がなかつたのよ。あの人が今まで非常識なくらいに、内氣で、はにかみやだつたつてことは兄さんだつて承知してるでしょう。子供のころ、ただお客さんのところへ出たくないばかりに、戸棚のなかへもぐりこんで、中に二時間もじつとしてたことがあるじやありませんか。とこ

とつて刮目すべきこのニュースが、少しも著しい効果を與えなかつたらしいので、妹は今更ながら愕ろいた。

「まあ、いいや、分かり切つたことなんだから。」暫らく考へてから彼はこう言つた。「つまり、これで幕という譯さ！」もう、ずつと静かにはなつていたが、相變らず部屋の中をあちこち歩き廻つて、妹の顔を狡猾そりに覗きながら、彼は何となしに妙な薄ら笑いをうかべて、附け加えた。

「でも、兄さんがまるで哲學者のような氣持で聽いて下さるからいいわ。ほんとに、わたし喜んでるの。」とワーリヤはいつた。

「うん、肩の荷がおりた。とにかく、お前だけでも。」

「わたしは、とやかくいつたり、うるさい目をかけたりしないで、眞ごころから兄さんのために盡したような氣がするの。兄さんがアグライヤさんから、どんな幸福を獲たがつていたのか、そんなことは訊いたこともなかつたわ、わたし。」

「だつて、一體、おれが……アグライヤさんから幸福なんて求めたかな？」

「まあ、どうぞですから、哲學めいたことはよして頂戴！ むろん、そうだわ。むろん、わたしは、これでもう澤山だわ、二人とも馬鹿だつたんだから。正直にいうと、わたしは一度だつて、このことを眞面目にとれなかつたの。ただ『萬一』をあてにして、あの人のおかしな性質を勘定に入れながら、手を着けただけなの。そして、何よりも、兄さんを慰めてやりたかつたの……でも、九分通り駄目だつたんだわ。わたし、兄さんが何を得意と賞つていたのか、今もつて

ろがあんなの、つばになつて、今でもそつくりその儘じやないの。ねえ、わたし、どういうわけか、あの家にはほんとに何かしら大變なことがあるように思えるの。それも、あの人のだけに限つて。あの人はね、公爵がまるで天にでも昇つたようにいい機嫌でいるんだから、せめて毎日こつそりと何か物をいつてやればやれるものを、その氣持を見せたくなつて、朝から晩まで一生懸命になつて公爵のことを笑つてるんですつて……公爵はそれあ、とても滑稽なんですつて。わたし、あの家の人から聞いたの。けど、わたしもやつぱり、あの、姉さんたちから面とむかつて馬鹿にされてるような氣がしたわ。」

ガーニヤは遂に、苦い顔をして來た。恐らく、ワーリヤは兄の本心を見抜こうとして、わざわざこの問題に深入りしたのである。ところが、又もや二階から喚く聲が聞こえて來た。

「おれは親仁を追い出すんだ！」爵憤の晴れるのを喜んででもいるように、ガーニヤは吼え立てた。

「何、昨日のようになつて？ どういうことなんだ、昨日のようになつて？ 一體……」と急にガーニヤは愕然とした。

「あらまあ、兄さんは知らないの？」ワーリヤはふと氣がついて言い換えた。

「何か……それじや、親仁があすこへ行つたつてのは本當なのか？」恥かしいのと腹立たしいのとで、すつかり赧くなつ

て、ガーニヤは大きな聲でいつた。「ああ、お前はあすこから歸つて来たんじゃないか！何か嗅ぎつけて来たのか？爺はあすこへ行つたのか行つたのか？行かないのか？」

「アグライヤさんて、おかしな人だわ。」と、いきなり彼女は言い出した。「わたしを引きとめて、『御両親様に、特にわたくしから宜しくおつしやつて下さいまし。わたくし、近いうちに、必らず、あなたのお父様にお目にかかる折があるうと存じますの。』と、こういうんです。その言い方がとても眞面目くさつてるの。變に、ひどく……」

「どうしたの？まあ、どこへ行くの？」と彼女はいった。「今、お父さんを放したら、あちこちへ行つて、もつと悪いことをするわよ……」

「冷やかしたんじゃないか？冷やかしてたんぢやないのか？」

「あすこで何をしたんだ？何を言つたんだ？」

「ところが、ほんとにそうじゃないの。だから變なの。」

「だつて、あすこの人も自分から話すことはできなかったのよ、何のことだか分からなかつたんでしよう。ただお父さんはみんなびつくりさしただけなの。且那樣のところへ行つたけれど、留守だつたもんだから、奥様を呼び出してね。初めのうちは、勤めに出たいから口をさがしてくるようにと頼んだのですつて。そうかと思うと今度はわたしたちのことをよくよし始めて、わたしのことだの、うちの人のことだのわけても兄さんのことをこぼしたそりです……碌でもないことをさんざん並べて。」

「それをよく探り出しては来られなかつたのか？」ガーニヤはヒステリカルに、身ぶるいした。

「まあ、馬鹿なことを！」と、ワーリヤはすつかり腹を立てて叫んだ。「酒のうえでのいたずらじやないの、それだけのことを……」

「だつて、そんなことがどうして！お父さんも自分では、何を話したのか、ろくに分つてないらしいの。尤も事によつたら、わたしに何もかも聞かしてくれなかつたらしいの。」

「まあ、もう少し見てくれ、呑み込めるか、呑み込めないか、分かるから。」と、ガーニヤは謎めいたことを呟やいた。

「爺は泥棒で、酔つ拂い、」とガーニヤは苦々しげに言い續けた。「おれは乞食で、妹の亭主は高利貸——これだけあれば、アグライヤさんにとつて願つたり叶つたりだ！いや、申し分がない、立派なものだ！」

「まあ、あんたつて人には何も呑み込めないんだわ！」

「その妹の亭主の高利貸が、兄さんを……」

「だからねえ、兄さん、公爵は別としても、話はすつかり知れるんだわ。それにしても、今どうするつもりなの？何をあてにしているの？まだ何か當てがあつたとしたら、それがあつたために、兄さんはアグライヤさんの眼から見ると、受難者のように見えるだけのことですよ。」

「兄さんは何をそんなに怒つてる？」とワーリヤはふと気がついて、言葉をあらため、「あなたは、なんにも分らないんだわ、まるで小學生みたい。こんなことがあつたからつて、アグライヤさんに見えられなくても思つてるの？あんなのはあの人の性質を知らないんだわ。あの人は選りに選つた花婿まで振りすてて、どこかの大學生のところへ、喜び勇んで逃げて行つて、屋根裏で餓え死するくらいのことをやり兼ねない人なのよ、——これがあの人の夢なんだわ！しつかりと、プライドをもつて、この境遇を耐え忍ぶことができたら、兄さんだつて、あの人が話せる人だと思われたでしようよ。それだけのこと、あなたにはどうしても呑み込めなかつたのね。公爵があの人を釣つたのは、第一に、無理に我が物にしよつたからなの。第二に、公爵が誰の眼から見ても白痴だつたからなの。もう、あの人は公爵のことで家じゆりの者を惱ましていただけでも楽しいんですからね。」

「アグライヤさんが氣おくれするんですつて？」ワーリヤは蔑むかのように兄を見つめながら、激昂した。「けれど、あんなつて人は淺間しい根性をもつてるんですね！あんたは何の値うちもない人だわ。假りにあの人のが可笑しい變人だつたとしても、その代り、あの人は、わたしたちみんな合わせたよりも、ずつとずつと氣高い人ですよ。」

「まあ、いいよ、いいよ、そう怒るな、」と得意そうにガーニヤはまた呟やいた。

「わたしはただお母さんが可哀そうなの。」とワーリヤはつづけて、「あのお父さんの一件が、お母さんに聞こえなけりやいいかと、それが心配だわ! ああ、心配だわ」

「だつて、もう必らず聞こえてる筈だ。」とガーニヤはいつた。

ワーリヤは、二階にいる母のところへ行こうとして立ちあがりかかつたが、ふと思いとどまつて、しげしげと兄の顔を眺めた。

「だつて、誰がそんなことをいつたかしら?」

「きつとイッポリットとだろやよ。ここへ引越して来るなりすぐに、お母さんに言いつけたと思う、何よりの土産だくらくらに考えて。」

「じゃ、どうしてあの人が知つてるのか、聞かして頂戴な。公爵とレーベジェフが誰にもいわないことに決めてるし、コオリヤだつて何も知らないのだし。」

「イッポリットかえ? あれは自分で嗅ぎつけたんだ。あいつがどれくらいずるい奴だか、とても想像もつくまい。あいつは、とてもおしやべりで、悪いことだの、人聞きの悪いことなら、何ごとによらず、すぐに嗅ぎつける怖ろしい鼻をもつてるんだ。まあ、お前は本氣にするかしらないか分からんけれど、あいつはアグライヤさんまで、まんまと丸めこんでしまつたんだ! 丸めこんでないとしたら、すぐに丸めこんでるろう? ラゴージンもやはり、あいつに渡りをつけたんだ。それをどうして公爵は気がつかないんだらう? 今、あいつはおれをどれくらい探索したがつてるか分からないんだ!

「追いついてしまいなさい。」

「おれはあいつを憎んじやいなさい。が、輕蔑はしてるんだ。」とガーニヤは傲然といひ放つた。「うん、そう、そう、憎んでもいい! それでもいい!」いきなり彼は非常に激昂して叫んだ。「あいつが床の上で死にかかつてもいい、おれは面とむかつて言つてやる! 若しも、お前があいつの告白を讀もうものなら、……ああ、圖々しい打ち明け話だ! あれはピロコフ中尉、あれは目もあてられないノズドリョフだ、要する

あいつはおれを目のかたきにしてるけれどそれはもうかなり前から分かつているんだ! どうしてそうなんだらう死にかかつてるくせに、——どうにも呑み込めない! しかし、おれはあいつを騙して見せる。いいか、あいつがおれを探索するんでなくつて、あべこべにこつちからやつて見せる。」

「そんなに憎らしいんなら、どうして、あの人を引つぱり込んだの? それに、あの人を探索したつてはじまらないじゃないの?」

「お前が引つぱり込めつて勧めたんぢやないか。」

「あの人を役に立つと思つたからなの。けども、ね、あの方は今アグライヤさんに惚れ込んで、手紙を出したんですよ。わたし、根掘り葉掘り訊かれたわ、あの人を……だつて、奥様にまで手紙をやりかねないくらいだつたんですもの。」

「その方にかけては大丈夫だ!」毒々しく笑いながら、ガーニヤはいつた。「尤も、何か曖昧なことがきつとあるんだらう。あいつが惚れたつてことは、ありそうなことだ。何しろ餓鬼だからな! しかし……あんな婆さんに匿名の手紙をやるなんて、そんなことはしないだらう。あいつは實に意地の悪い、一人よがりの凡くらなんだ!……それは本當だと思ふよ、おれは知つてる。あいつはあの人の前で、おれのことを腹黒だつて抜かしやがつた、それがあいつの手始めだつたんだ。おれは白状するけど、初めはまるで馬鹿みたいに、いろんなことをあいつにぶちまけていたんだ。あいつが公爵に對する復讐からして、おれのためになつてくれるだらうとそう

に餓鬼だ! ああ、あのととき、あいつをいやといふほどに腹を殴つて、あいつの度胸をぬいてやつたら、どんなに痛快だつたらう。あのとときうまく行かなかつたなら、今、あいつはみんなに復讐してやるんだ……と、ここで、あれは何だ? まだ二階でがやがやしてゐる! ほんとに、何だ、あれは? おれはもう我慢ができない。」と彼は部屋へ入つて来たブチーツインにむかつて叫んだ、「何だつていうんだ、おれたちはしまいにどうなるんだ? あれは……あれは……」

*ノズドリョフ……ゴオリヤ作「死せる魂」の人物。(譯者註)

ポリットに對してあれほどの敵意を懷いていたガヴリーラ・アルダリオノキッチが、自分の方から見舞いに來た。尤も、あの事件のうち三日目にはあつたが、恐らく、何か急に思いついたことがあつたからであらう。どうした譯か、ラゴージンもまた同様に病人を見舞いに來るようになった。初めのうちには、公爵にもこの『哀れな少年』にとつては、ここを出て行つた方が、却つてよいように思われた。しかし、引つ越しのときに、イッポリットは『親切にも、宿を借してやる』というブチーツインのところへ引つ越して行くといつた。しかも、ガーニヤが自分の家へ引き取ると極力主張したにも拘わらず、ガーニヤのところへ越して行くとは、何か含むところがあるかのように、ただ一度として言い出さなかつた。ガーニヤはそのとき直ぐにそれに氣づいて、忌々しいとは思ひながらも、胸の中へ疊みこんだのであつた。

彼が妹にむかつて、病人が大分よくなつたといつたのは、その通りであつた。事實、イッポリットは以前よりは十分よくなつて、一目見たばかりでも分かるほどであつた。彼は人を馬鹿にしたような、人のわるい微笑みを浮かべながら、そろそろと、みんなの後から部屋へ入つて來た。ニイナ夫人はすつかり度膽を抜かれて入つて來た(彼女はこの半年の間、かなり瘖せて、見ちがえるほどになつて來た。娘を嫁にやつて、娘のところへ引つ越して來てから、殆んど表面的には子供たちのことには容喙しなくなつた)。コオリヤは氣苦勞をして、途方に暮れているらしかつた。新しく家内に起つたこのごたごたの根本的な原因を知らなかつたので、彼のいわゆ

る『將軍の氣ちがい沙汰』についても、分らないことが多かつた。しかし、父が絶え間なしに、到るところで、馬鹿げたことばかりして、急に以前の父とは思われないほど、打つて變つた人になつてしまつたといふことは、彼にもよく分かつていた。また老人がこの三日の間、ふつつりと酒をやめたといふことも、また彼には心配の種となつた。彼は父がレーベジエフや公爵と仲たがいになつて、喧嘩さえもしたことを承知していた。コオリヤは自分の金で買つた火酒の小櫃を持つて、たつたいま歸つて來たところであつた。

「ほんとに、おつ母さん、」彼は先ほど二階でニイナ夫人を口説くのであつた。「ほんとに、飲ましてあげた方がいいんですよ。もう三日も、手を出さないんです。きつと憂鬱なんですよ。ほんとに飲ました方がいいんです。僕は債務監獄にいる時にも、持つてつてやりましたよ。」

將軍はドアを開け放して、憤慨のあまり身をふるわせているらしく、闕の上に立つていた。

「ねえ、君!」と彼は雷のような聲で叫び立てた。「若しもあなたがほんとりに、この青二才の無神論者のために、皇帝陛下の恩寵を辱らしたる名譽ある老人を、あなたの父親を、つまり、少くともあなたの妻君の父親を犠牲にしようといふ決心をされたのなら、わしは今の今から、あなたの家に足踏みはしませんぞ。さあ、どつちか選びなさい、早く選びなさい、わしを選ぶか、それとも、この……螺旋釘か! そりだ螺旋釘だ! わしは何の氣なしに言つたんじやが、これは……螺旋釘じや! なせといつて、こいつはわしの胸を螺旋釘

でぐるんじやから、それに全く相手の見さかぬなしに……螺旋釘のように……」

「栓抜きぢやありませんか?」とイッポリットが口を出した。 「いや栓抜きぢやない。何せ、わしは貴様に對しては將軍でこそあれ、續じやないんじやから! わしは勳章を持つてるんじや、勳章を……ところが、貴様は無一物ぢやないが。こいつか、わしか! さあ、早く決めなさい、ね、今すぐ、早速!」と彼は夢中になつて、ブチーツインにむかつて叫んだ。

そこへコオリヤが椅子をすすめたので、彼は殆んどぐつたりしたように、それに腰をかけた。 「ほんとに、あなたはお休みになつた方が……よろしいですよ。」とブチーツインは呆氣にとられて呟やいた。 「まだ威張り返つてやがる!」とガーニヤは聲低く妹に囁やいた。

「休めと!」將軍は叫んで、「ねえ、わしは酔つてはおおりませんのじや、あんたはわしを侮辱しなざる。分かりました。」と又もや立ち上がりながら、言葉をつづけて、「よく分かりました、ここでみんながわしに敵對してをる、誰も彼もみんなで、もう澤山だ! わしは出て行く……。じやが、いいかの、あなた、いいかの……」

彼はしまいまで口をきかされずに、無理やり腰を掛けさせられた。みんなは氣を落ちつけるようにと懇願してかかつた。ガーニヤは憤然として、片隅へ立ち退いてしまつた、ニイナ

夫人は慄えながら泣いていた。 「一體、僕が何をしたんだらう? 何をこの人はぐづぐづい

「じや、何もなさらなかつたつていうんですね?」と不意にニイナ夫人がいい出した。「年寄をいじめるなんて、殊にあなにとつては恥ずかしいことですよ……情れないことだし……あなたのような立ち場にあつたら尙更……」

「第一、僕の立場つてどんな何です、奥さん? 僕はかなりあなたを尊敬しています、あなたを個人的に、しかし……」 「こいつは螺旋釘だ!」と將軍は叫んだ、「こいつはわしの心や魂を、螺旋釘でぐるんじや! こいつはわしに無神論を信じさせたくて仕様がなないんじや! やい、青二才、貴様なんぞが、生まれてもない前に、わしはもう背負いきれぬほどの名譽を荷つていたんだ。貴様は二つに打ち切られた嫉妬の蟲だ、咳をしやがつて、……遺恨と不信心とで死にかかつている。……何のためにガーニヤは貴様をここへ連れて來たんじやろ? みんなでわしを、他人はじめ、現在のわが子に至るまで!」

「もう澤山ですよ、とんでもない愁嘆場になつちやつた!」とガーニヤは叫んだ、「ただ町中に、わたしたちの顔を潰すようなことをして廻つてくれなかつたら、ましだつたのに!」

「何、わしが貴様の顔を潰す! 青二才め! 貴様の顔を? わしは貴様の顔をよくすることはできても、恥をかかすようなことはできないんじや!」

彼は呷鳴り立てるばかりで、誰にももう抑えつけることはできなかつた。が、ガーニヤもどうやら、自分で自分が抑え切れなくなつたらしい。

「今ごろ名譽をどうのこりのと！」彼は恨めしげに叫んだ。「何ていつた？」將軍は蒼ざめて、彼の方へ一步を踏み出しながら呷鳴りつけた。

「なあに、僕がちよつと口を開けさえすれば……」ガーニヤはいきなり喚き出したが、あとを切つてしまつた。

二人は面とむかつて突き立つた。二人も度はづれに昂奮していたが、特にガーニヤは甚しかつた。

「ガーニヤ、どうしたの？」ニイナ夫人は飛びかかつて、息子を抑えながら叫んだ。

「四方八方、何ていうばかばかしいことばかりなんだろう！」とワーリヤはむつとして、辛辣なことをいつた。

「ただお母さんに免じて、黙つていますのよ。」とガーニヤは悲痛な聲でいつた。

「言つてみる！」と將軍はすつかり夢中になつて怒號した、「いつて見る、父親の呪いを覺悟の上でいつて見る！」

「まあ、それじゃ、僕があなたの呪いに度膽を抜かれたつていうんですか！ これで八日も、あなたが、まるで氣がはいみたいになつてゐるからつて、誰のせいでしょう？ ねえ、もう八日目ですよ、僕はちやんと勘定してゐるんですよ……い

いですか、どたん場まで言わせない方がいいでしょう、いやすつかり言つてしまします……あなたは何のために昨日エバソチン家へ、のこのこ出かけて行つたんです？ 年寄といわ

られ、御覽なさい。やはり、あなたの現在の息子さんまでがエラペゴフ大尉なんていう人は、てんでいたこともないつて仰つしやつてるぢやありませんか。」と叫んだとき、やつと老人は眩やいた、すつかりどきまぎしてしまつて。

「カピトン・エラペゴフだ、大尉ぢやない……カピトンだ、豫備中佐エラペゴフ……カピトンだ。」

「カピトンもやつぱりいなかつた！」ガーニヤはもうすつかり腹を立てていた。

「だが……なぜいなかつたんだ？」と將軍は眩やいたが、さつと顔が赧くなつた。

「もう澤山ですよ！」ブチーツインとワーリヤが宥めるのであつた。

「およしよ、ガーニヤ！」と又もやコオリヤが叫んだ。

しかし、この調停は將軍を一そり夢中にしたらしかつた。「どうしていなかつたんだ？ なぜいなかつたんだ？」と、彼は脅しつけるようにわが子に喰つてかかつた。

「いないからいいんです。ただそれだけのことでですよ。また、てんで、そんな者のいよう筈がありません！ まあ、そういう譯です。ほんとうに、もう止したらいいでしょう。」

「これでも息子なんだ……これが肉親の息子、俺が……ああ、忌々しい！ エラペゴフ、エロシカ・エラペゴフがいなかつたとは！」

「それ、見ろ、エロシカといつたり、カピトンといつたり

！」イッポリットが啄を容れた。

「カピトンだぞ、君カピトンだ、エロシカじゃあない！ カ

れる身分で、髪も白くなつて、一家の父となつてゐるくせに！ 結構な御身分で！」

「およしよ、ガーニヤ！」とコオリヤが叫んだ、「およしよ、

「一體、どうして僕が、僕が何をして、この人を侮辱したんです？」とイッポリットは言い張つたが、しかも相變らず、例の人を馬鹿にしたような調子であつた。「何だつて、この人は僕を螺旋釘だなんていうんでしょ、皆さん、お聞きになつたでしょう？ 自分からうるさくくつついて來たくせに今、僕のところへやつて來て、エラペゴフ大尉とかいう人の話を持ち出したんです。僕は一向あなたのお仲間になんか入りたくないんですよ、將軍、だから以前も避けていたんですそれはよく御自分でも分かつてるでしょう。だつて、エラペゴフ大尉なんて、僕に何の用があるんです。これは分かつて下さるでしょう？ 僕はね、エラペゴフ大尉のために、ここへ來たんですありませんよ。僕はただこの人にむかつて、エラペゴフ大尉なんて、そんな人は、實際にいたこともないらしいつて自分の意見をあからさまに言つただけなんです。そしたら、將軍は大さわぎをやり出したんですよ。」

「いたこともないに決まつてる！」とガーニヤは斷言した。

しかし、將軍は呆然として佇みながら、譯もなく、あたりを見廻すばかりであつた。息子の言葉の思い切つて露骨なのに、今更ながら辟易したのである。最初の一瞬間は、何と

いつてよいのかさえも分からなかつた。が、遂にイッポリットがガーニヤの答えを聞いて、聲を立てて笑いながら、

カピトンだ、カピトン・アレクセイキツチだ、ええと、それだカピトンだ、……少佐だ……豫備のな、マリヤ……マリヤ……ペトロローヴナ・ス……ス……あれは友だちで同僚じやつたが……ス……ス……ス……見習士官の抑々の初めからの親友だちでの！ わしはあれのために血を……いや、あれを庇つてやつたんだ、……だが、とうとう戦死しての。そのカピトン・エラペゴフ君がいなかつたとは！ この世に生きていなかつたとは！」

將軍はすつかり昂奮して叫んだが、しかも問題はただの

一つのことに関してゐるのに、まるで見當ちがいの飛んでもないことを喚き立ててゐるらしい形勢であつた。たしかに、これが他の場であつたならば、彼はもとより、何かカピトン・エラペゴフなる者が全くこの世にいなかつたなどという話よりも、もつと癪にさわることもさへも耐え忍んだことであろうし、また假りに、大聲を立てて、馬鹿さわぎをして、夢中になつたにしても、やはり、とどのつまりは二階の自分の部屋へ引き上げて、眠り込んだことであろう。ところが、今は、人間的な感情の非常に奇怪な反面があらわれて、エラペゴフに對する疑いと同様の、取るにも足らない侮辱が、彼をして憤激の極に達せしめる機縁とならなければならぬようなことになつたのである。老人は顔を眞赤にし、兩手を振りあげて叫ぶのであつた。

「もう澤山だ！ わしの祟りを……この家を飛び出すんだ！

コオリヤ、わしの囊を持つてこい、行くんだから……よそへ

！」

カピトンだ、カピトン・アレクセイキツチだ、ええと、それだ

カピトンだ、……少佐だ……豫備のな、マリヤ……マリヤ……

……ペトロローヴナ・ス……ス……あれは友だちで同僚じやつた

が……ス……ス……ス……見習士官の抑々の初め

からの親友だちでの！ わしはあれのために血を……いや、あ

れを庇つてやつたんだ、……だが、とうとう戦死しての。そ

のカピトン・エラペゴフ君がいなかつたとは！ この世に生

きていなかつたとは！」

將軍はすつかり昂奮して叫んだが、しかも問題はただの

一つのことに関してゐるのに、まるで見當ちがいの飛んでもな

いことを喚き立ててゐるらしい形勢であつた。たしかに、こ

れが他の場であつたならば、彼はもとより、何かカピトン・

エラペゴフなる者が全くこの世にいなかつたなどという話よ

りも、もつと癪にさわることもさへも耐え忍んだことであろう

し、また假りに、大聲を立てて、馬鹿さわぎをして、夢中に

なつたにしても、やはり、とどのつまりは二階の自分の部屋

へ引き上げて、眠り込んだことであろう。ところが、今は、

人間的な感情の非常に奇怪な反面があらわれて、エラペゴフ

に對する疑いと同様の、取るにも足らない侮辱が、彼をして

憤激の極に達せしめる機縁とならなければならぬようなこと

になつたのである。老人は顔を眞赤にし、兩手を振りあげ

て叫ぶのであつた。

「もう澤山だ！ わしの祟りを……この家を飛び出すんだ！

コオリヤ、わしの囊を持つてこい、行くんだから……よそへ

！」

彼は極度に憤慨して、あたふたと出て行つた後からはニイナ夫人、コオリヤ、ブチーツインが飛んで行つた。

「まあ、あんたは今、何ていうことをしでかしたの！」とワリーリヤは兄にむかつていつた。「お父さんはきつと又、あすこへのこのこと行くでしょう。まあ、面よごしつたらありやしない！」

「だから、泥坊なんぞするなつていうんだ！」とガーニヤは憎悪のあまり、今にも咽喉がつまりそうになつて喚き立てた。するうちに、彼の眼は圓らずもイッポリットと出あつた。ガーニヤは身ぶるいせんばかりであつた。「ところで、ねえ、君」と彼は叫んだ、「君は兎も角も、他人の家にいて……厄介になつていふというのを覚えていて、たしかに氣のちがつているあの年寄を……じらさないようにするのがあたりまえだつたんですよ……」

イッポリットもまた身ぶるいしたらしかつたが、忽ちにして自分を抑えた。

「あなたが、あなたのお父さんが氣が違つていふというのには、僕は全然不賛成です。」と落ちつき拂つて答えた、「僕には、その反對に、このごろ、あの人がかなり智慧を増されたようにさえ見えるのです。ええ、本當です。あなたは本氣にはしませんか？ あの人は用心深く、疑い深くなつて来て、何から何まで探りを入れて、實に言葉を慎んでいますよ……あのエペゴフのことだつて、目あてがあつて言ひ出したことじやありませんか。まあ、どうでしょう、その人は僕の氣持を……惹きよせようとして……」

「おお、若しもそういうことなら……」ガーニヤは慄え聲で言つた。

「若しもそういうことなら、僕は御免をこらむつて、腰をかけたさしていただきましょう。」將軍の坐つていた椅子に悠然と腰をおろしながら、イッポリットは附け加えた、「何しろやはり體の工合は悪いんでしてね。さあ、これであなたのおつしやることを、精々お伺いいたしましょう。まして、これが二人の最後の會話、事によつたら、最後の會見かも知れないんですからね。」

「ほんとなら、僕は君といふんなことの始末をつけるほど、落ちぶれたくはないんです。」と彼はいつた、「だから、若し

「ええ、親仁がどんなことに君の氣持を惹きよせようとしたところで、そんなことは僕の知つたことじやありませんよ！ どうぞですから、僕を相手にいんちきをしたり、ごまかしたりしないで下さい。」とガーニヤは甲高い聲でいうのであつた。「若しも親仁があんな状態に陥つた抑々の原因を君もまた承知しているんなら（とところで、君はこの五日間に、とても僕を探つてゐるんですね、それは君もたしかに承知でしょう）それなら、あの……運の悪い人をじらしたり、問題を大袈裟にして母を苦しめたりしないのが當然な筈です。何しろ、この問題は全くのナンセンスで、ほんの酒の上でのいたずらな

「およしなさい、イッポリットさん。そんなことは、とても恥ずかしいことじやありませんか。後生ですから、よして下さい。」とワリーリヤがいつた。

「ただ、御婦人に免じてそうしましうね。」とイッポリットは立ちあがりながら笑つた、「失禮ですけれど、ワルワラさん、あんたのためにお話を簡単にしてもいいです。尤もただ簡単にするだけです。つまり、あなたの兄さんと僕との話し合ひは、全く必要缺くべからざるものになつたからです。僕は臍に落ちないことをそのままにして、ここを出てゆ

「要するに、君はおしやべりだよ。」とガーニヤは叫んだ、「だから、君はおしやべりをしないで出て行くつもりになれないんだ。」

「あなたがお高くとまつたつて無駄ですよ。」とイッポリットが遮つた、「僕の方だつて、ここへ来た抑々最初の日から、二人が別れるときには、何もかも、精々さつづくばらんに言つてしまつて、氣楽になろうと、心の中ではちやんと覺悟をきめていたんですからね。僕はそれを今という今、實行するつもりです。勿論、あなたのお話が濟んでから。」

「しかし、僕は君にこの部屋を出て行つてもらいたいです。」

「それにしても、話だけはした方がいいでしょう、さもないと、あのとき、話をすればよかつたと、先になつて後悔しますよ。」

「およしなさい、イッポリットさん。そんなことは、とても恥ずかしいことじやありませんか。後生ですから、よして下さい。」とワリーリヤがいつた。

「ただ、御婦人に免じてそうしましうね。」とイッポリットは立ちあがりながら笑つた、「失禮ですけれど、ワルワラさん、あんたのためにお話を簡単にしてもいいです。尤もただ簡単にするだけです。つまり、あなたの兄さんと僕との話し合ひは、全く必要缺くべからざるものになつたからです。僕は臍に落ちないことをそのままにして、ここを出てゆ

「それ、御覽なさい。」とイッポリットは、落ちつき拂つて言った。「やつぱり辛抱がでなかつたでしょう。ほんとに、話をすればよかつたと、これからさき、後悔しますよ。さあ、もう一度あなたに先をゆずりましょう。僕はお待ちしています。」

ガーニャに口を噤んで、輕蔑的な眼で、相手を見つめていた。

「お厭やなんですね。あくまでも我を張ろうというおつもりなんですね。——それなら好きになすつたらいいでしょう。では、僕の方から、できるだけ簡単に僕は今日は、二度か三度、厄介者だというお咎めをうけましたが、それは不公平ですよ。あなたこそ、僕をここへ招び寄せて、僕を係蹄にかけたじやありませんか。そして、僕が公爵に恨みを晴らすようにもしているようにお考えになつたのです。おまけに、あなたは、アグライヤさんが僕に同情の意を表して、僕の告白を讀んだという噂を聞き込みなすつたんですね。それで、どういふものか、きつと、僕が一生懸命になつて、あなたの利害關係に携わるだろりとお考えになつて、事によつたら後押しになるかも知れないと、それを當てになすつたのです。もうこれ以上くわしい説明はよしましょう！僕はあなたにも、白状をしるか、明言をしるかと言いませんよ。ただ、あなたに良心を思いおこさせておいて、別かれて行くということ、それに、僕たちが、今お互いに實によく理解し合つていふことだけで充分なんですからね。」

「それにしても、あなたがついていける方は、實にありふれたことでやつて、もつともつと落ちついて、天國へ行きたいと、こゝろを代表しているのは、まぎれもない、あなたのお兄様なんです。僕があなたを憎むわけはね、ガヴリーラさん、——こんなことをいつたら、あなたはびつくりなさるかも知れません。——そのわけはただ、あなたが最も圖々しい、最も己惚れの強い、最も厭やらしい凡庸性の典型であり、化身であり、權化だからなのです！あなたは傲慢な凡庸性そのものです。自己を疑ふことのない、泰然自若たる凡庸性そのものは、ほんのちよつびりだつて、あなたの頭や胸に形となつてあらわれるものじやないんです、どんなことがあつても、しかも、あなたは、よくよくのやつかみやです。あなたは自分ほど偉い天才はないと信じていますけれども、やはり、どうかすると、憂鬱な時には、懷疑の念があなたを訪れて、人を恨んだり嫉んだりするので。おお、あなたの地平線にはまだ黒い斑點がありますよ。近き將來に、あなたがすつかり馬鹿になつたら、その點も消えてしまふでしょうが、それでもやはり、あなたの前には、長い、變化の多い道が横たわつていふのです。それも、愉快な道とは言えませんね。僕にはそれが却つて痛快ですね。先ず第一に、今から言つておきますが、例の人は、あなたのものにはなりませんよ。」

「ええ、もう聞いちゃいられない！」とワリーリヤが叫んだ、「もうあなた、それでおしまいでしょう？ いやな業突くばりつたら。」

とからとんでもないことをでつち上げるお方ですね！」とワリーリヤは叫んだ。

「だから、僕がそつたじやないか、「おしやべりな餓鬼」だつて。」と、ガーニャは口を出した。

「失禮ですが、ワルワリーラさん僕は後をつづけますよ。僕には勿論、公爵を愛することも、尊敬することもできません。しかし、あの人は實に氣だてのいい人ですよ。尤も……ずいぶん可笑しいところもあります。しかし、僕にはあの人を憎むわけは一寸もありません。あなたのお兄さんが公爵に反抗するように僕をけしかけたときも、僕はそんな氣は少しも見せませんでした。僕はつまり、おしまひになつて、大いに笑つてやるつもりでいたのです。兄さんがうつかり、僕に口をきいて、大へんな失敗をなさるつてことは、承知しましたからね。ところが、果して、その通りで……いま僕は兄さんを大目に見てあげるつもりですが、それも、あなたをねワルワリーラさん。尊敬して居ればこそですよ。しかし、僕がそんな生やさしいことで困るような人間でないということとを説明しましたから、今度は、なぜ僕が兄さんにへまなことをさせたくなかつたか、その譯もお話しましょう。いいですか、僕がこんなことを實行したのは、さつくばらんに打ち明けると、憎しみのためなんです。今、死にかかつていて、（だつて、いくらあなたの方が肥つたとおつしやつても、とにかく僕は死ぬんですからね）死にかかつていて、僕はね一生涯、僕をいじめ通して、こつちでもまた一生涯、憎んでいたあの無数の連中の代表者を、せめて一人だけでも愚弄した。

ガーニャが、その運命と失敗とをかこつたとすれば、それは極めて當然なことであろう。暫らくの間、ワリーリヤは兄に話しかける氣にもなれなかつた。彼が大股に自分の傍を通りすぎたときも、振り返つて見ようとさえもしなかつたのである。ついに、彼は窓の方へ行つて、妹に背を向けた。ワリーリヤは「一利一害」という露西亞の諺のことを考えていた。二階からまたもや騒がしい物音がきこえて來た。

「行くのかえ？」妹が席を立つたのを聞きつけて、ガーニャはふつと妹の方を振り向いた、「ちよつと待つて、これを御覽。」

彼は妹の方へ近づいて、ちよつとした置き手紙くらいの體裁に折つてある小さな紙きれを、妹の前のテーブルの上へ抛り出した。

「あら、まあ！」と叫んで、ワリーリヤは手を打つた。手紙はちよつと七行あつた。

「ガヴリーラ・アルダリオノキツチ様！ あなたがわたしに好意をよせて下さるものと信じて、わたしは自分にとつて大事な或ることについて、あなたに相談に乗つていただこうと決心いたしました。わた

しは明日の朝、正七時に、緑いろのベンチでお目にかかりとう存じます。これはわたしどもの別荘から遠くないところにございます。ワルワラ・アルドリオ・ゾナさまも是非とも御一しよにお出かけをいただかなければなりません。あの方はよく場所を御存じでいらつしやいます。A・B」

「いらつしやい、こうなつた以上は、あの人とよく話をつけなさいね！」とワルワラは両手をひろげて見せた。

ガーニヤはこのとき、とんでもない大きいことを言おうとしたが、しかもなお、どうしても勝ち誇つた色をあらわさずには居られなかつた。しかも、イッポリットがあれほど屈辱的な豫言をした後であつたから、なお更のことであつた。得意の微笑が何の憚るところもなく彼の顔に輝やいた。ワリリヤまでが、嬉しさのあまり、すつかり晴々しい様子を見せていた。

「それに、丁度あの家で婚約の披露をするという當日なんですからね！ いらつしやいよ、こうなつた以上は、あの人とよく話をつけなさいよ！」

「お前はどう思う、明日あの人は何を言うつもりなんだろう？」とガーニヤは訊ねた。

「そんなこと、どうだつていいわよ。何はともあれ、六ヶ月後に初めて會いたいつていうんですからね。よくつて、兄さん、あの家でどんなことがあつたにしろ、また様子があるんだ。風に乗つたにしろ、ほんとにこれは大事なことですよ！ 大

「何を威張つてるんです、どこへ行くんです！」とガーニヤが窓から叫んだ。「行くところもないのに！」

「歸つてらつしやいよ、パパ！」とワリリヤが叫んだ。「近所の人聞いてるのに。」

將軍は立ちどまつて、振り返り、片手を差しながら叫んだ。

「この家にはわしの罰があたるのじゃぞ！」

「おきまりの芝居口調が始まつた！」と、ガーニヤはびしやりと窓をしめながら呟いた。

近所の人たちははたしに、聞き耳を立てていた。

ワリリヤは部屋を駆け出した。ワリリヤが外へ出たとき、ガーニヤはテーブルの上の手紙を取り上げて、これに口づけし、ちよつと舌を鳴らして、頓狂な身ぶりをするのであつた。

將軍の馬鹿さわざもほかの時ならば、何ということもなくて覺がついたことであろう。以前にもこの種の氣まぐれ沙汰が勃發することがないではなかつたが、それは極めて稀なことであつた。というのには、大體が彼は非常におとなしく、殆んど善良といつてもよいほどの性癖をもつていたからである。晩年に到つて、病みつきになつた不しだらと、恐らく、彼は百度も闘つていたであろう。彼は不意に、自分が「一家

事すぎるくらいだわ！ またよけいな大風呂敷をひろげて、失敗しないようにして頂戴、それにびくびくしちや駄目、よくつて？ あの人に、あすこへ半年のあいだわたしがなぜ通つたのか、分からない譯はないわ。それに、どうでしよう、今日あの方はわたしには一言も物をいわなかつたの、それに素振りだつて見せなかつたし。尤も、わたしはあの家へこつそり寄つたので、わたしがいることを、お婆さんは知らなかつたの。さもなければ、きつとわたしを追い出したでしようよ。わたしはどんなことがあつても、兄さんのために是非とも探り出そうと考えて、危険を冒して通つたの。」

又しても叫び聲と物音が二階から聞こえて来た。何人かの人階段から下りて来た。

「もう何といつたつて、こんなことを許して置いちゃいけないわ！」とワリリヤがおびえたように、あわてた調子で叫んだ。「こんな見つともないことは、もう影もないようにしな

くちや！ さあ、行つてお詫びをなさい。」

しかし、一家の主人はもう往來に出ていた。コオリヤが後から囊を引きずつて行く。ニイナ夫人は玄關の階段に立つて泣いていた。彼女は良人の後を追つて駆け出そうとしていたがブチーツインに引きとめられてしまつたのである。

「そんなことをなすつたら、一そり將軍に油をかけるようなものです。」と彼はニイナ夫人にいつた。「どこへ行くところがないんですから、半時間もしたらまた連れ戻されて来ますよ。わたしはもうコオリヤによく話をしておいたんです。まあ、氣ままに馬鹿な真似をさせておいたらいいでしよう。」

の主人であるといふことを思い出しては、妻と仲直りをし衷心から涙を流したものであつた。彼はニイナ・アレクサン

ドロツナが大抵の場合に黙つて自分を許してくれるばかりではなく、道化者のように、淺ましい姿をさらしていてさえも

なお昔のように愛してくるので、殆んど崇拜ともいふべき尊敬を拂つていた。しかし、この不しだらを克服しようとする鷹揚な氣持は、あまり長くつづかないのが例であつた。將軍もまた、種類を異にしなから、やはり「お調子に乗りすぎ

る」人間であつた。彼は不斷に、家庭内の悔いに充ちた安閑とした生活にやり切れなくなると、擧句の果ては謀反をして

しまりのであつた。昂奮すると恐らく同時に自分で自分を責めるのであろうが、やはり押し切ることができなかつた。喧嘩をしては、堂々と雄辯を振り、法外な、無理な尊敬を要求し、とどのつまりは、家から姿を消してしまひ、どうかすると、永いこと家を空けていることもあつた。最近二年の間、

彼は家庭内の問題については、ほんの大體のことを、聞きかじりに知つていくものもので、それ以上くわしく立ち入ることを止してしまつていた。そんなことは、自分の役目ではないと感じていたからである。

しかし、今度という今度は、「將軍の馬鹿さわざ」のなかに、何かしら並大抵ではないものがあつた。誰も彼もが何かしら或るものについて承知をしているかのようにあつた。誰もそれについて物をいうのを怖れているかのようにも見受けられた。將軍はつい三日まえに、「正式に」自分の家庭へ、つまりニイナ夫人のところへ姿をあらわしたばかりであつた。

しかし、今までのいつもの『出頭』の時のように、諦めたり、後悔したりしている様子は見えず、それどころか、——並々ならぬ焦燥の念を懐いていた。彼は口敷が多く、落ちつきがなく、行き會う人ごとに熱情をこめて、恰も食つてかかるかのような調子で話しかけたが、しかも、その話題たるやいつもまちまちで、突拍子もなく、従つて、何のためにそんなにそわそわしているのか、本當のところはどうしても呑み込めないくらいであつた。時として陽氣なこともあつたが、大ていは物思いに沈んでいた。尤も、何を考えているのか、自分でもよくは分からなかつたのである。いきなり、何か——例えば、エベンチン家のことや、公爵のことや、レーベジエフのことなど話し始めるかと思つて、不意に話をやめて、それきり全く口をきかなくなつてしまふ、遠まわしに物を訊かれると、ただぼんやりと微笑むばかりであつたが、しかも實際は何を訊かれてあるのかさえもよく分からないで、ただ微笑んでゐるだけであつた。

前の晩は溜息をついたり唸つたりして夜を過ごし、ニイナ夫人を悩ました。夫人は何のためか一晚中、彼に濕布を温めてやつていた。彼は夜明けごろになつて、ふと眠りに落ちたが四時間ばかり眠つてから、猛烈な、しどけない憂鬱症の發作に襲われて眼がさめた。この病氣は、イッポリットとの喧嘩と、『この家に罰をあててやる』という文句で覺がついた。またこの三日間というものは、彼が絶えず極端な自負心に陥つて、その結果、非常に怒りつづくなつたことも、みんなよく人に氣づかれていた。コオリヤは、母にむかつて、こんなこ

軍の不幸な最後についてのこれから先の説明にあつても、この建前で行きたいと思ふ。即ち、どんなことがあろうともこの小説の第二義的な人物に對して、今まで豫想していたよりも、少し餘計に注意を拂い、少し場所をとらなければならぬ破目に立ち至つたからである。

これらの事件は次のような経路を辿つて後から後からと起つたことであつた。

レーベジエフは、フェルデシチェンコを搜索するためにベルブルグへ出かけて、すぐにその日のうちに將軍と一しよに歸つて來たが、別にこれというほどのことは公爵に傳えなかつた。若し公爵がそのとき、そんなに忙しくなく、自分自身にとつて重要な他の印象などにかまけていなければ、次の二日間に、レーベジエフが少しも打ち明けた話をしてくれないばかりではなく、却つて、公爵と顔を合わせるのをどういう譯か、避けてさへもいることに、すぐに氣がついた筈である。公爵は、やつと、これに氣がついて、この二日の間、ゆくりなくレーベジエフに會う度ごとに、何はともあれ、至つて上機嫌で、殆んどいつも將軍と一しよだつたことを思い起こして今更ながらに驚ろいた。二人の友だちは、もう一刻たりとも離れなかつた。公爵は時として、二階から彼の部屋にきこえて來る聲の高い、早口な話しごえや、大きな聲で笑いながら議論をしている聲を耳にした。ある時などは、夜も更けてから、軍隊式の酒盛の歌が、いきなり、だしぬけに響いて來たが、彼は直ぐに將軍の囁れた低音に氣がついた。しかし、歌は終いまで行かないうちに、ぱつたり聞こえなくな

とはみんな酒が戀しいためか、又は、事によつたら、このごろ變なぐらゐに仲よしになつたレーベジエフが戀しくて、爵いでいるのだと主張してやまなかつた。しかし、三日まえに彼はこのレーベジエフとも俄かに喧嘩をして、激怒の極に達して別かれてしまつた。のみならず、公爵とさえも、妙ないきさつがあつた。コオリヤは、公爵に説明をしてくれと頼んだが、ついには、公爵には何かしら彼に打明けたくないことがあるらしいと察するようになった。若しも、ガーニヤがあくまでも間違いないといつて推定を下したように、母夫人とイッポリットとの間に何か特別な話があつたとすれば、ガーニヤがあれほどづけづくと、おしやべりだといつたあの悪黨が、同じような方法で、コオリヤに同じことを言いきかせるのを遠慮したといふことは、甚だ奇妙なことになる。この男が、前にガーニヤが妹と話している時に言つたような意地の悪い『餓鬼』ではなくて、意地が悪いといつても、何か別の類いのものだといふことも、大いにあり得べきことである。それにまたニイナ夫人に向つて、ただ『その胸をかきむしる』ために、自分の一種の觀察を傳えたということも、怪しい話である。

ここで見のがしてはならないが、人間の動作の原因といふものは、常にわれわれが後になつて説明するよりも、大ていは遙かに複雑であり、多種多様なものであつて、はつきりとして輪廓の分かることは甚だ稀れである。で、時には、事件の單なる記述のみにとどめておくことが、説明者にとつては何よりも好都合な場合がある。そういう譯で、私は今の譯

つてしまつた。それから凡そ一時間ばかりの間、あらゆる様子から推して、酔つ拂つてゐると覺しく、ひどく威勢のよい話しごえがつづいてゐた。やがて、二階で、さわいでいた友だちが抱き合つて、ついには、どちらかが泣き出したといふことまで、察しがついた。それから急に烈しい議論が聞こえたが、それもやはり、忽ちのうちにびたりとやんでしまつた。

この間じゆう、コオリヤは何かしら特別な不安な氣分に浸されてゐた。公爵は大ていは家をあけて時おりは、かなりに夜おそく歸つて來た。すると、彼はいつも、コオリヤが一日じゆう公爵をさがしまわつてゐたといふことを聞かされるのであつた。しかし、會つて見ると、コオリヤは別に變つたことを言うわけではなかつた。ただ、將軍のことが實に『氣に喰わない』、將軍の今日この頃の品行が面白くないというだけのことであつた。『二人でうろつき廻つて、ここからあんまり遠くもない居酒屋で呑んでくれて、往來で抱き合つたり悪口を言い合つたり、お互いにおだて合つたりして、どうしても離れられないんです。』それと同じようなことは以前にも、殆んど毎日といつてもいい位にあつたことだと公爵が言つて聞かせたとき、コオリヤはそれに對して何と返事をしたらよいか、そして今の自分の不安がどこにあるのかをどういう風に説明したらいいのか、全く分からなかつた。酒盛の歌と議論の翌くる朝、十一時ごろに、公爵が家を出ようとしてゐると、だしぬけに彼の前に將軍があらわれた。何やら極度に昂奮してゐて、殆んど狼狽してゐるといつても

いい位であつた。

「ムイシキン公爵様、わしは疾うから、ずつとずつと前からあなたにお目にかかる光榮と、機會とを求めて居りました。」
實に固く、痛いほど固く、公爵の手を握りしめながら、將軍は呟やいた。「ずつと、ずつと前から。」

公爵は腰をかけてくれといつた。
「いや、坐りません、おまけに、お出かけのところを引きとめて居ります。わしは……またこの次に……。この際、わしは……心の願いの叶いましたることについて、……あなたにお祝いを申してもよろしいように、思いますがな。」
「どんな心の願いですか？」

公爵はどぎまぎした。彼はかような立場にある多くの人々と同じように、決して誰にも見られずまいし、察しもされまいし、悟りもされまいと考えていたのであつた。
「御安心なさい、御安心なさい！ あなたの極めてデリケートな感情をかき亂すようなことはいたしませんから。自分でも味を嘗めて、よく覺えがありますよ。他人が……その、何です、……諺にもある通り、……頼まれもしないのに啄を容れるというのは……。これは、わしも、毎朝、味を嘗めていただきます。わしはほかの用事で来たのです。大事なことで、とても大事なことですよ。公爵。」

公爵は席に着いてくれともう一度たのんで、自分でも腰を下ろした。

「では、たつた一秒間……實はあなたの御意見を伺いに参つたんですがね。わしは勿論、實際的な目的といふものをもち

ていた。
「澤山です！」と彼は急に叫んだ、「どうやら、わたしはあなたを大分邪魔したようです。」

「いいえ、どういたしまして、とんでもない、どうぞ聞かして下さい。僕はそれどころじゃありません、聴き耳を立ててお話を意味を推し量ろうとして居るのです……」

「公爵！ わしは自分自身が他人さまに敬われるような身分になりたいとつくづく考えています……。また、自分自身と、それに……自分の權利をも尊重したいものです。」
「かような希望をもつた人は、その希望の一つだけに對しても、尊敬を受ける値打があるものです。」

公爵が習字のお手本にあるような文句をもつて来たのは、それが立派な効き目があると堅く信じたからであつた。何かこういつたような、内容のない、しかも人聞きの良い句を、然るべき時に言つたら、かような人間、わけても將軍のような境遇にある人間の魂を、忽ちにして、克服し、和らげることもできるだろうと、どうやら本能的に考へていたらしいのである。兎にも角にも、かような客は心を和らげて、歸してやる必要があつた。ここに宿題があつたのである。

この句は將軍をそのかし、感激させ、彼の心をひきつけた。將軍は忽ち感動して、矢庭に調子を變えて、感激に満ちた長い打ち明け話をしていかかつた。ところが、どんなに緊張して、耳を澄まして、公爵には文字通り何ひとつ悟ることができなかつた。將軍は次から次へと押し寄せて來る思想を立ちどころに述べることができならしく、十分間ほども、

ずに暮らして居る者ですが、しかし、自分自身を尊敬し、……大體の露西亞人が重んじていない實務的な手腕を尊敬して……自分自身や、女房子供をいい境遇に置いてやりたいと思つて……要するにですな、公爵、わたしは相談に乗つていただきたいんです。」

公爵は熱心にその心がけを賞め讃えた。

「いや、そんなことはみんな下らん話です。」と將軍は早口に遮つた。「わしは兎も角、こんなことでなく、別の、大事なことをお話ししたいんです。つまりですね、ムイシキン公爵、態度に眞ごころがこもつて、感情の氣高いことを信頼し得る人として、あなたに打ち明けようと思つた譯なんです、人として……。あなたはわしの言葉にびつくりなすつて居るんじゃないやありませんか。公爵？」

公爵は特に驚ろくというほどではなかつたかも知れないが、並々ならぬ注意と好奇心をもつて、客の様子をじつと眺めていた。老人はいくぶん蒼い顔をして、唇は時おり微かに慄え、手は落ちつく所を知らないかのようであつた。彼はほんの二三分坐つて居る間に、もう二度までも何のためかだしぬけに椅子からとびあがつて、また急に腰をおろした。見たところ、自分のこうした掛引にはいささかの注意さえも拂わなかつた。テーブルの上には何冊かの本が載つていた。彼は話を續けながら、そのなかの一冊を取つて、一寸ひらげて頁を覗いて、すぐにまた閉じて、テーブルのうちに置いた。今度は別な本を取り上げたが、もう開けようとはせず、いつまでも、右手に持つたまま、絶えず宙に振りまわした。

無暗にせき込んで、早口に喋り立てていた。終りに、眼の中は涙さえ輝やき出した。しかもなお、それは初めもなければ終りもない文句で、いきなり途切れたり、不意に飛び移つて行つたりする突拍子もない言葉と思想に過ぎなかつた。

「澤山です！ あなたはわしの言葉を呑み込んで下すつた。それでわしも安心しましたよ。」だしぬけに立ち上がりながら彼はこう結んだ。「あなたのような心の人に、苦しんでいる者の氣持が分らない筈はないです。公爵、あなたは理想そのもののように高潔でいらつしやる！ あなたの前に出たら、ほかの連中なんか物の數ではありません！ しかし、あなたはまだ、年が若い、だから、わしが祝福してあげますよ。さて、結局ですね、わしがお邪魔にあがつたのは、大事なお話を聞いていただくのに、何時がよろしいか言つていただくためです。これがわしの主なる望みなんです。わしはただ友情と情けを求めているんですよ。公爵、わしはね、一度もこの心からの要求を物にした例がありませんのでな。」

「しかし、どうして今おつしやらないのです？ 僕は喜んでお聞きしますよ……」

「駄目です、公爵、駄目です」と將軍は熱くなつて遮つた。「今は駄目です！ 今というのはつまり空想です！ これはあまりにも、あまりにも大事なことです。あまりにも大事な！ このお話をする時は、取りかえしのつかない運命の決まる時です。これはわしの時になるのです。かういう神聖な時に、ひよつこりやつて來た者、偶然に來合わした無禮者の

ために、二人の話がとぎれるという事は、實に厭やなことです。こういう無禮者は珍らしくはありませんからね。」と彼は不意に公爵の方へ屈みこんで、いかにも祕密らしく、殆んど畏れをなしているような變な聲で囁やいた。「あなたの靴の……踵ほどの値打もない無禮者はさらにいますからね、公爵！ おお、わしは自分の靴とは申しませんよ！ いいですか、わしは自分の靴のことは言わなかつたのですよ。つまり何です、あまりに自分を尊敬しているのです、わしにはそんなことを平氣で口に出すことができないからです。尤も、あなただけはお分りになるでしょうが、こういう場合に、自分の踵をそつちのけにして、實は、自分の威嚴というものを大いに誇つているかも知れませんか。こんなことは、あなたを除けたら、誰にも分かるものではありません。しかも、あいつはその中の親玉ですよ。あいつは何も分らないんですよ、公爵！ 分かるだけの能力がまるで、まるで、ないんですからね。情がなくなつては、分かるもんじやありませんしね！」

終りごろになると、公爵は殆んど度膽をぬかれて、將軍にむかつて、明日の今ごろ會おうといつた。將軍はかたりに氣をよくして、兎も角も安心して、威勢よく出て行つた。夕方の六時過ぎに、公爵はレーベジェフにちよつと来てくれと使いを立てた。

レーベジェフは「まことに光榮と存じて」（彼が入つて来るなり、切り出した言葉をもつてすれば）非常にあわててやうて来た。

「誰にでも不安はあるものでございませぬよ、公爵、そして……殊に、現代のように變な、不安の多い時代におきましては、はい。」とレーベジェフは幾分そつげなく答えて、腹立たしげに口を噤んだが、まるで自分の期待をひどく裏切られた人のような様子をしていた。

「大へんな哲學ですね！」と公爵は苦笑した。

「哲學は必要なものでございましての。殊に十九世紀におきましては、その實際的適用の點で必要な筈なんですが、おろそかにされてしまつての、ほんとうに、はい。ところで、公爵様、わたくしはあなたも御承知の或る點に就いて、あなた様の御信任をいただいて居りますが、それもただ或る程度まででございましての。つまり、この一つの點に關する事柄以上には一寸も出て居りませんので……わたくしはよく呑み込んで居りますから、決して愚痴なぞ申しませぬ……」

「レーベジェフ君、君は何かのことで怒つてらつしやるようですね？」

「どういたしましたして、少しも、公爵様、決して、少しも？」とレーベジェフは胸に手をあてながら、物々しく叫んだ。「とんでもないこととございまして。わたくしは、世間での位置においても、智や情の發達においても、富の蓄積においても、以前の品行においても、さてはまた、知識の點においても、わたくしの希望などのとともども、及ばないあなた様の御信任を受けるほどの値打はございませぬし、また何かのお役に立つことができるかといつたしましても、奴隸だとか、雇人だとかの役目をするだけのことだ、ただそれだけだと、す

この三日の間、姿を消して、明らかに公爵と顔を合わせるのを避けていたのに、今はそんな氣ははどこにもないやうに見える。彼は椅子の端に腰をかけて、顔をしかめたり、微笑みを浮べたり、くすぐつたそうな、様子をさぐるような眼つきをして、手を揉んだりしながら、誰もかなり前から憶測して、期待をかけている何かの大事件の報せにもなぞらうべき何かを必らず聞かされるだらうと、かなり無邪氣な期待をかけているらしい風であつた。公爵は又もや辟易した。急にみんなが自分に對して何かの期待をかけるやうになつて、まるでお祝いで言いたそりに、謎をかけたり、忍び笑いをしたり、眼くばせをしたりしながら、自分を見まもつているのが、はつきりと彼にも分かつて来た。ケルレルはもう三度ほど彼のところへ、ほんの一寸の間、立ち寄つたがやはりこれもお祝いを言いたそうな様子をありありと見せていた。彼は来る度に、感激したやうな調子で、譯のわからないことを言い出したが、いつも途中でよしてしまつた、さつさと、いつの間にか姿を消してしまつたのであつた。（彼はこの頃、どこかで、とてもひどく酒を飲んで、或る撞球場で鬨聲を振つていたやうに。）「ユォリヤまでが、悲しみを忘れて、やはり、二度ばかりも何やら譯の分からぬことを、公爵に話しかけたりした。」

公爵はいきなり、幾分いらいらしながら、レーベジェフにむかつて、將軍の今日この頃の調子をどう思うか、將軍があんなに落ちつかないのはどういふ譯かと訊いた。すると彼は手短かにさきほどの場面を物語つた。

「誰にでも不安はあるものでございませぬよ、公爵、そして……殊に、現代のように變な、不安の多い時代におきましては、はい。」とレーベジェフは幾分そつげなく答えて、腹立たしげに口を噤んだが、まるで自分の期待をひどく裏切られた人のような様子をしていた。

「ただそれだけのことですよ！ 今もそつでした、つい今もそつでした。あなたにお目にかかつて、また肚の中であんなの様子をさぐつて居る時にも、いつも獨り言をいつていたのでした、『自分は親友として、信頼していただくほどの値打はないけれども、家主という小資格で、事によつたら、適當の時期に、こちらであてにしている期日の來ないうちに、いわばその、豫告といひますか、通知といひますか、近々に何かの變化が……おこるでしょうが、それについて、いろいろと承わることが出来るだらう。』と」

こんなことを言いながら、レーベジェフは、驚ろいて自分の方を眺めている公爵を、小さな鋭い眼で、穴のあくほどじつと見つめるのであつた。彼はやはり好奇心を満たすことができるか、あてにしていたのであつた。

「何が何やらさつぱり分かりませぬ。」公爵は今にも怒り出しそりにして、叫んだ。「が、……あなたはとて怖ろしい陰謀家ですわね！」といつて、不意に本氣になつて噴き出してしまつた。

レーベジェフも同時に笑い出したが、急に暗々して来た眸には、自分があてにしていたことが裏書きされて、更に一そり強まつて来たことが、ありありと窺われた。

「何を僕がいかにか分かつてますか、レーベジェフさん？ 僕のことを怒つちやいけませんよ。僕は君のね、尤も、君はか

りじやありませんが、無邪氣なのに驚ろいてるんですよ！
君はほんとうに無邪氣に、僕が何かいひのをあてにしてるんですね、つまり、この場合に、ところが、僕には君の期待に副うようなことが何ひとつないの、君に對してきまりが悪く、恥ずかしいくらいですよ。誓つて言いますが、ほんとに何もお話することがないんですよ、御想像がつかますか？」

公爵は又しても笑い出した。
レーベジェフは忽ち氣どつてしまった。事實。彼は好奇心にかけては、時おり、あまりにも無邪氣で、しつこいくらいであつたが、しかし、それと同時に、彼は極めてずるい、ひねくれた男で、どうかすると、あまりにも陰險に黙り込むのであつた。そこで、公爵は、絶えず彼の頼みをはねつけて、殆んど彼を敵にしまつていた。しかし、公爵が、はねつけるのは、輕蔑してゐたからではなく、彼の好奇心の對象があまりにデリケートだからであつた。公爵はつい數日まえまで、自分の或る種の空想をまるで罪惡のように見做してゐたが、レーベジェフは、公爵がはねつけたのは、ただ自分に對する個人的な嫌惡と、猜疑心によるのだと解釋して、いつも氣をくさして公爵の許を去るのであつた。そうして、公爵と親しい點で、單にコオリヤやケルレルばかりではなく、現在の子のヴェーラをさえも、妬ましく思うのであつた。この時でさえも、彼は恐らく、公爵にとつて、極めて興味のあるニュースを一つくらいは眞ごころから傳へることでもでき、またそれを望んでもいたことであらう、しかし、憂鬱そうに黙りこんで、とうとう何も言わずにしまつた。

た、「しかし、……一體、どうして見つけたんです？」
「實にたわいもなくでございますよ。フロックをかけておいた椅子の下にあつたのです。して見ると、紙入れがポケットから床の上へ滑りおちたに相違ないんですよ。」
「どうして椅子の下になんか？ そんな筈はない。だつて、君は隅々まで、隈なくさがしたつて、僕に言つてたじやありませんか？ 一體、どうしてこの一番大事な所を見おとしたんです？」

「それがその、ほんとうによく調べたんでございますよ、調べたつてことはよく、とてもよく覺えて居りましたよ！ 椅子をよせて、四つん這いになつて、自分の眼ばかりあてにしないで、よくその場所を手で撫でて見ましたの。しかし、何も無いじやありませんか。まるでわたしのこの掌のよう、何もなくて、すべすべして居るんですよ。でも、兎に角撫で廻して居りました。そんな氣の弱いことは、人が是非とも見つけ出そうと思つて居るとき、いつもよくやることでは、……大事な、氣にかかる物を失くした時に、何も無い空つぽの所だとは分つていても、やはり何十遍でも覗いて見るものですよ。」

「なるほど、假りにそうだとしても、一體どうしたんでしよらね？……僕にはやつぱり呑み込めせんね。」と公爵はどぎまぎしながら呟やいた。「前にはなかつたと言ひ、その場所をさがしたというのに、そこへひよつこり出て來たんですかね？」
「ところが、ほんとうに、ひよつこり出て來たんでございま

「公爵、何の御用で、兎に角、あなた様が今わたしを……お呼びになつたのでございませうかね？」暫らく口を噤んでいたがついに彼は口を切つた。

「そう、實は特に將軍のことを訊こうと思つて。」やはり、ちよつとの間、物思いに耽つていた公爵は、あわてて答えた。「それに……いつぞや聞かしてくれた盜難の件も……」

「それは何のことでございますか？」
「まあ、それじや、僕のいうことがまるで分らないらしいね！ ああ、君はいつでも芝居ばかりして居るんですね、レーベジェフ君！ 金ですよ、金、あの時、紙入れへ入れたまま失くしたつていう四百留ですよ。朝、ホテルブルグへ行くと、僕のとこへ來て話したでしょう、——やつと分かつたでしょう？」

「ああ、あの四百留のことだつたんですか！」レーベジェフはやつと今になつて思いついたらしく、言葉尻を引いた。「御親切に心配して下さいまして、有難う存じます、公爵、わたしにとりまして勿體なさ過ぎること。しかし、……あれは見つけましてでございます。もうかなり前に。」

「見つけましたつて！ ああ、よかつた！」
「あなたとしては、その叫び聲はまことに高潔なものです。何しろ、四百留という金は、親のない兒をどつさり抱えながら、辛い仕事をして、細々と生きて居る貧乏人にとつては、なかなか、並大抵なものではないんですよ。」
「しかし、僕のいうのはその事じやありませんよ！ 勿論見つけたという事は、嬉しいですが、公爵は急いで訂正しなすよ。」

公爵は妙な顔をして見つめた。
「では、將軍は？」不意に彼は訊いた。

「といたしますと、何でございますかね、將軍のことですか？」とレーベジェフはまた相手のいうことが分らなかつた。
「ああ、忌々しい！ 僕はね、君、君が椅子の下で紙入れを見つけたとき、將軍が何といつたかつて、それを訊いてるんですよ。だつて、前に一しよにさがしたんじやありませんか？」

「前には一しよでございました。でも、今度は正直のところを申しますと、わたしが一人で紙入れをさがし出したのですが、このことは黙つて、言わないでおいた方がいいと思ひましたんで。」

「しかし、……一體、どうしてですか？……で、金はそつくり元のままでしたか？」
「紙入れを開けて見ました、が、すつかり元のままでございます。ただの一留さえも。」

「せめて、僕にだけは、知らせに來てくれてもよかりそうなもの。」と、公爵は物思わしげにいつた。
「ですけれど、ねえ、公爵、あなたが個人的に、恐らく、大變な、いわば、感動をうけていらつしやる際に、こんな私ごとで、よけいな御迷惑をかけてはと、ついそれを氣にかけていたのみならず、わたくし自身も、何も見つけないような振りをして居りましたんで。紙入れは開けて、申をよく調べてそれからまたちゃんと閉めて、また椅子の下へ置いときましたよ。」

た。」

「だつて、何のために？」

「さ、さようでございます、これから先、どうなるかという物好きからなんでございますよ。」と揉み手をしながら、レーベジェフは、忍び笑いをした。

「それじゃ、今でも紙入れは、一昨日おとといからずつとそこにあるんですね。」

「おお、ちがいます、ただ一日一晩あつたきりです。御承知のとおり、わたくしは將軍に見つけ出してもらいたいという氣がいく分ありましたんでございます。というのには、わたしが結局、見つけた以上將軍だつて、いわば、目を惹くように椅子の下から突き出してある品物に、氣がつかんという話でございますからね。わたしは何遍もその椅子を持ち上げて置きかえましたので、紙入れはすつかり見えるようになってしまいました。けども、將軍はどうしても氣がつかないので、それがまる一晝夜つづきました。どうも、あの人は、この頃は、とても杜漏になつて、物の見さかいかもつかない様子です。話をしたり、講釋をしたり、笑つたり、騒いだりしているかと思つと、いきなりわたしを怒つたりするのです。どういふ譯か、わたしには分からんです。で、とうとう、二人で部屋を出かかつたんですが、わたしは戸をわざと開けつ放しにしておきました。將軍はちよつと、ぐづぐづして、何か言いたそうにいました。きつと、あんな大金の入つた紙入れを置くところが心配だつたんでしよう。ところがで、突然、おそろしく怒り出して、もう何もいわんのです。」

ポケットは、みんな、ちやあんとしていたものが、不意に一晚のうちにこんな穴があくなんて。なお物好きによくよく調べて見ましたら、誰かがペンナイフで切り抜いたような様子なんです。まるで嘘のような話じゃございませんか？」

「それで……將軍は？」

「昨日も今日も、一日じゆう怒つて居りました。怖ろしく不機嫌なのでございますよ。いい氣になつて、浮かれて、おべつかまで言ひかと思つと、涙を流さんばかりにセンチメンタルになる。そうかと思つと、今度はいきなり怒り出して、その權幕と來たら、こちらでは度膽を抜かれてしまいますよ。いや、本當でございます。わたしはね、公爵、とにかく、軍人ではございませんから、氣が弱いのです。昨日、二人で酒場に腰を据えていましたら、偶然のように、この裾が山のよりに膨れて、みんなの眼につくところへ出しやばりました。すると將軍はわたしを横眼で見、怒つて居るんです。もう永いこと、あの人があたしの眼を眞つ直ぐに見るといふことはなかつたのですよ。ただひどく酔つ拂つた時とか、感きわまつた時とかは別ですけれど。ところがです、昨日は二度ばかりもきつと、私をにらみつけましたので、もうわたしは、背中がぞくぞくしてね。それにしても、明日は紙入れをさがし出すつもりです。が、明日まではまだあのひと一しよに晩方の散歩に出かけますよ。」

「何だつて君はそんなにあの人をいぢめるんです？」と公爵は叫んだ。

「いぢめやしませんよ、公爵、いぢめやしません！」とレー

二人で往來へ出て二足と歩かないうちに、もう、わたしを置いてきぼりにして、さつさと別の方へ行つてしまいました。で、その晩はただ酒場で落ち合つたばかりでした。」

「しかし、結局は、やはり君が椅子の下から紙入れを取つたんでしよう。」

「ちがいます。その晩に椅子の下から消えてなくなりましたんでございますよ。」

「じゃ、一體どこにあるんです、今は？」

「はい、ここにございます。レーベジェフはすつくと立ち上がつて、快よげに公爵を見ながら、急に笑い出した。「いつの間にか、氣がついて見ると、ここに、このわたしのフロックの裾にあつたんです。そら、御覽下さい、ちよつとつまんで見て下さい。」

たしかに、フロックの左の前の方の裾のよく眼につくところに、袋のようなものが出來て、ちよつと觸つただけで、すぐに、ほころびたポケットから落ちこんだ革の紙入れがあるということがはつきりと分かつた。

「引き出して調べ見ましたら、全部そつくりして置きました。それでまた、元のところへ入れて、かうして昨日の朝から、裾の中へ入れたまま持ち歩いて居りますが、足へぶつかりつたりしますよ。」

「それで君は氣がつかないんですか！」

「え、氣がつかないんです、へへ！ で、公爵様、いかなるものでございませう、尤も、こんなことは特にあなた様の御注意をひくほどの値打はございませんが、いつも、わたしの

ベジェフは躍起になつてやり返した。「わたしは眞ごころからあの人を愛して居るんでございますよ、そして……尊敬もして居ります。ところで、今です、あなたがお本氣になさるるとなると、兎に角、あの人は以前よりは一そりわたしにとつて大事な人になりました、わたしはなお一そりあの人を重んずるようになりましたよ！」

レーベジェフが、あまりに眞面目に向きになつてこんなことを言つたので、公爵はとうとう憤慨さえもしてしまつた。

「愛して居るくせに、そんなにいぢめるんですか！ 冗談じゃありませんよ、あの人が失くした品を椅子の下や、君のフロックの中など、すぐに分かるところへ置いたということだけで、それだけで既に、自分は君に對して決してずるいことをしたくない、そして正直にあやまるのだというところを見せて居る譯なんです！ いいですか、あやまつて居るんです。つまりね、あの人は君の感情のデリケートなところを當にしている譯です。従つて、あの人に對する君の友情を信じ切つて居る譯なんです。ところが、君は、あんな眞つ正直な人に……そんな侮辱を加えて！」

「眞つ正直、成程ね、公爵、眞つ正直です！」とレーベジェフは眼を光らせながら合槌を打つた。「そういう公平な言葉を述べるのできるのは、とりも直さず、ね、公爵様、あなた様お一人でございますよ！ それだからこそ、わたしはいろんな身の誤ちに心はくさつて居りますが、崇拜といつてもいいくらいに、あなた様に參つて居るんでございますよ！ 先ず、話は決まりました！ 紙入れは明日といわず、今すぐ

にさがし出ししよ。そら、あなたの眼の前で取り出しますよ。ほら、これでございます。ほれ、これが金です、全部手つかずです。じゃあ、公爵様、おとり下さい、そして明日まで預つて下さいまし。明日か、明後日に頂戴いたします。ところで、ねえ、公爵、これが盗まれた最初の晩には、うちの庭のどこか、石つころの下に、かくされていたらしいんですが、あなたはどうお思いになりますか？」

「氣をつけなさいよ、あの人に紙入れが見つかったなんて、いきなり言うもんじゃありませんよ。ただあつさりよ、服の裾にもう何も無いことが分かつて、一人で悟るように仕向けてやることです。」

「そらでございますしよか？ 却つて、見つかったといつて、今まで氣がつかなくなつたような振りをした方がよくはないでしようか？」

「い、いや、」と公爵は考えて見て、「い、いや、今となつては遅いです、却つて險呑です、ほんとうに、言わない方がいい！ そして、あの人には優しくして上げなさい、しかし、……あまり眼につくようにしてはいけませんよ、それに、それに……分かつてるでしよ……」

「分かつてます、公爵、分かつてますよ。つまり、大てい、實行はできないということが分かつています。何しろ、そうするには、あなた様と同じような心をもつていなくてはなりませんから。おまけに、御當人様が、氣短か、無暗に怒る癖がありましてね、この頃は、どうかすると、あまりひどく、嫌な方をするようになりました。すうり泣うになつてゐるのに眼をとめた。あのどぎまぎしてとりとめもなかつたのに引きかえて、今は何となく並々ならず落ちつき拂つてゐる様子が見つけられる。そこで、これは何かしら斷乎たる決心をした人であらうという結論まで下された。それにしても、その落ちつきも實際のところは、見かけほどではなかつた。が、兎も角も客はつましやかな威厳を具えてはいたが、しかも上品なくつろぎを見せていた。最初のうちから彼は、幾分へりくだつたような様子を見せて、公爵と應對してゐた。——それはまぎれもなく、或る種の氣位の高いしかも、不當な侮辱を受けてゐる人たちが、時として、上品なくつろぎを見せる時のような態度であつた、聲の調子に、何となく悲痛な感じがなかつたが、それでも、優しい物の言い方をしていた。」

「先だつて拜借しました書物を持つて来ました。」と彼は自分が持つて来て、テーブルのうえにおいた一冊の本を、物々しく頷でさすのであつた。「有り難うございました。」

「ああ、そら。あなたはこの文章をお讀みになりましたか、將軍？ お氣に入りましたか、どうです？ なかなか面白いじゃありませんか！」公爵は、こんなに早く、わき道へ外れた話が切り出せたので、一方ならず喜んだ。

「面白いも分かりませんが、亂暴な書き方ですよ、そして勿論、たわいもない話です。ひよつとすると、一つ一つ、みんな嘘かも知れませぬ。」

將軍は泰然自若として、いくらか言葉尻までも引きながら、どういつた。

きをして、抱きついたり、そらかと思ふと不意にわたしを頭ごなしにして、こきおろしたりし出すのです。まあ、そんな時には、裾をつかんで、わざと見せびらかしてやりませう、へへ！ では、公爵、いずれまた、何しろ、お引きとめをして、いわば、その大へん乗り氣なところをお邪魔しているに相違ございませんから……」

「けれども、お願いですから、前のように内證で！」

「抜き足でそうつと、抜き足でそうつとでございますね、」しかし、事件は兎がついたとはいふものの、公爵は相も變らず、前と同じように氣が氣でなかつた。彼は明日の將軍との會見を、しびれを切らして待ちわびていた。

こちらで決めた時間は、十一時過ぎであつたが、公爵は全く思ひもよらない、遅刻をしてしまつた。家へ歸つて見ると將軍は彼を待ちかねてゐた。一目見ただけで、彼は將軍が不機嫌でゐるのに氣がついた。恐らく、暫らく待たされたからであらう。失禮を詫びて公爵はさつさと腰をおろしたが、何だか妙にびくびくしてゐた。まるでお客が瀬戸物づくりで、それはこわしてはいけなかつた。絶えず氣づかつてゐるような風であつた。前には一度として將軍の前へ出て怖じ氣づいた例もなく、怖じ氣づかうなどは、夢にも思つたことがなかつた。程なく公爵は、將軍が昨日とはすつかり別人のよ

「ああ、とんでもない、これは實に正直な話ですよ。佛蘭西兵のモスクワ滞在を自撃した或る老兵の實話なんです。よ。ところどころ、惚々するところがあるが、それには、目撃者の記録というものは、どれを見ても貴重なもの、たとい、目撃者が誰であつても、ね、そらじゃありませんか？」

「わたしが編纂者の位置にいたら、こんなものは發表しませぬね。ところで、慨して目撃者の記録というものを見ると、尊敬すべき、相當の人物の話よりは、むしろ、剽軽な、しかも亂暴な嘘つきの方が信用されている形です。わしも十二年の役についての記録を若干知つていますが、それは……ところで、公爵、實はわしは決心をして、この家を、——レーベジェフ君の家を出るつもりです。」

將軍は意味ありげに公爵を眺めた。

「あなたは、ベヴロフスクに御自分の宿がありますね、……お嬢さん……のところ……何といつていいか分からないので、公爵はこんなことをいつた。

彼は、將軍が自身の運命にかかわるような大問題について彼のところに相談に來たのだという事を思い出した。

「わしの家内のところへです。言い換えると、自分のところにも、娘のところにもあるんです。」

「濟みませんでした、僕は……」

「わしがレーベジェフの家を出て行くのは、ねえ、公爵、實はあの男と絶交したからです。もつと早くすればよかつた」と

* 十二年の役……ナポレオンのモスクワ侵入を指す。(譯者註)

後悔しながら、ゆうべ絶交しました。わしはね、公爵、尊敬を要求するのです。そして、わしが、いわば自分の心さえも贈り物にするような人たちからさえも、この尊敬を受けたのです。公爵、わしは時おり自分の心を贈り物にしますが、殆んどいつもといてもいい位に購されてばかりいますね。あの男もわしの贈り物を受ける値打がなかつたのです。」

「あの人にはかなり、だらしなないところがありますね。」と公爵は遠慮しながら言った。「そして、性質には若干、……しかし、そのうちにも、情がありますよ、狡猾ではあるが、しかし、どうかすると、なかなか面白い惻巧者ですよ。」

公爵の上手な言葉づかいと、荒々しい調子は、たしかに將軍を籠絡したらしかつた。尤も、彼はやはり、急に気がおけなくなつたりして、時おり公爵の顔を覗き込んだりした、しかし、公爵の言葉の調子があまりにも自然で誠實なので、疑いをいれることはできなかつた。

「あの男にもいい素質があるということは、」と將軍が引き取つた。「あの人間に情を與えたともいうべきこのわしが、最初に言明したことです。わしは自分の家族がありますから、あの家へ行つて、あれの厄介にならなくつてもいいのです。何も、わしは自分の身の過ちを辯護したくはありません。わしは放埒な人間で、あの男と一しよによく酒を飲みました。が今になつて、泣いてるのは多分、そのことを思うからでしょう。しかし、ただ一しよに酒を飲むことだけで、(へどろか、公爵、このいらいらしている男の、ざつくばらんな、亂暴な言い草を許してやつて下さい、) ただ酒を飲むことだけで、

佛蘭西の精兵があいつに大砲の口を向けて、遊び半分に片足を撃ちおとしたとか、その足をまたあいつが拾い上げて、家へ持つて歸つて、それからワガンコフスキ墓地に埋葬したとか、そんなことを人の前でよく臆面もなく言えたものですよ。それに、その墓の上に記念碑を立てて、一方に、『ここに十等官レーベジェフの足を葬る』また一方に、『いとしき死灰よ、よろこびの朝まで安らかに眠れ』という銘を刻んだとか、毎年この足のために供養をするとか(これ既に瀆神罪であります)このために毎年モスクワへ出かけるとか、そんな話をするのです。この話の證據として、その墓や、クレームリンにある、分捕つた大砲までも見せるからモスクワへ行かうと誘うんですよ。何でも、門から數えて十一番目の舊式の佛蘭西の小鷹砲だと斷言しましたね。」

「それにしても、あの人の足は、兩方ともちやんとしてるじやありませんか、眼前に！」公爵は笑い出した。「ほんとうに、それは罪のない冗談ですよ。腹を立てなさんな。」

「しかし、わしのいい分も聴いて下さい。足が眼前にあるという事です、あの男にいわせると、片方の足はチェルノスヴィートフ式の義足ださうですよ、全部が全部、嘘だとはかりもいえないでしょうよ……」

「ああ、そう、チェルノスヴィートフ式の義足なら、ダンスもできるつて話ですよ。」

「全くその通りです。チェルノスヴィートフが義足を發明したとき、まず第一番にわしのところへ見せに來たものですよしかし、本當のチェルノスヴィートフ式の義足が發明された

あの男とつき合つた譯しやない筈ですが？ つまり、今あなたのおつしやる素質に惚れこんだのです。しかし、何によらず、ある程度までで、素質というやつもその通りです。若しも、あの男が、わしに、面とむかつて、十二年の役の時、まだ子供で、ほんの赤ん坊の頃、自分の右の足を失くして、それをモスクワのワガンコフスキ墓地に葬つたなどという、圖々しいことを言つたとすれば、それはつまり破目はずしたのであつた、無禮をあらわし、圖々しさを見せることになりませぬ……」

「多分、それは面白おかしく人を笑わせるための、ほんの冗談だつたんでしよう。」

「心得て居ります。しかし、面白おかしく人を笑わせるための罪のない嘘は、たとえ無作法なものであつても、人の氣持を傷けはしないものです。中には、いわば、話の相手に満足と與えるためにただ單に友情によつて、嘘をつく者もあります。しかし、若しそこに無禮な態度が透いて見える時には、若しまた、交際するのが辛いといふことを、同じような無禮な態度で示そうとする場合には、高潔な人はただその男に背を向けて、そんな無禮者に自分の本當の位置というものを思い知らして、絶交するよりほかに道がないのです。」

將軍はこういいながら顔を赧くさえました。「しかし、レーベジェフが十二年にモスクワへ行く筈はありませんね、それにしても、あんまり年が若すぎます。實に滑稽です。」

「……あの男は、ずつとずつと後のことですが、……あの男は亡くなつた細君さえ長い結婚生活をしてる間じゆう、自分の亭主の足が木製だということを知らなかつたというじやありませんか。わしがそんな馬鹿げたことつてあるものかと注意してやつたら、こういふのです。『若し君が十二年戦争にナポレオンの小姓をしていたのなら、わしにだつて自分の足を葬るくらいのことには許してもよからう、』つて。」

「しかし、あなたは本當に……」といいかけて、公爵はまごついてしまつた。

將軍も同様に、いささかまごついたらしかつたが、その瞬間に、思い切つて横柄に、殆んど冷笑をさえ浮かべて、公爵を見つめた。

「公爵、途中でよさないで下さい、」と彼は特に流暢に、言葉尻を引いていつた。「おしまいまでおつしやつて。わしは氣が大きいから、おしまいまででも聞きますよ。自分の眼の前にいる人間が、本當に落ちぶれて……役にも立たないのを見ながら、同時にその人間が、大きな事件の……目撃者であつたというのを聞くのが、あなたに滑稽な氣がするといふんです。……おしやべりしませんでしたか？」

「いいえ、僕はレーベジェフからは何も聞きません。若しあなたにレーベジェフのことをおつしやるんでしたら……」

「ふむ……わしはその反対かと思つてましたよ。實は昨晩われわれの間の話題は主として……『實錄』の中の奇妙な文章のことに及んだのです。わしはあの文章の矛盾を指摘してや

りました。何しろ、わしは自分自身が目撃者でしたからね、……あなたは笑つてゐるんですね、公爵、あなたはわしの顔を見ていらしゃる。」

「い、いいえ、僕は……」

「わしは見かけは若いですが、」と將軍は言葉尻を引いた、「しかし、本當は、見かけよりも年とつてゐるんですよ。十二年の役にわしは十か十一くらいでした。わしの年は自分でもはつきり分らないんです。履歴書では減らしてあります。わしは自分の年を實際よりは減らす弱點があまりありません。これはずつと一生の間……」

「本當のところ、僕はあなたが十二年の役の時、モスクワにいらしたというのを、一寸も變だとは思いません。ですから、勿論、あなたはモスクワにいた誰もと同じように、……いろいろなことをお話しになつてもいい譯です。或る一人の自叙傳の筆者は、自分の本の書き出しに、十二年役の時、モスクワで佛蘭西の兵士たちが、まだほんの赤ん坊であつた筆者を、麵麩で養つてやつたということを掲げています。」

「そう、御覽なさいまし、」と、將軍は謙遜な態度で合槌をうつた、「わしの話は勿論、ありふれたこととは違つていますが、さうかといつて、何も珍らしいことがある譯でもないのです。本當の話があり得べからざるものように見えるのは、實によくある例です。小姓！ というのも、もちろん妙に聞こえるでしょう。しかし、十歳になる子供の冒險は、恐らく、その年齢でもつて説明できるかも知れません。若しも、十五の子供だつたら、そんなことはなかつたでしょう、どう

えられるのだと、さういふ感じがするのです。全くあなたはいいところにお氣がつかましたね、將軍。」公爵は、明らかに顔を赧くしないでも濟んだことを一方ならず喜んで、熱のこもつた調子で言い切つた。

「さうでしようかしら？ さうでしようか？」と將軍は嬉しくなつて、眼をさえも輝やかしながら叫んだ「危険というものを知らない子供は、金びかの軍服だの、お供の人だの、前からいろいろと話に聞いていた豪傑を見ようと思つて、人ごみを押し分けて進みました。この豪傑を見ようというのは、五六年まえからみんなが、この人のことばかり話していたからです。世界中がこの人の名で持ちきりでしたからね。わしは、いわば、この名を乳といつしよに飲んでいた譯です。ナポレオンは二歩ほどの所を通りかかつて、ふとわしが見てゐるの氣がつかしました。わしは貴族の子供らしい服を着てゐましてね、かなり贅澤な身なりをしてゐたのです。つまり、それほどの人ごみの中で、ただ一人、わしだけがさういふ風をしてゐたのです、お分かりでしよかね、……」

「それは無論、ナポレオンをびつくりさせて、誰も彼もが都落ちをした譯ではなく、貴族たちも子供と一しよに居残つていたということを證明したに相違ありません。」

「そこで、そこで！ 彼は貴族を味方にしたがつていました！ ナポレオンが鷲のような視線を投げたとき、わしの眼はそれに答えて輝き出したに違いありません。 Voilà un garçon bien éveillé! Qui est ton père? 活潑な子がいふよ お前の父さんは誰 た。わしは昂奮のために、まるで呼吸もとまりさうになつて、

考えても、その筈です。つまり、若しも、わしが十五にもなつていたら、ナポレオンのモスクワ入りの日に、モスクワを逃げおくれ、怖ろしさにぶるぶる慄えている母親を見ずして、舊バスマンナヤ通りにある木造の家を飛び出すようなことはしなかつたでしょうからね。十五にもなつていたら、びくびくしてたでしよ。ところが、まだ十でしよ。だから、わしは何一つ怖いもの知らずでした。そして、ナポレオンが馬を下りようとしてゐるとき、人ごみをかき分けて、宮城の玄關にまでも進んで行つたのです。」

「全く、十の年なら、怖いもの知らずで行ける……というあなたの御意見は實にすばらしいですね」と、公爵は合の手を入れたが、今にも顔が赧くなりはしないかと、びくびくしながら手を揉んでいた。

「全く、その通りです。この事は何もかも、實際の場合と同じように、單純に、自然に起きて來たことです。若しこの問題を小説家が取り扱つたら、きつと架空なことを織り交ぜるでしよ。」

「おお、たしかにその通りです！」と、公爵は叫んだ、「それは僕もそれは大いに痛感したことです。しかも、つい近頃僕は時計一つのために、人を殺したという實話を知つていますが、今ではもう新聞にも載つています。もしこんなことを小説家が考え出さうものなら、俗世間のことをよく知つてゐる人や批評家たちは早速、そんなことであるものかと呼ぶに相違ありません。しかし、これを新聞紙上で、事實として讀んでゐると、さういふ事實から露西亞の現實なるものを教

早速答へました、「祖國の戰場で戦死した將軍です。」 Arrière fils d'un boyard et d'un brave par-dessus le marché! この子は貴族の、まげに英雄だ。わしは貴族が好きかね。お前 この早口な質問に對して、わしも同じくはわしが好きかね。

早口に答へました。「露西亞人は祖國の敵の中にさえも、偉人を見分けることができます。」いや、實際、この通りの言

人を見分けるかどうか、よく覺えてはいませんが……何しろ子供でしたからね……しかし意味は確かにこりでしたよ！

ナポレオンはびつくりして、ちよつと考へて居りましたが、やがて、おつきの者にむかつて、「わしはこの子のブライド

が氣に入つた！ しかし、露西亞人が悉くこの子供のように考へてゐるとしたら……」その後は言わずに、宮城の中へ入つてしまひました。わしはすぐにお供の人たちに交つて、後を追つて行きました。お供の人たちは、わしに道をあけて、

まるでお氣に入りか何かのようにわしを眺めてゐました。しかし、そんなことに、ちらと眼についただけのことです……ただ一つ、今でも覺えていますが最初の廣間へ入ると、皇帝はふとエカテリナ女王の肖像畫の前に立ちどまつて、永いこと物思いに耽りながらじつと見つめてゐましたが、やがて、

「これは豪い女だつた！」といつて傍を通りすぎました。二日ほどのうちに、わしはもう宮城で、クレームリンでみんなに知られて Le Petit boyard 小ぢやな貴族 と呼ばれるよりになりました。ただ、夜だけは家へ歸つて寝みました。家ではみんな氣が狂わんばかりです。それからまた二日たつて、ナポレオンの小姓のバロン・ド・バザンクールが、遠征に疲れて死

んでしまいました。すると、ナポレオンはわしのことを思い出しました。みんなはわしをつかまえて、何のことやら説明もしないで、引つばつて行きました。そして、やつと十二になる子供だった故人の制服を、わしの體に合わせて見るのです。やがて制服を着て御前へ連れ出され、皇帝がわしにちよつとやがて見せた時に、わしは自分が恩寵を蒙つて、小姓の役を仰せつけられたことを聞かされました。實に嬉れしかつたですよ、實際、もうずつと前から、皇帝に對してかなりの好感を寄せていましたからね……まあ、そればかりではなく、御承知のように金びかの制服という奴は、子供にとつては大へんなものですからね……。わしは細くて長い裾のついた地味な緑いろの燕尾服を着ていました。金の釦、金の縫取のしてある赤い袖口、高く、びんと立つて前が開いていて金の刺繡をした襟、裾の刺繡、びつたりと足につく鹿革のズボン、白い絹のチョッキ、絹の靴下、尾錠のついた沓……、そして皇帝が馬に乗つて散策をなさる時、若しもわしがお供の仲間に入つていたら、深い長靴。戦況はあんまり香ばしくなく、それに非常な災難が豫感されていたのですが、禮式はできるだけ守られていました。しかも、そういう災難が豫感されればされるほど、いよいよ固苦しくなつたくらいでした。

「そり、無論……」と公爵は殆んど、途方にでも暮れたような風をして呟やいた、「そのあなたの記録があつたら……ずいぶん面白かつたでしょうに。」

かえすのであるから、その話ぶりもきわめて流暢なものであつた、ところが、又もや胡散くさげに公爵を尻目につけた。「わしの日記が」と彼はなお一そり得々として、いろいろであつた、「わしの日記を書いたらつて？ そんな氣にはなりませんでしたよ、公爵！ しかし、お望みなら、わしの日記はもう書いてあるんです、しかし……それはわしのデスクの中にしまつてあるのです。わしが墓の中に眠るとき、その時には世に出してもいいものですし、もとより、他の國々の言葉にも譯されるでしょう、しかし、文學的價値のためではないんで、わしが自ら目撃した莫大な事實を重んずるがためです。その頃、わしはほんの子供だったんですが、そのために一そり値打が出て来る譯です。つまり、子供として、わしは奥の奥まで、いわば、あの『豪傑』の寢室にまで入りこんだのですからね。わしはこの『不幸に陥つた偉人』の呻きごえを毎晩のように聞いたものです。彼は、子供の前で、呻いたり泣いたりするのを恥ずかしいなどと思わなかつたのです。尤もわしはすでに、彼の惱みの原因がアレクサンドル陛下の沈黙にある、ということを知つていました。」

「なるほど、そしてナポレオンは手紙を書いたでしょう……和を乞うために……」と公爵はおづおづと相槌を打つた。

「果してどんな申し込みを書いたか、詳しいことはわれわれには分かりませんが、しかし毎日、毎時間、次から次へと手紙を書いていました！ 怖ろしく昂奮しましたね。ある晩、わしは一人で、眼に涙をうかべて、彼にとびつきました。ああ、わしは彼を愛して居りました！」と、アレクサンドル

ル陛下にお詫びをなさい、お詫びを」と叫んだのです。つまり、「アレクサンドル陛下と和睦をなさい！」といわなければならぬところだつたのですが、子供のことでですから、無邪氣に、自分の考えてゐることを全部いつてしまつた次第です。すると、彼は「おお、いい子だ！」と答えました。——彼は部屋の中をあちこち歩き廻つていたので、「おお、いい子だ！」彼はその當時わしの年が十だということに、氣がつかなかつた様で、わしと話しをするのを好んでいた位でした。「おお、いい子だ！ わしはアレクサンドル皇帝ならば、潔よく足に接吻もするけれども、その代りプロシヤ王とか、オースリヤの皇帝とか、ああ、あんな奴どもは、永久に憎まざるには居られぬ！ また……しかし、結局、お前には外交のことは、何も分かんないので！」——こういつたかと思つと、急に話の相手が誰だかということを感じ出したらしく、口を噤んでしまつたのです。が、その眼はいつまでも、火のよりに光つて居りました。まあ、こういう事實をすつかり書いて御覽なさい、——全くわしはこの最も偉大なる事實の證人だつたのです。——若しも、今、それを出版して御覽なさい、あんな批評だとか、文學的虛榮心だとか、羨望だとか、または黨派だとかはすつかり跡形もなくなつて、——失禮いたし候、勿々頓首ということになりますよ！」

「この本が並み並みならぬ知識をもつて書かれたことは、専門家も保證していただけます。しかし一頁ごとに、ナポレオンの没落を喜ぶ氣持が窺われるのです。若しも、他の戦役においても、ナポレオンの才能の全貌をやりこめることができたなら、シャルラスは一方ならず喜んだことでしょう。これはこんな眞面目な本にしては、宜しくないことです、というのは、これが一つの黨派根性だからです。で、その頃、あなたはお勤めが非常に忙しかつたのですか……皇帝のところへ……」

將軍は有頂天であつた。公爵の説は、眞面目で純朴であつたから、今までどうしても拭い切れなかつた彼の疑惑をすつかり吹き散らしてしまつた。

「シャルラス！ おお、わし自身も憤慨して居たのです！ その頃あの人に手紙をやつたものでした、しかし、今はもうわしも確かなことは覺えて居りません。……あなたは、わしの勤めが忙しかつたかとお訊ねなさるんですね？ いやいや決して！ わしは小姓とは呼ばれて居たものの、もうその頃それを眞面目に考へては居なかつたのです。それに、ナポレオンは忽ちにして、露西亞人を近づけようという望みをすつかり失くして居たのです、若しも……若しも、——これは今になつて敢えて申しますが、個人としてわしを愛して居らなかつたら、政略のために近づけたわしのことでも、無論、忘れてしまつた筈です。向うでも愛して居たのですが、わしはまたわしで、心から彼に引き付けられたのです。勤めの方は氣樂なものでした。ただ時おり宮城へ伺候したり、……皇帝

の散歩に騎馬でお供をすればよかつたのです。ただそれだけのことです。わしは實によく馬に乗れましたからね。晝餐まえに彼は乗り出しましたが、お供としては不斷はダヴーと、わしと、奴隷兵のルウスタンとが……」

「コンスタン。」不意に、どうしたわけか、公爵は口を止らした。

「い、いや。コンスタンはその頃はいなかつたのです。あの人はその頃は手紙を持つて……ジョセフィン皇后のところへ行つていました。あの人の代りに二人の傳令と、四五人の波蘭の鎗騎兵がいました。まあ、それがお供の全體です、無論、そのほかにナポレオンが一しよに地形や軍の配置を視察したり、いろんな相談をしたりするために選び出した將軍や元帥などがいました。……一番よくお側についているのはダヴーで、いま覺えているところでは、大きな、肥つた、晴れない男で、眼鏡をかけて、妙な眼つきをしました。この男を皇帝は一ばんよく相談相手にして居りました。この男の考えを皇帝はかなりに重んじていたのです。今でも覺えていますが、二人が幾日も幾日も相談していることがありました。ダヴーが朝に晩にやつて来て、しよつちゆり議論さえもしていました。しまいにナポレオンも賛成しそりな様子でした。二人きりで私室にいたのですが、わしは第三者として、殆んど二人に顧みられずいたのでした。すると不意に、ゆくりなくもナポレオンの眼がわしの方へ向くのです。不思議な考えがその眼をちらついている、やがて、『子供！』いきなりわしに七言うじやありませんか、『お前はどう思う、もしわ

り何もかも決まつたので、ダヴーはいよいよの決定を迫りました。又もや二人きりになりました。わしは第三者です。又してもナポレオンは腕組みをして、部屋の中を歩き出しました。わしはその顔から眼を放すことができませんでした。わしの胸はときどきしている。『わたくしは參ります』とダヴーがいうと、『どこへ？』とナポレオンが訊ねました。『馬を鹽漬けに。』とダヴーがいました。ナポレオンは身ぶるいしました。運命は決まつた。『子供よ、』と彼はいきなりわしにむかつて言うのです。『お前はわれおれの計畫を何と思つう？』もちろん彼がこう訊いたのは、非常に偉い智慧をもつた人が、どうかすると、どたん場になつて、丁か半かを占うのと同じ譯です。わしはナポレオンの代りにダヴーにむかつて、インスピレーションをうけたかのように、こういいました。『將軍、もうお國へ逃げてお歸んなさい！』もうその案も豪なしになりました。ダヴーは肩を縮めながら出がけに小さい聲で、『Bah! Il devient superstitieux!』おやおや、この人は街幣かつきになつたと叫びました。さて、その翌くる日には、退却の命令が下つたのです。

「それは實に面白い話ですね。」と公爵はひどく靜かな聲でいつた。「若しそれが全部その通りだつたら……いや、つまり、僕のいおうとするところは……」と彼はあわてて言い直そうとした。

「おお、公爵！」と將軍は叫んだが、自分の物語にあまりにも夢中になつていたので、相手の無分別きわまる言葉にさえも、恐らく心をとめることができなかつたのであろう、「あ

しが正教を採用して、お前たちの國の奴隷を自由にしてやつたら、露西亞人はわしに従うだらうか、どうだらう？」で、わしは『決してそんなことはありません！』と憤慨して叫んだのです。ナポレオンはびつくりして、こういきました『愛國心に輝やくこの子供の眼に、わしは露西亞全國民の意見を讀むことができた。澤山だ、ダヴー！ そんなことはみんな氣まぐれだ！ ほかの案を述べてくれ。』

「なるほど、しかし、その案は立派な理想でしたね！」公爵はこういつたが、明らかに興味を感じていらした。『あなたはその案をダヴーのものとなさるのですか？』

「少くとも、二人がいつしよに相談したものです。むろんナポレオン流の理想で、鴛が考えた理想です、しかしもう一つの案も、やはり立派な理想でした……これはナポレオン自身がダヴーの獻言を呼んでいつた通り、極めて有名な

『Conseil de Lion』獅子のです。この意見は、全軍を率いてクレームリンにたてこもり、バラックを建て、塹壕を掘り、砲を配置して、できるだけ澤山の馬を屠つて、肉を鹽漬にできるだけ多量の穀類を買い入れたり、掠奪したりして、春の來るまで冬ごもりをし、やがて春が來たら、露西亞軍を突破しようといふところにあるのです。この案はひどくナポレオンの心を惹きました。われわれは毎日クレームリンの城壁をぐるぐる乗り廻しましたが、彼はどこに構築するとか、どこに眼鏡堡をつくるとか、どこに半月堡を築くとか、どこに柵舎を建てるとか、そりう指し圖をしましたが、……その慧眼で、機敏で、的確なことは大へんなものでした。とうと

あなたは『それが全部、あつたことなら、』とおつしやるんですね。しかしそれより以上のことがあつたのです。本當に、遙かにそれ以上のことがあつたのです！ そんなことはみんなつまらない政治上の事實に過ぎません。しかし、繰り返して申しますが、わしはこの豪傑の夜の涙や、呻きごえの目撃者だつたのですよ。これはもう、わしよりほかに誰も見たものはありません！ しまし頃にはもう涙を流して泣くようなことはなくなつて、ただ時おり呻いているばかりでした。しかし、その顔はだんだんと、暗い闇のようなものに蔽われて來ました。まるで、不滅の神が早くもその暗い翼で彼を蔽つてもいたかのようにでした。時として、われわれ二人は幾晩も幾晩も二人きりで、物も言わずに夜明かしをすることがありました。——奴隷兵のルウスタンはよく隣りの部屋で鼾をかいていました。あれは實によくぐつすり寝る男でした。『その代り、あれはわしに對しても、わが朝廷に對しても忠實な男だ。』とナポレオンはこの男のことをいつていました。ある時わしは實に辛い思いをしていました。その時、ふつと彼は、わしの眼に涙がうかんでいるのに氣がついて、やさしい眼でわしを見つめていましたが、『お前はわしを憐れんでいるんだな！』と叫びました。『おお、子供よ、そちのほかに、恐らく、もう一人の別な子供が、わしを憐んでくれるだらう。それはわしの息子の Le roi de Rome』王だ。ほかの者はみんなみんなわしを憎んで居る。同胞たちは第一番にこの不幸につけこんで、わしを賣るだらう！』そこで、わしはしくしく泣き出して、彼にとびかかつたのです。すると彼もたまら

なくなつて。二人は抱き合いました。二人の涙は入りまじつた。『お手紙をジョセフィン皇后様にお書きなさいまし!』とわしはしやくりをあげながらいきました。ナポレオンは身ぶるいして、ちよつと考えていましたが、『お前はわしを愛してくれらもう一人の人を思い出させてくれた、ほんとにありがとう!』といきました。すぐに彼は腰をおろして、ジョセフィン皇后に手紙を書きました。それは翌くる日にコンスタンに持たせてやりました。』

も一片の煙となつた! 『わしはお前を母親の手から奪いたくはない、だから一しよに連れて行く譯には行かない!』と、彼は退却の日にいきました。『しかし、わしはお前のために何かしてやりたい。』このとき彼はもう馬上の人となつていました。『わたくしの妹のアルバムに、何か記念のためにお書き下さいまし。』と、わしはナポレオンがうろたえて、憂鬱な顔つきをしていましたから、おそろおそろ言いました。すると、振りかえつてペンをいつけて、アルバムを取りました。『お前の妹は何歳になる?』と、その時はもうペンを持つていましたが、こらいう御下問。わしは『三歳』と答えました。』

『Petite fille alors だ。』と、アルバムへ次ぎのように書きました。

『Ne mentez jamais』

『Napoleon, votre ami sincere』

ゆめゆめいつわりごとをいうなかれ

ナポレオン敬白

「全くその通りです、公爵、あなたの解釋は何で御立派でしよう、まあ、あなた御自身のお心にそつくりです!」と將軍は有頂天になつて叫んだが、不思議にも、まぎれもない涙がその眼に輝き初めた。「それで、公爵、それで、公爵、それで、公爵、それで、公爵、わしはもう少しのところで彼について、巴里へ行くところでしたよ。そして、もう無論、『暑苦しい幽閉の島』へも行を共にしたかも知れんのですが、しかし——悲しい哉! 運命はついに二人を引き離してしまつた! われわれは別れ別れになつた。彼は——はるばると、『暑苦しい島』へ。そこで、せめて一度ぐらひは、悲痛な思いに沈むとき、モスクワで自分を抱きしめて、自分を許してくれたあの哀れな少年の涙を、恐らくは、思ひおこしたことでしよう。ところで、わしは二にも二にも訓練で、友だちといえは幾多、幼年學校へやられました。……ああ! 何もか

こんな時にこんな忠告なんです、公爵、まあ、お察し下さい。』

「そう、實に意味深長ですね。」

「この紙きれは金様の額に入れて、硝子をあてて、妹の客間の、一ばん眼につく所にかかつて置きました、あれの一生、死ぬまでです。——妹はお産で亡くなりましたが、さて、今はどこにあるのやら——知りませんが……しかし……あつ、しまつた! もう二時ですわ! すつかりお引きとめしちや

いましてね、公爵! これはこれは不届千萬。」

將軍は椅子から立ちあがつた。

「おお、とんでもない!」と公爵は口の中でもぐもぐいつた

「大へん結構なお話を伺いました……全く……面白うござい

ました。まことに有り難う存じます!」

「公爵!」と將軍は又もや痛いほど手を握りしめて、光る眼

でじつと公爵を見つめながら言ひ出した。不意に我にかえつ

たように、また、考えついて肝をつぶしたかのように見える

「公爵! あなたはとても氣だてがよくて、無邪氣なお方で

す、それで時おりあなたが氣の毒になるくらいですよ。わし

はあなたを見つめていて、胸が一ぱいになるのです。おほ

神様、この人に祝福を與えたまえ! そしてこの人の新らしい

生活が始まつて、愛……のうちに花を咲かせるように。わ

しの生活はもうお終いです! おお、許して下さい、許して

下さい!」

彼は両手を顔におしあてて、さつさと出て行つた。公爵は彼の昂奮が眞ごころから出たことを疑うわけに行かなかつた。彼にはまた、老人が自分の成功に酔いながら出て行つたという事とも、はつきり分かつていた。それにしても、彼にはやはりこんな豫感がするのであつた。すなわち世の中には情慾といつてもよいほど、夢中といつてもよいほどに好んで嘘をつきながら、しかも、すつかり無我夢中になつてゐる時でさえも、肚の中では、——自分は信用されてゐないのではな

いかな、また、信用される筈もないんだが……と、やはりこんな疑いを懷く嘘つきがあるものであるが、將軍もまたか

て、とうとう頭の調子が變になつて、殆んど氣ちがいのよ
な様子で、往來へ飛び出したのであつた。

コオリヤはやはりまだ事の真相がはつきりと呑み込めな
かつたので、きつい仕事をすれば正氣にかえらせることができ
るとさえも考えていた。

「まあ、どこへ行くんです、どういうつもりです、お父さん
？」と彼は言つた、「公爵のところはいやだとおつしやるし
レーベジェフとは喧嘩をなすつたし、お金も持つていない
でしよう。僕のところにはいつだつてあつたことがないし、
もうすつかりわれわれは往來の眞ん中で臺なしにしちやつ
た。」

「臺なしになるより、臺と一しよにいた方がいい氣持だぞ。」
と將軍は呟やいた、「この……洒落でわしはみんなを熱狂さ
せたものだ……將校仲間でな……四十四……一千……八百……
……四十四年、そりだ……しかしよく覺えて居らん……ああ、
思い出させてくれるな、思い出させてくれるなよ！『わが青
春は今いずこ、いずこにありや、わが生氣！』何という叫び
だろ……これは誰が叫んだんらう、コオリヤ？」

「それはゴゴリですよ、お父さん、『死せる魂』のなかで
す。」とコオリヤは答えて、おつおつと父を横眼に見た。

「死せる魂！ ああ、そりだ、死せる魂だ！ わしを葬ると
きは臺標へ、『死せる魂！』の臺と書いてくれよ。」

『悪名はわれを追うなり！』
これは誰がいつたんだえ、コオリヤ？」

使のよりだぞ！

「それは僕だつて知つてますよ、お父さん。ねえ、家へ歸つ
て、お母さんのところへ行きましよう！ お母さんは僕らの
後を追つかけてましたよ！ おや、何だつて立ちどまつて
んです？ 何だか僕のいつてることが分からないみたいで
すね、……おや、何で泣いてるんです？」

コオリヤ自身も泣きながら、父の手に接吻した。

「お前はわしの手に接吻しているんだな、わしの……」

「ええ、そりですよ、お父さんです、お父さんです。で
何か不思議なことでもあるんですか？ ねえ、何だつて往來
の眞ん中で吼えてるんです。それで將軍だの軍人だのといわ
れるんですか。さあ、行きましよう！」

「神様、このいじらしい少年が不甲斐なき……さよう、不甲
斐なき親爺に敬意を拂つてゐることに對して、……祝福を垂
れたまえ、ああ、この子にもまた、…… Le roi de Rome
マ王……のごとき子を授けたまえ、おお、『呪いあれ、呪い
あれ、この家に！』」

「だつて、本氣になつてそんなことをここで言つたつて仕様
がないじゃありませんか！」と、コオリヤは急にかつとなつ
た、「一體何ごとが起つたんです？ なぜ今うちへ歸るの
が厭なんですか？ 何だつて、そんなに氣が違つたんです？」
「譯を聞かしてやる、お前に聞かしてやる……お前にすつか
り話してやる、大きな聲をするな、人に聞こえるから。……
Le roi de Rome (マ王) おお、胸が悪い、憂鬱だ！
『乳母よ、おまえのお墓はどこにある！』」

「知りませんよ、お父さん。」

「エラペゴフがいなかつたつて！ エロシカ、エラペゴフが

！」ふと往來に立ちどまつて、將軍は夢中になつて叫んだ、

「しかもそれは息子の、血を分けた息子の言い草だ！ エラ

ペゴフは十一箇月の間、わしのために、兄弟の代りをしてく

れたんだ。この男のためにわしは決闘を……ヴィゴレーツキ

イ公爵というわれわれの中隊長が、酒の席でこの男にむかつ

て言つたんだ、『おい、グリーシャ、貴様はどこでアンナ章

を貰つたんだ、一つ聞かしてくれんか？』すると、『御國の

戦場で貰つたんです。』といつたから、わしは、『でかしたぞ

グリーシャ！』とどなつてやつた。まあ、こうして決闘沙汰

になつたんだ。やがて、後に……マリヤ・ペトロウナ・ス

ウ……スウトウギナと結婚したが、とうとう戦死してしまつ

たんだ……彈丸はわしの胸にかけていた勳章にあたつて、撥

ねかえつて、エラペゴフの額に命中したんだ。『永久に忘れ

ないぞ！』と叫んで、その場に倒れてしまつた。わしは……

わしは潔白に勤務したんだぞ、コオリヤ。わしは立派に勤務

して來たんだ。しかし悪名は——『悪名はわれを追うなり！』

だ。お前とニイナはわしの墓へ來てくれるだろ……『可

哀想なニイナ』と、昔はわしもこう呼んでいたんだ。コオリ

ヤ、ずつと昔まだ若かつた頃のことだ、あれは本當にわしを

愛してくれた……ニイナ、ニイナ！ わしはお前の一生を何

ということにしてしまつたのだらう！ おお、何のためにお

前はわしを愛することができたのだ。辛抱つよい女よ！ コ

オリヤ、お前のお母さんの心は天使のようだ、いいかえ、天

これは誰が叫んだんだ、コオリヤ？」

「知りません、誰が叫んだのか知りません！ すぐ家へ行き

ましよう、すぐに！ 僕はガーニヤをぶんなぐつてやりま

す若し必要があつたら……でも、またどこへ行くんです？」

しかし、將軍は近くの或る家の踏み段のところへ、彼を引

つばつて行つた。

「どこへ行くのよう？ これはよその家の上がり段だよ！」

將軍は上がり段に腰をおろして相變らず、コオリヤの手を

引つばつていた。

「しやがめ、しやがめ！」と彼はささやいた、「お前にすつ

かり聞かしてやる……面目ない……しやがめ……耳を、耳を

こつそり耳打ちしてやる」

「だつて何ですか！」コオリヤはひどく驚ろきながらも、耳

を寄せるのであつた。

「Le roi de Rome (マ王)……」と將軍はささやいたが、や

はり、體じゆうを慄わしているらしかつた。

「何です？……どうしてそんなに Le roi de Rome (マ王)の

事ばかりくどくと言つてるんです？……どうしたんです？」

「わしは……わしは……」いよいよしつかりと『己が少年』

の肩にしがみつきながら、又もや將軍はささやいた、「わし

は……聞かしてやりたい……お前に……すつかり、マリヤ、

マリヤ……ペトロウナ・スウ……スウ……スウ……」

コオリヤは振りきつて、今度は自分の方から將軍の肩をつ

かんで、狂人のようになつて、父を眺めていた。老人の顔は

眞赤になり、唇は蒼ざめ、微かな痙攣はなおもその顔を走る

のであつた。不意に彼は前によろめいて、静かにコオリヤの手へ倒れかかつた。
「發作だ！」少年はついに事の真相に気がついて、町中に聞こえるような聲で喚き立てた。

事實、ワルワラ・アルダリオ・ヴナ(ワリ)は兄と話をしたとき、公爵がアグライヤに結婚を申し込んだという消息を、いささか誇張したのであつた。事によつたら彼女は炯眼な女として、近き將來に當然おこるべきことを豫見したのかも知れなかつた。また恐らくは煙のように飛び散つた空想(實際自分でもそれを本氣にはしていなかつたが)を悲しんで、やはり一個の人間としては、不幸を誇張することによつて、心から同情して愛してはいるというものの、親身の兄の心になお一その毒を注ぎ込んで痛快がろうとする氣持を振り棄てることのできなかつたかも知れぬ。しかし、兎にも角にも、彼女は自身の友たちであるエバンチン家の令嬢たちから、それほど正確な消息を得ることができなかつたのであつた。ただほんの仄めかしだとか、中途半端な言葉だとか、意味ありげな沈黙だとか、謎だとか、そりうりものがあるばかりであつた。尤も、ひよつとしたらアグライヤの姉たちもかえつてワルワラ・アルダリオ・ヴナの方から探り出すつもりで、わざと何か口を滑らしたのかも知れない。二人の姉が友だち

と主張するようになって来た。姉たちが言明したこともその通りであつた。もとより、リザヴェータ・プロコフイヴナも誰よりも先にすつかり見ぬいてしまつて、もうかなり前から『胸を痛めて』いた。が、彼女の知つたのがかなり前であらうとも、またそうでないにしても、——この頃になつて公爵のことを考えると、急にひどく機嫌が悪くなるのであつた。というのには、主として、公爵のことを考えると何が何やら譯が分からなくなるからであつた。直ぐにも解決しなければならぬ問題が眼の前にあるのに、その解決ができないばかりではなく、哀れな夫人には、どんなにもがいて見ても、その問題をはつきりと見きわめることさえもできなかつた。この問題はむずかしかつた、『公爵は好い相手か、どうか?』このことは全體として好いことか、好くないことか? 若し好くないとすれば、(きまり切つたことではあるが)どういふところが良くないか? また若し、ひよつとして、良いとすれば(これもまた有りうべきことである)。一體どういふところが良いのか?』一家の主人であるイワン・フォードロキッチ自身も勿論、誰よりも先にびつくりしたが、後になつてから突然こんなことを白状した、『全くのところ、この頃しよつちゆう、何かそりうつたようなことを私はうすうす感づいていた。いやいや、そんなことはないと思ひながらふいと心にうかんで来る!』
彼は妻からきつい眼でにらまれて、直ぐに口を噤むのであつた。ところが、朝には口を噤んだものの、晩になつて妻と二人きりになると、又しても口をきく必要に迫られて、出し

を——幼馴染みではあつたが、——一寸からかつて見たいという女らしい快感を、振り棄てる氣になれなかつたということも、ありそふなことであつた。つまり、彼女たちが、あれほどの永い間に、ワリヤの意圖をいささかなりとも、眼にとめない筈はなかつたからである。

一方から見ると、レーベジェフにむかつて、自分には何も珍らしいことを知らせることができない、自分の身には取りたてて言うほどのことは何も起こらなかつたといつたときに全く正しかつた筈の公爵もまた、事によつたら間違つていたのかも知れぬ。實際のところ、誰もの上の身に、何かしら非常に奇妙なことが起こつたかのように見える。事實においては何ごととも起こらなかつた筈なのに、同時にまた非常に多くのことが起こつたかのように見える。この後者の場合をワルワラ・アルダリオ・ヴナは女らしい確かな本能によつて嗅ぎつけたのであつた。

それにしても、いかにして、エバンチン家の誰も彼もが、アグライヤの身の上になきわめて重大なことが起こつて、彼女の運命が決せられんとしているなどと、急にみんなが揃ひも揃つて考へるようになったのか?——筋道を立ててこのことを説明するのは極めて困難である。しかし、この氣持が一時に誰も胸に閃くや否や、忽ち誰も申し合わせたように——何もかもすつと前から見抜いていた、はつきりと見通しがついていた、何もかも既に『貧しき騎士』の頃から、或いはそれ以前にさへも、はつきりしてゐたこと、ただあの頃はそんな莫迦々々しい話を本氣にするつもりがなかつただけだ——

ぬけに一種特別な勇氣を振うかのように、思ひもよらない考へを少しばかり言い出した。「しかし、本當のところは一體どうなんだろう?……(沈黙)。若し本當だとすれば、勿論、これは不思議千萬な話だ、これにはわたしも異存はないが、……(再び沈黙)。しかし、もし別な方面から事件を正視したならば、公爵は全く、すばらしい青年だよ、そして……そして、そして——まあ、結局、家柄がね、家柄がうちと親戚關係にもなつて居るから、いわば、零落している親戚の名前を維持するという體裁にもなるから、……世間の眼から見つたり、その見地から見るとき、つまり、なぜかというところ、……もちろん、世間がだ、世間は世間だ。が、しかし、それにしては公爵もたとい少しであつても、まるで財産がないという譯でもないんだし……あの男は有つてゐるんだ……そして……そして、そして……(長き沈黙のち遂に全く言葉絶えたり)良人の言葉を聞いて、夫人はすつかり我慢がしきれなくなつた。
彼女の意見によると、この出來事は悉く、『赦すべからざる、犯罪的とさへもいえるほどのナンセンスであり、一種の馬鹿げた、お話にもならない夢物語であつた』という。何より先ず、『この公爵様は病氣もちの白痴であり、第二には世間も知らなければ、社會上の地位も持つていない馬鹿者である。こんな人間を誰に見せられるものか、どこへ世話ができればいいのか! 一種の許すべからざる民主主義者で、おまけに位階もない。そして……そして……そして……ペラコンスカヤのお婆さんが何というだろう? しかも、みんな、あんな

なあんな花婿を想像して、アグララーヤのために豫定していたのかしら？」この最後の論據は、いうまでもなく最も重要なものであつた。母の胸はこれを考へるとき血と涙で一ぱいになつた。尤もそれと同時に胸の奥の方では、何かしらうごめいて『さればといつて、公爵のどんなところがお前の要求に合わないのか？』と囁やいていた。さて、こうした自分自身の心の反抗は、夫人にとつて何よりも厄介なものであつた。

アグララーヤの姉たちにはどうした譯か、公爵のことを考へることが好ましいこととなつていた。それ程おかしいことだとも思わなかつた。要するに、忽ちにして二人はすっかり公爵の味方とさえもなつていたのである。が、二人とも黙つてゐることに覺悟を決めていた。この家庭で、常に氣づかれることは、何かしら家族に共通した論點について、リザヴェータ夫人の反抗や反撥が執拗に、頑固になればなるほど、それがほかの誰にも對して、恐らく夫人がもう我を折つてゐるだろうという證據になることであつた。しかし、アレクサンドラの方はやはり全く黙り通すというわけには行かなかつた。既にかなり前から、母は彼女を相談相手にしていたので、今度もしよつしゆう彼女を呼び出して、その意見を、——しかも主として追憶を要求するのであつた。つまり、『一體、どうしてこんなことが起きたのか？ あの時の厭やらしい貧しき騎士』はどんな意味だつたのか？ なぜ自分ばかりが、あらゆることに氣をつかつたり、氣をつけたら、先を見抜いたか？ 一しよになつて鴉の數をかぞえたりして居られるのは、ど

ういふ譯なのか？』等々。

アレクサンドラは最初のうちは用心して、ただ——エバンチン家の娘の一人に、ムイシキン公爵を良人として選ぶのは世間體からいつて悪くはないだろうといつた父の意見が、かなり正確な氣がすると——いつただけであつた。ところが次第々々に熱して來ると、彼女はこんなことさえも附け足した。——公爵は決して、『馬鹿』ではない、一度だつてそんな風を見せたこともない、ところで、職業という點になると何年か後のおが露西亞において、相當な人物の使命がどこにあるか——これまでのような勤務の方での成功が、それともその他の事業か、そんなことは神様にしか分かりはしないではないか——などというのであつた。これに對して母は早速アレクサンドラを『自由思想だ、そんなことはあの連中の悪むべき婦人問題だ』といつてやりこめた。それから半時間にして、夫人は市内へ出かけた。それから、ベラコンスカヤのお婆さんに會いに岩島へ行つた。お婆さんは幸いにも偶然にベテルブルグへ來ていたからである。尤も、すぐに歸ることにはなつていた。ベラコンスカヤはアグララーヤの教母であつた。

ベラコンスカヤの『お婆さん』はリザヴェータ夫人の熱病やみのような、やけくそな告白をすっかり聞いてしまつたが、途方に暮れた母親の涙に少しも心を動かさず、却つて嘲るよりに見つめていた。お婆さんは怖ろしい專制君主なので、他人との付き合ひに、それがたとい昔からのものであるうとも對等といふことにはどうにも我慢がならなかつた。そこで、

リザヴェータ夫人をも三十年の昔と同じよりに、全く自分のProsees 被後 扱いにして、夫人のはげしい獨立的な氣象に馴染むことができなかったのである。お婆さんはいろいろな意見のなかで、こんなことをいつた、『どうもあんな方は皆いつもの癖で、あんまりお先走りをし過ぎて、針を棒にしてゐる』らしい。わたしにはどんなに聞き耳を立てても、あんな家で本當に何か大變なことが起こつたとは、呑み込めない。いつそ本當に何か起こつて來るまで待つていた方がよくはないかしら、わたしの考へでは、公爵も相當の若者だ、病身で變人で、あまり世間へ出て眼につかぬ過ぎるけれど、が何よりも感心できないのは、明らかに變人を圍つておくことだ。』

リザヴェータ夫人には、お婆さんが自分の紹介したエヴゲニイの失敗によつて少しく腹を立ててゐることが、實によく分かつていた。彼女は出かけて行つた時よりも、よけいにいらいとした氣持で、バヴロフスクの家に歸つて來たが、すぐに家の者に入つあたりを始めた。主なる理由は、——みんなが「氣がちがつてしまつた、誰のところだつて、物事を全くこんな風に運んで行くところはありはしない、うちばかりだ、何をそんなにあわてるんです？ 何事が起こつたのです？ わたしには、どんなに横から見ても縦から見ても、本當に何か變つたことが起きたとは、どうしても思われません！ 本當に起こつて來るまでしばらく待つてらつしやい！ お父さんの頭にとんでもない考へがちらちらするのは、今に始まつたことじやありません、針のようなことを棒のようにするの

はよして頂戴！』といふようなことであつた。

して見ると、氣を落ちつけて、冷靜に眼を据えて待つていたらよいといふことになる。しかし、——悲しいかな、落ちつきは十分間とはつづかなかつた。落ちつき最初の打撃を興えるものは夫人が岩島へ行つた留守中の出來事についての消息であつた。リザヴェータ夫人が上京したのは、公爵が九時すぎに行くべきところを十二時すぎに訪問したその翌朝であつた。二人の姉は、母親のじれつたそりな質問に對して、詳細に亘つて答へたが、先ず第一に『お母さんの留守中には、決して何にも起りはしなかつたらしい。』と言ひ、公爵がやつて來たこと、アグララーヤが永いこと、三十分ほども出て來なかつたが、やがて出て來るや否や、早速公爵に將棋を差そうといつたこと、公爵が將棋の駒を動かすことも知らないで、忽ちアグララーヤに負かされてしまつたといふこと、そして彼女は非常に陽氣になつて、公爵の無能ぶりをこきおろして恥ずかしい思ひをさせ、ひどくからかつたので公爵は見る影もない位になつたといふようなことを説明した。何でも、それから彼女はカルタの『馬鹿あそび』の勝負を申し込んだといふ。ところが、今度はまるで反對の結果になつた。公爵は『馬鹿あそび』の方では丁度、先生『ほどの腕前』があることが分かつて、かなり達者な手を用いた。とらうとうアグララーヤはずるいことを始めて、札をかえたり、公爵の眼の前でいんちきをしたりした、それでもやはり公爵はつづけざまに、五度も、彼女に背負投げを食わしてしまつた。アグララーヤはひどく腹を立てて、すつかり前後を忘れてしま

つたほどであつた。公爵にむかつて、散々いや味をいつたり失敬なことをいつたりしたので、公爵も遂には笑わなくなつてしまつた。彼女が「あなたがいらつしやる間は、この部屋に足ふみしませんよ。あんなことであつた後で家へ出入りなさるの、しかも、夜の十二時すぎにいらつしやるのは、あなたとしてあんまり向う見ずやありませんか。」といつた時には、彼はすつかり血の氣をなくしてしまつた。そういつて彼女は、彼はすつかり戸を閉めて出て行つてしまつた。公爵は姉たちがどんなに慰めてやつても、まるで葬式からの歸りのように、悄然と歸つて行つた。公爵が去つてから十五分もたつたころ、突然アグララーヤが二階から露臺へ駈け下りて來たがあまりに急いだので、眼を拭く間もなかつたくらいであつた。彼女の眼は泣き濡れていた。彼女が駈け下りて來たのは、コオリヤが針鼠を持つて來たからであつた。一同はその針鼠を眺めはじめた。コオリヤはみんなの質問に對して、この針鼠は自分ではないといふこと、自分はいま一人の友だちであり中學生のコスチャ・レーベジェフといつしよに歩いてゐるのだといふことを説明した。この友だちは手斧を携へてゐるのが恥ずかしいといつて、中に入らずに往來で待つてゐるのだといつた。また、針鼠と手斧は、たつたいま通りすがりの百姓から買つたのだともいつた。百姓はその針鼠を五十哥で賣つたが、手斧の方は二人の少年が、序でもあり、かなりによい品であつたので、無理に賣つてくれとこちらからねだつたのである。ところが、今度はアグララーヤが今すぐその針鼠を賣つてくれと、だしぬけにしつこくコオリヤに附

きまどつて來て、我をも忘れてコオリヤを「可愛い子だ」などとまで言い出した。コオリヤは暫らく承知をしなかつたがとうとう降参して、コスチャ・レーベジェフを呼び入れた。コスチャはたしかに手斧を持つて入つて來たが、かなりにどぎまぎしてゐた。が、すぐに、この針鼠は二人のものではなくて、ペトロフとかいうもう一人の第三の少年の持物であることが分かつて來た。この少年は、また別な金に困つてゐる第四の少年から、シュロツセルの『歴史』を安く買うつもりで、二人の少年に金を渡して依頼した。そこで二人はシュロツセルの『歴史』を買いに出かけたが、とうとう辛抱がしきれなくなつて、針鼠を買つたのであつた。従つて、針鼠も手斧もこの第三の少年のもので、二人の少年は、『歴史』のかわりに、これらのものを持主のところへ持つてゆくところなのである。然るに、アグララーヤがあまりうるさく附きまどつたので、二人はとうとう針鼠を賣ることにした。針鼠を手に入れや否や、アグララーヤはコオリヤに手傳つてもらつて、それを編籠に入れ、上からナブキンをかけて、コオリヤにむかつて、今からすぐどこへも寄らないで、針鼠を公爵に届けて貰いたい、自分の名をいつて、『深い深い尊敬のしるし』として受け取つてもらつてくれと頼みにかかつた。コオリヤは喜んで承知し、必らず届けますと、誓いまで立てたが、すぐに「たい針鼠のような贈り物に、どんな意味があるんです？」としつこく訊ねた。アグララーヤは、そんなことはあんたの知つたことじやありませんと答えた。すると、彼は、きつと何かの諷刺が含まれてゐるのに相違ありませんと答えた。

アグララーヤは怒り出して、あんたはまだ戯鬼です、それだけのことですと、辛辣なことをいつた。コオリヤはすぐに反駁して、若し僕があなたを婦人として尊敬しなかつたら、そのうえ自分の信念を尊重しなかつたらそんな侮辱に對する返事の仕方を知つてますから、それを早速お眼にかけましようと言つた。尤も、結局のところ、やはりコオリヤは喜び勇んで針鼠を持つて行つた。コスチャ・レーベジェフもその後から駈けて行つた。アグララーヤは少年があまり籠を振り廻わすのを見て、たまらなくなつて、露臺から大きな聲で、「頼みますからね、コオリヤさん、落つことさないで頂戴よ、いい子だから！」とまるで今しがた喧嘩したのは別の人となつたやうな調子で叫んだ。コオリヤも立ちどまつて、喧嘩などはしなかつたかのように、非常な御機嫌で、「いいえ、落つことしませんよ、アグララーヤ・イワーノヴナさん、安心していらつしやい！」と叫んで、また一目散に駈け出した。アグララーヤはその後で、ころげんばかりに、聲を立てて笑いながら、大満足の體で、居間へ駈け込んだが、その日は一日じゆう、怖ろしく浮かれていた。

こゝろいつたやうなニュースは、全くリザヴェータ夫人を啞然たらしめた。どうしてそんなことになつたのかとも考えられる。しかも明らかに、そゝろいつたやうな變な氣分になつていたのである。夫人の不安はその極に達した。何よりも變なのは——針鼠である。「針鼠に何の意味があるんだらう？何の約束があるんだらう？ どんな下ごころがあるんだらう？ 一體なんのしるしだらう？ 何という電報であらう？」

おまけに、可哀想にも、偶然その審議の場に居合わせたイワン・フョードロキッチが、とんでもない返答をして問題をすつかり臺なしにしてしまつたのである。彼の意見によると、何も電報なんかというのにはありはしない、針鼠は——「要するに針鼠であつてそれだけのことである。尤も、そのほかに友誼とか、侮辱を忘れての仲直りをするとか、それくらいの意味はあるかも知れぬ。一言にしていえば、これはほんのいたずらである、しかも、兎に角、無邪氣な、罪のないいたずらだ。」といふ。

こゝで序でに書きとめておくが、彼はすつかり本當のことを言い當てたのである。散々からかわれた末に、追い出されて、アグララーヤのところから歸つて來た公爵は、暗澹たる絶望に浸つて、半時間ばかりもじつと坐つていたが、そこへ忽然として、コオリヤが針鼠を持つて來たのだ。忽ちに空模様は明るくなつて、公爵はまるで、死人が蘇つたかのようになつた。コオリヤにいろんなことを根掘り葉掘りして、その一言一句を耳にとめて、一言を十遍くらいも訊き返して、子供のように笑つては、絶えず自分の方を微笑みながら、明るい眼つきで見つめてゐる二人の少年の手を握りしめていた。問題の結果は、アグララーヤが彼を許すといふことになつて、公爵は、今晚すぐにもまた彼女の家へ行つてかまわないことになり、これが彼にとつてはただ單に重大なことであるばかりではなく、むしろ全部とさえもなるのであつた。

「僕たちはまだほんとに子供ですね、コオリヤ！ そして：僕たちが子供だつてことは、ほんとうに結構なことす

！」ついに彼は夢中になつて叫ぶのであつた。

「話とはともあつさりしたことです、あの人がね、あなたを戀してゐるんですよ。それだけのことです！」コオリヤは一人前の顔をして、ひどく高飛車に答えた。

公爵は顔を赧くしたが、そのときには一言も物をいわなかつた。コオリヤはただ聲を立てて笑いながら手をたたくばかりであつた。暫らくして公爵も笑い出した。それから日が暮れて夜になるまで彼は五分ごと、もうよほど経つてゐるだろうか、晩までにかなり間があるだろうと、しきりに時計を見ていた。

結局、リザヴェータ夫人は気分には克てなかつた。夫人はとうとう辛抱がし切れなくなつて、ヒステリーの發作に負かされてしまつた。夫人は二人の娘たちがあれやこれやといつて引き止めたのにも拘わらず、直ぐにアグライヤを迎えにやつた。アグライヤにいよいよ最後の質問を發して、はつきりした最後の返答を得ようとしたのである。「こんなことは一時にすつかり片づけてしまつて、すつかり身輕になつて、これらは二度と口に出さないようにしたい。」「それが分からなければ、わたしは晩までも生きては居られませんか！」と夫人はいつた。ここにおいて、ようやく、問題がお話にならないよりのな事になつてしまつたといふことを誰もが悟つたのであつた。それにしても、わざとらしい驚ろきと笑いと、公爵および、その他、このことを云々する凡ゆる人々に對する嘲りと——それ以外には何ひとつアグライヤから聞き出すことができなかった。リザヴェータ夫人は床に就いて、やつと公爵

が訪ねて来る間際になつて、茶のテーブルに出ただけであつた。彼女はぶるぶる慄えながら公爵を待ちかまえていたが、やがて彼がやつて来た時には殆んどヒステリーにならなばかりの有様であつた。

さて、公爵自身もおぼつと、手さぐりでもするようにして妙な微笑みをうかべながら入つて来た。何か質問でもするよりに一同の顔色を窺つていたが、それはアグライヤが又もや部屋にいなかつたので、入つて来るや否やぎくりとしたからである。その晩は、他の人は一人も来て居らずに、一家水入らずであつた。S公爵は伯父のエツゲニイ・パーヴロキッチの用件でまだベルブルグへ行つていた。「せめてあの人ももいてくれたら、何とか言つてくれるだろうに。」とリザヴェータ夫人はこの人のいないのを情けなく思つていた。イワン・フョードロキッチはひどく心配そりな顔をしてじつとして居り姉たちは眞面目な顔をして、わざとらしく、黙り込んでいた。リザヴェータ夫人は何から切り出していいのやら分からなかつた。とうとう、いきなり氣色ばんで、鐵道を罵倒し、あくまでも挑戦的な態度で公爵を見つめるのであつた。

嗚呼！アグライヤは出て来なかつたのだ。公爵は途方に暮れた。彼は茫然として、やつとのことで呂律を廻しながら鐵道を修理することは極めて有益なことであるといふ意見を述べかけたが、不意にアジェライダが笑い出したので、公爵はまた蕩なしになつてしまつた。折しもアグライヤが靜かに入つて来て、公爵に對して物々しく、甚々しい會話をして

取り早くいふと……

彼は息がつまつたので、黙り込んでしまつた。

から圓テーブルのそばの最も眼につき易い所へ嚴かに眼をおろした。彼女は物問いたげに公爵を見やつた。一同は、あらゆる疑惑の解決さるべき時の到來したことを悟つた。

「わたしの針鼠を受取つて下さつて？」と彼女は、力強く、殆んど腹立たしげに訊ねた。

「ええ。」と公爵は眞赤になつて答えたが、もう生きた空もなかつた。

「このことについてどうお考えですか、すぐここで説明して下さいな。これはお母さん始め、家じゆりの人を安心させるために是非とも必要なことですから。」

「これ、アグライヤ……」と將軍は急に心配し始めた。

「それは、それは途方もないことです！」リザヴェータ・プロコフィエーヴナは急になせかしら愕然として叫んだ。

「途方もへつたもありやしないわ、この場合、ママ！」と娘は即座に嚴めしく答えた。

「わたしはきより公爵に針鼠を送りました、それで、公爵の御意見を伺いたいです。一體、どうなの、公爵？」

「とうとう、つまりどんな意見ですか、アグライヤ・イワノヴナさん？」

「針鼠のこと。」

「つまり、……アグライヤ・イワノヴナさん、して見るとあなたは僕がどんな風に……針鼠を受け取つたかということが知りたいんですね……いや、何ですね、僕がこの贈り物を……針鼠をどんなに見たかといつた方がいいかも知れませんが。つまり、……僕の想像では、こりいう場合に、……手つ

「まあ、少ししか仰つしやらないんですね。」五秒ほど待つてから、アグライヤはこり言つた。「よござんすわ。針鼠はそれでよしにしても結構ですわ。でも、わたし、ほんとに嬉しいの、積もり積つた誤解を、やつと、きれいさっぱり、片づけることができるんですものね。失禮ですけど、あなた御自身から、じかに聞かして下さいな。あなたわたしに結婚を申し込んでいらつしやるの、どうなの？」

「まあ、何だろり！」といふ叫び聲がリザヴェータ・プロコフィエーヴナの口をもちて出た。

公爵はぎよつして、後ずさりした。イワン・フョードロキッチは棒立ちになり、姉たちは苦い顔をした。

「嘘をいわないで頂戴な、公爵、本當のことをいつて頂戴。あなたのお蔭で、わたしは變なことばかりしつこく訊かれるんですからね、あんな質問にも何か曰くがあるのかしら？」

「さあ！」

「僕はそんな申し込みなんかしませんよ、アグライヤさん。」と公爵は急に元氣づいて答えた。「けれど……あなた御自身でも御存じの通り、僕はあなたを愛し、また、信じています……今でさえも……」

「あたしが訊いたのは、こりいうことなんですよ、あなたはわたしと結婚したいんですか、そうでないんですか？」つて。

「したいです。」公爵は生きた心地なく答えた。

一座のはげしい動揺がこれにつづいた。

「そんなことはみんな話が違いますよ、君。」とイワン・フォードロキッチはひどく昂奮しながら言い出した。「もしそうだとすれば、それは……それは殆んど無理な話だ……グラシヤ……御免なさい、公爵御免なさい、ね……ねえ、リザヴェータ！」と彼は助けを求めて妻の方を向いた。「よく吟味を……する必要が……」

「わたしはお断りします、お断りします！」と夫人は両手を振った。

「ママ、わたしにも口をきかして下さいな。だつて、この問題では、本人のわたしだつて、何かの引つかかりがありますものね。わたしの運のきまる大變な時ですものね。(アグララーヤは實際にこういふ言葉づかいをしたのであつた。) だから、わたしも自身でお訊きたいんです。そのうえ、みんなの前だから嬉しいわ……。ねえ、公爵、失禮ですけれど、若しあなたが『そういう御意向をもつて』いらつしやるのでしたら、どういふ風にして、わたしを幸福にして下さるおつもりですの、聞かして下さいな?」

「僕はほんとに何とお答えしていいやら分からないんです。アグララーヤさん。今……今、何といつてお答えしたらいいのでしょうか? それに……必要があるでしょうか?」

「あなたはどりやら、まごついてしまつて、息切れがするようですわね。少しお休みになつて元氣を恢復なすつたら。水でも召しあがつて御覽なさい。尤も、今すぐお茶が出ますよ」

*アグララーヤの愛稱。(譯者註)

もなりませんね。侍従武官になる氣がありますか?」

「侍従武官? 僕は、そんなことは一寸も想像したことはありません、けれど……」

ここで二人の姉はたまらなくなつて、ふつと、噴き出してしまつた。もうアグララーヤはびくびくと動くアグララーヤの面差に、一生懸命になつて抑えつけている笑いが、今にもこらえ切れなくなつて爆發しそふなのを、かなり前から眼にとめていた。アグララーヤはしきりに笑つてゐる姉たちを嚴めしそふに睨んでいたが、自分でも一秒とは我慢ができなくなつてかなりに氣ちがいがつて、殆んどヒステリカルな高笑いをして、遂には、跳びあがつて、部屋から駈け出してしまつた。

「わたし、元から、冗談だけで、あとにはなんにもないことよく分かつてたわ!」とアグララーヤは叫んだ。「初めつから、針鼠の時から!」

「いいえ、もうこんなことは黙つておけません、黙つておけません!」と、リザヴェータ・プロコフィーヴナは、かんかんになつて怒つて、まつしぐらに娘の後から追い駈けて行つた。

その後から直ぐに二人の姉も駈け出した。部屋の中は公爵とこの家の主人だけになつた。

「これは、これは、……君は何か、こういつたよなことを想像することができましたか、レフ・ニコライキッチ君?」將軍は自分でも何を言おうとしているのか分らずに、鋭い調子で叫んだ。「いや、眞面目な、眞面目な話だ!」

「アグララーヤ・イワーノヴナさんが僕をからかつたんです。」

ど。

「僕はあなたが好きなんです、アグララーヤさん、とても好きなんです、あなた一人が好きなんです、そして……からかわないで下さい。僕はとてもあなたが好きなんです。」

「けど、これは大事なことですわ。わたしたちは子供ではありませんが、實際的に物事を見きわめなければなりません……御面倒でしょうけれど、今ここで説明して下さいな、一體あなたの財産は何々でしょうかしら?」

「まあ、まあ、まあ、アグララーヤ! お前は何です? そんなことは別問題だ、そんなことは……」

「不名譽だ!」と聲高らかにリザヴェータ・プロコフィーヴナが呟やいた。

「氣がちがつたんだわ!」とこれも大きな聲でアレクサンドラが呟やいた。

「財産……つまり、金ですか?」と公爵は驚ろいた。

「僕……僕はいま三萬五千留もつています。」と公爵は顔を赧くしてささやいた。

「たつたの?」とアグララーヤは赧い顔もせず、大きな聲で遠慮會釋もなく、驚ろきの聲をあげた。「もつとも、それだけでも構わないわ。わけても、つましくやつて行きましたらね……勤めでもなさるおつもり?」

「僕は家庭教師の試験を受ける氣でいました……」

「大へん都合ですわ。むろん、うちの財産を殖やすことに

それは自分にも分かります。」と公爵は物悲しげに答えた。「待つてくれたまえ、君、わたしはちよつと行つて来るから待つてゐるんだよ、……なせつて……ねえ、レフ・ニコライキッチ君、せめて君でも、よく説明してくれたまえ、せめて君でも。一體どうしてこんなことが起こつたんだらうね? 全體的に見て、いわば、綜合して見てこれは一體、どういふ意味になるんだらう? いいかえ、君、わたしは——父親の身だ、兎にも角にも、父親じやないかな。それなのに、何が何やらとんと分からん。そんな譯だから、せめて君でも、一つ聞かしてくれ給え!」

「僕はアグララーヤ・イワーノヴナさんが好きなんです。あの人はよく、それを承知しています。そして……ずつと前から知つてゐるらしいです。」

將軍は肩をすくめた。

「變だなあ、變だわい……で、大好きなのかね?」

「ええ。」

「變だな、何もかもわたしには變な氣がする。つまり、思いもよらん不意打で、……ねえ、君、わたしのいふのは財産のことじやないよ(尤も、もう少しよけいにあるんだらうと、當てにはしてたけども)しかしだね……あたしにとつて娘の幸福が……結局、……君はできるのかね、いわば、その……幸福をだな? そして……そして……あれは何かね? 女の子の方では、冗談なのか、本氣なのか? つまり、君の方ではなく、あの子の方ではだな?」

ドアのかげから、アレクサンドラ・イワーノヴナの聲が聞

た。「どういふ譯であなたは……お詫びなんか……なさるんです……」

彼はお詫びなんか言つて貰える柄ではないとさえ言いたかつた。事によつたら彼も『何の足しにもならない馬鹿げたこと』という言葉の意味に氣がついたかも知れない。しかも、變人であつたから、却つてかよひな言葉を聞いて喜んだかも知れない。もとより彼にとつては、誰にも妨げられずに、アグラーヤのところへ遊びに来て、彼女と共に言葉を交わしたり、席を同じうしたり、一しよに散歩することまでを許してもらふという、そのことだけでも既に幸福以上のものであつたには相違ない。また、若しかしたら、ただそれだけで一生涯、満足して居られたかも知れぬ！（この満足をリザヴェータ・プロコフィエフナは心の中でひそかに怖れているらしかつた。夫人には彼の人となり、よく分かつていた。彼女は心の中でいろんなことを怖れてはいたが、それを自ら口に出すようなことはとてもできなかった。）

その晩、公爵がどの程度にいきいきと元氣づいたかといふことは容易に想像することもできない。彼はひどく陽氣になつて、わきから見ただけでも、實に愉快そりであつた——と後でアグラーヤの姉たちがいつた。彼はさかんに喋つていた。こんなことは半年の前、初めてエパンチンの家の人々と近づきになつたあの朝以來、絶えてなかつたことである。ペナルブルグへ歸つて來ると、彼は眼立つて、故らに無口になつた。つい近頃のことであるが、彼はみんなのいる前で、公爵にむかつて自分は是非とも自分を抑えて、沈黙を守らな

おとすまいとしてゐるんです！」と、後になつてリザヴェータ・プロコフィエフナは良人にいふのであつた。「ところであれが戀をしてるなんかと言おうものなら、それこそ大さわざになりませうよ！」

「仕方がない——運命だ！」と將軍はひよいと肩をすくめた。それから後も暫らく、このお氣に入りの言葉をくりかえしていた。序でに付け加えておくが、將軍は事務家肌の人間として、こりいつたような現在の状態に非常に多くの氣に喰わな

いものをもつていた。それは主として——物ごとの曖昧なことであつた。しかし、或る時期の來るまで、黙つて、……リザヴェータ・プロコフィエフナの眼の色を見ていようと決心してはいた。

家族たちの愉しい氣分はそう長くはつづかなかつた。アグラーヤはすぐその翌くる日に公爵と再び喧嘩をした。かくのごとくにして幾日も幾日も絶えず繰り返されるのであつた。彼女は何時間も、つづげさまに公爵を手玉にとつて、殆んど道化扱いにせんばかりであつた。事實、二人きりで、一時間も二時間も自分の家の庭にある東屋に腰かけていることもないではなかつた。そういうとき、殆んどいつものように公爵はアグラーヤに新聞だとか、何かの本などを讀んで聞かして

てはならない、といふのは、自分は思想を述べることによつて、思想を卑しめるほどの柄ではないからだと言つた。

この晩、彼は一晚じゆう殆んど一人で喋つて、いろんな話をしてはいたが、みんなから物を訊かれると、はつきりと、大喜びで、くわしく返答をしていた。それにしても、戀物語に似たようなことは、少しも彼の言葉の中に窺われなかつた。何を話しても、ひどく眞面目で、どうかすると、難解な思想にまでも及んで行つた。公爵は自分の見解や、自分の胸の中に深く秘めてゐる觀察までも披瀝したが、この方になると、若しも、そのとき聴いていた人たちが後になつて異口同音にいつたようにあれほどまでに『立派な述べ方』をしていたのでなかつたら、却つて滑稽なものにさえなつたかも知れぬ。將軍は眞面目な話題を好んだ、が彼もリザヴェータ夫人も、共に心の中では『あんまり學問的であり過ぎる』と考へて、そこでしまし頃には、二人とも憂鬱にさえなつていた。とはいへ公爵は、しまし頃には、五つ六つ、滑稽きわまる逸話を物語るほどのいい機嫌になつて、話をしながら自分が先ず第一に笑い出すので、ほかの人たちは逸話そのものよりも、公爵の嬉しそうな笑い方がおかしいといつて頻りに笑つていた。

アグラーヤはどうかというに、彼女は一晚じゆう、殆んど物をもいわなかつた。その代り、じつと公爵から眼を放さずに耳を傾けていたが、耳の方は眼よりも寧ろ、おろそかであつた。

「あんなに見とれてゐるでしよ、眼も放さずに。あの人のいふことを一言一句、耳にとめて、あんなに一生懸命に聞か

て方はお氣の毒な方ね。」

「僕はそんなに博學じやないつて、あなたに言つた筈です。」と公爵は答へた。

「して見ると、一體あなたには何があるんでしよ？ そんなことで、わたしはどうしてあなたを尊敬することができるとでしよ？ まあ、後を讀んで頂戴。けど、もういいわよ、よして頂戴。」

その晩のうちに、何かしら、一同の者にとつて、かなりに謎めいたものが、アグラーヤの素振りのうちに、ちらと眼に

ついた。

S公爵が歸つて來たので、彼女はかなりに愛想よく、いろいろとエウゲニー・パーヴロキッチのことを訊ねた。（ムイシキン公爵はまだ來ていなかつた。）ふとS公爵はリザヴェータ・プロコフィエフナが、うつかりして、二つの結婚式を同時に擧げるために、ひよつとすると、アデライダの結婚式が延びることになるかも知れないと口を迂らしたのを、だしに使つて、『やがて來らんとしている新しい家庭内の變化』をほめかした。アグラーヤが、いかばかり『こんな馬鹿げた豫言』に對して腹を立てたかは、想像に餘りあるものであつた。しかも『わたしはまだ、誰の戀人の代りを勤める氣もありませんよ。』という言葉が彼女の口から洩れたのであつた。

この言葉は一同の者、わけても兩親を一方ならず驚ろかした。リザヴェータ・プロコフィエフナは良人と内々に相談してナスターシャ・フィリップソフナの件について、公爵からきつぱりした釋明をしてもらおうと主張した。

イワン・フォードロキッチは、それはほんの『出まかせ』で、アグライヤの『はにかみ』から出たことであり、若しもS公爵が結婚式のことなど言い出さなかつたら、そんな出まかせもいわなかつたに相違ない、なぜなれば、アグライヤもそれが、悪人どもの言いがかりだということを、よく知つてゐるからである、また、ナスターシャ・フィリップポヅナはラゴージンと結婚する筈で、公爵はそのことには何の關係もない筈で、あくまでも本當のところをいうと、ただ、單に、情交がなかつたというばかりではなく、今までにだつて、そんなことは決してなかつた筈だ——と夫人に誓うのであつた。

病人は肺病患者にありがちなように、急に元氣づいたらし
かつた。

彼は、公爵の幸福そうな顔つきを見て、何か毒舌を揮つてやろうというつもりで寄つて來たのであるが、早速、先手をうたれてしまつて、仕方なく自分のことを言い出した。彼は長々と、いろんなことをこぼし始めたが、ひどくとりとめのないものであつた。

「あなたは、まさかとお思ひになるでしょうが、」と彼は結んだ、「あすこの連中はどいつもこいつも實に癩癩持ちで、こせこせして、エゴイストで、見え坊で凡くらなんですよ。本氣にはなさらないでしようけれど、あの連中が僕を引き取つたのは、外でもない、僕が少しでも早く死ぬようにという條件づきなんですよ。ところがどうでしょう、死にそうにもなく、かえつて前よりも工合がよくなつたもんですから、憤慨してゐるんですよ。まるで喜劇です！ 賭けをしてもいいですが、あなたは僕のいうことを本氣にしないんですよ！」

「たびこうだと思ひ込んで、彼はもうどんなことがあつても、動かされなかつた。事によると、あまりに落ちつき過ぎていたかも知れなかつた。少くとも、或るとき、ゆくりなくも公園で公爵に出あつたときのイッポリットにはそういう氣がするのであつた。

「僕はあの人たちが君を呼んだのは、何かはかに當てがあつたと思つてました。」

「さうして、君が君を呼んだのは、何かはかに當てがあつたと思つてました。」

「さうして、君が君を呼んだのは、何かはかに當てがあつたと思つてました。」

「ハ、あなたは何だ、あなたは何だ、あなたが悪い心でしよ、若しよかつたら、僕はちよつとあなたに、ガ、ネチカのことだの、あの男の見込みのことだの、ぶちまけてあげたいんです。あなたは陥し罠を掘られてゐるんですよ、公爵、残酷に陥し罠を……だから、そんなに落ちつき拂つていられるのが氣の毒なくらいです。でも、仕様がな……あなたには、さうしてゐるよりほか、できないんですからね！」

「僕は時おり、あなたのところへ引つ越そうかと思つてゐる位です。」と、ぞんざいな調子でイッポリットは附け足した、

「では、あなたはやつぱり、いくらあの連中だつて、是非とも少しでも早く死んでくれなんかというつもりで、他人を引き取るような浅ましい人たちではないと、さう思つてらつしやるんですね？」

「まあ、大へんなことで同情されましたね！」と公爵は笑い出した、「じゃ、一體、君の考えでは、どうなんですか、僕がもう少し落ちつき拂つていなくなつたら、一そう幸福だらうというんですか？」

「幸福で、……馬鹿になつて生きてゐるよりは、却つて不幸でも、物ごとをよく知つていた方がましですの。あなたは一寸も、競走者があるということを、本當になさらないようですわね？ しかも、……あの方面にですよ。」

「競走者があるという君の言葉は少々皮肉ですね。僕には残念ながら君にお答えするいわれはありません。ただ、ガザリイラ君のことになると、まあ、自分で考えてみて下さい、あれを失つた後で、落ちつき拂つていられるものかどうか？ 若し君が少しでもあの人の問題を知つてゐるんだつたら、……僕には、この見方から見て行つた方が却つていいよな氣がするんです。あの人はまだ變化する餘地があります。あの人はまだまだ前途があるんです。人生というものはなかなか味があるものですからね……尤も……尤も……」と公爵は急

「いいえ、この苦しみを受ける値打がないからです。」

「より以上に苦しむことができた人は、當然、より以上に苦しみを受ける値打があります。アグライヤさんは君の告白を讀んだとき、君に會いたがつていました、けども……」

「延ばしてゐるんですよ……あの人にはできません、それは分かつてます、よく分かつてます……」

「イッポリットは少しも早く話題を變えようと努めてゐるかのようには遮つた、」

「序です、あなたは自分であのくだらない話をアグライヤさんに讀んで聞かしたさうですね。全くあれは熱に浮かされて書いたんです……こしらえたんです。だから、あの告白をもつて僕を責めたり、またあれを僕に對する武器として使おうと思えば、——残酷にはいいいけません、それは僕とつて侮辱になりますから、極度に子供らしく見え坊で、執念ぶかくならなくちやなりません！ 心配しないで下さい、僕はあな

たのことをいつてるんじやありませんから。」

「しかし、君があつた原稿をつまらないつて言われるのは、惜しい気がしますね、イッポリット君、あれは全く眞ごころがこもつていて、それにですね、最も滑稽なところでさえも、そんなところが随分ありましたね、(イッポリットはひどく苦い顔をした) そんなところでさえも、苦しみによつて償われていました、何しろ、あんなところまで告白するということは、やはり苦痛でもあり、……また、ひよつとしたら、男子の意気かも知れませんか。見かけはどうあろうとも、君にあれを書かせた思想そのものには、必らず氣高い根據があつた筈です。時が経てば経つほど、それが僕には益々はつきりと分かつて来るのです、本當に。僕は君を批判してゐるんじやありません、心に思つてゐることを、すつかり打ち明けたいから言ひだけのことです。あのとき黙つていたのが僕は残念でなりません……」

イッポリットはかつとなつた。公爵がそらとほけて、自分を手玉にとつてゐるのだという考えがちらと彼の頭に閃めいたからであつた。が、公爵の顔をじつと見つめてゐるうちに、ついに公爵の誠意を信じないでは居られなかつた。彼の顔は明るくなつて來た。

「でも、やつぱり死ななくてはなりません、」と彼は言つたがもう少しのところ、「僕のような人間はね！」と附け足すところであつた、「そして、あのガーニヤが僕をどんなにいじめてゐるかを想像して見て下さい。あの男は僕の原稿朗讀を聞いた人たちのなかで、多分、三人か四人は、僕より先にあなたに、グレイボフのような死に方は僕にできないと思つてらつしやるんでしようね？」

「おお、どういたしまして、」と公爵はどきまぎした、「ただ僕がいたかつたのは……君がつまり、……グレイボフに似ていないという譯ではないが、しかし……君ならば、……君なら寧ろあの時……」

「察しがつきますよ、グレイボフではなくつてオステルマンのようにとりんでしより、……その意味でしより？」

「オステルマンつて誰？」と公爵は驚ろいた。
「外交官のオステルマンです、ビョートル時代のオステルマンです。急に少しうろたえて、イッポリットは呟やいた。何となく當惑したような氣持がこれに續いた。

「おお、ち、ちがいます！ 僕がいろいろとしたのは、そんなことじやありません。」と公爵は、暫らく黙つていたが、出じぬけに言葉尻を引いて言ひ出した、「君は、決してオステルマンにはならないでしより、僕にはそんな氣がしますよ。」

イッポリットは眉をひそめた。

「それにしても、僕がこんなことを斷言するのは、」と公爵は言いつくろおるとするかのように、だしぬけに後をつづけて「つまりあの頃の人たちは(實際ですよ、これにはいつも僕は驚ろかされるんですが)、今のわれわれとは似ても似つかない人たちで、現代の人間とはまるで人種が違つていて、全く別な種族だつたからです、……あの時代の人たちは、兎も角も一つの共通の觀念をもつていました。ところが今の人たちは

死ぬかも知れないなんて、抗議みたいなことを思いついたんですよ！ まあ、どうでしよりね！ これが僕にとつて慰めになるとでも思つてゐるんですよ、は！ は！ 第一にまだ誰も死なないし、たといみんな死んでしまつたにしても、それが僕にとつて何の氣休めになるものでしより、ね、そりじやありませんか！ あの男は自分を目安にして、物ごとを判斷するんですよ。尤も、ただそれだけではなくなつて、今ではもう無暗に人の悪口をいつて、こんな場合には、禮儀をわきまえてゐる人間ならば、黙つて死んでゆくものだ、お前と來たら、まるでエゴイズム一點張りだなんかと言ふんですよ。どうでしより！ とんでもないことです、あの男のエゴイズムはどうでしより！ あの連中のエゴイズムの巧者なことはとうより寧ろ、同時にひどく無作法なことはどうでしより！ それでいて、自分がそりだとは一寸も氣がつかないんですからね……公爵、あなたは十八世のステパン・グレイボフという男の死ぬときの話を讀んだことがありませんか？ 僕は偶然に昨日、讀みましたが……」

「ステパン・グレイボフつて誰です？」

「ビョートルの時代に杖にされた人です……」

「ああ、そうですか、知つてますよ！ ひどい寒さの中に十五時間も、外套一枚で、杖にさされて、從容自若として息を引き取つたのですね。むろん、讀みましたよ、……それがどうしたんです？」

「神様はほかの人たちには、あんな死に方をさせて下さるのだから、われわれには、そうはして下さらないのです！ 多分、二つもの三つもの觀念をもつてゐるからです……今の人間はもつと見識も廣いし、……いや、事實、それがあの時代の人のように、裏も表もない人間になることを妨げるんです、……僕が、……僕があんなことを言つたのはただ、こういう考えからで、決して……」

「分かつてます。あなたは僕の無邪氣な言葉に賛成しなかつた代りに、今度は僕を慰めようと一生懸命になつてらつしやるんですね、は！ は！ あなたは全くの子供ですよ、公爵それはそうと、よく分かつてますよ、あなた方はみんな僕をまるで、まるで、……これ物扱いにしているんです。でも平氣です、かまいやしません、僕は怒りませんよ。それはさしておき、ずいぶん可笑しい話になつてしまいました。あなたもオステルマンよりは、何とかして、一寸ましな人間になりたいと思つてゐたかも知れませんかよ。オステルマンのために死んでからまた蘇つて來ようたつて始まりませんかね……そりはいつても、できるだけ早く死ななければならぬことが分かつてゐるんだし。さもなければ僕自身で……まあ、放つといつて下さい。さよりなら。ところで……まあ、いいでしより、まあ、聞かして下さい、まあ、あなたのおつもりを僕は、どうしたら一番いい死に方ができるでしよりね？……つまり、できるだけ……徳にかなうよりな？ さあ、教えて下さい！」

「われわれを黙殺して下さい、そして、われわれの幸福を許

して下さい！」と公爵は低い聲でいつた。
「は、は、は！ 僕もそうだろうと思つた！ きつと、そういうことになるだろうと思つてた！ それはそうと、あなた方は……あなた方は……まあ、まあ！ 口先のうまい御連中だ！ さよなら、さよなら！」

ペラコンスカヤ夫人を招待したエバンチン家の別荘の夜會のことをワルワラ・アルドリオ・ゾナは、やはり寸分の間違ひもなく傳えたのであつた。たしかに、その晩、何人かの客が見えることになつてゐた。しかし、彼女はこのことについて、實際よりは幾ぶん辛辣な言ひ方をした。事實このことは餘りにも慌しく、いささか餘計な昂奮までして、取り決められた。というのも、この家庭では「何をすることも、よその家とは勝手が違つてゐた」からである。何もかも、「もうこれ以上に逡巡することを欲しない」リザヴィータ・プロコフイーヴナの氣短かと、愛しい娘の幸福を思ふ切なる親ごころに歸することであつた。おまけに、ペラコンスカヤ夫人は、話の通り、程なくこちらを發つことになつてゐたからである。この老夫人の知遇というものが社交界において、まぎれもなく、多くの意義をもち、また、彼女が公爵に對して好意をもつてくれるだろうという目當があつたので、親たちは

アグラレーヤの花婿を、「社交界」は必らずや、あの縦横自在に切り廻す「お婆さん」の手からならば、直ぐに喜んで迎えてくれるだろう、従つて、若しそこに何か變なことが起きても、あれほどの威光をもつてすれば、わきから見ても、それほど變ではなくなるだろう、——と、それを當てにしたのであつた。

親たちが、——この問題には變なところがあるだろうか、若しあるとしたら、どの程度にであらうか？ それとも、絶無であらうか？——という問題を解決できなかったところは一切の問題が含まれてゐた。殊にアグラレーヤのせいで、何一つはつきりと始末がついていない目下の場合にあつては、權威のある相當な人たちの打ちとけた、腹藏のない意見がかなりに役立つ筈であつた。兎にも角にも、晩かれ早かれ、公爵を社交界へ出さなければならぬ。何しろ、公爵は社交界というものには、とんと不案内だからである。要するに、親たちは、公爵を多くの人に「見せ」たい意向をもつてゐた。

尤も夜會の手配は簡單であつた。招待されたのは、ただ、「家族の友だち」だけで、きわめて少數に限られてゐた。招待された主なる人といつては、ペラコンスカヤ夫人のほかに一人の貴婦人——かなり有力な地位にある高官の夫人だけであつた。若い人のなかでは、やつとエヴゲニー・パーヴロキッチがその數に入るくらいであつて、彼は「お婆さん」のお供をして、出席しなければならなかつたのである。

ペラコンスカヤ夫人が来るということは公爵も會の三日ばかり前に聞いてゐた。夜會のことはやつと前の晩に耳にした。彼女にもお客のことを考えると、殆んど堪えられないほどの思いがした。誰もが、このことには氣がついてゐた。恐らく彼女はこのことについて、両親と議論がしたくてたまらなかつたであらう、ところが、ブライドと内氣とが物をいうことを許さなかつた。公爵は直ぐに、彼女が自分のことを氣にかけてゐる（彼女は自分が氣にかけてゐると、白状する氣にはならなかつた）のを悟つて、急に我ながら愕然とした。
「そり、僕も招待されているんです。」と彼は答へた。
彼女は「どうやら、二の句がつけずに困つてゐるらしくかつた。」

「あなたを相手に、何か眞面目な話なんか、できるんでしょるか？ せて一生に一度でも？」と彼女は何のためかも分からずに、自分を抑えつけることができずに、だしぬけに、ひどく腹を立てた。

「できませんよ。僕はあなたのおつしやることを聴きます。僕はとても嬉しいんです。」と公爵は呟やいた。
アグラレーヤは又しても一分間ほど口を噤んでゐたが、やがていかに厭や厭やそりにいい出した。

「わたしはこのことでは家の人と喧嘩したくなかつたの。だつて、どうかすると、あの人たちに物の道理を言つて聞かせても仕様がなすからね、いつもわたし、時折お母さんが振りまわす理窟がいやでたまらないんです。お父さんのことはわたしは言いませんわ。あの人に物を訊いても仕方がないんですもの。お母さんだつてむろん高尚な女ですわ、ちよつと何か卑劣なことを申し出て御覽なさい、大變な目に遭うから

ばかりであつた。もとより、彼は家族の人たちのあくせくしている様子に氣がついて、微かに仄めかすような心配らしい口ぶりから推して、家じゆりの者がお客に與える印象を氣にかけてゐるのを看破した。しかし、エバンチン家ではどういふものか、誰も彼も揃ひも揃つて、公爵という人はまことに目出たい人で、自分の身の上をみんながこんな心配してゐるのに、一寸も察しつかないのだという概念を作り上げてしまつてゐた。そのため、彼を見ては、誰もが心ひそかに憂えてゐた。とはいへ、彼は實際においても、眼の前に迫つてゐる事件に對しては、殆んど何らの影響をも與えてはゐなかつた。彼は全く別のことに氣を取られてゐた。アグラレーヤは時々刻々と、いよいよ氣まぐれになり、憂鬱になつて行つた。——そのことが彼にはひどく氣をもませるのであつた。エヴゲニー・パーヴロキッチも招かれてゐるというところを知つたとき、彼は一方ならず喜んで、疾うからあの人に會いたいと思つてゐたといつた。なぜか、この言葉はみんなの氣に入らなかつた。アグラレーヤは腹立たしげに部屋を出て行つてやつと夜が更けて、公爵がいよいよ歸ろうとしてゐる十二時ちかくになつて、見送りに出て来て、たつた二人きりになつたのを、これ幸いと、少しばかり物を言つた。
「わたし、あなたに明日は一日いらつしやらないで、晩になつて、あの……お客たちが集まつてから、いただきたいの。あなたは御存じでしょうね、お客様が来ることは？」
彼女が「夜會」のことを言い出したのはこれが始めてであつた。

「まあ、それでいて、あの……やくざ者を崇拜しているんですからね！ わたし、ベラコンスカヤのことをいつてゐるんじゃないのよ。よぼよぼの婆さんで性質もやくざですけれど—— 剛巧な人で家の人をみんな丸めこんでいるんですからね—— それだけでも見つけ物だわ！ ああ、何て卑劣なことでしょう！ でも滑稽だわ。わたしたちはいつも、中流の、ほんとにこの上なしの中流の人間ですからね、一體、何だつてあんな上流社會へ、のこのこ出てゆく必要があるんです。姉さんたちはあんなところへ行きながつてゐるの。あれはS公爵がみんなをどぎまぎさせてしまつたからだわ。どうしてあなたはエツゲニイさんが来るのがそんなに嬉しいんですの？」

「あのね、アグライヤさん、」と公爵は言つた、「あなたは僕が明日……大勢の前でやつつけられやしないかと、心配してらつしやるようですね……」

「あなたのことを？ 心配ですつて？」とアグライヤは眞つ赤になつた。「たとえ、あなたが……たとえ、あなたが赤恥をお搔きにならうと、わたしが心配するわけなんか無いじやありませんか？ わたしにとつてそれが何でしょう？ それにどうしてあなたはあんな言葉が使えるんです？ 『やつつけられる』つて何のことですか？ それはやくざな言葉だわ、下品な。」

「これは……小學生の言葉です。」
「まあ、そうだわ、小學生の言葉よ！ やくざな言葉！ あなたは明日もそんな言葉ばかり使つてお話をなさるおつもり

「よござんすか、もうこれが言ひおさめですよ。」とどうとうアグライヤはこらえかねて、「若しもあなたが、何か死刑だとか、露西亞の經濟状態だとか、『美が世界を救う』だとかそんな風なことをしやべり出したら、そしたら……わたしは勿論、よろこんで、散々笑つてあげますけど、しかし、前もつて御注意しておきますが、今後はもうわたしの眼の前には出ないで下さいね！ いいでしょう、わたし眞面目にいつてゐるの！ 今度こそ眞面目にいつてるんだわ！」

彼女は本當に眞面目にこの脅し文句をいつたのである。だから、その言葉のなかには何かしら並大抵ではないものまでも感ぜられるのであつた。また、その眸には、今まで公爵が見たこともないような、すでに冗談らしいところもない妙な表情が窺われた。

「まあ、あなたは僕が必らず何か『しやべり出して』おまけに……ひよつとしたら……花瓶までこわすように仕向けてしまひましたね。ついさつきまで、僕は何ひとつ怖れなかつたのに、今はもう何もかも怖ろしくなりました。僕はきつとやつつけられますよ。」

「それじや黙つてらつしやい。神妙に坐つて黙つてらつしやい。」

「駄目でしやう。僕はきつと、怖ろしさのあまり『しやべり出して』怖ろしさのあまり花瓶をこわすに相違ないと思ひます。多分、滑つこい床のうえにころぶとか、何か、そついつたよなことを仕でかすでしやうよ。何しろ、今までにもあつたことですからね。きつと今夜は、僕は一晩じゆうそんな

なんでしやう、そうらしいわね。家へ歸つて、御自分の辭書を引いて、そんな言葉をもつと澤山おさがしなさい。そしてらすばらしい効き目がありましようよ！ 残念なことに、あなたは上手に客間へ入る、はいり方を御存じらしいわね。どこでお習いなすつたの？ ほかの人がわざとあなたの方を見てるをき、お行儀よく茶碗をとつて、お茶を飲む方法を御存じ？」

「知つてるつもりです。」

「それはお氣の毒さま。でなかつたら、笑つてあげるところでしたのに。でも、せめて、客間にある支那焼きの花瓶ぐらゐこわして頂戴！ かなり高いものですからね、どうぞこわして頂戴！ そよから戴いたものなの。お母さんが氣ちがいのようになつて、みんなのいる前で泣き出すでしやうよ——」
「それほどお母さんは大事にしてゐるの。いつもなさるような變な身振りをして、叩きこわして頂戴。わざとすぐ傍へお坐んなさい。」

「とんでもない、できるだけ離れて坐るようになります。御注意下すつてありますか？」

「して見ると、あなたは大げさな身振りをしてはと、今から心配してらつしやるんですね。わたし、賭けをしてもいいわ。きつとあなたは何かの『テーマ』を、何か、眞面目な、學問的な、高尚なテーマを持ち出しなされるに決まつてゐるわ。まあどんなに……お似合ひでしやうね！」

「僕は馬鹿らしく聞こえるだらうと思ひます……若し、とんでもないときに持ち出したら。」

ことばかり夢に見ますよ。何だつてあなたはそんなことを言ひ出したんです？」

アグライヤは憂鬱そうに彼を眺めた。

「ねえ、どうでしょう。僕はいつぞ明日はまるきり行かないことにしましやうか。病氣だとかわつておけば、それで事はすむ筈です！」遂に彼は言ひ出した。

アグライヤは足を踏み鳴らした、憤怒のあまり蒼ざめてさへしまつた。

「まあ！ そんな話つて、どこにあるかしら！ そのためにわざわざ催おすところへ、當の御本人が來ないなんて……ああ、忌々しい！ あなたみたい……悟りの悪い人を相手にするのは、いいお慰みだわ！」

「いや、參ります、參ります！」と公爵はあわててさへぎつた、「そして、あなたに誓います、僕は一晩じゆう、一ことも口をきかないで坐つています。必らず、そうします。」

「見事にやつて御覽なさい。ところで、あなたは『病氣だとかわつて』とおつしやいましたね。ほんとにあなたはそんな言葉づかいをどこから仕入れて來るんですしやう？ わたしと話をするのに、そんな言葉を使うなんて、どんなつもりなんでしやう！ わたしをからかつてるんでしやう、え？」

「済みません。これもやはり小學生の言葉です。もうこれからは氣をつけます。あなたが……僕のことを氣にかけて下さるのが……僕にはよく分かります……（でも、怒らないで下さい！）僕はそれがとても嬉しいんです。あなたは本氣にな

さらんでしようが、僕は今ほんとにあなたのお言葉がおつかないんです、……そして、ほんとに嬉しいんです。けども、誓って申しますが、そんな怖じ気はみんなつまらないことです。たわいもないことです。ほんとにです。アグラヤー！そして、嬉しい気持だけが残るんです、僕はあなたがそんな子供なんで、そんな氣だてのいい、可愛い子供なんで、嬉しくって仕様がないうんです！ ああ、あなたはほんとに立派な人になれますよ！ アグラヤー！」

勿論、アグラヤーはこんなことを言われて、腹を立てるのが當然であつた。また、腹を立てようとしたのであるが、不意に、或る自分自身にとつても思いがけない感情が、一瞬にして彼女の心をつかんでしまつた。

「あなたは今のわたしの不躰な言葉を、おとがめにならないでしようか……いつか……後になつて？」いきなり彼女はこり訊いた。

「あなたどうしたんです、どうしたんです！ 何だつてまたかつとしたんです。そらまた陰氣な眼つきをしていらつしやる！ あなたはどうかすると、怖ろしく陰氣な眼つきをするようになりましたね。アグラヤー、そんなことは以前は一寸もなかつたのに。僕は知つてますよ、どうしてそんな……」

「黙つてて頂戴、黙つてて！」

「いや、言つた方がいいです。僕は疾うから言いたかつたんです。もう、前にも言つた筈ですが、あれだけでは……不充分です。だつて、あなたは僕の言うことを本氣になさらないかつたんですからね。僕たち二人の間には、やつぱり、ある一

へも行こうと、すつかりその氣になりかかつていた。胸のうちに何かしら暗れやらぬものがあつて、ついには、この朝、ゆくりなくも身に降りかかつて来た様な出来事が、非常に強い、しかもなお何となく物足りない印象を與えるのであつた。この出来事の一つは、レーベジェフの訪問であつた。

レーベジェフはかたりに早く、九時を廻つたばかりに、殆んど酔いつぶれたようになつて現われた。公爵は、この頃になつて、目が利かなくなつていたが、それでも、イヴォルギン將軍が引き拂つてこのかた、すでに二三日になるが、この間レーベジェフの品行がひどく悪かつたことを眼にとめない譯には行かなかつた。彼は何だか急に油じみて、汚らしくなり、ネクタイは横の方にねじくれて、フロツクの襟は綻ろびていた。家でまで亂暴を働らくようになり、その騒ぎが小さな庭ごしに聞こえて来るようになった。或る時などは、ヴェーラが涙ながらにやつて来て、何やら訴えて行つたりした。今朝は公爵のところへ現われて、自分の胸をたたきながら何だかひどく變妙な様子でしゃべり出して、どうした譯か、濟まなかつたなどと言つていた。

「とられましたよ……とうとう、かたきをとられましたよ、裏切りをして卑劣なことをしたために……。横びんたを喰らつたんです！」ついに彼は悲愴な聲でこり結んだ。

「横びんたを？ 誰から？……しかも、こんなに朝つばらから？」

「朝つばらからですつて？」レーベジェフは皮肉な微笑を浮かべて、「今は時のことなんか問題じゃありません……たと

人の人間が邪魔をして……」

「黙つて、黙つて、黙つて、黙つて！」とアグラヤーはしつかりと公爵の手を握りしめて、殆んど怖じ氣づいてるよりに相手を見つめながら、いきなり遮つた。

折しも、彼女を呼ぶ聲がきこえて来た。彼女はこれ幸いと喜ぶかのように、公爵をふり捨てて逃げて行つた。

公爵はその晩、一晩じゆう熱になやまされた。不思議なことに、彼はこの頃になつて、夜になると必ず熱を出していた。その晩、半ば夢にうなされているとき、「若しも明日、みんなの前で發作が起つたらどうだろ？」という考えが胸に浮かんで来た。今までにも、人のいる前でよく發作を起したのではなかつたか？ 彼はこのことを考えるとぞくぞくするのであつた。一晩じゆう、彼は噂にさえも聞いたことのないような得體の知れない人たちの間にいる自分をしきりに心に描いていた。何よりも氣にかかるのは、彼が「しゃべり出した」ことである。彼は、口をきいてはならないということをよく承知しながら、しよつちゆう口を出して、何やら人々を説き伏せにかかつていた。エツゲニイ・パーヴロキッチと、イッポリットもまた、來客の中に加わつていて、極めて陸まじげに見えていた。

彼は八時すぎに眼をさました。頭が痛んで、考えはとりとめもなく、妙な印象が心に残つていた。どうした譯か、彼は怖ろしくラゴージンに會いたくなつた。會つていろんな話があつた。それは、何を話すのか、それは自分にも分からなかつた。それからまた何かの用で、イッポリットのところ

え體罰だつたところ……、しかし、わたしが喰らつたのは精神的な……精神的な横びんたで、肉體的のじやありません！

彼は無遠慮にいきなりどつかと腰を下ろして、くどくどと話し出した。彼の話しはひどく取りとめがなかつたので、公爵は眉をひそめ、出て行こうとした。ところが、不意に話の一節が彼を愕然たらしめた。彼は驚愕のあまり、棒立ちになつた。奇怪なことをレーベジェフ氏が物語つたからである。

最初の話は、見たところ、何かの手紙に關することらしかつた。アグラヤー・イワーノヴナという名前が擧げられた。やがて、だしぬけに、レーベジェフは當の公爵を痛烈に非難し始めた。彼が公爵に對して感情を害していることは察しがついた。彼の話によると、初めのうち公爵は例の『やつ（ナスターシャ）の問題で、彼をすつかり信頼して、敬意を拂つていたという。ところが、その後、すつかり交りを斷つて、屈辱を與えて、自分のところから追い拂つてしまひ、擧句の果には、『近く起らんとしている一家内の變動についての罪のない質問』さえも邪慳に突き放してしまふほどの無禮ぶりを發揮するに至つたという。レーベジェフは、血走つた眼に涙を浮かべながら告白するのであつた。「あれからというもの、わたしはどうしても辛抱がでなかつたのです。それも、いろんなことを知つていたので、尙更です、……ラゴージンからも、ナスターシャ・フィリッポヴナさんからも、ナスターシャさんのお友だちからも、ワルワラ・アルダリオ・ヴナさんからも……それから……それからあの御當人のア

グライヤさんからさえも、いろんなことを聞いていましたんで。それに、お察しのおり、ヴェーラでございますね。あのわたしの可愛い、一人娘の……さより、……尤も、たつた一人ではございませんが、何しろ、わたしには子どもが三人もありますんで、……まあ、とにかくあのヴェーラを通しましたりして。時に、リザヴェータ様に手紙をやつて、大へんな祕密までも洩らしたのは、どなたでございますしやうね？へ、へ！ あのお方への返事にナスターシャ・フィリップツナという人のいろんな關係筋のことや……動靜を書いてやつたのはどなたでしやうか、へ、へ、へ！ どなたでしやう、この名なしの人はどなたでしやう！ 失禮ながらお伺いしたいもんですよ。」

「まさか君じやないでしやう」と公爵は叫んだ。

「たしかに」と酔いどれは威厳をもつて答えた、「今朝も八時半に、今から丁度三十分前、いや、もう四十五分になりましようが……母御様に或る出来事を……大へんな出来事をお知らせしたいと申し込みました。裏玄關から女中にたのんで書面で。ところが、會つて下さいました。」

「君がいまりザヴェータ夫人に會つたんですつて？」と公爵は殆んど自分の耳を信じないかのようにして訊き返した。

「唯今お目にかかつて、横びんたを喰らいましたんで、……精神的の……奥様は手紙を突き返されました。封も切らないやつを叩きつけたりなすつて、……とんでもない奴だといつて追い出されたんです、……でも、精神的にですからね、肉體的にじやなかつたんですよ、……尤も、大體がその、肉

宛てたんじやなくつて、ラゴージンにですよ。どつちにしても同じことですが、ラゴージンに宛てたものでございませよ。或る時などは、チェレンチェフ君(リツボ)に宛てたものさえありましたよ、Aの字のつくお方から、手渡しを頼んだのが。」とレーベジェフは眼を瞬いて見せて微笑みを洩らした。

この男はしよつちゆる、あれを話していたかと思つと、すぐにこちらへ飛んで来て、何から話し出したのか、すつかり忘れてしまふ癖があるので、公爵は種切れになるまで話をさせようと考へて、神妙にかまえていた。が、それにしても、そんな手紙が彼の手を通つて行つたものか、それともヴェーラの手を通つて行つたものか、その邊のことは、やはり非常に曖昧であつた。彼が自分から、「ラゴージンに宛てるのも、ナスターシャに宛てるのも、どつちにしても同じことだ」と断言している以上、たとえ、そんな手紙があつたにしても、彼の手を通つて行つたものではないと見た方が一そう確かな譯である。それにしても、いかにして、この手紙がいま彼の手に落ちたか、ということとは相變らず、全く不明なのである。彼がどうにかこうにかして、ヴェーラのところから掠めとつて、……こつそり、ちよろまかして、何かのつもりがあつてリザヴェータ夫人のところへ持つて行つたのだらうと假定するのが最も正確らしかつた。こう考へて、公爵はやつこのことで、呑み込むことができた。

「君は氣が違つてゐるんです！」彼はすつかり狼狽して、叫んだ。

「萬更そりでもありませんよ、公爵様。」とレーベジェフはい

體的といつてもいいくらいでしてね、もう一寸のところでしたよ。」

「奥さんが、封も切らないで叩きつけなすつたつて、どんな手紙？」

「じや、ほんとうは……へ、へ、へ！ 一體、あなたにまでお話ししなかつたんでしたかね！ わたしはもうお話ししたもとの思つてましたよ、……時に、渡してくれといつて、一寸した手紙をこつつかつて来ていますかね、……」

「誰から？ 誰に？」

しかし、レーベジェフの『説明』には、一體何をいつていのか、少しでも分かつてやろうと思つと、容易ならぬものが少くはなかつた。それにしても、公爵は精々あれかこれかと考へて見て、この手紙はけさ早く、宛名の者に渡してくれようといつて、女中を通してヴェーラ・レーベジェフのところへ届けられるものであると、やつと察しがついた。「前と同じように、……前と同じように、……例のやつに宛てて例のお方がおよこしになつたもので……(つまり、わたしはあの二人のうち、一人を指すのに『お方』、もう一人は卑しさをあらわし、區別をするために、ただ『やつ』といつてゐるんです。何しろ、罪けがれがなくつて、高貴な將軍令嬢と……椿姫との間には、大へんな相違がありますからね、まあ、そういう譯で、手紙はAという頭字の『お方』からのもので……」

「どうしてそんな管が？ ナスターシャ・フィリップツボツナさんに？ 冗談じやない！」と公爵は叫んだ。

「ありましたよ、あつたんでございますよ。でも、あの女に

ささか恨めしげに答えた、「實際、わたしは忠義を立てて、あなたに、お渡し致そうという氣になりかかつてたんです……しかし、一そのこと、お母様に忠義を立てて、一切合切お話しした方がよろしいと考へましたんでね。つまり、何です、前にも一度、名なしの手紙で、お知らせしたことがあるんでしてね。で、さきほど、紙きれへ、八時二十分に御面談を願いたいと、前もつてお都合を伺う手紙を書きましたときも、やはり、『あなた様の祕密通信員より』と署名しましたんでございますよ。すると、さつそく、無理に早くして下すつたかのように、裏口から通して下さいましたね、……お母さまのお部屋へ。」

「それで？……」

「あちらへ參つてからのことはもう分かりきつたことでございますよ、もう少しのところ、叩かれるところでした。つまり、危機一髪というところで、いや、もう本當に叩かれたといつてもよいくらいでございますね。それで、手紙を叩きつけなすつたんですよ。たしかに、御自分のお手許へ残してお置きになろうとしかかつていたんですが、——それはわたしにもよく分かりましてね、ちやんと氣がつきましたよ、ところがです、また考へ直しなすつて、叩きつけなすつた譯です。『お前のような者にこつつける位ならば、まあ、いいから、勝手に先様へ届けたらいいわ』と、こう仰つしやいましてね……おまけに御立腹なすつたんですよ。まあ、わたしのような者に、臆面もなく、そんなことをおつしやる以上は、これはどうも御立腹なすつたと見るのが至當でございますよ

うな。何しろ、疍積もちの質でしてね！」

「じゃ、一體、その手紙は今どこにあるんです？」

「やはりわたしが持つてをります、これ。」

といつて、ガーニャに宛てたアグライヤの手紙を公爵に渡した。これは、この朝、ガーニャが二時間ばかり経つてから得々として妹に見せたものであつた。

「この手紙は、君のところを取つて置くべきものじやありません。」

「あなたに、あなたに上げましょう！ あなたに進呈します。」と、レーベジェフは熱心に後を引き取つた。「これからわたしはまた、あなたの家來です、すつかりあなたのものです、——身も心も、ちよいと謀反氣を起こしましたが、今度はまだあなたの家來です！ あの英國の、大ブリテンの……トマス・モールズの言い草じやありませんが、……心を咎めて、身を許して下さいませ……。Mea culpa, mea culpa(罪なりわが罪なり)これは羅馬上人のいつたことです、……つまり、それは——羅馬法王のことなんです、わたしは羅馬上人といつてますんで。」

「この手紙は今すぐ渡さなくてはなりません。」と公爵は氣にかかつて来た。「僕が渡してあげましょう。」

「でもいつそ、いつそ、ねえ、公爵様、いつそのこと、あの……あれした方がよかありませんか！」

レーベジェフは妙な、いじらしい響め面をした。まるで急

*トマス・モールズ……「ユートピア」の作者トマス・モア(Thomas More)のこと、ラテン風にモールズ(Morus)ともいう。(譯者註)

わざわざあそこへ行つたんですか、え？ 何かいいことがあると思つたんですか？ 何だつて、そんな淺ましい了簡になつたんです？」

「それはただ単に、呑氣な好奇心と……やましいところのない親切氣から出たことでして、はい！」とレーベジェフは口の中で呟やいた。「今からは、もうすつかりあなた様のものです、また元通りにすつかり！ たとえ首を絞められようとも……。」

「君は今のような、そんな恰好をして、リザヴェータ・プロコフイーヴナさんのところへ出かけたんですか？」と、公爵は嫌惡の情を感じながら、一寸した物好きから訊いて見た。

「いいえ、……もつとみづみづしく、……もつと相當なといつてもいい位で。こんな恰好になつたのは……きめつけられからのことでございます。」

「まあ、よろしい、僕にかまわないで下さい。」

尤も、このお客様がやつと思ひ切つて出て行くという氣になるまでに、この乞いを幾たびとなしに繰り返さなければならなかつた。もうすつかり戸を開け放しておきながら、彼は又もや引き返して来て、忍び足で部屋の眞ん中へやつて来ては、手眞似で手紙の開け方を教えたりするのであつた。しかし、口に出してまで、開けて見よと勸めるほどの勇氣は流石になかつた。やがて、靜かな愛想のいい微笑を浮かべて、とうとう部屋を出て行つた。

彼の話を耳にするのはたまらなく苦痛であつた。いろんな話を聞いた中であつた一つ、重要であり、聞きずてならぬ事實

に針でも刺されたかのように、ひどくもじもじ出した。彼は狡猾そうに眼をばちばちさせて、両手で何かやつて見せるのであつた。

「何ですんね？」と公爵は嚴めしそりに訊いた。

「先廻りをして、開けちやつたらどうでしょう！」しおらしそりに、いかにも祕密だというように、彼は囁やいた。

公爵がひどく憤然として跳びあがつたので、レーベジェフはまつしぐらに逃げ出しかかつたほどであつた。が、戸口まで行つたとき、ふつと、お許しが出るだろうと考へたので、立ちどまつてしまつた。

「ええつ、レーベジェフ君、君のような卑劣なことが、どうしたらできるだろう、どうしたら？」と公爵は悲痛な叫び聲をあげた。

レーベジェフの顔つきは晴々しくなつて来た。

「卑劣な奴です、卑劣な！」と彼は眼に涙をうかべながら、胸を叩いて、すぐに引き返して来た。

「實に下劣じやないですか！」

「大きに下劣なこと、お言葉の通りです！」

「まあ、何ていふ癖でしょうね、その癖は……、妙なことはばかりして！ だつて君は……何のことはない、體のいいスパイじやありませんか！ 君は何のために無名の手紙を書いて氣を使わしたんです……あんな立派な、善良至極な御婦人に？ また、アグライヤ・イワーノヴナさんが、自分の好きな人に、手紙を書いてやるのに、いけないつていう法がどこにあるんです？ 君はそれじや、告げ口をするつもりで、今日

があつた。それは、アグライヤがどうした譯か、公爵のたぬたぬと公爵は獨り言をいつたが、非常な不安と、並々ならぬ逡巡と、はげしい苦痛におそわれているという事實であつた。また同様に、彼女が勿論、質の悪い人たちに惑わされてゐるといふことも分かつて来たが、不思議でたまらないのは彼女がそんな連中を、かほどまでに信用してゐるといふことであつた。いふまでもなく、この世間に馴れない、熱情的な氣位の高い頭腦のうちに、何か特別な計畫が、事によつたら熱しているのかも知れない、それも、身の破滅を招くような……無鐵砲な計畫かも知れない……。

公爵は極度に怯えて、すつかり狼狽してしまつて、どんな覺悟を決めたらよいか分からなかつた。是非とも、何か機先を制するよきなことをしなければならぬと、彼は痛切に感じていた。彼はもう一度、封をしたままの手紙の宛名を見た。ああ、そこには彼にとつて、何の疑惑も不安もないのである。といふのは彼がすつかり信じ切つていたからであつた。この手紙のなかで、彼に不安を感じさせたのはほかのことであつた。彼はガヴリーラ・アルダリオ・キッチを信用してはいないのである。

それにしても、彼は自らこの手紙を彼に直接わたしてやろりと決心しかかつていた、そうして、そのためにわざわざ家を出たのであつたが、また途中で氣が變つた。が、殆んどブチツインの家のすぐそばのところ、まるで蹠し合つたかのように、コオリヤにばつたり出會つたので、公爵はアグライヤから直接たのまれたような風をして、この手紙を兄に

渡してくれといつてコオリヤに渡した。コオリヤは何ひとつ訊ねるでもなく、直ぐ兄の手へ渡したので、ガーニヤはこの手紙がいろんな局を経由して来たとは、夢にも知らなかつた。家へ歸ると、公爵はヴェーラを自分の部屋へ呼んで、必要なことを話して、彼女を安心させた。彼女はそれまで一生懸命に手紙をさがしたが、さがしあたらぬので泣き出していたからであつた。手紙を父親が持つて行つたと聞いて、彼女は疎然とした。(後になつて、公爵はヴェーラから、彼女が一度ならず、ラゴージンとアグラヤ・イワーノヴナのために秘かに後押しをしてやつたというのを聞かされた。これが公爵の邪魔にならうとは、彼女は思いもよらなかつたのである)……

ついに、公爵はすつかり頭が混亂してしまつて、二時間ばかり経つて、コオリヤからの使の者が駈けつけて来て、父の發病を知らせた時にさえも最初のうちは、何のことやら殆んど合點が行かなかつたほどであつた。しかし、この出来事は彼の元氣を引き立ててくれた。すつかりその方に氣を奪つてしまつたからである。彼はニイナ・アレクサンドロヴナのところ(病人は勿論、ここへかつきこまれたのである)、晩まで殆んどすつと居通した。彼は殆んど何の役にも立たなかつたが、苦痛な時にどうかすると、傍にいてくれるだけで、何とはなしに、こちらに快よい感じを興える人があるものである。コオリヤはひどく驚ろいて、ヒステリカルに泣いていたが、それでもしよつちう走り使いに出ていた。醫者を迎へに走つて行つて、三人もの醫者を見つけて来た。薬屋や理髮

りなしに口説いていた。彼はこの天才といふことを殊に眞面目に主張した。恰もこのことから、今の今、何か非常な利益が生じてでも来るかのようにであつた。ニイナ夫人も、遂にはその眞ごころからの涙を見て、少しも不平がましいことは言わずに、むしろ優しさをさえも見せる位にして、「まあ、大丈夫ですから、泣かないで下さいね、ほんとに、神様があなたを許して下さいますよ!」といつた。レーベジェフはこの言葉とその調子に、すつかり感激してしまつて、一晩じゆうニイナ夫人の傍を離れようとしなかつた。(次ぎの日もその次ぎの日も、將軍の死ぬ時まで、彼は殆んど朝から晩までのこの家で時を送つていた。)

この一日のうちにはリザヴェータ夫人の使いが二度も將軍の容態を聞きに来た。公爵はその晩の九時ごろ、もう客で一杯になつたエバンチン家の客間へ現われると、早速リザヴェータ夫人は病人のことを根掘り葉掘り、こまごまと熱心に訊ね始めた。そして、「一體、病人といふのは誰のことです、またニイナ・アレクサンドロヴナといふのはどんな人です?」というベラコンスカヤ夫人の問いに對して、鹿爪らしく返答をした。公爵にはこれがひどく氣に入つた。彼自身もリザヴェータ夫人に説明をしているとき、後でアグラヤの姉たちのいふた言葉でいうと、「すばらしい」話し方をした。「餘計な言葉を使わないで、身振りも入れず、品位を保つて、つつましくやかに、靜かに話をして、入つて来る時もすばらしかつたし身なりもすてきだつた。」という。前の日に心配したように、「滑らかな床でころびもし」なかつたばかりか、明らかに、快

店へ驅けついたり、なかなか大變であつた。

將軍は息を吹き返したが、相變らず意識不明であつた。醫者は「とにかくこの患者は危険です。」といつた。ワーリヤとニイナ夫人は、病人の側を離れなかつた。ガーニヤはすつかりどぎまぎして、怯え切つていたが、しかも二階へ上がるともせず、病人の顔を見るのをさえも怖れていた。彼は非常なショックをうけて両手を固く握りしめていたが、公爵ととりとめもない話をしてる中に、ついつつかりと、「まあ何ていう災難でしょう。しかも、わざとのように、こんな時に!」と口をこらした。公爵には、彼のいう時というのは、どんな時なのか、よく分かるような氣がした。公爵はプーチンツインの家に、もうイッポリットの姿を見ることができなかつた。

夕方近くなつてレーベジェフが駈けつけて来た。彼は朝の「告白」がすんでから、今までぐつすり一度も眼をさまさずに寝ていたのである。いま彼は殆んど酔いが醒めて、まるで親身の兄にでも對するやうに、病人の身の上を悲しんで、かりそめならぬ涙を流して泣いていた。彼は聞こえるやうに詫びをいつていたが、その仔細を説明はしなかつた。そして、ニイナ夫人にうさく附きまつて、「これはわたしに因なんですよ、たしかにそうでござんす、ほかの誰でもござんせん……、元をただせば、これもただ單に呑氣な好奇心から出たことなんぞござんして……『故人』は(彼はまだ生きてゐる將軍をつかまえて、どうしたことか、執拗にこゝろ呼ぶのであつた)、實に天才といふべき人でした」と、しつこ

よい印象をささる興えたといふ。公爵はまた公爵で、座について、あたりを見まわしたときここに集まつてゐる人たちが、誰ひとりとして、昨日アグラヤがやおどしつたやうな、幻にも、昨夜、夢に見た夢魔にも一寸も似ていないといふことを、すぐに見取つた。彼は生まれ初めて、「社交界」といふ怖ろしい名で呼ばれてゐるものの一端を見たのであつた。彼は二三の特別な目論見と想像と憧れとによつて、この魔法の國のような仲間へ入りこむことを、久しい前から渴望していたので、第一印象に、一方ならぬ興味を覺えた。この第一印象は、魅力にさえも富んでいた。何とはなしに、これらの人々は、こうしていつしよになるために、生まれて来たのではないかしらと、すぐにそういう氣がするのであつた。エバンチン家に、別に夜會などというものがなくて、この夜會に招待された客もなく、ここにゐる人たちは全く『うちの人』で、彼自身もすつと前から、これらの人々の親友であり、ほんの暫らく別れていて、今その仲間へ歸つて来たのだといふやうな氣持もするのであつた。

スマートな素振りや、あつさりした様子や、純情らしい感じの魅惑は殆んど魔術めくほどのものであつた。彼の腦裡には、こゝろした純情らしい感じも、品のよい態度も、機智に富んだ話ぶりも、堂々たる風采も、單なる技巧的な見せかけにすぎないものであるといふ考へなどは更に浮ばないのであつた。お客の大部分は、人に尊敬の念を起こさせるやうな風貌を備えているのにも拘わらず、むしろ頭の足りない、たわい

もない人たちがばかりであつた。尤も、彼ら自身も、己惚れをもつていたので、自分たちのもつていゝるすぐれたものが——單なる見せかけに過ぎないことを知らないでいたのである。それに、かような見せかけも自身の知つたことではなかつたのだ。なぜというのに、それは無意識の間に生じ、親代々のものだからである。

公爵は第一印象の美しさに魅惑されて、そんなことを氣にとめて見ようともしなかつた彼には、たとえ、僕の祖父にあたるくらいこの老人、重要な位置にある高官が、こんな世馴れない青年の言葉を聴くために、わざわざ自分の話しをやめてしまつて、ただ聴いているだけではなく、いかにも彼の意見を尊重しているらしい様子で、彼に對しても愛想がよく、眞、ごころから好意を示しているのだというように思われた。しかも、二人はここに初めて顔を合はしたばかりの見ず知らずの他人ではないのかとも考えた。恐らく、公爵の鋭敏な感受性には、何よりもこの洗練された懇ろな態度が強い効果と與えたのであろう。事によると、彼が初めからあまりに思惑をし過ぎて、幸福な印象を受け入れるような氣分に、前もつてなり切つていたのかも知れぬ。

それにしても、これらの人たちは——もとより、『この家にとつても、またお互い同志の間でも、親友』ではあつたに相違ないが、——しかも、これらの人々に引き合はされて、紹介をされるや否や、公爵がすぐに愛着を感じてしまつたほど、この家にとつても、お互い同志の間でも、それほど親しい間柄ではなかつた。そこには、エパンチン家の人々を、はで、むしろ博識をもつて評判なくらいの人であつた——『おそらく露西亞そのものに關する以外』のことならば、何でも知らないものはあるまいというほどの、オリムピヤの神々にもなぞらうべき爲政者の一人であり、『その深刻なる點において、まことに刮目すべき』警句を五年に一度、吐いて聞かせる人であつた。しかも、その警句たるや、一たび發せられると、必らず格言となつて、畏きあたりにも知られるのであつた。この人は普通に、一方ならず永い年月に亘る（むしろ奇妙なほどに）奉職のうちに、これというほどの大した勳功をも立てずに、却つて、勳功などというものに、幾ぶんの敵意をさえも持ちながらも、高い官等と、立派な地位と、非常な金をもたらし、あの世の人となつてゆくありふれたお上の役人の一人なのであつた。この將軍は勤めの方で、エパンチン・フォードロキッチの直屬長官にあつていたので、エパンチンは持ち前の熱烈な、感じ易い性質のうえに、自惚れまでが手傳つて、この將軍をもやはり恩人あつかひにしていた。ところが、相手の方では決して自分のことを、エパンチン・フォードロキッチの恩人だとも思つていないので、全くすましこんで、程よくあしらつていた、エパンチン將軍の示してくれるさまざまな好意を、喜んで受けていたとはいふものの、若しも、そうしたいという氣持が起つて來たら、たとえ取るにも足らない氣持であるとしても、いささかも假借するところなく、今にでもイワン・フォードロキッチの椅子にほかの官吏を坐らせるかも知れないのである。そこにはもう一人、相當の年配の偉そうな紳士がいた。こ

んの表向きにでも自分と對等のものと認めていない人たちもあつた。また、お互いに心の底から憎み合つていゝるような人たちもあつた。ベラコンスカヤのお婆さんは、一生涯、『年寄の高官』の夫人をさげすんで居り、またその夫人の方は、リザヴェータ・ニコロフイーヅナをあまり好いてはいなかつた。彼女の良人たる『高官』はどうしたわけかエパンチン將軍夫妻が若い時分からの保護者で、今夜一座の音頭取りになつていた。この人はイワン・フォードロキッチの眼から見ると、非常に重要な人物なので、彼はこの人の前へ出ると敬虔の念と恐怖よりほかには、何らの感じも覺えない程であつた。若しも、彼がほんの一分間たりとも、この人をオリムピヤのジュビタ神のように崇めずに、自分と對等の人間だなどと考えるようなことがあつたならば、それこそ彼は心から自分を侮蔑せずには居られなかつたであらう。

そこにはまた、もう幾年も顔を合わせたことがないので、お互いに、たとひ嫌惡の念ではないにしても、無關心な冷淡な氣持よりほかには、何らの感じももつていないのに、まるでつい昨日あたり、かなり打ち解けた氣持のいい會合で、顔を合わせたばかりのような風をしている人たちもあつた。とはいへ、この集いは、それほど多人數ではなかつた。ベラコンスカヤ夫人と、事實において重要な人物である『年寄の高官』と、その夫人を別として、第一番に指を折られる人には、男爵か伯爵かで、獨逸名前を持つた、しつかりした陸軍の將軍がいた。この人は、人並はずれて無口な人であるが、行政方面のことには驚ろくべき知識をもつていゝるので評判な人の人は、リザヴェータ夫人の親戚でもあるかのようによら考へられていゝるが、それは全く見當ちがちなことであつた。この人は位階も勳等も立派な人で、財産もあり、門閥も高い人で、肉つきがよく、體格もかなりに嚴丈で、非常に能辯家であつた。それに、世間では不平家だとか（それも非常に穩當な意味においてではあつたが）、癩癩もちだとか（しかも、この人にあつては、氣持のよいことである）という評判さえも立てられていた。この人の習慣で、趣味も英吉利風であつた（先ず言つて見れば、血のたれるようなローストビーフだとか、馬具だとか、侍僕の服装だとか、そんな風のこと）。

彼は『高官』とは大の仲よしで、いつも彼の機嫌をとつていた。それは別として、リザヴェータ夫人はどういうわけか、この中年の紳士が（この人は幾ぶん浮氣で、若干、女好きであつた）、ふつと、アレクサンドラに結婚を申し込んで、幸福を授ける氣になるかも知れないという、妙な考えを懐いていた。

この最上流に位する、重みのある連中の下には、同じく身分の點ではひけはとらないが、もつと年の若い連中が控えていた。S公爵とエツゲニイを除いて、この階級に屬する人に有名な、色男のN公爵があつた。これは歐羅巴じゆりの女を惱殺するほどの人で、また女ごころの征服者でもあつた。もう今では四十五くらい年の輩になるが、相も變らず風采は美しく、話しぶりも巧妙で、いくぶん家政が紊亂してはいるといふものの、かなりの財産家で、習慣の上から、いづれかといへば、外國に多く暮らしていた。

そこにはまた、第三の階級ともいべきものを形づくつて
いる人たちがいた。この人たちは、本来ならば『限られた社
會』には屬しないものであるが、エバンチン家の人たちと同
様に、どうかすると、どうした譯か、この『限られた社會』
に見受けることのできる連中であつた。これらの人々が原則
として一種の氣轉によつて、エバンチン家の人たちは稀
れにお客を招待して催おす夜會のときに、上流の人々と、稍
々その下につく人々、すなわち『中流階級』の選り抜きの代
表者とを好んでつきまぜるのであつた。エバンチン家の人た
ちは、このことによつて賞め讃えられ、あの人たちは自分の
位置というものをよく知つてゐるとか、氣轉のきく人だとか
いう噂を立てられていたので、彼らもかういふ意見を誇りに
してゐた。この晩の『中流社會』の代表者は、さる工兵の大
佐であつたが、この人は眞面目な人物で、S公爵とはかなり
の親しい間柄なので、彼によつてエバンチン家へ紹介され
たのであつた。尤も、この連中の中では無口で、右手の人さし
指に恐らく御下賜品であらうが、大きな、よく眼につく指環
をはめていた。

またそこにはもう一人、文學者で詩人である人さへもいた。
元は獨逸人の出であるが、今では立派な露西亞の詩人で、そ
の上、きわめて禮儀正しいので、立派な席へ案内しても何ら
危ぶむことはなかつた。彼は立派な風采をしてゐたが、どう
いう譯か、それは妙に厭やらしいものであつた。年は三十八
くらいで、申し分のない服装をしてゐた。極度にブルジョア
くさい、しかも極度に尊敬されてゐる獨逸人の家庭に屬して

さて、公爵はこうした一座の人々も、まがり方なき金貨の
ように、少しも混ぜ物のない金無垢のように考へたのであつ
た。尤も、これらの人もまた、まるで隠し合わせたかのよりに
この晩は非常に上機嫌で、それぞれにかなりの満足を感じて
いた。いづれも、揃いも揃つて、自分たちはエバンチンを訪
問して、同家に大きな名譽を興えたのだと考へてゐた。しか
し、悲しい哉、公爵にはそんなデリケートなことは想像もつ
かなかつた。例えば、彼には、エバンチン夫妻が、娘の運命
を決すべき重大な處置をとらうとしてゐるとき、自分たち一
家の擁護者である年寄の高官に、彼、レフ・ニコライキッチ
公爵を引き合わせることを忘れて、平氣でゐるなどとい
うことができよう筈はないのに、それすら察しがつかなかつ
たのである。ところで、年寄の高官の方はどうかというに、
彼はエバンチン家に降りかかつて來た最も怖るべき不幸の報
知をすらも、平然と落ちつき拂つて聴きかねるほどでありな
がら、ここに若しエバンチン夫妻が彼に相談せずに、いわば
勝手氣儘に、娘を婚約させたりなどしよるものなら、必らず
感情を害するに相違ないのである。

N公爵、この愛嬌のある、確かに機智に富んで、磊落な人
は、自分こそは今宵エバンチン家の客間にさし昇つた太陽に
もなぞらうべきものだとかくまでも信じ切つてゐた。彼はこ
の家の人たちを自分よりも遙かに遙かに身分の低いものと見
做してゐたので、こうした純情な、氣高い考へが、このエバ
ンチン夫妻にたいする、驚ろくばかりに打ちとけた、優しい
懇ろな氣持を喚び起こさせたのであつた。

はいたが、よく種々の機會を利用して、身分の高い人の援助
を受け、その恩顧を蒙ることがあつた。日外、さるすぐれ
たる獨逸詩人の名作を、韻文の形で露西亞語に譯した時は或
る人にその翻譯をデジケートするほどの器用なことをし、或
る有名な、しかも今は故人となつてゐる露西亞の詩人と親交
のあつたことを自慢したりすることも心得てゐた。(偉大な
しかも、今はこの世にいない作家と親交があつたことを、麗
々しく發表するのを好んでゐる作家は棄てるほどある。)この
詩人はつい近ごろ、『年寄の高官』の夫人によつて、エバ
ンチン家へ紹介されたばかりであつた。

この夫人は作家や學者のパトロンとして評判されてゐたが
實際に、彼女と因縁のある知名の士たちの助力をえて、一人
乃至二人の作家に奨勵金を與えてもいたのである。たしかに
夫人はそれにはそれだけの因縁をもつてゐた。彼女は、年頃
は四十五ほどであつた、(して見ると、良人として、こんな
に年老いた人をもつてゐるのには、きわめて若い譯である)
もとほなかなかの美人であつたが、今は四十五くらいの貴夫
人になり勝ちな癡り性の病いで、ひどくけばけばしい風をす
るのが好きになつてゐた。あまり頭のいい人ではなく、文學
の知識の點でも、きわめて怪しいものがあつた。しかし、文
學者を援助することはこの夫人にとつては、派手な服装をす
るのと同じ類いの癖癖であつた。作品や翻譯の、夫人にデジ
ケートされたものは、かなりにかつた。二三の作家は夫人
の許しを得て、甚だ重大な事柄についての夫人宛の手紙を、
公けに發表した……

彼はこの晩はひとと、一座の人たちを驚かすような話し
をしなければならぬことを、よくよく承知してゐて、一種
のインスピレーションをさへ感じながら、その心構えをして
いた。やがて後にN公爵の物語を聴いたムイシン公爵は、
このN公爵のよきなドン・ジュアンの口から出たすばらし
いユーモアや、驚ろくべきまでに陽氣な調子や、殆んど感動
おく能わざらしむるといつてもよいほどの素朴な言葉つきに
比すべきものは、未だ曾て一度として聴いたことがないと、
しみじみ考へるのであつた。それにしても、この物語が、い
かばかり陳腐なものであり、言い古されたものであるか、い
かばかり暗で覺えられるほど人に知られてゐるものか、いか
ばかりすり切れてゐるか、どこの客間へ行つてもいかばかり
倦き倦きされてゐるか、やつと無邪氣なエバンチン家にあ
られて、いかにも新しい話のように思われて、立派な、美男
子の胸に思いがけなく浮かんで來た、眞ごころからの華やか
な思い出話でもあるかのように考へられたのだ、——という
くらいのことでも、公爵が知つていたらよいものを!

さて、例の獨逸派の詩人は、非常に愛想よく、つましや
かに振舞つてはいたが、しかも、殆んど自分の訪問によつて
この家に對して名譽でも與えたかのようになつてもりになつて
いた。ところが、公爵はこうした裏面の事情には、全く氣がづ
かなかつたのである。

この醜態に對してはアグライヤにも先見の明がなかつた。
彼女自身は、この晩は、すばらしく綺麗であつた。三人の令

* ドン・ジュアン……ここでは道樂者で、口の汚い人といふ意味。(譯者註)

嬢はみなそれほど派手ではなかつたが、粹な身なりをして、髪（髪）の結い方には何とはなしに、いつもとは違つていた。アグラ（アグラ）ーヤは、エヴゲニー・パーヴロキッチの傍に腰をかけて、かなり親しげに話し合つたり、冗談をいつたりしていた。エヴゲニー・パーヴロキッチもまた、恐らくは名士たちに對する敬意からであるが、ほかの時よりは、幾分どつしりとかまえていた。尤も、彼は社交界ではすでに夙くから人に知られて、年こそ若かつたが、もう何の氣兼ねもなくなつていた。この晩、彼は帽子に喪章をつけてやつて來たので、ベラ（ベラ）コンスカヤ夫人は、亡き叔父に對する儀禮を賞め讃えて、ほかの社交人であつたら、こんな場合に、甥としてあのような叔父のために、恐らく喪章などは附けなかつたらうといつた。リザヴェータ夫人も、やはり、これには満足してはいたが、概して、なぜかしら、ひどく心配げな様子を見せていた。公爵はアグラ（アグラ）ーヤが二度ばかりも、自分の方を、しげしげと見つめていたのに氣がついてはいたが、どうやら、アグラ（アグラ）ーヤが今もなお公爵に満足しているらしく思われた。だんだんと彼は自分を幸福だと感ずるようになって來た。さきほどの「氣まぐれ」な考えや危懼の念（レーベジェフと話をした後での）はゆくりなくも、幾たびとはなしに心に浮かんで來たが、今は到底この世にありうべからざる、むしろ滑稽なくらいに夢に過ぎないものと思われた！ それは別としても、無意識にはあつたが、さきほどと、いうよりも、この一日じゆう、最も大きな念願となつていたものは、——どうかしてこの夢を信じないようによろしいことであつた。

すばらしい所有地を、特に金に困つたという譯でもないのに殆んど半値で賣つてしまふ、しかも同時に、不利益な、訴訟問題がからまつて荒廢した土地を、金まで拂いながら、手に持つていなければならなかつた理由を、流暢に物語つていた。

「バヴリシチェフ家の領地と訴訟でも起こしたら大變だと考へて、あの人たちのところを逃げて來ました。あんな親ゆづりの土地がもう一つか、二つもあつたら、それこそわたしは破産しては了す。尤も、わたしはあそこで立派な土地を三千町ばかり手に入れましたよ！」

「それ、あの……イワン・ペトロキッチは亡くなつたニコライ・アンドレーキッチ・バヴリシチェフさんの親類なんですよ、……君は何だか、親類の人をさがして居つたようだが。」と、イワン・フョードロキッチは、不意に公爵のところへ來て、彼が二人の話に並々ならぬ注意を拂つて居るのに氣がついたので、小さな聲で囁やいた。それまで、將軍は自分の長官のお相手をしていたのであるが、もうかなり前から、レフ・ニコライキッチが全く一人ぼつちになつて居るのに氣がついて、心配し出したのであつた。彼はある程度まで、公爵を話の仲間へ入れて、そつして、もう一度、「上流の人たち」に引き合わせ、紹介をしようという氣になつた。

「レフ・ニコライキッチ君は兩親を失くして以來、ニコライ・アンドレーキッチ・バヴリシチェフさんに育てられた人で、——と彼はイワン・ペトロキッチ（英國狂のこと）の視線を迎えて、啄を容れた。

彼はあまり口をきかなかつた。それも、ただ質問に答へるだけのことであつた。遂には、すつかり口を噤んで、じつとしたまま、他人の話に耳を傾けるばかりであつた。が、偷しい感じに耽つて居るのだと明らかに看取された。彼自身のうちにも、次第々々に、よい折さえあれば燃えあがるやうとして居る一種の感興が湧いて來た。……彼は圖らずも口を出した。これはまた、質問に答へてではあつたが、全く何ら特別な下ごころもなく、うつかり口を滑らしたかのようであつた。

7

彼がよい氣になつて、N公爵やエヴゲニー・パーヴロキッチと言葉を交へて居るアグラ（アグラ）ーヤを見まもつて居る間に、今まで一方の隅で、高官のお相手をして、元氣よく何か話を聞かして居た中年の紳士、英國狂が、不意にニコライ・アンドレーキッチ・バヴリシチェフという名を口にした。公爵は、ひよいと、その方を振り向いて、耳をすまし始めた。

話題は……縣の地主領に對する現行の制度のことや、何かの騒ぎのことであつた。ついに年寄の高官が、話相手の氣むづかしい激越な調子を笑い出したところを見ると、英國狂の話には、何か面白いところがあつたに相違ない、英國狂は母音に柔らかな力點をつけ、何だか氣短からしく、言葉尻を引きながら、現行制度の直接の影響を蒙つて、……縣における

「いやあ、實に愉快ですね——と相手はいつた、——と御紹介下すつた時に、直ぐに氣がつかまりましたよ、顔さえ覺えていますよ。あなたは實際、あんまりお變りになりませぬねえ、わたしがあなを見たのは、まだあなたが子供で、十か十一ぐらいでしたのに。いや、何となくお顔に、昔を思いおこさせるところがありますね……」

「あなたは僕が子供の頃にお目にかかつたんですか？」公爵は何となく一方ならぬ驚ろきを懷いて訊ねるのであつた。

「おお、もうかなり昔のことですよ。」とイワン・ペトロキッチは言葉をつづけた。「何でも、あなたが、金（金）村のわたしの従姉たちのところにいらした頃ですよ。わたしは昔は、しよつちゆり、金村へ出向いていました。——わたしを覺えていらつしやらないでしょうか？ 覺えていらつしやらないのがあたりまえですよ……、あなたはあのころ、……何か病氣をしていらつしやりましたね、で、一度などは、あなたを見てびっくりしたものでしたよ……」

「一寸も覺えて居りません……」公爵は熱心に念を押した。それからなお、イワン・ペトロキッチの方は極度に落ちつき拂い、公爵の方はびつくりするほど昂奮して、とにかく互いに話をして見ると、公爵が養育方を託された亡きバヴリシチェフの親類にあたり、金村に住んでいた中年のオールド・ミス二人は、同時にまたイワン・ペトロキッチの従姉にあたることがかつて來た。イワン・ペトロキッチも世間の誰彼と同様に、どういふ仔細があつてバヴリシチェフが

いわない公爵の身の上をあんなに心配したのか、説明することができなかつた。

「それにあの頃、そんなことに物好き心を起こすのを忘れていましたからね。」といったが、それにしても、この人がかなり記憶のよいことが分かつた。というのは、彼はマルファ・ニキーチシナという年上の方の従姉が、幼い子供にたいしてどんなに嚴重であつたかといふことまで、思い起こさせたからである。

「ですから、一度なぞはあなたの教育方針のことで、その従姉と口汚なく喧嘩したことさえもありませんよ、何しろ、病身の子供を仕込むのに、明けても暮れても鞭棒という始末で……いや、そんなことは……御承知でしょうが……。」ところがこれに反して、年下の方のナタリヤ・ニキーチシナが病身の子供にたいして、どんなに優しくあつたかといふことも話してくれた。二人とも今は、（と彼は先から先へと説明した、）……縣に住んでいます。（尤も、今なお生きてゐるかは知りません）その縣には、バヴリシチェフが二人の従姉に残した實に實に整然とした小さな領地がありましてね。マルファ・ニキーチシナは修道院へ入りたがつたようです。尤も、それは斷定の限りではありません。ひよつとしたら、誰かほかの人の噂だつたかも知れません。……そう、これはつい先だつてお醫者さんの妻君の話を開いたので、……。」

公爵は歡喜と感激とに眼をかがやかせながらこの話を聞いていた。今後は彼の方から、この六ヶ月の間、内部のあちこちの縣を旅行しながら、もとの養育者を探し出して、訪問りでも？ 全くほんの少しばかりでも！ へー！ へー！ 僕があんなことをい出したのは、つまり、亡くなつたニコライ・アンドレーキッチ・バヴリシチェフさんが、實に立派な人だつたからです！ 全く鷹揚な人でしたねえ、本當に、正直のところ！

公爵は息切れがしたという譯ではなかつたが、いわば、「美しい愛情のために咽せかえつたのであつた」これは翌くる朝、アデライダが、未來の良人であるS公爵との會話の中でいつたことであるが。

「ああ、これはどうも！」とイワン・ペトロキッチは笑い出した。「一體、どうして、わたしは、鷹揚な人の親戚になる資格がないんでしょうね？」

「ああ、とんでもない！」公爵は次第々々に昂奮しながら、あわてて、どきまぎしながら叫んだ。「僕は……僕はまた馬鹿なことをいつてしまいました、しかし、……それが當然な話です、なぜつて、僕は……それにしても、僕はまた、とんでもないことをいつて……それに、こんな面白い話があるのに、……こんなすばらしく面白い話がたくさんあるのに、……僕のことなんか話して何になりましょう！ それに、そんな鷹揚な人にくらべると、僕は……、だつて、全くあの方は鷹揚な人でしたものね、そうじゃありませんか？ そうじゃありませんか？」

公爵は體じゆうをぶるぶるわせてさえもいた。なぜ彼がこれというわけもないのに、急にこんなに小躍りして喜んだのか、しかも、話題とはまるで調子が合わないと思われる

する機會を捉えなかつたことを、つねに濟まないと思つていると、非常な熱をこめて告げるのであつた。

「毎日のように出かけたいたとは思いますが、やはりいろんな事情に妨げられたのです。しかし、今度こそは必ず、……是非でも、……たとい、……縣でもかまいません、行つて來ます……では、あなたにはナタリヤ・ニキーチシナを御存じなんでしょうね！（何という美しい、何という聖い心のお方でしょう！ けれど、マルファ・ニキーチシナさんは、……いや、御免なさい、あなたはマルファ・ニキーチシナさんを勘違いしていらつしやるようです。あの方は嚴いお方ではありましたが、けれど、……あの方の僕のような……白痴には、やりきれなかつたんじゃないやありませんか。（ひ、ひ）だつて、僕はあの方の全く白痴でしたからね、あなたは本當にはなさらないでしようが、（は！ は！）尤も、……尤も、あなたはあの方の僕とお目にかかつていらしたんです、……して見ると、一體、どうして僕はあなたを覚えていないんでしょう。どういふ譯ですか、聞かして下さいませんか？ じゃ、あなたは……ああ、いまましい、それでは、本當にあなたはニコライ・アンドレーキッチ・バヴリシチェフさんの御親類なんですか？」

「たあしかに、そうです」とイワン・ペトロキッチは、公爵をじろじろ見まわしながら微笑んだ。

「おお、僕は決して……疑つたがために、そんなことを申したわけじゃありません。それに、まあこれが一たい疑がられるようなことでしょうか（へー！ へー！）……たとい……はど感傷したのか、……といふことになる、容易に解答がつかかねのである。兎に角、こつた氣分になつてしまつていたので、殆んど彼はこの瞬間に、誰かに對して、何かの理由で、非常に熱烈な、感傷的な感謝の念をさえも感じていたのである、——恐らく、この感謝の念はイワン・ペトロキッチにさえも、乃至は客全體にも向けられていたであらう。すつかり『嬉しくてたまらなかつた』のである。

イワン・ペトロキッチは遂に、じつと眼を据えて、彼を眺め始めた。「高官」も、しげしげと彼を見つめていた。ペラコンスカヤ夫人は、彼の方へ腹立たしそうな視線を注いで唇をかみしめていた。N公爵、エツゲニイ、S公爵、令嬢たちも、話をやめて聴き耳を立てていた。アグライヤは、愕然としたらしかつた。リザヴェータ・ブコフイヴァナはただただ怖じ氣づいていた。この母と娘は變な人たちであつた。自分たちで勝手に、公爵は一晚じゆう黙つて坐つていた方がよからうと決めておきながら、公爵が片隅に全く一人ぼつちになつて、自分の境遇に満足しきつてゐるのを見るや否や、そつと直ぐに氣がかりになつて來た。アレクサンドラはもう、そつと氣をつけて向うの隅の彼のところへ行つて、仲間になり、ペラコンスカヤ夫人のわきにいるN公爵の仲間に加えてやろふと考へていた。ところが、公爵が自分の方から話し出すと、母と娘は一そう甚だしく氣をもみ出したのである。「立派な人だつたといふことは、あなたのおつしやる通りです。」と、押しつけるように、もう微笑みもせず、イワン・ペトロキッチがいつた、「そう、そう、……あれはすばら

しい人でした！ すばらしい、そして、値うちのある人でした。暫らく口を噤んだが、またこり附け足した。「それどころか、あらゆる尊敬を受くべき価値のある人、といつてもいいくらいでした。」と、彼は三たび沈黙のち押しつけがましく附け加えた。「しかし、……しかし、かえつて非常に愉快です、あなたがそんなに……」

「そのパヴリシチェフ氏じやないですか、何か……妙な話があつたのは……カトリックの僧院長について、……カトリックの僧院長、どんな坊さんだつたか……忘れてしまつたけれど、あの當時みんなが何か言つてたようですが。」と、ふと思ひ出したかのように「高官」がいつた。

「あれはエスイタ派の僧院長ゲウロオです。」とイワン・ペトロキッチは思ひおこして、「それで、あれは、わが國でも珍らしい立派な、尊敬すべき方でした！ とにかく、門閥はよし、財産はあり、ずつとつづけて勤めていたら、侍従くらいにはなれた人だつたのですからね。……それが、どうでしょう、不意に勤務も何もすつかり抛り出してしまつて、カトリックに改宗して、エスイタ派になるなんて、しかも殆んど大つびらで、一種の感激までもつてゐるなんて、實際、いい時に死んだものですよ、……全く。あの時は大へんな噂でしたわね、……」

公爵は我を忘れてしまつた。「パヴリシチェフさんが……パヴリシチェフさんがカトリックに改宗したんですつて？ そんな筈つてあるもんでしょりか？」と彼は懐然として叫んだ。

「どうも露西亞はあの……山師にかつたとき、じつと持ちこたえることができないようですね……殊に外國にいる人は、その傾向が著しいものがありますからね。」

「それはつまり、露西亞人の倦意から来るんだ……と思う。」と年寄の高官は鹿爪らしく、もぐもぐ言つた。「まあ、それにあの連中の説教のやり方が……一流の派手なもので、脅かしがうまいので、わしも三十二年(三二)はウインナで脅やかされてね。實際、尤も、降参しないで、逃げ出してしまつたよ。は、は！ ほんとうに逃げ出したんだよ。」

「わたしの聞いた話では、あなたは綺麗なりヴェツキイ伯爵夫人と一しよに、任務をすてて、ウインナからパリへ『逃げ出した』そうじやありませんか、エスイタ派から逃げ出したんではなく。」と不意にベラコンスカヤ夫人が口をいれた。

「まあ、しかし、それでもやはり、エスイタ派から逃れたという事になりますよ、エスイタ派から！」年寄の高官は愉しい思ひ出に笑いながら、言葉をかえして、今度は「君はどりやら、今どきの青年に珍らしく、かなり宗教的な方らしいですね」と口をあけて、相變らず呆然と、耳を傾けているレフ・ニコライキッチ公爵に向かつて、彼は愛想よく言葉をかけた。老高官は一そう詳しく公爵の人となりを嗅ぎ出そうと考へた。彼は少々仔細があつて、公爵に少からぬ興味を感じ始めたのである。

「パヴリシチェフさんは頭腦明晰な人で、基督教徒でした、ほんとうの基督教徒でした。」と、俄かに公爵はいつた、「ですから、あの人が……基督教に合わない宗旨に屈服する筈は

「え、そんな筈つてあるものか」ですつて！」とビョートル・ペトロキッチはどつしりとした態度で言つた。「それは言はずです、御自分でもお分かりでしょうが、……しかし、あなたは非常に故人を尊敬しておいでの方ですから……實際、あの人は善良至極な人でしたよ。つまり、そういうところがあるために、グウロオという山師につけこまれたんだと僕は考へています。しかし、その後このグウロオの一件について、わたしがどれほど骨折つて奔走したか、全くお聞かせしたいくらいです。いかがでしょう、」と彼は不意に高官の方を向いた。「その連中がですね、遺産についての要求まで持ち出そうとしたのですよ。そこで、わたしは思ひ知らせるために、止むを得ず。最も、その強硬なる手段に訴えるようなこととにまでなつたのです、……何しろ、あいつらは、したたか者ですからね！ おどろき入るほどの！ しかし、いい鹽梅に、この事件はモスクワで起つたものだから、わたしはすぐ伯爵のところへ駈けつけて、一しよになつて、あいつらに思ひ知らしてやりましたよ……」

「こんなことを申しても本當になさらないでしょうが、僕はあなたのためにすつかり悲觀してしまいましたよ、そして、びつくりしてしまつて！」と公爵は又もや叫んだ。「それはお氣の毒さま。しかし、實際のところ、はつきり言つと、この事件は實につまらない話で、いつものおきまりで、あつてなく終る筈だつたんですよ。わたしはそう信じています。昨年の夏、と再び高官の方を向いて、「K伯爵夫人もやはり、外國の或るカトリックの修院へ入つたという噂です。」

「ありませぬ！ カトリックは異教と同じことですよ！」と彼は眼を輝やかして、一座の者を普く見わたすように、前の方を見ながら、附け足した。

「まあ、これはひど過ぎる。」と高官は呟やいて、驚きの眼を見はつてイワン・フョードロキッチの方を見た。

「どうしてカトリックが異教徒だといふのかね。」とイワン・ペトロキッチは椅子に腰をかけたまま公爵の方を振り向いた。「一體、どういふ宗旨なんです？」

「第一は基督に合わない宗旨です！」公爵は並々ならぬ昂奮に動かされて、除方もなく鋭い調子で、又もや話し出した。「これが第一です。第二には、羅馬カトリックは無神論よりもつと悪いくらいのもので、これが僕の意見です！ そろです、これが僕の意見です！ 無神論は單に無を説くばかりですが、カトリックはそれ以上のところまで進んでいます。つまり、歪曲された基督を、彼ら自らが譏誣し、中傷した基督を説いているのです、まるで正反對の基督です！ 反基督を説いているのです、僕は誓つて申しますが、全くです！ これは僕自身の豫てからの信念で、このために僕自身も惱まされたものでした……。羅馬カトリックは全世界に及ぼす國家的權力なしには、地上に教會を確立することができないと信じて

Zon Posunius (われらな)と叫んでいます。僕の見るところでは、羅馬カトリックは信仰でさえもなく、全く西羅馬帝國の繼續です。カトリックにおいては信仰を初めとして、ありとあらゆるものが、この思想に支配されています。法王は世界を掌握し、地上の王座を得て、劍を取りました。それか

らというもの、つねに何もかもが、かよいな道を辿つて、ただ剣のほかに付け加わつたものは、虚言と詐欺と、偽瞞と狂信と罪惡だけであつた。神も神聖で、誠實で、單純で、熱烈な民衆の感情は弄ばれ、何もかも、何もかもが、金と變り、卑しい地上の權力と化したのです。しかも、これでも反基督の教義ではなかつたのでしようか?! こんなものの中から、どうして無神論が出ずにいられますようか? 無神論は、この中から出て来たものです。羅馬カトリックそのものの中からは出て来たものです! 無神論は何はともあれ、そこから始まつたものです。カトリック教徒が、どうして自分を信ずることができましようか? 無神論は彼らの自己嫌惡に基礎を固めたのです。無神論は彼らの虚偽と精神的無力との産物です! ああ、無神論! わが國において神を信じないものはただ特殊の階級ばかりです、先日エヴゲニイ・ペーヴロキッチさんのおつしやつたすばらしい言葉を藉りると、『根つこを失くした人』たちばかりです。ところが、あちらでは、西歐羅巴では、民衆そのものの最大多数が、信仰を失いかけています、——それも昔は暗黒と虚偽のためでしたが、今では狂信の結果です、教會および基督教に對する憎惡から來てい

るのです。」

公爵はここで、ほつと一休みした。彼の話しぶりはおそろしく早口であつた。彼は蒼ざめて、息切れがしていた。一同は顔を見合せていたが、ついに、老高官が無遠慮に笑い出した。N公爵は柄附眼鏡を出して、眼も放さずにじつと公爵を見つめていた。獨逸系の詩人は片隅から這い出して、縁起

「死を賭して同胞! 二百萬の民衆よ!」と叫んでいます。それは彼らのすることを見れば分かります! そんなことはわれわれにとつて、無邪氣な遊びごとで、大して怖ろしくないなどと思つたら、大へんです。おお、われわれは支柱が必要なのです。一刻も早く、できるだけ早く! われわれが維持して來たわれわれの基督を——彼らの今まで知らなかつたわれわれの基督を、西歐文明に對抗して輝やかさなくてはなりません! 唯々諸々とエスイタ教徒の畏にかかることなく、露西亞の文明を彼らにもたらしながら、われわれはいま彼らの前に立たなければなりません。そして、いまだなたか仰つしやつたように、あの連中の説教のやり方が派手だなどと、われわれの間で、いわないようにはしたくないのです……」

「しかし、失禮ですが、失禮ですが。」イワン・ペトロキッチはあたりを見まわしながら、怖じ氣つきさえもして、不安になり、「あなたのお考えは、勿論、賞讃に値するもので、愛國心に充ちています。しかし、全く、極度に誇張されたものです。却つて、この問題は、後まわしにした方がよろしいとさえ思います……」

「いいえ、誇張されてはいません、むしろ、控え目にしたくらしいです。たしかに控え目にしてあります。なぜといつて、僕にはりまく言いあらわす力がないからです。しかし……」

の悪い笑いを浮かべながら、テーブルの方へそろそろと寄つて來た。

「あなたは非常に誇張をしてえいますね。」とイワン・ペトロキッチはいくぶん退屈そうに、何かしら氣恥づかしげに言葉尻を引きながら言い出した。「あちらの教會にも、やはり民衆の尊敬をうけるに値する、徳のたあかい代表者がいますよ……」

「僕は決して教會の個々の代表者のことを言つたわけではありませぬ。僕は羅馬カトリックの實體を論じたのです。僕は羅馬の話をしたのです。果して、教會は全くあとかたもなく消滅するなんて、そんなことがあり得るでしようか? 僕はそんなことを言つた例はありません!」

「御尤もです、しかし、そんなことは知れきつたことで、むしろ、——不必要なことです、それに……神學に屬することでもありません……」

「おお、ちがいます! おお、ちがいます! 決して神學のみに屬することではありません、全く、ちがいます! これはあなたの方のお考えになるより、遙かに、われわれに接近している問題です。これがただの神學上の問題でないといふことを、われわれが知らないでいるところに、われわれの誤謬があるのです! 社會主義というものは、やはりカトリック教と、カトリック思想の産物じやありませんか! これは兄弟分の無神論と同じように、絶望から出發したものです。道徳的の意味でカトリック教に反對して、自ら失われた宗教の道徳的權力にかつて、饑えたる人類の精神的饑渴をいやし、

「しつづいて、公爵は黙り込んでしまつた。彼は椅子の上にとりかえつて、じつとしたまま、燃えるような眼つきでイワン・ペトロキッチを見つめていた。

「君はどうも、君の恩人の一件にあんまり驚ろきすぎたようです。」と高官は相變らず落ちつきを失わずに、愛想よく言つた。「君は、ひよつとしたら、……孤獨だつたために、熱し易くなつたかも知れませぬ。もう少し、世間へ出て多くの人とつき合つたら、立派な青年だといつて、きつと歓迎されるでしよう。そうしたら、無論、そんな昂奮も静まつて、こんなことはずつと簡單なことだといふことがお分かりになるでしようよ……それに、わしの眼から見ると、あんな珍らしい出來ごと、一部分はわれわれが、いろんなことに飽きているところから、一部分は……退屈のために生ずることだと思ひますが……」

「そうです、たしかに、そうです。」と公爵は叫んだ。「それは實にすばらしい御意見です。全く退屈のためです、われわれが退屈しているためです。しかし、飽きているからではありませぬ、むしろその反對に渴えているからです……決して飽いているからではありません。この點ではあなたは勘違いをなすつて居られます! それも、單に渴えているためのみでなく、むしろ、炎症のためといつていくらいです、熱病のような渴望の結果です! それも、……それも、ただ笑つて濟まされるような些細な程度だと思われは困ります。失禮な言い分ですけど、こんなこんなことは豫感ができま

せん！露西亞人は岸へ泳ぎついて、これが岸だなど思い込むと、もう大喜びで、すぐに決勝點まで行きついでしまふ、これは一體どういふわけでしょう？あなた方は、パヅリシチェフさんのことにびつくりなすつて、その原因を同氏の氣ちがい沙汰や、氣だての好い性質に歸しておしまひになりましたが、あれは、とんでもないことです！全くそつういふ場合には、單にわれわればかりでなく、歐羅巴全體が、われわれ露西亞人の情熱にびつくりするのです。われわれ露西亞人がカトリックに入るときは、必らずエスイタ派になつてしまひます、しかも、一ばん墮落したエスイタ派に入るのですからね。若しも無神論者になるとすると、必らず暴力をもつて、——従つて、劍をもつて、神にたいする信仰の根絶を要求すよりになるのです。これはどういふ譯でしょう？こんな一擧にして夢中になるのはどういふ譯でしょう？あなた方には、お分かりになりませんか？それはどういふわけです。つまり、彼はここで見おとした祖國を、かしこに發見して、大喜びをしたのです。岸を見つ、陸を見つけて接吻したのです！露西亞の無神論者やエスイタ派は、單に見榮からばかりではなく、見苦しい虚榮心に富んだ感情によつてばかりではなく、精神的な苦しみ、精神的な渴望からうまれて來るのです。より高き問題、堅固な岸、生みの故郷——どういふものかたいするあこがれから出て來るものです。露西亞人は生みの故郷を信じなくなりましたが、それというのも、未だ會て、自分の國といふものを、よく知らなかつたからです。無神論者になることは、世界中のどの國民よりも

露西亞人にとつては容易なことです！露西亞人は單に無神論者になるばかりではなく、まるで新しい宗教かなんぞのよりに必然的に無神論を信仰するのです。しかも、自分が無を信仰しているのだといふことには、とんと氣がつかないのです。われわれ露西亞人の渴望といふものはどういふ嘆悔です！『自分の足下に地盤をもたない者は、神をもつていない。』これは僕の言葉じやありません。僕が旅行中に出あつた舊派に屬する商人の言葉です。實のところ、言ひ方はこの通りではありませんでした。この商人は、『自分の生れた國を見ずてゐるものは、自分の神をも見ずてゐることになる。』といつたのです。露西亞で最上の教育を受けた人たちが、鞭打教に馳せ參じたことを考へても御覽なさい……。それにしてもこの場合は、鞭打派はいかなる點において、虚無主義や、エスイタ派や、無神論などに劣るものでしょうか。事によつたら、こんなものよりはつと深味さへあるかも知れません！しかし、とにかく、あこがれがこんな程度にまで達したのです！……渴望に燃えるコロンプスの道づれに『新世界』の岸を見せてやつて下さい、露西亞人に露西亞の『世界』を見せてやつて下さい。露西亞人にこの地上において、隠されてゐるこの黄金を、この寶を發見させてやつて下さい！將來は露西亞人に全人類の刷新と復活とを示してやつて下さい。それは、ひたすら露西亞思想と、露西亞の神と、基督のみによつ

* 鞭打教……第十四世紀ごろ、歐羅巴の中部および南部に行われた狂信の一派、罪障の消滅を祈つて、自ら鞭體となつて、自らを鞭うつたりした。（露西亞誌）

て、成し遂げられるものかも知れませんが、それならば、力の強い、誠實な、知慧のある、心のやさしい巨人が、嗚然たる世の前に、嗚然として降易せる世界の前にはあらわれるのを見ることのできるでしょう。なぜというのに、われわれ露西亞人か期待されているものは、ただ劍のみ、劍と暴力のみだからです。彼らには、自分の方のことから推して考へるために、野蠻でない露西亞人を想像することができないからです。これは今までもつとそうでした。時が経てば經つほど、この傾向はいよいよ盛んになるばかりです！そして……」

ところが、ここに、不意に一つの事件が起つて、公爵の熱辯は全く思いがけずに中斷されるの止むなきに至つた。

この熱のこもつた長廣舌、情熱的な、落ちつきのない言葉と、統一もなく狂熱的な、恰も入り亂れてぶつかり合ひながら、互いに先を争つて飛躍しつゝあるような思想の奔流は、見たところは、これという原因もないらしいのに、俄かに昂奮して來た青年の氣持の中に、何かしら危険な、何かしら特殊なものがあらわれたことを暗示していた。客間に居合わす人々のうちでも、公爵を知つてゐるすべての人は、彼のいつもの臆病でさえもある控え目な性質や、或る場合に稀れにあられる獨自な交際術や、上流社會の禮儀作法に對する本能的な敏感などと、全く似てもつかない今の狂氣じみた言動に不安の念をうかべて、（或る者は羞恥の念をすらもつかべて）仰天するばかりであつた。どうしてこんなことになつたのか、彼らはどうしても呑み込むことができなかった。パヅリシチェフ氏のことを聞かされたのが、原因になつた譯でもな

かつた。婦人席の方では、氣のちがつた人でも見るやうな眼で彼を眺めていた。ペラコンスカヤ夫人は後になつてから、『もう一分もしたら、もうわたしは逃げ出そうと思つていた。』と告白した。老人たちは最初に度膽を抜かれて、殆んどほんやりしてしまつていた。獨逸系の詩人は顔色まで變えたが、それでもなお他の人たちにどういふ反響があるかと、その方を眺めながら、例の作り笑ひをしてゐた。尤も、こうしたことでもこの『醜態』も、悉く恐らく、もう一分もすれば、きわめてありふれた自然な道を辿つて、全く鼻がつくべきものであつたらう。極度におどろいてゐたイワン・フォードロキッチは誰よりもさきに我に返えつて、幾たびも公爵に話をやめさせようとしていた。ところが、どうにも巧く行かないので、今度は固く意を決して、公爵の方へ客の間を縫つて近づいて行つた。もう一分しても、効果があがらなかつたら、病氣を楯にとつて、きわめて打ちとけた態度で、公爵を部屋から連れ出すくらい覺悟をきめていたのであろう。病氣といふのは恐らく全く正しい事實かも知れなかつたが、イワン・フォードロキッチは心の中で、たしかにそれに違ひないと信じ切つていたのである……。しかも、事態は全く別な方へ變つて行つた。

最初に、公爵は客間へ入るや否や、アグラライヤにおどしつけられた支那焼の花瓶から、できるだけ速く離れたところに腰をかけた。殆んど嘘のよふな話ではあるが、昨日アグラライヤにあんなことをいわれてからは、どんなにその花瓶から

遠ざかつて、どんなに禍いを避けようとしても、必らず明日は花瓶をこわすに相違ないだろうという一種の消しがたい信念、一種の驚ろくべき、ありうべからざる豫感が、彼の心に乗り移つたのであつた！ところが、實際にその通りになつてしまつたのである。夜が更けて行くにつれて、例の強い、しかも明るい印象が、彼の心を充たし始めた。このことはすでにいつておいたことである。そうして、彼はついに豫感を忘れてしまつたのである。彼がパヴリシチェフという名を耳にしたとき、イワン・フォードロキッチが公爵をイワン・ペトローキッチのところへ連れて行つて、あらためて紹介したが、このとき、公爵はテーブルに一そり近いところへ寄つて行つて、いきなり安樂椅子に腰をおろした。その傍には美しい支那焼の大花瓶が花臺の上に立つていて、殆んど彼の肘とすれすれになつて、ほんの少し彼の後ろの方になつていた。最後の言葉を述べたとき、彼は不意に席を立つて、何となく肩を動かす拍子に、ついうっかりして手を振つた、……と一座の人たちがあつと叫んだ！花瓶は、最初は、老人たちのうちの誰かの頭のうえに倒れようかと、意を決しかねていゝるらしく、ふらふらと揺れたが、不意に反対側の、肝を冷やして今まさに飛びのこうとした詩人の方へ傾いて、床の上に崩れ落ちた。

轟ろき、叫びごえ、絨氈のうえに散りこぼれた貴重な破片恐れ、驚ろき、——ああ、公爵の心中やいかに？今は名状すべからざるものであり、しかし、その必要もないことである！それにしても、この刹那に、彼の心を打つた一つの

眼な顔つきをして、自分を眺めているアグラシーを見た。その眼の中にはいささかも憎悪の色がなく、いささかの憤怒の色もなかつた。彼女は怯え切つた、しかも、同情のある眸で公爵を眺めていた、……ほかの人たちを見る眸は妙に輝やいて、……彼の胸は不意に快よい痛みを覚えて来た。

彼はついに、一同があたかも何ごともなかつたかのように席に着いて、笑つてさえもいるのを見て、不思議な驚ろきを覺えた！一分の後には、笑い聲は一そり高まつた。やがて感覺が失くなつたかのように棒立ちになつていて彼を見ながら笑い出した。しかも、いかにも打ちとけた、愉しげな笑ひ方をしていたのであつた。多くの人たちは彼にむかつて言葉かけたが、その話しぶりは、極めて愛想がよく、リザヴィータ夫人に至つては殊更なものがあつた。彼女は笑いながら何かしら、かなり親切な言葉をかけた。不意に彼はイワン・フォードロキッチが、まるで友だちのように、自分の肩をたたくのになつた。イワン・ペトローキッチもやはり笑つていたが、それよりも、一そり親切で、魅力のある、同情的な態度を示したのは老高官であつた。この人は公爵の手を取つて、軽く握りしめ、一方の掌で軽くその手を叩きながら、まるで怯えている小さな子供を相手にするように、氣をしつかりしなさいと言つて聞かせるのであつた。これが非常に公爵の氣に入つた。やがて、ついに公爵を自分と並んで坐らせた。公爵は愉しそりに、相手の顔を見つめていたがそれでもまだ、どうした譯か、口をきくだけの元氣が出て來なかつた。彼は息がつまつていたのである。老高官の顔はひと

奇妙な感覺、その他の漠然とした怖るべき感覺のうえに、不意に、はつきりと浮かんで來た一つの感覺については、ここに述べないわけには行かない。彼を驚ろかしたのは羞恥の念でもなく、醜態を演じたという氣持でもなく、恐怖でもなければ、あまりに不意であつたという感じでもなく、何よりも先ず、豫感が的中したということであつた！然らば、彼を驚ろかせた、かような考えのうちに、何か彼を牽制するものがあつたであらうか？彼はこれを心の中で説明することができなかつた筈である。彼はただ、心の底まで驚ろかされたという感じを得たばかりで、殆んど神秘的ともいふべき恐怖をいだきながら佇んでいるのであつた。次の刹那になると、何もかも眼の前にあるものがぼつと開けたように思われた。今は恐怖に代るに、光りと、喜びと歡喜の念があるばかりである。息がつまりかかつて來た、また、……しかしその刹那も過ぎた。やれやれ、これは本當のことではなかつたのだ！彼はほつと息をついて、あたりを見まわした。

彼はあたりを湧きかえる混亂を、永いこと悟りかねていたらしかつた。つまり、全く悟りもし、一切を見てとつてはいたのであるが、まるでこの出來事に少しも關係のない人のように、ぼんやりと佇んでいたのである。お伽噺の中にある姿の見えない人のように、こつそりと部屋に忍び込んで來て、何の緣故もないとはいへ、かなりに自分にとつて興味のある人たちを眺めている人のようでもあつた。彼はみんなが破片を取り片づけているを見、みんなが早口に話をしてゐるのを耳にした。また、顔いろを變えて、不思議な、あまりにも不意

く彼の氣に入つた。「え？」と、彼はよりやくのことで、眩やいた。「本當にお許し下さいますか？そして、……リザヴィータ・ブッコフイーヴナさん、あなたも？」

笑い聲は一そり高まつた。公爵の眼には涙が浮かんで來た。彼は我と我が身を信ずることができずに、まるで魔法にかかつたかのようにあつた。「もちろん、花瓶はすばらしいものでした。……あたしがこちらで初めて見てから、もう十五……そう……十五年にもなりますよ。」とイワン・ペトローキッチが言いかけた。「まあ、ほんとに、とんだ災難でしたわ！一人の人間が滅びるかも知れないんですよ。しかも、瀬戸物の壺のことから！」とリザヴィータ夫人は聲高らかに言つた、「ほんとうにそんなにびつくりなすつたの、レフ・ニコライキッチさん？」危惧の念をさへも懐きながら、夫人は付け加えた。「澤山ですよ、あなた、もう澤山。本當にびつくりするじゃありませんか。」

「何もかもお許し下さいますか？花瓶のほかのことも、一切？」公爵はいきなり席を立とうとした。ところが、老高官はすぐにまた彼の手を引つばつた。彼は公爵を放したくなかつたのである。

「C'est très curieux et c'est sérieux! (これは實に奇妙なことだ) と彼はテーブル越しにイワン・ペトローキッチに囁やいた。しかも、かなり高い聲であつたから、或いは公爵にも聞かえたかも知れない。

「では、僕は皆さんのどなたにも、お氣にさわるようなことはしなかつたんですね？ あなた方は本當になさらないでしようけど、僕はこう思うと實に嬉しいんです。でも、それが當然なんです！ 果して、ここで、どなたかにお氣にさわるようなことをするなんて、そんなことが僕にできるものでしよるか？ 若しも、そんなことを考えたなら、それだけでもまた御迷惑をかけることになりませう。」

「氣を落ちつけなさいよ、君、それは誇張です。それに、君がそんなに感謝するいわれなんか、少しもありませんよ。その感情は美しいけれど、誇張されています。」

「僕はあなた方に感謝なんかしていませんよ、ただ僕は、あなた方に見とれていただけです。僕はあなた方を眺めていると、ほんとに愉しいんです。ひよつとすると、僕のいうことは馬鹿げてるかも知れませんが、しかし——僕は話をしなくてはなりません、説明しなくてはなりません、……ほんの自分自身に對する尊敬の念からでも。」

彼のなすこと、することは、一切が發作的で混亂していて熱にでも浮かされていようであつた。彼の發する言葉が、彼の言わんと欲するところと、屢々違つていふといふことも大いにありうべきことである。彼は眸によつて、『話をしてもいいでしょうか？』と訊ねるかのようであつた。

さて、彼の視線はベラコンスカヤ夫人のうえに落ちた。「かまいませんよ、あなた、後をつづけなさい、後を、ただ息を切らさないようにしなさいよ。」と夫人は注意した、「お前さんはさつき息を切らしながら話を始めたもんだから、と

た、あなたは半年まえに、モスクワで、リザヴェータ・ニコロフ・イヴァナさんのお手紙を御覽になつて、まるで親身の息子か何ぞのよりに、僕をもてなして下さいましたね。そしてそれこそ本當に親身の息子にたいするよきな、御親切な忠告を與えて下さいましたね、僕は決してあの御忠告を忘れません。覚えていらつしやいますか？」

「何だつてお前さんはそんなに躍氣になつてゐるんです？」とベラコンスカヤは忌々しげにいつた、「お前さんはいい人だけれど、可笑しいですよ。銅貨の二つも貰つたくらいで、まるで命でも助けてもらつたやうにお禮を言うんですからね。お前さんは、それを賞むべきことだと思つてゐるんだらうけれど、厭やらしいことです。」

夫人はもうすつかり腹を立ててしまふところであつたが、急に笑い出した。しかも、今度は善良な笑い方であつた。リザヴェータ・ニコロフ・イヴァナの顔も明るくなつた。イワン・フォードロキッチの顔も晴れ晴れして來た。

「わたしもいつたことですが、レフ・ニコライキッチさんという人は、……なんです、……つまり、いま公爵夫人のおつしやつた通り、息を切らしたりなんかしなければいいんですが、……」將軍はベラコンスカヤ夫人の言葉に感激して、同じことを、有頂天になつて呟やいた。

ただひとり、アグラヤーだけは、何となく沈み込んでいた。しかし、その顔には、恐らく、憤慨のためではあろうか紅らみが残つていた。

「あの男は實際、可愛い男だよ。」と又もや老高官はイワン・

うとうあんなことになつたんですよ。けれども、口をきくのを怖がることはありません。ここに居る皆さまは、お前さんよりもつと奇妙な人を、しよつちゆう見てらつしやるから、お前さんなんかには、びくともしないわ、それにお前さんなんかまだ、高が知れてますよ。ほんの、花瓶をこわして、一寸びつくりさせた位なんだから。」

公爵は微笑みながら、お婆さんの言葉を謹聴していた。

「ところで、あれはあなたじやありませんか、彼はいきなり老高官の方を向いた、「あのポドクローモフという大學生と、シワープリンという役人を、三月まえに流刑から救つておやりになつたのは？」

老高官はちよつと顔まで、赧らめて氣を落ちつけるがよいと呟やいた。

「それから、僕が聞いたあの噂はあなたのことでしょう、彼はずくにイワン・ペトロキッチの方を振り向いた、「××縣で、疾うに自由になつて、あなたにさんさん厄介をかけた百姓たちが、焼け出されたとき、家を建て直すために、無料で森をおやりになつたそりですわね？」

「いや、それ、誇張ですよ。」とイワン・ペトロキッチは呟やいたが、それでもいい氣持になつて、ぐつと反り身になつた。しかし、この場合に、『それは誇張ですよ』といつた彼の言葉は、全く事實であつた。それはただ、公爵の耳に入つた流言に過ぎなかつたからである。

「ところで、公爵夫人、あなたは、いきなり公爵は朗らかな微笑みをおやりなべながら、ベラコンスカヤ夫人の方を向い

た、僕は心に痛みを覺えながら、ここへ入つて來ました。次第に次第に狼狽しながら、公爵はいよいよ早口に、いよいよ妙な、昂奮した調子で語りつづけた、「僕は……僕はあなた方を怖れました。自分自身をも怖れました。何よりもひどく、自分を怖れました。このペテルブルグへ歸つて來るとき、僕は是が非でもわが國の第一流の方々にお目にかかり、家柄の古い、遠い昔からつづいてゐる名家の人たちにお目にかかりうと心に誓いました。何しろ、僕自身もこういふ人々の仲間です、家柄からいつても、第一流の譯ですから。だつて僕はいま自分と同じよきな公爵たちと、席を同じうしてゐるんじやありませんか、そりやありませんか？ 僕はあなた方を知りたかつたのです。それは必要なことでした、實に實に必要な……僕はいつも、あなた方のお噂は、あんまり悪いことばかり聞いていました、善いことよりもよけいに。やれ、あなた方の趣味が小つぽけで、片よつてゐるだとか、時世おくれだとか、教育が低いとか、習慣が滑稽だとか、何のかんのと。——お、だつて、今あなた方のことはずいぶんあちこちで書き立てられたり、噂に上つたりしてゐるじやありませんか！ 今日、僕はこちらへ好奇心をいだいてやつて來ました、びくびくしながら。僕が自ら見て、直接にはつきりと見きわめたかつたのは、——事實において、この露西亞の上流階級は、何の役にも立たないものだらうか、黄金時代を過ごして、今は速い昔からの生活によつて干乾らびてしまひ、死を待つばかりとなつて、しかもなお、自分たちの死に

かかっていることには気がつかず、……相も變らず、未來の……人たちとささやかな嫉み半分の戦いをつづけて彼らの邪魔をしているのだからか？——という問題だったので。僕は以前にも、こんな意見をすっかり信じはしなかつたのです。なぜというのに、わが國には、制服によつて區別されたり、……偶然なことによつて區別されたりする宮内官を除くほか、上流階級というものが未だ曾てなかつたからです。しかも、今では官仕えの階級も全く消滅してしまいました。ね、そうじゃないでしょうか、どうでしょう！」

「まあ、とんでもないことです」とイワン・ペトロキッチは毒々しく笑つた。

「おや、またテールをたたいた！」ペラコンスカヤ夫人はたまりかねて言い出した。

「Laissez le dire (勝手に言わしめ) 體じゆう慄えてまでいる。」と老高官はまたもや低い聲で警告した。

公爵はすつかり夢中になつていた。

「ところが、どうでしょう？ 僕は粹で、淳朴で、賢明な人たちを見たのです。僕のような子供を可愛がつて、その話を聴いて下さる御老人に會つたのです。よく理解をして心よく許して下さる方々、僕があらゆる會つた人々と殆んど同じような、殆んど負けず劣らずの氣だてのいい、やさしい露西亞人を見たのです。僕がどんなに嬉しい驚ろきを感じたか、お察しをねがいます！ おおどろかすつかり言わして下さい！ 僕はいろんなことを聞いてたものですから、社交界は、作法一點張り、何から何まで、やくざな形式萬能で、眞實とい

え、夫人の方は、しよつちゆり聴き耳を立てたり、わき見をしたりしてました。

「いいえ、ねえ、もう、話をした方がいいですよ！」と、公爵は特に相手を信頼するよきな、あまつさえ秘密を洩らすよきな風までして、老高官の方を向きながら、熱病やみのよきな新しい激情をもつて言葉を吐つて行つた。「昨日、アグライヤさんが僕に物をいうなとおつしやつて、どんなことを話してならないか、その題目さえもおつしやいました。そんなことに話に移ると、僕が滑稽になるといふことを、よく、あなた方は承知していらつしやるんです！ 僕は二十七にもなりません、まるで子供みたいだつてことは、自分でもよく承知しています。僕は自分の思想を語る資格がありません、これは、ずつと前にも申したことです。僕はただモスクワで、ラゴージンにだけは打ちあけた話をしました、……僕らはブウシキンを読みました、すつかり讀みました。あの男は何一つ、ブウシキンの名さえも知らなかつたんです、僕はいつも滑稽な様子をして、自分の思想や大事な觀念を、傷つけたら大へんだとびくびくしているんです。僕には身振りというものがありません。僕の身振りは、いつもとんでもない結果になるんですから、物笑いになつて、自分の觀念を卑しいものに考えられてしまうのです。また感情の釣合いがとれません、これは大事なことです、これは最も大事なことでさえもありません、……僕は黙つて坐つてた方がいいということは、よく承知しています。隅の方に引つ込んで、黙つていと、却つて、非常に分別がありそいな氣がします。それに、いろ

うものが、全く干乾らびているんだと、てつきりそうだとばかり思い込んでいました。しかし、今という今、そんなことがわが國にありよう筈がないことが、よく分かりました。それはどこかほかの國のことで、決して露西亞のことじゃありません。果して、あなた方が今、みんなエスイタ派で、嘘つきだなんてことがありうるものでしょうか？ さつき、N公爵のお話を聞きましたが、果して、あれは純朴な、思いつきのユーモアじゃなかつたんでしょか、果して、あれは眞ごころからの親切じゃなかつたんでしょか？ 果して、あんな言葉が、情も才能も潤れてしまつた死んだ……人の口から、出る筈のものでしょか？ 果して、皆さんが僕にたいして取られたような態度を、死人が取る筈のものでしょか？ 果して、これは未來にたいする、希望にたいする材料ではないでしょか？ 果して、こういう人たちが理解をせずに、取り残されるなんて話があるものでしょか？」

「もう一度お願いしますが、ねえ、君、氣をおちつけて下さいよ。そんな話はまた今度の時にしましょう、わたしも悦んで、……」と老高官は薄ら笑いを洩らした。

イワン・ペトロキッチは喉を鳴らして、安樂椅子に腰をかけたまま、向きをかえた。イワン・フォードロキッチは身動きを初めた。長官のI將軍は、もはや公爵にはいささかの注意も拂わずに、高官の夫人と言葉を交わしていた。とはい

* 將軍……これは英語の General であるが、必ずしも軍人とは限らず、露西亞に於ては、一等乃至四等文官をも「ダネラル」と言つていた。従つて日本に於けるいわゆる將軍の場合のみならず、更に「そう嚴況な意味を有する。」(譯者註)

んなことをよく考えることもできませんし、しかし、今は話をした方がいいです。僕がいま話をし出したのは、あなた方がそんなに美しい眼つきをして、僕を御覧になるからです。あなた方はきれいな顔をしていらつしやいますね！ 昨日、僕は、明日は一晚じゆう黙つていましてしようと、アグライヤさんに約束したんです。」

「Vraiment (ほんとう) 老高官は微笑んだ。

「けれど、僕は時おり自分は勘違いをしてるんじゃないかと思ふことがあります。眞面目だということは身振りなんかより大事なものでないかと思ふんですが、そうじゃないでしようか、……そうじゃないでしようか？」

「時と場合でね。」

「僕はすつかり説明してしまいたいんです、すつかり、すつかり、すつかり！ おお、そうです！ あなた方は僕を理想家だと思ひですか？ 理窟屋だと思ひですか？ おお、決してそうじゃありません。僕の考えはみんな實に單純なものばかりです、……あなた方は本當になさいませんか？ あなた方は笑つてらつしやいますね？ でもね、僕はどうかすると、下種根性になるんですよ。なぜつていうのに、信仰を失くすからです。さつきも、ここへ来る途で、こんなことを考えました。『さあ、あの人たちの前でどんな工合に話を切り出したもんだらう？ どんな言葉から始めたら、あの人たちがせめて少しでも理解してくれるだらう？』つて。どんなに僕は氣がかりだつたでしよう、けれど、自分のことよりも何よりもあなた方のことを、びくびくしてました。ひどく

ひどく！ それにしても、どうして怖じ氣ついたりすることができたんでしよう？ 怖じ氣ついたりして氣まりが悪くなかつたんでしようか？ 一人の進歩した人間にたいして、時勢おくれの不良な人間が無数にいるからつて、それが何だというんでしよう？ 尤も、無数なにかつて言うべきものではなく、何もかも生きた材料だと、確信していますから、僕は却つて嬉しいんです！ われわれが滑稽だからといつて、じつはほんとの通りじゃありませんか、われわれは滑稽で輕薄で、癖が悪くつて、退屈して、物をよく見る眼がなくつて、理解することもできないでいる、みんなみんなそんな人間じゃありませんか、みんな、あなた方も、僕も、あの人たちも！ ほら、僕が面と向かつて、あなた方は滑稽ですといつても、あなた方は氣を悪くならぬじやありませんか。して見ると、あなたは材料じやないでしようか？ 僕の考えではね、滑稽に見えるという事は、時として結構なくらいなんですよ、却つて一層いくらいなんです。お互いに一刻も早く許し合つて、早く仲直りができますからね。だつて一時に全部が全部、呑み込むことはできませんし、また、最初から、いきなり完全なものになれる譯のものじやありませんからね！ 完全なところに達するためには、いろんなことを知らずに初めることが必要です！ あまり早く、物が分かり過ぎると、或いは、早呑込みをしないと限りませんからね。僕はあなた方にこんなことをいうのは、あなた方がもういろんなことをよくお分かりになつて、しかも……お分かりにな

らないでしまつたからです。もう僕は今、あなた方のことを怖じと思いません。だつて、あなた方は、こんな子供がこんなことをいつているのに、咎めなさんじやありませんか？ 無論、腹を立てなさんでしよう！ おお！ あなた方はあなた方の感情を害した者をも、害しない者をも、お忘れになつて、許すことのできる方々です。なぜつて、感情を害しない者を許すつてことは、何より難かしいことですからね、何しろ、感情を害しない、従つて、あなた方の愚痴に、何らの根據がないということになりますからね。つまり、僕はこういうことを上流の人たちから期待していたのです、そしてこちらへ来てそれをいおうとあせつたのですがどう言つていいか分からなかつたのです……あなたは笑つてらつしやるんですね、イワン・ペトローキッチさん？ あなたは僕が、あの人たちのことを氣にかけていたとお思ひですか？ 僕があの人たちの味方で民主主義者で平等論者だと思ひですか？」と、彼はヒステリックに笑い出した。(彼は絶えず、感激しては、ふつと笑い出して、すぐにやめてしまふのであつた。)

「僕はあなた方のことを氣にかけています。あなた方みんな僕たち全體のことを氣にかけているのです。だつて、僕自身も遠い昔からの古い家柄の公爵で、多くの公爵たちと席を同じうしているんですものね。僕は、われわれ一同を救おうとして、こんなことを言うのです。この階級が、何ひとつ情りもしないのに、何かにつけて、喧嘩ばかりしながら、あらゆるものを失つて聞かから聞かへ、徒らに消えてゆかないように

したいから、言うのです。進歩的な、指導者として、階級とどまつて居られるのに、闇に消えてしまつて、ほかの連中に席をゆずるいわれが、どこにありましよう？ 進歩的な人間になりましよう、そしてまた、指導者にもなりましよう。指導者になるために、召使になりましよう。」

彼は安樂椅子から立ちあがりうとしかかつたが、老高官はいよいよ募りゆく不安をいだいて彼を見つめながらも、やはり彼を抑えつけていた。

「皆さん！ 僕も話をしてはいけないことはよく知つています。まあ、いつそのこと、單に實例を示した方がいいでしよう。あつさり始めた方がいいでしよう……僕はもう始めていました。……そして、實際において、不幸になる筈はないじやありませんか？ おお、若し僕が幸福になれるものならば、今のこの悲しみや災難などは物の數でもないでしよう？ ねえ、皆さん、僕は見たい見たいと思つていた木のわきを通り過ぎて、その木を見ながら、どうして人が嬉しい氣持になれないのか、分らないんです。會いたいと思つていた人と話をして、その人を愛していながら、幸福を感じないと言ひ譯があるものでしょうか！ おお、これは、僕にうまくいい表わせないだけのことなんです。……しかし、すつかり途方に暮れてしまつた人でさえも、美しさを感じるような美しいものは到るところに、どんなにたくさんあるでしよう！ 赤ん坊を御覽なさい、神々しい朝の光りを御覽なさい、草を御覽なさい、どんなに成長してゆくか御覽なさい、あなた方を見つめあなた方を愛する眼を御覽なさい……」

彼は話をしながら、もう暫らく立ち上がった。老高官も今は愕然として彼を見つめるばかりであつた。リザヴェータ・ブコフイェーヴナは眞つ先に氣がついて、「ああ、大變！」と叫んで、手をたたいた。

アグライヤは、まつしぐらに駈けつけて来て、恐怖の念にうたれ苦痛に顔を歪めながら、彼を危ういところで抱きとめたが、めぐまれぬ人の心を『かき亂して、投げつけた妖怪』の荒々しい叫びを耳にした。病める者は絨氈のうえに横たわつていた。誰かがすばやく頭の下に枕をあてがつてやつた。

これは何びとも豫期しないところであつた。十五分して、N公爵、エツゲニイ・パーヴロキッチ、老高官など、夜會に再び活氣をつけようと試みた人もあつたが、そののち三十分とたたない中に、一同はもう散會してしまつた。

いろいろと同情の言葉や、様々な愚痴や、また二三の意見なども述べられた。中でも、イワン・ペトローキッチは、「この青年は、スラヴ主義者か、乃至は、そついつたも類いのもんです。しかし、決して危険なものじやありません。」といつた。老高官は何一つ口を出さなかつた。それにしてもそののち、明るる日や翌々日に、誰もが少しく腹を立てたことは事實であつた。イワン・ペトローキッチは感情を害しさえもしたが、それも大したことはなかつた。長官の將軍は暫らくイワン・フォードロキッチに對して、いささか冷淡な態度を示していた。この一家の『擁護者』である高官もまた、やはり『一家の主人』にむかつて、何やら諭すようなことをぶつぶつ言つたが、そのとき、アグライヤの運命に對して、

かなりな、かなりな興味を抱いていると、お世辭たつぷりなことを述べた。彼は事實において、いくぶん好人物であつたが、夜會の席で、彼が公爵にたいして懐いた好奇心の動機をなしたものは、いつぞやのナスターシャ・フィリップovichと公爵との一件も含まれていた。この事件について、彼は何かしら噂にも聞いていたので、かなりの興味をさえも寄せていろいろと根掘り葉掘り聞いても見たかつたのであろう。

ベラコンスカヤ夫人は夜會から歸りしなに、リザヴェータ・プロコフィーヴナに言うのであつた。

「まあ、お人よしでもあるし、人の悪いところもある。若しわたしの意見を知らないとあれば、悪い方がよけいですよ。あんたも自分で見て、どんな人だか分かつてるでしょうが、病人ですよ！」

リザヴェータ・プロコフィーヴナもついに心の中で、婿にしては『無理だ』と、すつかり決めてしまつた。そして、その晩のうちに、『わたしが生きている間は、公爵を家のアグラーヤの婿にするわけに行かない』と、ひそかに誓うのであつた。翌くる朝、彼女は決心をもつて、起床した。ところが、その朝のうちに、十二時すぎに食事のときに、彼女は驚ろくべき自家撞着に陥つた。

姉たちの一つのきわめて用心ぶかい質問にたいして、アグラーヤは急に冷淡な、しかも、高慢な、まるで斷ち切るような調子で答えるのであつた。

「わたしはあの人に、約束なんかした覚えはないわ。うまれから一度だつて、わたし、あの人を未來の良人だなんて、

考えたことはないわよ。あの方は、世間の人と同じように、赤の他人なの。」

これを聞いて、リザヴェータ・プロコフィーヴナは急にかつとなつた。

「そんなことを、お前の口から聞こうとは思わなかつた。」と夫人は悲しそりにいつた。「婿にして無理だということ、わたしも承知しています。そして、幸いに、あんなことになつてしまつたけれど、よもや、そんな言葉をお前の口から聞こうとは、思いがけなかつた！ お前には、もつと別なことをあてにしています。わたしは昨日の連中をみんな追い出してしまつても、あの人だけは残しておきたいんです、あの人をわたしは、それくらいにまで考えているんですよ！」

ここで彼女は、我ながら自分のいつたことに驚ろいて、不意に口を噤んでしまつた。が、若しも夫人が、このとき娘にたいして、いかに不公平であつたかというところを知つていたら、決まつていたのである。彼女もまた同じように、一切を解決すべき己れの時の到るのを待ちうけていたのであつた。そして、仄めかすような言葉や、問題の核心にいつうつかりと觸れる言葉を聞く毎に、彼女の心は深く傷められて、張りさけるような思いがするのであつた。

公爵にとつてもまた、この朝は重苦しい豫感に壓しつけられて明けはなれた。この豫感、彼の病的な状態によつて説明ができたであらう。しかし、彼はあまりにも、とりとめのない悲しみに浸つていたのである。このことは彼にとつて何よりも辛いことであつた。たしかに、彼の眼の前には、いくつかの重苦しい、峻烈な事實がまざまざと現われていた。しかも、彼の悲しみは、彼が思いおこしたり、心に描いたりしていることとは、およそ懸け離れていた。彼は自らの力をもつてして、心の憩いを得ることのできないことを自覺した。

心のうちには、今日という今日、自分の身に、何かしら特殊な、最後の運命を決すべきほどの事が起こるであらうという期待が、だんだんと根を張つていた。昨夜のあの發作は、彼としては軽いものであつた。意氣沮喪と、少しく頭が重いと、手足の痛むのを除いたら、別にどこが悪いという感じもなかつた。氣力は弱つていたが、頭はかなり明瞭にはたらいていた。

彼は大分おそく起きたが、起きるなり直ぐに昨夜のことをはつきりと思ひ出した。全く明瞭にというわけではなかつたが、それでも、發作ののち半時間して家へ連れ戻されたことまで思ひ出した。聞いて見ると、もうエバンチン家から容態を聞きに使者がやつて来たとのことであつた。十時半にはまた別の使者がやつて来た。これは、彼には嬉しいことであつた。最初に来てくれた人のうちで、ヴェーラ・レーベジェフは見舞い旁々、用足しにやつて来た。彼女は公爵を見るや否や急に泣き出した。が、公爵になだめられて、また笑ひ出した。

公爵は何がなし、この娘の熱い同情の念に心をうたれて、彼女の手をとつて接吻した。ヴェーラはさつと顔を蔽らめた。

「まあ、あなたは何ですの、何ですの？」と彼女はすばやく自分の手を引いて、愕然として叫んだ。

彼女は程なく、一種の妙な當惑を感じて、出て行つてしまつた。

それにしても、出て行く前に、彼女は父がまだ夜の明けないうちに、『故人』——父のレーベジェフはイヴォルギン將軍のことをこういつていた——のところへ、『故人』が昨夜のことに死にはしなかつたかどうか、見るために慌しく出て行つたことや、將軍が間違ひなく死ぬだろうという噂があるなどということを物語つて行つた。十一時すぎに、當のレーベジェフが家に歸つて来て、公爵のところへ現われた。しかも、それはただ、『ほんの一分間ばかり、大事な、大事なお體の様子を伺いに』だとか何とかいつて、それに、ちよつと『戸棚』の中を見るためにやつて来たまでのことであつた。彼はただ『ああ』だとか、『おお』だとか、溜め息をついたり、唸つたりするばかりなので、公爵はすぐに部屋から引き退がらせた。それでも相手は昨夜の發作のことを、うるさく訊ねにかつていた。そのくせ詳細に亘つて、このことを承知していることが、ありありと見えるのであつた。

彼の後から、コオリヤが、これも同様にほんの一分間といつて駆け込んで来た。コオリヤは實際に、あわてて、ひどく暗い不安におそわれていた。彼はいきなり、しつこく、みんなが彼に隠している一切のことを分かりよく聞かしてくる

まうにと公爵に頼むのであつた。昨日、殆んど全部のことを聞いたのだともいつた。彼はひどく、心の底まで感動していたのである。

公爵ができるだけの同情をあらわして、極めて正確な事實を擧げながら、一切の事情を物語ると、哀れな少年は、雷に打たれたように心を打たれた。彼は一言も物を言うことができずに、聲もなく泣き出してしまつた。公爵は、——このことは少年の心に永劫に痕を残して、若き日の危機ともなるほどの印象の一つである——と感ずるのであつた。彼は急いでこの事件にたいする自己の見解を述べ、更に附け加えて、彼の見るところでは、恐らく、老人の死は、主としてあの自分自身の過失によつて身に覺えた恐怖のために喚び起こされたものであるといひ、こういう氣持は誰にでも分かるとは限らないといつた。コオリヤの眼は、公爵の言葉を聞き終ると輝やき出した。

ガンカも、ワリーヤも、ブチーツインもやくざ者だ！ 僕はあんな人たちを相手に喧嘩をしたくはありません。でも、今から、僕らの行くべき道はわかれかれです！ ああ、公爵、僕は昨日から、とても澤山の新しい感情を経験しました。これは僕の勉強になりました！ 僕はお母さんをも、やつぱり自分で背負つてつもりなんです。お母さんは、今はワリーヤの厄介になつていますが、そんなことは別のことです！

コオリヤは、家の人が待つてゐることを思い出して、ひよと飛び上がった。そそくさと公爵の容態を訊ねた。返事をとほまるで反對の方へ、さつさと歩き出した。一同にはそのいわれが分かつたので、母夫人の氣をいら立たせることを怖れて、何一つ言わなかつた。夫人はほかの者の非難や抗議から身を隠すかのように、後を振り向きもせず、先頭に立つてどんどん歩いて行つた。ついに、アデライーダは、——散歩のときに何も駆け出すものはありませんよ、とてもお母さんの後からついて行けやしない、——と注意した。

「ちよつと」とリザヴェータ夫人は不意に後ろを向いて、「ちよつと今、あの人の家の前へ差しかかりました。どんなことをアグラヤーが考えていようと、また後でどんなことが起ころうとも、あの人はわたしたちにとつて赤の他人ではありませんよ。おまけに今、不仕合せな身になつて病氣までしてゐるんですからね、せめて、わたしたちだけでも、見舞いに寄りましょう。一しよに來たい人はいらつしやい、厭やな人は通り過ぎて行くことにして。道に障害物はありませんから。」

「……不始末のことを、急いで詫びをいつた。……いいえ、あんなことは何でもありません。」とリザヴェータ夫人は答えた。「花瓶は惜しかりませんよ、ただ氣の毒なのはあなたです。して見ると、あなたも今になつて、不始末だつたと、初めて氣がついたんですね。ほら、『何ことも翌くる朝』というのはこのことだわ、……けど、そんなことは何でもありません。だつて、あなたを責めるものはないつてことは、誰でも承知してゐるんですからね。じゃ、とにかく

聞いてしまふと、急にあわただしく附け足した。

「ほかに何か、變つたことはありませんか？ 僕ちよつと聞いたんですが、昨日……（でも、僕はそんなことをいう資格はありません。）しかし、若しもいつか、何かのことで、まめな召使が必要でしたら、召使はあなたの前にいますよ。何だか、二人とも、そんなに幸福じやないようです、そうじやありませんか？ けど、……僕は細かいことはお訊きしません、決して訊きません……」

彼が立ち去ると、公爵は一そり深く物思いに沈んだ。誰も彼も不幸を豫言してゐるのだ。誰も彼もがすでに結論を下したのだ。誰も彼もが、何かを知つていて自分の知らないようなことまで知つてゐるらしい眼つきで自分を見ているのだ。レーベージェフは何か嘆き出そうとし、ヴェーラは泣く。ついに、彼は忌々しくなつて手を振る。「呪うべき病的な邪推だ！」と考える。

二時近くに、『ほんの一分間』の見舞いに入つて來たエバノンチン家の人たちを見たとき、彼の顔は晴れ晴れしくなつた。この人たちはたしかに、『一分間』のつもりで立ち寄つたのであつた。

これよりさき、リザヴェータ・ブニコフイーザは朝の食事が終つて立ちあがると、これから直ぐみんなで一しよに散歩に出ようと言ひ出した。このお達しは命令のような形で、何の説明もなく、ぶつきら棒に、味もそつけもなく發せられた。一同、すなわち、母親と令嬢たち、それにS公爵は打ち揃つて出かけた。リザヴェータ夫人は、毎日歩いてゆく方角を、さうなら、元氣が出たり、少し散歩をして、またおやすみなさい、——これはわたしの忠告です。若し氣が向いたら、元どおり遊びにいらつしやい。それはそうと、これだけは信じて下さいね、たとえ、どんなことが起ころうとも、どんなことになろうとも、あなたはやはりいつまでもうちの友達なんですよ。少くとも、わたしの。少くとも、自分の言葉にたいしては責任が持てますからね……」

一同は、この挑むような言葉にたいして、母親と同じ氣持をもつてゐると言つた。やがて一同は立ち去つた。優しい、元氣をつけるようなことをいおうとする純情な氣短かさのうちに、多くの殘忍性がひそんでいたが、それにはリザヴェータ夫人も氣がつかなかつた。『元どおり遊びにいらつしやい』という言葉や、『少くとも、わたしのお友だちですよ』という言葉のなかには、またしても何か豫言めいたものが感ぜられた。公爵はアグラヤーのことを思いおこし始めた。たしかに入るときと出るときに、彼女は不思議な微笑みを洩らした。が、しかも一同が友情を誓つたときすらも、彼女は一つも口をきかなかつた。ただ、二度ほど、しげしげと公爵を見つめただけであつた。彼女の顔は、一晩じゆう満足には寢なかつたものと見えて、いつもよりはつと蒼白かつた。日が暮れたら、是非とも『元どおり』遊びに行こうと公爵は決心して、熱にでも浮かされたかのように、時計をのぞき込んだ。

ヴェーラが入つて來た。ちよつと一行が立ち去つて三分のちであつた。

「レフ・ニコライキッチ様、たつた今アグライヤ・イワーノ
ヴナさまから、こつそりと、一ことあなた様へお言づてがあ
りました。」

公爵はゆくりなくも、ぞつとした。

「手紙ですか？」

「いいえ、お言づてです。それもやつと間に合つたくらいで
すの。今日は、晩の七時か、せいぜい九時ごろまで、ほんの
一寸でも表へ出ないで下さいつておつしやいました。はつき
りと聞き分けられませんでしたけれど。」

「しかし、……一體、何のためなんだろう？ どういう意味
かしら？」

「そんなことは一寸も存じませんの。ただ間違ひなく傳える
ようにとのお言葉でしたの。」

「じゃ、『間違ひなくつて』おつしやつたんですね？」

「いいえ、そうはつきりおつしやつた譯ではございませぬの。
ちよつと後ろを振り向きなすつて、ちよつとそれだけおつし
やつただけですの。いい鹽梅に私がお傍へ走つて行きました
ので。でも、もうお顔いろを見ただけで、『間違ひなく』つ
ておつしやつたかどうか分かりますわ。わたしをじつと御覽
になりましたので、わたし、息がとまりそうでしたわ……」

更にあれこれと訊ねて見たが、公爵はもうその上のことは
何事も聞き出せずに、ただ一そう不安になるばかりであつた。
たつた一人になつて、彼は長椅子に横たわると、又もやいろ
んなことを考え始めた。「事によつたら、あすには九時ご
ろまで、誰か來ているかも知れない。そして、あのひとはま

つづけた、「僕は、それどころじゃなくつて、必要があつて
ここへ來たんですよ、用事があつて、……さもなくばつたら、
こんな迷惑をかける筈じゃなかつたんです。僕はね、あの
世へ歸るつていうんですよ。今度は眞面目らしいですよ。い
よいよこれで、おさらばだ！ しかし、僕は同情して貰うた
めにわざわざ來たんじやありませんよ、ほんとうに……、僕
は、そのときが來るまでは決して起きないつもりで、今日は
十時ごろ床に就きました。でも、ちよつと考えなおしたもん
ですから、起き出してここへ來たんです、……つまり、必要
があるからです。」

「君を見てると、可哀想な氣がしますよ。自分ひとりで辛い
目をする位なら、ちよつと僕を呼んでくれたらよかつたの
に。」

「いいえ、もう澤山です。よく不憫がつて下さいましたね、
しかし、社交的な儀禮のためなら、澤山ですよ、……あ、そ
うだ、忘れていた、あなたのお加減はいかがですか？」

「すつかりいいです。昨晩はちよつと……大したことはあり
ませんでした。」

「聞きました、聞きました。支那焼の花瓶こそ、ひどい目に
遭いましたね。僕がいなかつたのは残念でした！ 僕は用事
で來たんです。第一に、僕は今日、ガヴリーラ・アルダリオ
ノキッチ君(ガ)が緑いろのベンチのわきでアグライヤ・イ
ワーノヴナさんとあいびきをしてるところを見せつけられて
大へん結構でした。人間はどれほどまでに馬鹿げた顔ができ
るものかと、驚ろいてしまいましたよ。僕はガヴリーラ・ア

た、僕がお客様の前で、何か馬鹿なことをしやしないかと心
配しているんだろう。」と、ついに考えついた。そりしてまた
彼は日の暮れるのを待ちかねて、時計を眺めるのであつた。
しかし、この謎はまだまだ日の暮れない先に、解決がついて
しまつた。この解決はやはり新しい來客によつて齎らされた
が、それも要するに、新しい苦痛を伴う謎の形をなしてい
た。

エバンチン家の人たちが立ち去つてから、ちよつと半時間
たつたとき、イッポリットがやつて來たが、彼はすつかり疲
れて、へとへとになつて、入つて來ても、物もいえないほど
であつた。まるで正氣を失つたもののように、安樂椅子に、
文字通り、どつかと倒れて、すぐに堪えきれないように咳き
こんだ。彼は咳がとまらずに、ついに血まで吐いてしまつ
た。その眼は氣味わるく輝やき、頬には赤い斑點がにじんで
來た。公爵は何やら咳やいたが、相手は答えなかつた。更に
永いこと返事もせずに、ただ片方の手を振りながら、暫らく
放つておいてくれという合圖をするだけであつた。
「歸る！」ついに彼は噎れた聲で、やつとの思いでこういつ
た。

「何なら、僕は送つてつて上げましょう。」と、公爵は席を立
つて行つたが、さつき、表へ出てはならないと足止めされた
ことを思い出して、不意に言葉をつまらせた。

イッポリットは笑い出した。
「僕はここから歸るといつたんじやありません。」と、絶えず
息ぎれがしたり、喉がかわいたりしているのに、彼は言葉を

つてやりました……時に、あなたは一寸もびつくりなさ
ないようですね。公爵。」と彼は公爵の落ちつき拂つた顔を、
腑に落ちないかのよりに眺めながら附け足した。「どんなこ
とがあつても驚ろかないのは、大賢のしるしだそうですね、
しかし、僕の眼から見ると、それは同じ寸法でいつて、大愚
のしるしにもなりますよ、……尤も、僕はあなたに當てこす
りをいう譯じやありませんが。済みません、……今日は僕は
言葉づかいで不都合ばかりしています。」

「僕はもう昨日から知つてました、ガヴリーラ・アルダリオ
ノキッチ君が……」

公爵はどきまぎしたらしく、言葉がつまつてしまつた。一
方、イッポリットの方では、どうして公爵がびつくりしない
のかと、忌々しく思つていた。

「知つてたんですか！ いや、これはニュースだぞ！ それ
にしても、そつとして、話さないでおいた方がいいでしょう。
……ところで、今日のあいびきの現場は御覽にならなかつた
でしょうね？」

「君がその場にいたのなら、僕がそこにいなかつたことは分
かつてるでしょう。」

「だつて、ひよつとしたら、どこか繁みの蔭にでもしやが
んで居られたかも知れません。でも、兎に角、いうまでもな
いことですが、僕はあなたのために嬉しいんです。だつて、
僕はいよいよガヴリーラ・アルダリオノキッチ君が——御最
負にあずかつたんだなと思ひましたからね！」

「お願いだから、僕の前でそんなことをいわないで下さい、イッポリット君、しかも、そんな言い方で。」

「それは君の勘違いですよ。僕は殆んど何にも知りませんし、アグライヤさんだつて、僕がなんにも知らないという事はたしかに御存じの筈です。僕はそのあいびきのことさえ、まるで何も知らなかつたんですからね、……君はあいびきつていうんですかね？ いや、それもいいですよ、でも、もう、この話はやめましょう……」

「まあ、どうしたんです、知つてると言つて見たり、知らないと言つて見たり？ あなたは『いいですよ、でも、もうこの話はやめましょう』とおつしやるんですね？ まあ、そんなでもない、そんなに氣を許すもんじやありませんよ。なんにも御存じないのなら、なんにも御存じないからですよ。ところで、あの二人の人間、あの兄と妹との間に、どんな目論見があるか御存じなんでしょうか？ それぐらいのことは、恐らく、お察しがつくでしょうね？……いいです、いいです、僕はやめましょう、」公爵のいらいらしているような身ぶりに氣がついて、彼は附け加えるのであつた、「しかし、僕は自分の用事があつて来たんですから、このことについて……話を聞きたいのです。ああ、忌々しい、僕はこの話をつけないではどうしても死ねない。全く僕は實によく告白しますね。聞いて下さいませんか？」

「さあ、聞かして下さい、僕は聞いてますよ。」

の友情にたいして、直接にお禮を申したいと思つて、来たまでです、若し、あなた方の友情をわたしが必要とするものがありませんら、そのときは必ず……』と言ひ放つて……。そこで、さよならをしたので、二人は行つてしまいました。一杯食わされて行つたか、勝ち誇つて行つたか、そのところは分かりません。無論、ガーニヤは一杯食わされたんですよ。ガーニヤは何が何やらさつぱり分からないで、蝦みたいに眞つ赤になつていました。どうかすると、あの人はすばらしい顔つきをしますよ！ しかしワルワラ・アルドリオノ・ヴァは、少しでも早くこの場を逃げるに限る、いくらアグライヤ・イワーノ・ヴァさんでも、これはあんまりひどすぎると悟つたらしく、兄貴をぐんぐん曳つて行きましたよ。あの女は兄貴よりは慥巧ですから、今頃はきつと得意になつてゐるでしょう。ところで、僕がアグライヤ・イワーノ・ヴァさんのところへ行つたのは、ナスターシャ・フィリップ・ボザンさんと會うことについて、相談するためだつたのです。」

「ナスターシャ・フィリップ・ボザンさん！」と公爵は叫んだ。「ははあ！ やつと、あなたは知らぬ顔でなくなつて、びつくりし出したようですね。あなたが一人前の人間らしくなるといふ氣になられたので、僕もうれしいのです。それに免じて、氣晴らしをさして上げましょうね。ところで、氣位の高い若い御令嬢にサーヴィスするのも、なかなか大へんなものです。僕は今日、あの人から横びんたを一つ頂戴しました！」

「せ……せいしんのですか？」ついつつかりと公爵はこん

「それにしても、僕はまた考えを變えて、やはりガーニヤのことから話を始めましょう。あなたには想像もつかないでしょうが、僕も今日、やはり、緑いろのベンチのところへ来るようにとお指圖をうけたんですよ。お察しがつかないでしうけど、僕は嘘はいいたかありません。僕は自分から、是非ともお會いしたいといつたのです。お願いをして、祕密を暴露する約束をしたんです。僕の來るのがあんまり早すぎたかどうか分かりませんが、たしかに早く来たよな氣がします、しかし、僕がアグライヤ・イワーノ・ヴァさんのわきに腰をかけたと思つと、ガヴリーラ・アルドリオノ・キッチ君とワルワラ・アルドリオノ・ヴァ(ワヤ)とが手をつなぎ合つてまるで散歩でもしてるように現われたんじやありませんか。二人とも僕にひよつこり會つたので、びつくりしてたようです。そんなことは全く思いがけなかつたので、どぎまぎさえてたようです。アグライヤ・イワーノ・ヴァさんは顔を赧くなさつて、これは本氣になさるかどうか分かりませんが、少しあわてたくらいなんです。それは、僕がいたからか、それともただガヴリーラ・アルドリオノ・キッチ君の姿を見つけたからか、それは分かりません。何しろ、彼氏の風采があんまり良すぎましたからね。とにかく、すつかり赧くなつて、一秒間に問題を片つけてしまつたんです。とても滑稽に。つまり、こうなんです。ちよつと立ち上がつて、ガヴリーラ・アルドリオノ・キッチ君のお辭儀と、ワルワラ・アルドリオノ・ヴァのふざけたよな微笑みに答えると、いきなり、斷ち切るように、『わたしはただ、あなた方の眞ごころから

なことを語つてしまつた。」「そう、肉體的のじやありません。どんな人だつて、僕のよるな人間に、手を振り上げるよなことはしないでしよう。そりう氣がしますよ。今は女だつて僕をなぐりやしません。ガーニヤでさえもなぐりやしません！ 昨日はふつと、あの男が僕にとびかかりやしないかと、考えたんですけど……賭けをしてもいいですが、僕は今あなたが、どんなことを考へてらつしやるか、ちやんと分かつてますよ。あなたは『假りに、この男をなぐる必要はないとしても、そのかわり枕か濡れ雑巾でもつて、眠つてるところを絞め殺すことにはできる。——それどころか、そりすべき義務さもある。』と、そり考へてらつしやるんでしよう……、あなたの顔に、現に今、そり考へてゐると、ちやんと書いてありますよ。」「そんなことを考へた覺えはありません！」と公爵は嫌惡の色をうかべて言ひ放つた。

「分かりませんね、だつて、僕はゆるべ、濡れ雑巾で絞め殺された夢を見たんですよ……或る一人の男に……まあ、誰だかいいますよるか、想像してごらんなさい、——ラゴージンなんですよ！ あなたはどう思います、人間を濡れ雑巾で絞め殺せるでしようか！」

「どうですかね」

「できるそりですよ。でも、まあいいです、よしませう。では、一體、どういふ譯で、僕がおしやべりなんですか？ 何だつて今日、あの女は僕のことを、おしやべりだなんて罵倒したんでしよう？ それも、僕のいうことを最後の一句ま

でも聞いてしまつて、何のかんのと訊きかえしたりした擧句なんですからね、……まあ、女つて、そんなもんですね！しかし、僕はあの人のために、ラゴージンという、面白い男に渡りをつけたんです。あの人の利害のために、ナスターシャ・フィリップボヅナさんとの直接會見をとり持つてやつたんです。僕が、『あなたはナスターシャ・フィリップボヅナさんの食べ残りをおいしく頂戴している』なんて當てこすりを言つて、あの人の自尊心を傷けたからでしょうか？しかし、このことは、しよつちゆうあの人の爲を思つて、説明してやつたんですよ。僕は、そうでないとは言いません。それで、こゝろいつたような手紙を二通も書きました。で、今日ので三度目です。そのうえ、こゝろしてお目にかかつて、……僕はさつきあの人に會うなり、これはあなたとして、顔をつぶすことですよつて言つてやりました、……おまけに、『食べ残り』というより言葉は、決して僕がいつたんじやありません、ほかの人の言つたことです。少くとも、ガーニャのところでは家じゆうの者がみんなそつてましたからね。それに、あの人だつて、自分でそれを承認してたんですよ。まあ、そつう譯ですから、あの人から僕はおしやべりだなんて言われる筈がないじやありませんか？分かります、分かります。今あなたは僕を見ながらおかしくつておかしくつて、仕様がなんでしょう。賭けをしてもいいけど、あなたはあつ

かくて、おそらくは、わが悲しき落日にかがやさいでむ、愛のわかれの微笑み、

「それはどうも怪しい！」
「怪しいつていうのなら、それで結構です。尤もあなたに知れるわけでもないでしょう？こゝろでは、蠅が一びき飛んで来ると、——もうみんなに分かつちまいますね、こんな小つぽけな所ですから！しかし、それにしても、このことは前もつてお知らせするんですから、あなたは僕に感謝してくれるでしょうね。じゃ、いずれました、——今度は多分、あの世で。ああ、そつだ、もう一つ話があつたんだ、いくら僕があなたに卑劣なことをしたからつて、そのために……僕がすべてを失わなくてはならないつて譯がどこにあるでしょう、どうか考へて見て下さい？それが、あなたのためになるんではないですか？僕はあの女に『告白』を捧げました。（このことは御存じなかつたでしょう？）ところが、あの受け取りようたら、どうでしょう！へ、へ！けども、あの人にたいしては、僕は卑劣な眞似はしませんでしたよ。あの人にたいしては、何一つ悪いことはしませんでしよ。それなのに、あの人は僕を侮辱して頭ごなしにして、……でも、それにしても、僕はあなたにたいしても、何一つ悪いことなんかしませんよ。たとえ、『食べ残り』とか何とか、そついつたようなことをいつたにしろ、そのかわり、今、會見の日も、時間も、場所もちやんとお知らせしたでしょう、このまごつをすつかりぶちまけてしまつたでしょう、……これは無論、忌忌しくつて仕様がなからで、度量が大きいためじやありません。さよなら、僕はまるで吃りか肺病やみのように、ほんとお喋りですね。氣をつけなさいよ、若し、あなたが、人

という馬鹿げた詩を僕にあてはめてゐるんですね、……は、は、は！不意に彼はヒステリックに大聲をあげて笑い出した。また咳をしはじめた、「ところだね、」と彼は咳をしながら腹れた聲を出した、「ガーニャつて何ていう奴でしょう。人のことを『食い残りだ』なんていつてゐるくせに、今では自分でそれをせしめようとしてゐるんですね！」
公爵は暫らく黙り込んでいた。彼は怖じけていたのである。

「君はナスターシャ・フィリップボヅナさんとの會見の話をしましたね？」ついに彼は呟やいた。

「え、じゃ、あなたは本當に、今日アグララーヤ・イワーノヅナさんと、ナスターシャ・フィリップボヅナさんの會見があることを御存じないんですね。そのためにナスターシャ・フィリップボヅナさんは、ラゴージンの手を通して、アグララーヤ・イワーノヅナさんから招かれたのに應じて、わざわざペテルブルグから呼び出されたんですよ、僕の骨折甲斐があまりましてね。あの方は今ラゴージンと一しよに、ここからごく近い以前の家にゐるんです。あのダーリヤという……得體の知れない友だちのところに。そして今日、そこへ、その得體の知れない家へアグララーヤ・イワーノヅナさんは出向いて行かれるのです。ナスターシャ・フィリップボヅナさんと打ちつけた話をして、いろんな問題を解決するんですつて、二人とも算術の勉強をしたがつてゐるんですよ。あなたは御存じなかつたんですか？ほんとうですか？」

間といわれる確打があるなら、一類も早く然るべき手筈をきめなさい、……會見は今日の夕方です。それは確かです。イッポリットは戸口の方へ歩き出したが、公爵が大きい聲で呼びかけたので、戸口のところまで立ちどまつた。

「して見ると、君の話では、今日アグララーヤ・イワーノヅナさんは、自分でナスターシャ・フィリップボヅナさんのところへ行くつてゐるんですね？」と公爵は訊いた。

赤い斑點が彼の頬にも額にも現われた。

「たしかなことは分かりませんが、きつと、そつでしよ。」「半ば振りかえりながらイッポリットは答えた、「だつて、ほかにやり様がない筈ですからね。ナスターシャ・フィリップボヅナさんの方からあの人のところへ行くわけはないでしよう？またガーニャのところでも黙目でしょう。あの男の家には、殆んど死人同様の人がいますからね。一體、將軍はどうなつてゐるでしょうね？」

「そのことから考へても、無理な話ですよ」と公爵は後を引きとつた、「いくら、あの人が出たいと思つたからつて、一體、どんな風にして出るんでしよ？君は知らないんですね、……あの家の習慣を。あの方は一人でナスターシャ・フィリップボヅナさんのところへは行けないですよ。そんな話はナンセンスですよ！」

「しかし、ねえ、公爵。窓を飛び越える人なんかありませんよ。ところが、火事になつて御覽なさい、そつしたら多分、第一流の紳士でも、第一流の貴婦人でも窓を飛び越えるでしよ。若しも必要だとなれば、やむを得ませんからね。わ

われの御令嬢もナスターシャ・フィリップボヅナさんのところへお出かけなさる。じゃ、あの家では、どこへも表へ出してもらえないんですか、あなたの御令嬢は？」

「いや、僕はそんなことをいつてるんじゃないやありません……」
「そんなことでないとしたら、あの人はただ表の段々を下りて、まっすぐに çık かけて行けばいいんですよ。出てさえ行けば、もう家へ歸らなくなつていいですからね。時と場合で、自分の船を焼いてしまつて、二度と家へ歸らなくてもいいこととがありますよ、人生というものは、朝飯だの、晝飯だの、S 公爵だのばかりによつて出来てるものじゃありませんよ。どうやら、あなたはアグララーヤさんを、ただのお嬢さんか、女學生か何かのように思つてらつしやるようですね。僕はもうこのことをあの女に話しましたが、あの人も賛成してたらしいですよ。では、七時か八時ごろを待つていらつしやい、……僕が若しあなただつたら、あの家へ見張りの者をやつてちようどあの人が表の段々を下りるところをつかまえさせますね。まあまあ、コオリヤでもおやんなさい。あの子だつたら、悦んでスパイになるでしょうよ、ほんとにね、これはあなたの爲なんですよ、つまり、……みんなあなたに關係があるんですからね……は、は！」

イッポリットは出て行つた。公爵にとつて、誰かにスパイになつて貰うということは、たとひ彼にそんなことができるにしても、何のいわれもないことであつた。家にいるようにというアグララーヤの指圖も、今になつて殆んど譯がわかつて来た。恐らく、彼女は公爵を連れ出しに寄るつもりだつたか

命を、まるで朽ちた糸屑か何かのように、ちぎつてしまひだろ、——と、どうして、いつもそんな氣持になるのか？ 彼は半ば人事不省に陥つていたが、いつも、そんな氣がしていたという事だけは今ここに誓つてもいいとさえ考へた。若しも、彼が最近になつて、この女のことを忘れようと努めたとすれば、それは偏に、この女を怖れたがためであつた。一體、どうなるのか、自分はこの女を愛していたのか？ 彼はこの質問を、今日は一度として心に浮かべなかつた。この點に至つては、彼の心は澄み切つていた。自分が誰を愛しているかという事を、彼はよく知つていた……彼は決して、二人の女の會見をも、その會見の奇怪なことをも、はつきりと分らない原因をも、解決（どんなことによつてであろうとも）をも、それほど怖れてはなかつた、——彼はナスターシャ・フィリップボヅナその人を怖れていたのである。

この熱にうかされていつの間、殆んど絶え間なく、彼女の眼、彼女の眸がちらついて、彼女の言葉——何かしら奇妙な言葉が耳に聞こえていたのを、後に四五日もしてから彼を思い出すのであつた。尤も、熱にうかされている間、い何時間かが過ぎてしまつと、そうしたもの、それほど記憶に残つてはいなかつた。彼は、例えば、ヴェーラが食事を運んで来たことも、自分で食事を取つたことも、食事の後に眠つたかどうか、微かにしか覚えてはなかつた。この晩、自分が全く明瞭に、凡ゆるものを區別することができるようになつたのは、不意にアグララーヤが彼のところの露臺へ上が

も知れない。實際、事によつたら、公爵が自分の家へやつて来るのを厭やがつて、そのために家にじつとして居るやうにと命令したのかも知れぬ。これもあり得べきことである。彼は目眩がして来た。部屋全體がぐるぐる廻つて居るかのやうであつた。彼は長椅子に横たわつて、眼を閉じた。

いづれにしたところで、この問題は最後の運命を決すべきほどのものであつた。
決して公爵はアグララーヤをただのお嬢さんだの、女學生だのと思つてはなかつた。自分は、ずつと以前から、何かこゝろいつたやうなことがあつてはと怖れていたのだと、今になつて彼は痛切に感ずるのであつた。しかし、何のために彼女はあの女に會いたがつているのか？ 公爵の體じゆりを悪寒が走り廻つた。再び彼は熱を出した。

決して彼はアグララーヤを子供あつかひにしてはなかつた！ 最近になつて、どうかすると、彼女の眼つきや言葉に慄然とすることがあつた。時として、彼女があまりにもしつかりして来て、自分をあまりにも抑え過ぎるやうに思われて、恐怖の念をすら覺えたことも今更のように思い出した。事實彼はこの幾日というもの、こんなことを考えまいと絶えず努力して、こゝろい重苦しい考えを追い拂つていたのである。然るに、この魂のうちに何が潜んでいたのか？ この魂を信じてはなかつた、かなり前からこの疑問が彼を苛んでいた。ところが、今日という今日、これら一切のことが解決され、暴露される筈なのだ。思うだに怖ろしい！ それにまた——「あの女が！」 あの女が最後の時に現われて、彼の運

つて来たその瞬間から、自分は長椅子から跳び上がった、彼女を迎えるために部屋の眞ん中へ出て来たが、その時は七時十五分であつた、ということだけは承知していた。アグララーヤはたつた一人きりで、身なりは、いかにも急いだらしく、あつさりして、頭巾つきの軽い外套を着ていた。顔はさつきと同じやうに蒼白かつたが、眼はみずみずしいところのない、強い光りを放つていた。公爵は未だ曾て彼女のこんな眼つきを見た例しなかつた。彼女は注意ぶかく公爵を見まわした。

「あなたはすつかり支度をなすつてるのね。」彼女は靜かに落ちつき拂つて居るらしく言ひのであつた、「着物も召していらつしやるし、帽子まで手に持つて。して見ると、あなたは前もつて聞かされていたのね。誰だか知つてますよ、イッポリットでしよう？」
「ええ、あの人が言つたんですが、……」半ば死人のやうな公爵は呟やいた。
「じゃ、參りましょう。あのね、あなたは必らず一緒にいていらつしやるなくてはなりませんよ。あなたは外へ出る位の元氣はおありなんですよ、わたし、そう思うわ？」
「ええ、元氣はあります、しかし、……そんなことがあるべき筈のものですらうか？」
彼は一瞬にして言葉を切つたが、もう何一つ、それ以上い出すことはできなかつた。これは半ば狂つて居る娘を引きとめようとする唯一の試みであつた。やがて、彼は自ら囚人のやうに、彼女について歩き出した。彼の考えがどんなに混

池としていたにしても、彼女はやはり——アグララーヤは自分がついて行かなくともあすこへ行くだろう、して見ると、どうあつても一緒について行かなければならぬ——ということに悟つていた。アグララーヤの決心がどんなに強いか、推量することができたのである。この野性的な衝動を止めることは彼の手に負えないことであつた。二人は黙りがちに、途中殆んど一ことも口をきかずに歩いて行つた。公爵はただ、彼女がよく道を知つてゐるのに気がついた。一つ手前の道が、あまりに人通りが少いので、横丁を一つだけ迂廻しようと考えて、彼がそれをアグララーヤにすすめたとき、彼女は一心に注意力を集中させるようにして聞き終ると、『どつちにしろ、おんなじだわ!』とぶつきら棒に答えた。

二人がダリーヤ・アレクセイヴナの家の大きな古い木造ののすぐ傍まで来たとき、表の段々から、一人のけげげしい服装をした婦人が、若い娘をつれて下りて来た。二人は大きな聲で笑つたり話したりしながら、階段の傍に待つていた氣のきいた幌馬車に乗つたが、近づいて来る二人には一度も眼をくれず、氣がつかないらしくあつた。幌馬車が出てゆくや否や、直ぐにドアがあいて、待ちうけていたラゴージンが公爵とアグララーヤを中に入れて、すぐにその後から戸を閉めてしまつた。

「家じゆうに誰もいないんだ、僕たち四人のほかは。」と、彼は大きな聲でいつて、妙な眼つきで公爵を見た。とつときの部屋にはナスターシャ・フィリップポヅナが、やはり極めてあつさりした服装をして待ちうけていた。彼女は

思い切つて見つめた。女が女を理解したのである。アグララーヤはぞつと身慄いした。

「あなたは無論、御存じでしょうね、何のためにわたしがあなたをお招きしたか。」とうとう、彼女はこう言い出した。しかも、かなりに聲が低く、こんな短かい句の中で二度までも言葉を切つたほどであつた。

「いいえ、なんにも存じません。」とナスターシャ・フィリップポヅナは味も素つ氣もなく、ぶつきら棒に答えた。

アグララーヤは顔を赧らめた。恐らく、彼女は不意に、『この女』の家で、今この女と座を共にして、この女の返答を自分か求めてゐるのだということが、ひどく不思議な、あり得べからざることに思われたのであろう。ナスターシャ・フィリップポヅナの聲の最初のひびきが耳に傳つたとき戦慄が彼女の體じゆうを走つたかのように感ぜられた。勿論こうしたことは、何もかも、『この女』にはあまりにもよく氣づかれていた。

「あなたは何もかもお分りのくせに……わざと分からない振りをしてらつしやるんです。」とアグララーヤは氣むづかしげに床を見つめながら、殆んど囁やくように言つた。

「そんなことをして何になりましょう?」ナスターシャ・フィリップポヅナは微笑に笑つた。

「あなたは、わたしの位置を利用しようと思つてらつしやるんです……わたしがあなたの家にいるのをいいことにしで。」滑稽に、不器用に、アグララーヤは續けた。

「その位置はあなたのせいでしょう、わたしの知つたことじ

黒づくめであつた。出迎えのために立ち上がったが、彼女は微笑みもしないばかりか、公爵に手を差し出そうとさえもしなかつた。

瞬きもしない、不安に充ちた彼女の眸は、いら立たしげにアグララーヤの上に注がれた。二人は互いに少し離れて座を占めた。アグララーヤは片隅の長椅子に、ナスターシャは窓ぎわに。公爵とラゴージンは坐らなかつた。二人に坐れという者もなかつたのである。公爵は訝かしげに、何かしら苦痛の色をも浮べているばかりであつた。沈黙はなおも何秒かつづいた。

一種の不吉な感じが、ナスターシャ・フィリップポヅナの顔をかすめて行つた。彼女の眸は執拗に、動ずる色もなく、殆んど憎悪の念さえも浮かべて、暫しの間も客の顔から離れはしなかつた。アグララーヤはどぎまぎしたらしかつたが、怖じ氣づいてはいなかつた。入つて来るとき、ちらと相手の顔に一瞥を與えたが、今は物思いに耽つてゐるらしく、絶えず伏目になつて、じつとしていた。二度ばかり、ゆくりなくも彼女は部屋の中を見まわしたが、嫌悪の色がその顔に描かれた。まるで、こんなところにおいて身がけがれてはと、怖れてでもいるかのようにあつた。彼女は機械的に自分の着物をなおしていたが、一度は不安げに席を變えて、長椅子の片隅に身を寄せたほどであつた。しかも、こうした自分の動作を殆んど意識してはいないらしかつた。が、この無意識ということとは、更に一そやお客たちの感情を害するものであつた。ついに彼女はナスターシャ・フィリップポヅナの顔を、まともに

やありませんよ!」急にナスターシャ・フィリップポヅナはかつとなつた。「あなたがわたしに招かれたのじやなくつて、わたしがあなたに招かれたんですよ。それも、何のためなのか、今もつてわたしは知らないんですよ。」

アグララーヤは誇らかに首をあげた。「その舌をお控えなさい。わたしはそんな武器を相手に、あなたと闘うために来たんじゃないやありませんよ……!」

「ああ! して見ると、あなたはやはり、『闘う』ためにいらしたんですね? まあ、どうでしょう、わたしはやはりあなたというお方は……も少し惻巧なお方かと思つてましたわ……!」

二人はお互いに憎悪の念を隠さずに、睨み合つていた。二人の中の一人は、ついこの間まで、もう一人に、あのような手紙を書いてゐたその當人なのである。ところが、最初に會つて、最初に言葉を發するとともに、何もかもが散り散りになつてしまつた。一體、これはどうしたというのか? この瞬間に、この部屋に居合わす四人の者は、誰一人として、このうした事實を不思議とも思われない様子であつた。つい昨日まで、こんなことは夢にも見ることさえもできない、と信じていた公爵も、今はかなり前々からこれを豫感してゐたかのよりに、ぼんやりと佇んだまま、二人の顔を見くらべながら聞いていた。異様な夢が今や忽ちにして、きわめて生々しい、まぎれもない現實と化したのである。このとき、一人は、一人をひどく輕蔑して、それをつけつけと遠慮會釋もなく言つてやりたくてたまらなかつたので、(事によつたら、ラ

ゴージンが翌くる日に言つたように、ただそれだけのためにやつて来たのかも知れない、相手の方もかなり變つた女ではあつたが、頭の調子が狂い、心も病的になつていたので、今までもつていたような考えでは、自分の戀がたきの毒々しい純然たる女性的な侮蔑を、食いとめることができなかつたろうと思われる。公爵はナスターシャ・フィリップボヅナが自分の方から、あの手紙のことを言い出しはすまいと信じきつていた。あの手紙が今、彼女にとつてどれだけの價値があるか、それはぎらぎら輝やく眼つきを見れば、察することができる。公爵はアグライヤに、あの手紙のことをいわせまいとして、餘生をなげうつていくらしいの氣持であつた。

しかしアグライヤは、急にしつかりと落ちついて來たらしかつた。「それはあなたの勘違いですよ、」と彼女はいつた、「わたしは、あなたを好きませんけれど……喧嘩したくて來たのじやありません。わたしが……こちらへ參つたのは……人間らしいお話がしたいからです。お招きするとき、わたしはもうあなたにお話することを、すつかり決めていました。たといあなた、わたしのほんとうの氣持をまるきり分かつて下さらないにしても、もうその決心はどうしてもひるがえしません。そんなことをすればあなたのおためにならないでしょうよ、わたしはどうでもよいとしても、わたしはあなたのお手紙に御返事しよう、直接お目にかかつて、御返事しようと思つたのです。何しろ、その方があなたにとつて、一そう都合だらうと思ひましたので。あなたのお手紙にたいするわたしの

満快げに述べて、自分の言葉の効果を、根めしげな眸をあげて、ナスターシャ・フィリップボヅナの昂奮のため歪んだ顔のうえに窺つていた。

「覚えてらつしやるでしょう、」と彼女はつづけた、「あのころ、公爵はわたしに手紙を下さいました。公爵のお話では、あなたはこの手紙のことを御存じなんですつてね。それに、お讀みになつたことさえあるそうですね？ この手紙を拜見して、わたしは何もかも分かりました。はつきり分かりました。つい先だつて公爵が御自身でそれを確めて下さいました。つまり、わたしが今あなたにいつてることですの。しかも一こと、一こと、そつくりそのままといつてもいいくらいです。手紙を讀んでから、わたしは、お待ちするようになります。つまり、あなたがこちらへきつといらつしやるだらうと察したのです。だつて、あなたはペテルブルグなしではやつてゆけない方なんですからね。あなたはまだあまり若くつてお綺麗ですから田舎には勿體ないお方ですわ……尤も、これはやはりわたしの言つたことじやありませんよ。」と彼女はいどく根くなつて、附け足した。この時から最後の言葉の切れるまで、彼女は顔を赧くしたままであつた。「それから二度目に公爵を見たとき、わたしはあの人のために怖ろしいほど苦しく腹が立つて來ました。笑わないで下さいな。若しあなたが面白いになれば、それはあなたにこの氣持を諒解する資格がないということになりますからね……」

「御覽の通りわたしは笑つてなんかいません。」とナスターシャは憂鬱そうに嚴然といつた。

返事を聞いて下さいな。わたしは公爵と初めてお目にかかり、その後、あなたの夜會で起こつたことをすつかり聞かされたその日から、レフ・ニコライキッチさんというお方が可哀想になつたのです。なぜ可哀想になつたかといひますと、公爵はほんとに純なお方で、ほんとにお人よしなので、……さういふ……性格の女と……一しよになつて、幸福になれると、すつかり、信じておしまひになつたからです。わたしが氣づかつていたことが實現してしまいました。あなたは公爵を愛することができなかつて、憂き目を見せた上に、棄てておしまひになつたのです。あなたが公爵を愛することができなかつたのは、あまりあなたが高慢だからです……いいえ、高慢なのじやありません。わたしの言い間違ひです。つまり、あなたが見え坊だからです。いえ、これでもまだ違います。あなたはまるで正氣の沙汰とはいへないほど、……己惚れが強いのです。わたしに下すつた手紙はその何よりの證據です。あなたはこんな純な人を愛することができずに、心のなかで馬鹿にして笑つてらつたのです。あなたには自分の汚名だけしか愛することができなかつたのです。自分は汚されていゝる。自分は辱ずかしているという考えだけしか、愛することができなかつたのです。若しあなたの汚名がもつと少ないか、それとも全然なかつたとしたら、あなたはもつと不仕合せだつたでしょう……」

アグライヤは、あまりにもすらすらと迸り出る、しかも、もうかなり前から——今の會見を夢にも思ひがけなかつた頃から、すでに準備され、考え考えされてきたこれらの言葉を

「それにしても、わたしはどうかだつて驚きません、御手紙に笑つて下さい。で、わたしが自分の口からあの人に訊ねるよになつてから、公爵はこういひましたの。『わたしはもう以前からあの女を愛してなんかいません。あの女を思い出すだけで、苦しいくらいです。ただ、あの女が可哀そうです。あの女のことを思い出すと、まるで永久に胸をつき通されたような氣がします。』つて。ところで、わたしは當然あなたに、もう一こと言わなくてはなりません、わたしは生れてからまだ一度も高潔な純情という點で、また、他人にたいする限りのない信頼という點で、公爵に比べられるような人を見たと例しがありません。わたしは公爵の話を聞いた後で、すぐに悟りました。どんな人でもその氣にさえなれば、譯なくこの人をだますことさえできます。しかも、公爵はそのだまし手が誰であらうとも、後になれば、みんな許しておしまひになりますつて。つまり、この性質のために、わたしは公爵が好きになつたのです……」

アグライヤは自分で自分に驚ろいたかのように、こんな言葉を口にすることができるとは、自分でも信ずることができないらしく、一寸のあいだ口を噤んだ。けれども、それと同時に、殆んど量りも知れぬほどのプライドがその眸のなかに輝き出した。今は思はずも迸り出たこの公言を「この女」が笑おうと、笑うまいと、どうでもいらいらしかつた。「わたしはあなたに何もかも申し上げました。ですから、無論、あなたもわたしが何を望んでいるかおわかりなすつたでしょう？」

「多分、わかつたでしょうよ。けども、御自分でいつて御覽なさい。」ナスターシャ・フィリップポヅナは低い聲で答えた。

憤怒の色がアグララーヤの顔に燃えあがつた。

「わたしはお訊きしたかつたんですよ。」しつかりした聲で歯ぎれよく彼女は切り出した。「あなたはどんな権利があつて、わたしにたいする公爵の感情に干渉なさるんですの？　どんな権利があつて、おこがましくも、わたしに手紙を下すつたんですの？　どんな権利があつて、あなたがこの人を愛してゐるつてことを、わたしやこの人にしよつちゆう廣告なさるんです？　しかも、自分でこの人を棄てて……あんな侮辱と……汚名を浴びながら、逃げ出したあとまでも！」

「わたしが公爵を愛してゐるなんて、御本人にもあなたにも廣告したなど覚えありません。」やつとのことでナスターシャはこりいつた。「尤も、わたしがこの人を棄てて逃げ出したのは、……あなたのおつしやる通りですわ……」やつと聞こえるぐらいの聲で附け足した。

「御本人にもわたしにも廣告した覚えがないなんて、よくもまあ」とアグララーヤは叫んだ。「では、一體、あなたの手紙はなんですか？　誰があなたにわたしたちの仲人になつてくれと頼んだんですの、この人と結婚しろと誰がわたしに勧めたんですの？　これも廣告でないんですか？　何だつて、わたしたちの中へ出しやばるんです？　わたしは最初のうちには反対に、『あの女はあんな干渉をして、公爵にたいする嫌惡の種を蒔いて、公爵を棄てさせようというのじやあるまい

そろしい復讐の快慰の前に、自分を御えることができなかった。ナスターシャにとつて、こりしたアグララーヤを見るのはむしろ不思議なことであつた。彼女は相手を見つめながらも自分の眼を信ずることができないらしかつた。最初の一瞬間、彼女は全く途方に暮れてゐた。彼女は、或いはエザゲニイが推定したように、多くの詩を讀んだ女かも知れない。けれども、とにかくこの女は（時として、あのような皮肉で高慢な態度を取ることもあるが）、實際において人々が結論を下すよりも、遙かに、はにかみやで、優しい、信じ易い女であつた。いうまでもなく、彼女には世事に疎く、空想的で、獨りよがり、氣まぐれなところが多分にあつた。しかし、そのかわり、力強く、深いところもあるのである。……公爵はそれを了解してゐた。苦痛の表情が彼の顔に浮かんで來た。アグララーヤはそれに氣がついて、憎惡の念に身を慄わした。

「あなたはわたしに向かつて、よくもまあ、そんな口がきけますね！」名状すべからざる高慢な態度で、彼女はナスターシャの言葉に答えた。

「それはあなたの聞きがちでしょう。」とナスターシャは驚ろいて、「わたしがあなたにどんな口をききました？」

「若しも、あなたが純な婦人になりたかつたら、なぜ、あつたとき自分を誘惑したトーツキイを、あつさり……お芝居がかつたことをせず、棄ててしまわなかつたのです？」突然アグララーヤは飛んでもないことをいつた。

「そんな失禮な批評をなさるについて、どれだけあなたはわ

か。」と、こり考えたのです。ところが、後になつて、そのわけがわかりました。あなたは其の厭やらしいやり口でもつて、何か大へんな手柄でもしているような氣がしたんでしょ、……ところで、それほど自分の虚榮心を愛してらつしやるあなたに、公爵を愛することができましたか？　あんな可笑しな手紙を書くひまに、なぜ綺麗にここを立つてしまわなかつたのです？　あんなにまであなたを思つて、あなたに求婚をするほどの敬意を拂つた氣高い青年と、どうして結婚しようとなさらないんです？　その理由はあまりにはつきりしてゐます。若し、ラゴージンさんと結婚すれば、何も愚痴をいわなくてもすむからです。かえつてあなたの得る名譽が多すぎるからです！　あなたのエザゲニイ・パーヴロキッチさんがそりいきました——あなたはあまりたくさん詩を讀みすぎたものだから、あなたの……身分としてあまり教養がありすぎる、あなたは本學問の世事に疎い人で、有閑婦人ですつて。これにあなたの虚榮心を加えると、理由がすつかり揃いますよ、……」

「じゃ、あなたは有閑婦人ぢやないんですね。」

事件はあまりにも急激に、あまりにも露骨に、思いがけないところまで行き着いてしまつた。實際、思いがけないことであつた。というのは、ナスターシャがこのパヴロフスクへ來る途すがら、（無論、いい事より、むしろ悪いことを豫想してゐたが）、それでもまだ何か別なことを空想してゐたからである。アグララーヤに至つては、もう一瞬間の間に全く激情の發作に襲われて、まるで斷崖から轉がりおちるやうに、お

たしの境涯を知つてらつしやるんです。ナスターシャはひどく蒼くなつて身ぶるひした。

「ええ、知つてますよ、あなたが労働につかないで、墮ちたる天使ぶりたいために、金持のラゴージンと逃げ出したくらのことは知つてますよ。トーツキイが墮ちたる天使を逃れるために、ピストルで自殺をしようとしたと聞いても、驚ろきやしませんよ！」

「およしなさい！」ナスターシャは嫌惡の色を浮かべ、痛みを忍ぶよりにいつた。「あなたはまるで……ついこのあいだ自分の許婚といつしよに治安判事の判決を受けた、ダーリヤさんの小間使と同じよりの眼で見えてらつしやいますね。かえつて、あの小間使の方があなたより分かつていますよ……」

「それはきつと純な娘さんでしょう、自分の労働で生活してゐる人でしょう。なぜあなたは小間使にたいして、そんな輕蔑した態度をおとりなさるんです？」

「わたしは労働にたいして、輕蔑の態度を取る譯ぢやありません、労働を口になさるあなたにたいしてです。」

「わたしは純な女になりたかつたら、洗濯女にでもなりますよ。」

二人は立ち上がつて、眞つ蒼な顔をして、互いに睨み合つてゐた。

「アグララーヤ、およしなさい！　だつて不公平ぢやありませんか。」と公爵は氣が顛倒したらしく、こり叫んだ。

ラゴージンはもう薄ら笑いをやめて、唇を食いしぼり、腕を組んでじつと聴いてゐた。

「まあ、ごらんなさい、」とナスターシャは憤怒のために、身をふるわせながら、こりいつた、「このお嬢さんを。今までわたしはこの人を天使のつもりでいたんですよ！ ねえ、アグライヤさん、あなたは家庭教師を連れないうで、わたしのところへお出かけ下さったんですか？ もしお望みなら……お望みならわたし今すぐ、忌憚なく申しますわ。……なぜあなたにわたしのところへいらしたんです？ つまり、おじけがついたんです？、それでいらしたんです？」

「わたしはあなたを怖れるですつて？」この女がよくまあ自分に向いて、こんな口がきけたものだという、純真な、向う見ずな驚ろきのために我を忘れて、アグライヤは叫んだ。

「むろん、わたしをね！ わたしのところへ来ようと決心なすつた以上、わたしを怖れてらつしやるんですよ。自分の怖れている人は輕蔑できないものです。けども、考えて見ると、わたしはたつた今さつきまで、あなたを尊敬してたんですから！ けども、ねえ、あなた、どういふ譯であなたがわたしを怖れてらつしやるんだか、まああなたの主な目的がどういふところにあるのか、御存じですか？ あなたは、この人がわたしをあなたよりよけいに愛してらつしやるかどうか、それを自分の眼ではつきりと確かめたかつたのです。だつて、あなたは怖ろしい嫉みやですからね……」

「この人はわたしにそっくりいきました、あなたを憎んでるつて……」アグライヤはやつとの思いで口ごもつた。

「多分、多分、大きにそうかも知れせんわ。わたしにはこの人の愛を受ける資格がありませんわ。けれど……けれど、

「……」アグライヤはやつとの思いで口ごもつた。一體は前さんは、あなたをわたしに悦ばすために、ラゴージンと結婚したでも思つたの？ とところが、わたしはね、今お前さんの眼の前で言つてやるわ、『出て行け、ラゴージン！』そして公爵には、『あなたはわたしに約束したことを覚えてるでしよう？』とこつて言つてやるわ。ああ、しまつた！ 一體わたしは何のためにこの人たちの前で、あなたに自分を卑下していたのでしよう？ ねえ、公爵、あれは全體あなたじやなかつたの、『お前さんの身のうえに、どんなことが起ころうとも、必らず後について行く、決して棄てやしない、わたしは心から愛してやる、お前さんのすることは何でも許してあげる、そしてお前さんを……そんけ……』ええ、そらだわ、あなたがそつていつたのよ！ それなのにわたしは、あなたを自由に上げて上げたい一心で、一旦あなたの傍から逃げ出したの。けども、もう今となつては厭やです！ あの娘は何だつてわたしを、自墮落者扱いにしたんだらう？ わたしが自墮落者かどうか、ラゴージンに訊いて御覽なさい、あの人が證明するから！ けれど、今はあの娘が、あなたの眼の前でわたしの顔に泥を塗つたから、あなたも多分わたしに後足で砂をかけて、あの娘の手を引いて歸るんじやなくつて？ 若しそうなら、わたしがあなた一人だけ信じていたのに對しても、あなたは罰があたりますよ。さあ、出て行け、ラゴージン、もうお前になんか用はない！」

彼女は顔を歪め、乾ききつた唇から、やつと言葉を絞り出すようにしながら、殆んど前後を忘れてこつ叫んだ。明らか

あなたは嘘をおつきになりましたね、わたし、そつ思うわね！ この人がわたしを憎む筈なんありません、そんな言い方をする譯はありません！ もつとも、わたしは潔よく、あなたを大目に見ておきますよ……あなたの情状を酌量しましたね……でも、とにかく、わたしはあなたという人をもつとよく考えてましたわ。もつとお惻巧で、もしお器量のいい方と思つてましたわ、ほんとですの……さあ、可愛い人を連れてらつしやい、ほら御覽なさい、この人はあなたを一生懸命に見つめて、どうしても正氣になれないんですよ。さあ、早くこの人を連れてつて下さい。但し條件つきですよ——すぐに出て行つてもらいましよう！ さあ、今すぐに……」

彼女は安樂椅子に倒れて、さめざめと泣き出した。しかし急に何かしら新しいものが、眼の中に輝き出した。彼女は穴のあくほど執念ぶかくアグライヤを見つめていたが、ふと席を立つて、

「だけど、若しお望みならば、わたし、今すぐにでも……めい、れいするわ、よくつて？ 尤も、公爵にめい、れいするのよ。そしたらこの人は早速お前さんを見すてて、わたしの傍に永久に居残るわ。そしてわたしと結婚するわ。お前さんは一人で家へ走つて歸るんです、いいでしよう？ 狂氣のように叫んだ。恐らく、自分でもこんな言葉を發し得ようとは、殆んど信じていなかったに相違ない。

アグライヤは愕然として戸口の方へ駆け出そうとしたが、釘づけにでもされたかのように、戸口のあたりに立ちどまつて聴いていた。

「……」アグライヤはやつとの思いで口ごもつた。一體は前さんは、あなたをわたしに悦ばすために、ラゴージンと結婚したでも思つたの？ とところが、わたしはね、今お前さんの眼の前で言つてやるわ、『出て行け、ラゴージン！』そして公爵には、『あなたはわたしに約束したことを覚えてるでしよう？』とこつて言つてやるわ。ああ、しまつた！ 一體わたしは何のためにこの人たちの前で、あなたに自分を卑下していたのでしよう？ ねえ、公爵、あれは全體あなたじやなかつたの、『お前さんの身のうえに、どんなことが起ころうとも、必らず後について行く、決して棄てやしない、わたしは心から愛してやる、お前さんのすることは何でも許してあげる、そしてお前さんを……そんけ……』ええ、そらだわ、あなたがそつていつたのよ！ それなのにわたしは、あなたを自由に上げて上げて上げたい一心で、一旦あなたの傍から逃げ出したの。けども、もう今となつては厭やです！ あの娘は何だつてわたしを、自墮落者扱いにしたんだらう？ わたしが自墮落者かどうか、ラゴージンに訊いて御覽なさい、あの人が證明するから！ けれど、今はあの娘が、あなたの眼の前でわたしの顔に泥を塗つたから、あなたも多分わたしに後足で砂をかけて、あの娘の手を引いて歸るんじやなくつて？ 若しそうなら、わたしがあなた一人だけ信じていたのに對しても、あなたは罰があたりますよ。さあ、出て行け、ラゴージン、もうお前になんか用はない！」

彼女は顔を歪め、乾ききつた唇から、やつと言葉を絞り出すようにしながら、殆んど前後を忘れてこつ叫んだ。明らか

身をしびらせながらこれだけのことしかいふことができなかつた。彼女の眸のうちには量り知らぬ苦痛と、同時に限りない憎悪が現われた。公爵は思はず両手をうつて、叫び聲をあげながら、彼女の方へ飛んで行つた。が、すでに時おそく、彼女は公爵の躊躇の一瞬間をも、堪え忍ぶことができなかった。両手で顔をかくしながら、『ああ、くやしい!』と叫ぶや否や、部屋の外へ躍り出てしまつた。その後からラゴージンが往來へ抜ける戸の門をはずすために駆け出した。

公爵も駆け出そうとしていた。ところが、闕のうゑで手で抱き止められてしまつた。ナスターシャの絶望に歪んだ顔がじつと彼を見つめていたのである。やがて、紫いろになつた唇が動いて、言葉をかけた。

「あの女につくの? あの女につくの?」

彼女は感覺を失つて、公爵の手に倒れかかつた。彼はそれを抱きおこして、部屋の中へ引き入れ、安樂椅子の上になかした。そして、かすかな期待を懐きながら、その傍にじつと立つていた。小机の上には、水の入つたコップが置いてあつた。やがて引きかえして來たラゴージンは、それを取つて彼女の顔に水をふりかけた。彼女は眼を見開いたが、一分間ほどは、何一つ分からなかつた。が、ふつとあたりを見まわして、身をふるわすと、叫び聲とともに公爵にとびかかつた。

「わたしのものだ! わたしのものだ!」と彼女は叫んで、「あの高慢ちきなお嬢さんは行つちやつたの? はははは!」とヒステリーの發作に笑い出した。「ははは! わたしはそんなところから、この人をあの女に渡すところだつた! 何の

怪な、曖昧なことと見えるに相違ない。すなわち明瞭な概念も、独自の意見ももつてないことを、どうして他人に語るることができるのか、という疑問が生ずるからである。これより以上おぼつかない立場に陥らないために、むしろ實例を擧げて、説明をするように努めた方がいいようである。そうしたならば好意ある讀者は、恐らくわたくしが、どういふことに苦しんでいるかといふことを悟つてくれるであらう。殊にこの實例といふのが、逃げ路ではなしに、直接に物語のつづきとなつてゐるから、なおさらのことである。

二週間の後(といへば、すでに七月の初めである)更にこの二週間のあいだに、わが主人公の物語、わけても物語の最後の出来ごとは、奇怪な、極めて愉快な、殆んど信じえないほどの、また同時に分かりのいい世間話と變り、レーベジエフ、ブチーツイン、ダーリヤ、エバンチンなどの別荘に近い街全體、もつと簡單にいへば、殆んど町じゆう、および郊外にまでも、次第々々に擴がつて行つた。殆んど町じゆうの人が、土地の者も、別荘の人も、樂隊を聞きにやつて來る人も——同じ話に尾鱈をつけて、一人の公爵、或る家柄の正しい名家で、醜態を演じて、もう結婚の約束まで出來てゐるその家の令嬢をもふり棄てて、有名な蓮つ葉女に夢中なり、元からの交遊を元から全く絶つてしまひ、人々の威嚇も、公衆の憤慨も、何もかもかえり見ずに、近い中にこのパヴロフスクの町で、公けに、人目を憚ることなく、意氣揚々と、穢れは

ために? どういうわけで? ふん、氣ちがいだわ! 氣ちがいだ!……ラゴージン、さつさと出て行きな、ははは!」ラゴージンは二人をじつと眺めていたが、一言も物をいわずに、自分の帽子を取つて出て行つた。十分して、公爵はナスターシャの傍に坐つて、少しも眼を放さずに彼女を見つめながら、まるで小さな子供をあやすように、両手で頭や顔を撫でるのであつた。彼は女の笑いにつれて笑い、その涙につまされて泣かないばかりであつた。彼は何もいわなかつたが、斷續的な、歡びにあふれた取りとめのない片ことに、一心に耳を傾けていた。何か悟りえたかどうかは怪しいが、ただ靜かに微笑んで、少しでもナスターシャが悲しんだり、泣いたり、咎めたり、訴えたりし始めたと思つると、すぐにまたその頭を撫でたり、やさしく両手で頬をさすつたりして、幼児を相手にするかのようになつたり、宥めたりするのであつた。

9

前の章に物語つた出來事から二週間は過ぎた。この小説に出てくる人たちの境遇もかなりに變つた。従つて、特殊な説明を加えずに續きにとりかかると、非常に困難なこととなつた。それにしても、なるべく特殊な説明を省いて、事實の單なる記述にとどめておかねばなるまいと思ふ。しかも、それはきわめて簡單な理由による。つまり、わたくし自身が、多

その話についてはいろいろな機關に影られ、その中にまた知名の士がかなりに捲きこまれて、さまざまな空想的な謎めいた陰影まで附け加えられていた。しかも、一方から見れば、否定することのできない。明白な事實に基づいてゐるので、誰もがもつていた好奇心もゴシップも、勿論、大目に見なければならなかつたのである。その中でも最もデリケートな、奸智に長けた、それと同時に、いかにも尤もらしい説明は、少數の並々ならぬゴシップ屋の仕業なのであつた。これらの人々は、分別のある階級の人で、どんな社會にあつても常に誰よりも先に新しい出來ごとを、他人に説明して聞かせようとあせり、そのことを自分の使命と考え、往々にして、慰みとさえ心得てゐる連中である。

彼らの説明によると、この青年は名門の出で、公爵で、先ず金持の方で、馬鹿ものではあるが、ツルゲエネフ氏によつて暴露された現代の、虛無主義に夢中になつてゐる民主主義者で、殆んど露西亞話も話せない男で、エバンチン將軍の令嬢に思いをかけて、ついに同家へ花婿の候補者として出入するまでに漕ぎつけたという。それはまさしく、つい先だつて新聞に逸話が載つたばかりの、佛蘭西の神學生に似てゐる。この神學生といふのはわざわざ身を僧職に委ねようと決心して、自分で採用を哀願し、跪拜、接吻、誓言など、一切の儀式を行つておきながら、すぐその翌くるの日に主教に公開狀を書いて、自分は神を信じていないのに、民血を瞞着するのは、破廉恥だと思ふから、きのう戴いた位階は自分で剝奪し

ます、といったようなことを二三の自由主義の新聞に掲載したのであつた——ちよりの無神論者と同じように、公爵は自己流の芝居を打つたのである。彼は故らに花嫁の家で催された盛大な夜會を待あ構えていた。という噂で、（ここで彼は極めて多數の名士に紹介された）それはただ単に一同の前で麗々しく自分の思想を披露して、尊敬すべき名士を罵倒し、自分の花嫁を公衆の面前で侮辱して、縁談を拒絶しようがためであり、その際に彼は、自分を引っぱり出そうとする侍僕らに抵抗して、見事に支那焼の花瓶をこわしたといふ。人々は、更にまた當世氣質の特徴だといつて、おまけをつけ、——この分からずやの公爵は實際のところは、自分の花嫁、將軍令嬢を愛してゐたのであつたが、その縁談を断つたのは、ただ虚無主義から出たことで、今度の醜事件を目安においたのである、すなわち、世間を向こうへ廻して、墮落した女と結婚するといふ満足なふり切りたくなかつたからである。つまり、この行爲によつて、『自分の心には、墮落した女も、貞淑な令嬢もない、ただ自由な女があるばかりである、自分は古い世間的な區別を信じない、ただ、一箇の「婦人問題」を信するだけだ、』といふことを證明したかつたのである。それどころか、彼の眼から見ると墮落した女は墮落しない女より、少し優れているようにさえ映じたのである。

この説明はこのうへもなく尤もらしく思われたので、別荘ぐらしの大多數の人たちにそのまま承認された。わけても、毎日の出来事がこれを裏書するものであつた。とはいへ、詳細な事情は、相變らず未解決のままであつた。たとえば、或るナスタシーヤ・フィリップボツナが、驚びの聲をあげて依頼したこと、また、式は七月の初めと決まつたこと——先ず、大體においてこれ位のことである。

とはいへ、このような極めて正確な事實のほか、まるで作者を戸惑いさせるような、二三の噂が耳に入つてゐる。つまり、前にも前にも述べたような事實と矛盾を來すような噂である。例えば、レーベジェフその他の者に厄介なことを全部おしつけておきながら、公爵自身は儀式執行係や、結婚の介添人のあることも、自分が結婚しようとしてゐることも、早速その日のうちに忘れたとのことである。彼が大急ぎで、萬端の世話を他人にまかせてしまつたというのも、單に自分でこのことを考えないため、或いは事によつたら少しでも早くこのことを忘れてしまいたいためかも知れない。若しも、そうだとすれば、彼自身は何を考へてゐるのであるか？ 何を思い出そうとしてゐるのであるか？ 何にむかつて急いでゐるのであるか？ また、彼に對して、何びとの（たとへばナスタシーヤ・フィリップボツナなどの）強制もなかつたということ、これは、これまた疑うべき餘地のないことである。全くナスタシーヤ・フィリップボツナは、是非にいつて結婚を取り急ぎ、自分からこのことを考へ出したのであつて、決して公爵から持ち出したのではないが、しかし公爵は全く自由意志をもつて承諾したのである。却つて、何かごくありふれたものでもねだられたように、それをわした手輕な態度で承諾したくらいである。このような奇怪な事實はわれわれの前にはたぐさんにある。こんなことはどんな引き合いに出したところ

者は、哀れな令嬢は心の底から婚約をした男（ある人に言わせると「誘惑者」）を愛してゐたので、絶交を言い渡された翌る日には、男が情婦と差し向かいでゐるところへ駆け込んだといひ、また或る者はその反對に、令嬢は故ら自分から男に誘われて、情婦のところに行つたのである、しかも、それはただの虚無主義から出たことであつて、汚名と侮蔑を與へたためである、といつた。いずれにしても、その事件の興味は日ごとに増して行つた、まして、實際にけがらわしい結婚式が擧げられるという事實には、いささかの疑惑をさしはさむ餘地もないので、なお更のことであつた。

若しも、ここで私にこの事の説明を求め人があつたら——それは事件の虚無主義的色彩に關してではない、全くその要求を満足させてゐるか？ またその要求とは今のところ、どんなものであろうか？ 目下の公爵の心境をどういふ風に斷定したらよいか？ といつたような説明を求め人があつたならば、作者は、正直にいうと、非常に答へに窮するであらう。作者がいま知つてゐることは、わずかに、本當に結婚が成立して、公爵が教會や家事向きの面倒は、一切レーベジェフとケレルと、それにこのたび公爵に紹介されたレーベジェフの知人と、この三人にすつかり委任してしまつたといふこと、金に糸目をつけるなといふ命令の出ていること、結婚を主張して、それを急がせたのはナスタシーヤ・フィリップボツナであるといふこと、公爵の介添として、ケレルの切なる頼みによつて指定されたこと、ナスタシーヤ・フィリップボツナが、驚びの聲をあげて依頼したこと、また、式は七月の初めと決まつたこと——先ず、大體においてこれ位のことである。

次ぎのような事實もまた全く知れ渡つてゐることである。つまり、この二週間のあいだ、公爵が幾日も幾晩も、ナスタシーヤ・フィリップボツナと一しよに時をすごしたことが、彼女がよく公爵を散歩へ誘つたり、音楽を聞きに連れ出したりしたこと、また公爵は毎日彼女と一しよになつて、あつちこつちを幌馬車で乗り廻して、たつた一時間でも彼女の姿が見えないとなつて、公爵はもうすぐに心配を始めるといふこと、（従つて、すべての様子から推察して、公爵が彼女を心の底から愛してゐたことが分かる。）公爵が幾時間もつづけさまに、おだやかな、つつましい笑いを浮かべながら、自分の方から殆んど口をきかないで、彼女の話でさえあればどんなことでも、じつと耳を傾けて聞いていたといふことなど。

しかも、われわれはそれと同じように、次の事實をも知つてゐる。それはほかでもない、この數日のあいだ彼は幾度もといふよりは殆んどしよつちゆり、いきなりエバンチン家へ出かけたのであつた。けれど、それをナスタシーヤに隠そうとはしないで彼女は度毎に、殆んど絶望の極に達した。また、エバンチン家ではバヴロフスク滞在中、決して公爵を上へはあげず、アグライヤ・イワーノヴナに會わせてくれといふ彼の願ひは、いつもはねつけられて、彼は一語も發しないで立ち去つたが、すぐ翌くる日になると、きのうのことわられたことは、けろりと忘れてしまつたように、またまた將

軍家を訪ずれて、無論またもや拒絶の憂き目を見たというよりな話も知つてゐる。

また同じようにこりいうことも知れてゐる——アグラライヤ・イワーノヴナがナスターシヤ・フィリップポヴナのもとを走り出してから一時間ののち、(或いはもう少し早かつたかも知れない)公爵はもうエバンチン家に姿を現わした。無論ここでアグラライヤに會えるものだと思ひながら……ところが彼の出現はそのとき同家に非常な恐怖と、騒ぎを惹き起した。というのは、そのときアグラライヤはまだ歸宅してゐなかつた上に、同家では娘が彼と一しよにナスターシヤ・フィリップポヴナの家に向つたことを、公爵から初めて聞いたからである。噂によると、リザヴェータ・プロコフィエヴナも姉たちも——おまけにS公爵までが、そのとき公爵に冷淡な敵意に充ちた態度をとり、即座にはげしい言葉を使つて、知り合ひとして、また友だちとしての付き合いを断つた。わけでも不意にそこへワルワラ・アルドリオノヴナが入つて来て、リザヴェータ・プロコフィエヴナに、アグラライヤ・イワーノヴナはもう一時間ばかり前から自分の家に来ていて、怖ろしい状態に陥つてゐる、そして自分の家へは歸りたくないような風であると知らせたとき、一入その態度が露骨になつた。

この最後の報告は、何よりもひどくリザヴェータ夫人を驚ろかした。しかも、それは全く事實だつたのである。ナスターシヤ・フィリップポヴナのところから出たとき、アグラライヤは今さら家の人に顔を合わせるよりは、いつそのこと、死んでしまつた方がましだと思つて、一散にニイナ・アレクサンドロフ

浮かべたので、アグラライヤはヒステリイにかかつてゐるやうに高笑いをしながら、二階にゐるニイナ夫人のところへ走つて行つた。そこで彼女は自分の両親に會つたといふ。この逸話は翌くる日イッポリットを経て、公爵の耳に入つた。イッポリットはもう床から起きられなかつたので、このことを知らせるために、わざわざ公爵に使いをやつた。どうしてこの噂がイッポリットの耳に入つたのか、それは分からないが、公爵は蠟燭と指の話を聞いたときに、イッポリットさえもびつくりするほどに笑ひ出した。が、急にぶるぶるとふるえ出して、さめざめと涙を流した。……一體に彼はこの數日間、非常な不安な困惑に陥つてゐた。それはそこはかかない惱ましいものであつた。イッポリットは、公爵のことを頭が變だと斷言したが、それはまだどうしても、はつきりしたことはない。

こうした事實を擧げて、しかもその説明を拒みながら、決してわれわれはこの小説の主人公を讀者の眼の前で、辯護しようとして望んでゐるわけではない。それどころか、公爵が親友の間にさえも呼びおこした憤懣そのものを分かつたことすらも敢えて辭しないつもりである。ヴェーラでさえも暫らくのあいだは、公爵の行爲に憤慨してゐた。またコオリヤさえも、そうであつた。ケルレルすら、介添人に選ばれるまでは、腹を立ててゐた。レーベジェフのことはいりまでもない。彼もやはり、憤慨のあまりに、公爵にたいして奸策をさえめぐらし始めた。極めて眞摯なものといつていくらいの。しかしこのことは後でいおう。一體にわれわれはエツゲニイの言葉、

ヴナのところを駈け込んだのである。ワルワラは今すぐに一刻の猶豫もなく、このことをすつかりリザヴェータ・プロコフィエヴナに報告する必要があると感じた。母と二人の姉を初めとして、一同の者はすぐにニイナ・アレクサンドロヴナのもとに駈けつけた。たつた今、歸宅したばかりのイワン・フォードロキッチ——一家の主人も皆の後につづいた。またその後からムイシキン公爵も、人々が荒々しい言葉で追いつた。ワルワラの取り計らいで、彼はここでもアグラライヤの傍へ通してもらえなかつた。アグラライヤは、母や姉たちが自分に同情して泣きながら、少しも咎め立てないのを見て、いきなりみんなに飛びかかつて抱き合つた。そして、すぐに一同と共に家に歸つたので、これで事件は一先ず覺がついた。

尤も、あまり確かな噂ではないが、こんなことも人々の語り草となつた。——ガーニヤがここでも散々な目に合つたといひ、ワルワラがリザヴェータ夫人のもとへ走つて行つた隙をねらつて、彼はアグラライヤに面と向つて、自分の戀を打ち明ける氣になつたとのことで、その言葉を聞くや否や、アグラライヤは自分の悲しみも涙もすつかり忘れて、急に聲をたてて笑ひ出したといふ。そして不意に奇妙な質問を持ち出した。それは、どれだけ思つてゐるかという證明のために、今すぐ指を蠟燭の火で焼くことができるかといふのであつた。ガーニヤはその要求に度膽を抜かれて、何と答えていいのかわからないので、たとえようもない不思議そうな表情を顔に

——心理的に深刻でかつ強烈な言葉に、全く同意を表するのである。それは、ナスターシヤの家で起つた出来事のうち六日か七日目に、彼が公爵との打ちとけた話のときに、無遠慮に述べた言葉であつた。

序でに斷つておくが、エバンチン家の人々ばかりではなく直接になり間接になり同家に屬してゐる人は、誰も彼も、公爵との關係をすべてなくしてしまふ必要を認めてゐた。例えば、S公爵などは、公爵に出會うと、横を向いてしまつて、會釋さえしよとしないかつた。しかし、エツゲニイは自分の立場を傷つけることを何とも思わなかつた。(また毎日のやうにエバンチン家へ出入りを始め、前にも増した接待を受けるやうになつたにもかかわらず)、公爵を訪問した。それはエバンチン一家が、バヴロフスカを去つて翌くる日であつた。ここへ來るときも彼は町じゆりに擴がつた噂を、すつかり知つてゐるばかりではなく、事によつたら、自分でも少しづつていその手傳いをしたかも知れない。公爵は非常に彼の來訪を悦んで、すぐさまエバンチン家のことを言ひ出した。こうした純眞で、率直なきつかけに、エツゲニイはすつかりうちかけて、廻りくどいことを省いて、いきなり、要件に取りかかつた。

公爵はまだエバンチン一家の出立を知らずにいた。それを聞いて彼は驚ろいて眞つ蒼になつた。しかし、しばらく経つと、當惑したやうな考え深い様子で、首を振りながら『そうあるべき筈だつたのです。』と告白した。それから落ちつかない調子で、『一體、どこへ行かれたのでしよう?』と訊ねた。

エツゲニイはそのあいだ、じつと公爵を観察していた。早口な質問、その質問の調子の無邪気さ、うろたえた、それと同時に何だか妙に露骨な態度、不安そうな昂奮した様子——かような凡ゆるものが、少からず彼を驚ろかした。けれども彼は愛想のいい調子で、詳しく一部四什を公爵に報告した。相手はいろんな事實をまだ知らなかつた。これは將軍家から出た初めての便りであつた。彼はアグライヤが本當に病氣をして、一週間ばかりつづけて熱に悩まされ、夜も殆んど眠らなかつたが、今はかなりよくなつて、心配なことは少しもないが、神経的なヒステリックな状態にあるという噂を確かなことだといつた。……「けれど、家の中がすつかり穩かになつたから、それでも結構なんですよ！　すぎ去つたことは、アグライヤさんの前だけでなく、お互い同志の間でも、仄めかさないうちにしています。御両親は秋になつて、アデライーダさんの結婚がすみ次第、外國旅行をすることに相談を決められました。アグライヤさんは初めてこの話を打ちかけられたときも、ただ黙つて聞いて居られました。」

彼エツゲニイ。パーヴロキツチも、やはり外國へ出かけるかも知れない。S公爵さえも、若し事情が許すならば、アデライーダと一しよに二月ばかりの豫定で、行つて來たいといつている。將軍自身はこちらに居残る筈である。この度、一同が引き移つたのは、コルミノ村といつて、ベテルブルグから二十露里ばかり離れた同家の領地で、そこにはゆとりのある地主の館がある。ペラコンスカヤ夫人はまだモスクワへ歸らないが、どうやら、わざと踏み止まつてゐるらしい。リザ

「そり、そり、おつしやる通りです、僕が悪かつたのです。」と公爵はまた怖ろしい哀愁に沈みながらいい出した。「それにねえ、ナスターシャさんにたいしてあんな見方をしたのは、あの女一人、アグライヤさん一人じゃありませんか……ほかの人は誰でもあんな見方はしませんでした。」

「おまけにこの事件全體が言語道斷なのは、眞剣なところが少しもなかつたからですよ！」エツゲニイはすつかり夢中になつて叫んだ。「失禮ですけれど、公爵、僕は……僕はこのことについて考えたのです、いろいろに考えて見たのです。僕は以前のことをすつかり承知しています。半年まえのことですつかり承知しています。——あれは決して眞剣ではなかつたのです！　あれはすべて單なる理性だけの熱中だつたのです、繪です、幻想です、煙です。あれを何か眞剣なことのやうに考えることのできるのは、全く無經驗な少女の怯じ氣づいた嫉妬です！……」

ここでエツゲニイはもうすつかり遠慮會釋なしに、自分の忿懣を洩らしてしまつた。筋道を立てて、明瞭に、更にまた繰り返していうが、異常な心理解剖さえ試みながら、彼は公爵とナスターシャの以前の關係を悉く、繪のやうにさまざま公爵の前に擧げて見せた。エツゲニイはいつも言葉の才能を與えられていたが、今はもう雄辯の域にさえも達していた。

「抑々の初めから、」と彼は聲をあげまして言つた、「あなた方の關係は虚偽で始まりました。虚偽で始まつたものはまた虚偽に終るのが當然です、それが自然の法則といふものです。僕は人があなたを——いや、まあ、誰にもせよ——白痴

ヴァイタ夫人はあんな出來事であつたあとで、ペヴロフスクに居残るのは、できない相談だと主張した。それはエツゲニイが、毎日のやうに町中の噂を夫人に傳えたからである。エライギン島の別荘に暮らすのも、やはりできないことであつた。

「ねえ、まあ本當に、」と、エツゲニイは附け足した、「考えても御覽なさい、我慢ができるでしょうか……わけても、あなたの家で、ねえ、公爵、絶えず運んでいる話を聞かされたりえに、どんなに斷わつても、あなたが毎日あすこを訪問なさるんですものね……」

「そりです、そりです、おつしやる通りです。僕はアグライヤさんに會いたかつたものですから。」と彼は再び首を振つた。

「ああ、公爵、」急にエツゲニイは、元氣よく、しかも物悲しそりに叫んだ。「あなたはどうしてあのとき……あんな出來事を打つちやつておいたのです？　もちろん、もちろん、あんなことはあなたにとつて、實に意外でしたらうね……僕も、あなたが度を失つてしまつたのは、當然だと認めます。それに、あの氣ちがいじみた娘さんを引き止めることは、あなたにできなかつたでしょう、全くあなたの手に負えませんからね！　しかし、あの娘さんがどの程度まで、眞面目にまた熱心に……あなたを思つていたかを、あなたが理解するのはあたり前だつたでしょうよ。あの女はほかの女と愛を分かつのが厭だつたのです。しかも、あなたはあなた……よくもあれほどの實をなげりつて、こわしてしまひましたね！」

だといつても、同意することができません。憤慨したくなる位です。あなたはそんなことを言われるには、あまりに聰明です。しかし、あなたは、普通の人とはちがうといわれても仕方がないほど、變なところがあります、ねえ、そりです、僕

の斷定では、過去のあらゆる事件の基礎は、第一にあなた、……いわば、生まれつきの無經驗と、(この『生まれつき』という言葉に氣をつけて下さい、公爵、)それから、あなたの方から、(あなたが御自分でも幾度か告白なすつたやうに、)それから頭の中で作りあげた信念の難然たる累積と、こりいりものから成り立つてゐるのです。あなたは今の今まで御自分の廉潔な性質から推して、これらの信念を偽りのない、生つ粹のものだと、信じていらつしやるのです！　ねえ、公爵、そりじゃありませんか、あなたのナスターシャさんにたいする關係には、最初つからその紋切型の民主主義的(これは簡單な言い方をしようと思つていつたのです)とでもいうやうなものがあるのです。あなたのお簡單にいうと『婦人問題』の崇拜です。僕は、ラギーソンが十萬留の金を持つて來たときの不體裁きわまる、奇怪千萬な、ナスターシャさんの夜會の場面を、すつかり正確に知つています。お望みなら、まるで掌をさすやうに、あなた自身を解剖して見せましよう。まるで鏡に映して見せるやうに、あなた自身をお目にかけますよ。それくらいに、僕は正確に事の眞相と、どうして引つくりかえつたかという理由を知つてゐるのです！　青春の血に燃えるあなたは、瑞西に住んで、父祖の國にあこがれていまし

た。まだ見たことのないカナン地かなんぞのよりに、まつしぐらに露西亞に歸つていらつしたのです。あなたはあちらで露西亞に關する本を、たくさんお讀みになつたでしょう。その本は優れたものだつたかも知れませんが、あなたに取つては有害なものだつたのです。とにかく、あなたは若々しい熱情に充ちた實行慾を懷いて、われわれの中へ現われて來ました。そして、いきなり實行にとりかかつたのです！ ちようど、到着の日に、あなたはさつそく悲しい胸をおどらすような話——辱かしめられた婦人の話を聞かされたのです。相手はあなたという童貞の騎士、話題は女のこと。その日のうちにあなたはその婦人に會つて、その美貌に心を奪われました——幻想的な悪魔的な美に心を奪われました（全く僕はあの女が美人であるということを確認しますよ）。それにあなたの神經と、あなたの持病と、そして人の神經をかき亂さないではおかない、わがベテルブルグの雪だけの氣候を加えて御覽なさい。あなたに取つていくぶん幻想的な未知の町における、この一日を加えて御覽なさい。幾多の邂逅や、芝居めいた場面や、思いがけない知り合いに會う日や、意外な現實を見る一日や、エパンチン家の三人の美人（その中にはアグライヤさんも入つていますよ）もの一日を加えて御覽なさい。疲れとめまいを加えて御覽なさい。ナスターシャさんの客間と、客間の調子を加えて御覽なさい……こういふ瞬間に、あなたは自分がどうなると思ひますか？

「ええ、ええ、そうです、そうです、」と公爵は、次第に顔を赧らめながら、首を振つた。「ええ、それは殆んどその通り

りです。それに、僕は前の晩もその前の晩も汽車の中だつたので、本當に少しも寢なかつたのです。それですつかり頭の調子が狂つて……」

「ええ、そうですとも、勿論ですよ。僕もその方へ議論を運んでるんです。」とエツゲネイは熱くなつて、言葉をつづけた。「分かりきつた話ですね。あなたはわゆる歡喜に酔つて、自分は親代々の公爵だ、潔白人間だという立派な感情を、大勢の前で發表することのできる最初の機會に飛びかかつたのです。つまり、自分の罪ではなく、いやらしい上流社會の道樂者の罪のために瀆された女は、決して墮落したものだと思わない、こういふことが知られたかつたのです。おお、分かり切つた話です！ しかし、それは問題じゃありません。ねえ、公爵、問題はあなたの感情に眞實があつたか、眞理があつたかということですよ。それは單に、あなたが頭の中だけの歡びではなかつたか、ということですよ。公爵、あなたは何とお考へになりますか、——ああいう種類の婦人が、教會で許されたことはありませんが、しかし、その婦人に、お前のしていることは立派だ、あらゆる尊敬を受ける價值があるとは誰もいいやしなかつたじやありませんか。だから三箇月たつたのち、常識があなた自身に、事の眞相を教えてくれたのじやありませんか。今あの女が無垢なら無垢でいいです。僕は無理に争おうとはしません。そんなことは厭やです。しかし、果してあの女の行爲が、あのお話にならない悪魔のよりに傲慢な態度や、あの圖々しい、あの飽くことを知らないエゴイズムを辯護し得るでしょうか？ まあ、御覽なさい、

公爵、僕は夢中になつたもんですから、しかし……」

「そうです、それはみんなそうかも知れませんが、多分あなたのおつしやる通りかも知れませんが……」と再び公爵は呟やいた。「あの女はほんとにひどくいらしてしまいました、無論、おつしやる通りです。けれど……」

「同情を受ける價值はあるでしょうか？ そうおつしやるおつもりでしょうか、ね、公爵？ しかし、單なる同情のために、あの女の満足のために、いま一方の高潔な令嬢を汚してもいいものでしょうか？ あの傲慢ききな、あの恨めしげな眼のまえで、その令嬢を辱しめていいのですか？ そんなことを言つたら、同情という奴はどこまで行くか分かりませんよ！ それはあり得べからざる誇張ですよ！ あなた自身、公明正大な申込をして、しかも眞底から愛している令嬢を、競争者の前であんなにまで辱しめた上に、戀がたきの見ているところでその女に鞍がえするなんて、一體、できることでしょうか？ あなたは全くアグライヤさんに申込をしたのでしよう、両親や姉さんたちの前で立派におつしやつたんでしよう？ これでもまだ、あなたは潔白人なんではないですか？ 公爵、失禮ですが、伺いたいですね。それでも……それでもあなたは神様のよきな娘にむかつて『わたしはあなたを愛しています』といつたのが、嘘をいつたことにならないんでしようか？」

「そうです、そうです、おつしやる通りです、ああ、僕はしみじみ自分が悪かつたと思ひます！」公爵は名狀すべからざる憂愁にとざされて言い出した。

「一體それで満足なんですか？」エツゲネイは憤激して叫んだ。「果して、『ああ、自分が悪かつた！』と叫んだら、それだけで事はすむものでしょうか？ 悪かつたといひながらやはり強情を通してるじやありませんか！ 一體、あなたの心は『基督教的』の心はどこにあつたのです？ あのときのアグライヤさんの顔を御覽になつたでしょうか？ 一體あの人は二人の仲を引き裂いたもう一人の方より苦しみ方が少かつたでもいりませんか？ どうしてあなたははつきりと見ていながら、放つたらかしておいたんですか、え？」

「けれど……僕は放つたらかしておいた譯じやないんです……」と哀れにも公爵は呟やいた。

「どうして放つたらかしておかないつてことになるんです？」

「決して放つたらかしてはしなかつたのです。どうしてあんなことになつたのか、僕はいまだに分かりません……僕は……僕はアグライヤさんの後を追つて駆け出したのです。ところが、ナスターシャさんが卒倒したもんだから、……その後ずつと今まで、アグライヤさんに會わしてもらえないんです。」

「どつちにしる同じことですよ！ ナスターシャさんが卒倒したにしろ、あなたはやはりアグライヤさんの後を追つて行くべきだつたのです！」

「ええ……ええ、僕は行くべき筈だつたのです……、だつて死んでしまつたかも知れないんですからね！ あなたはあの女を御存じですが、きつと自殺したに相違ありません。それに……いや、どつちみち、あとで僕、アグライヤさんにすつ

かり話します、そして……ねえ、エツゲニイさん、お見受けしたところ、あなたは一部四件をよく御存じないようですね。一體なんだつて、僕をアグライヤさんに會わしてくれないでしょう。僕はあの人にすつかり説明したいんですけれど。全く二人ともあのと見え當ちがいのことばかりいつたのです。すつかり見當ちがいのことでした。だから、あなたのことになつてしまつたのです、……僕はどうしてもあなたにこの事が説明できません、けれど、アグライヤさんには巧く説明できるかも知れません、……ああ、忌々しい！ 忌々しい！ あなたは、あの女が駆け出した瞬間の顔と聞いて、ね……ああ、口惜しい！ 僕おぼえています、行きましよう、さあ、行きましよう？」急に彼は落ちつかない調子で椅子から飛び上がりながら、エツゲニイの袖を引つぱつた。

「どこへ？」
「アグライヤさんのところへ行きましよう、今すぐ！」
「だつて、もうバゾロフスクにいないといつたじやありませんか、それに、何のために行くんです？」
「あの人は分かつてくれます、あの人は分かつてくれます！」公爵は祈るように手を組みながらいつた、「あの人は何もかもすつかり違つてゐる、まるで別な事情だつたということを解つてくれますよ！」
「どうして、まるで別なんです？ あなたはやつぱり、結婚しようとしてるじやありませんか。して見ると、強情を通しでいらつしやるんです……結婚なさるんですか、なさらないんですか？」

御存じないからです。ほら、……あのヴェーラ・レーベジエワなんかの眼は、まるつきり違うじやありませんか。僕は……僕はあれの顔が怖ろしいのです！」彼は並々ならぬ恐怖に捉えられて附け足した。
「怖ろしいですつて？」
「ええ、あれは——氣が違つてるんです！」と彼は蒼い顔をしながら囁やいた。
「あなたは確かに知つておいでなんですか？」エツゲニイは一方ならぬ好奇心を寄せて、訊ねた。
「ええ、確かに、今はもう確かにこの節——この四五日のあいだに、もう確かに突きとめました！」
「まあ、あなたは自分をどうしようとしてるんです？」とエツゲニイは愕然として叫んだ、「して見ると、あなたは何かが怖ろしくつて結婚されるんですね？ どうも何が何やら、さつぱり譯が分からない……愛情もないのに、多分？」
「おお、違います。僕は心の底からあの人を愛しています！ だつて、あれは……まるで子供ですものね。今は子供ですよ。まるで子供です！ おお、あなたはまるで御存じないんです！」
「それなのに、あなたはアグライヤさんに愛を誓つたんですか？」
「おお、そうです、そうです！」
「一體、何です？ それじや、兩方とも愛したいんですか？」
「おお、そうです、そうです！」

「ええ、そう……結婚します、ええ、しますよ！」
「じや、どうして別なんです？」
「おお、別ですとも、別です、別です！ 僕が結婚しようとするまいと、それは、それはどつちにしる同じことです、何でもありません！」

「どうして同じことなんです、どうして何でもないんです？ だつて、これは冗談じやありませんよ。あなたは好きな人と結婚して、その女に幸福を與えようとしてらつしやる。ところが、アグライヤさんはそれをよく見て、知つてるんですよ。して見ると、どうして同じことなんです？」
「幸福ですつて？ おお、違います！ 僕はただ何ということなしに結婚するのです。あの女の望みですから。それに、僕が結婚するというのが、一體、何でしょう。僕は……いや、これもやはりどつちにしたつて同じことです！ ただ、あのままにしておいたら、きつと死んだ筈です！ 僕はラゴージンとのあの結婚が氣ちがい沙汰だつてことは承知してあります。僕はいま以前に分からなかつたことまで、すつかり分かります。あのと二人が顔と顔を突き合はして立つたとき、僕はナスターシャさんの顔を見るにたえなかつたのです。あなたは御存じないでしょうね、（と祕密でも打ち明けるように聲をおとして）これは今まで誰にも、アグライヤさんにもいわなかつたのですが、僕はいつもナスターシャの顔を見るとたまらないんです、……あなたがさつきナスターシャの夜會についておつしやつたことは、全くその通りでした。しかし、たつた一つ、言い残されたことがあります。つまり、

「冗談じやありませんよ、公爵、何をおつしやるんです、しつかりなさい！」
「僕、アグライヤさんがなくては……僕はどうしてもあの人に會わなくてはなりません！ 僕は……僕は間もなく、寢てゐる間に死んでしまいます。僕は今夜にも、寢てゐる間に死ぬだろうと思ひました。ああ、アグライヤさんが知つてくれたらなあ、一切のことを……本當に一切のことを知つてくれたら。だつて、この場合一切を知ることが必要なんです。それが第一のことです！ 僕らは、他人に罪がある場合、その他人に關する一切の事を知る必要があるのに、どうしてそれができないんでしょう！……それはそうと僕自身でも何をいつてるのか分かりません、あなたがあまり僕をびつくりさせたものですか……ところで、果してあの人は今でも、あの部屋を駆け出したときのやうな顔をしていますか？ おお、そうだ、僕が悪かつたです！ すべて僕が悪い、というのが一ばん確かです。果して何が悪かつたのか、それはまだ分かりませんが、とにかく僕が悪いのです……この事件には何かしら、ねえ、エツゲニイさん、あなたに説明できないやうなものがある、説明の言葉のないやうなものがあります、しかし……アグライヤさんは分かってくれます。おお、僕はいつも信じていました。あの人は分かってくれます。」
「いや、公爵、分かりやしませんよ！ アグライヤさんは女として、人間として、戀をしたので、決して……抽象的な精靈として戀したんじやありませんよ。ねえ、公爵、あなたはどちらも愛したことがないといつた方が、最も確かじやない

でしよるか？」

「僕には分かりません。……そうかも知れませんが、多分、そうかも知れません。いろんなことで、あなたのおつしやることは本當ですからね、エツゲニイさん。あなたは非常に賢いお方です。ああ、僕はまた頭が痛み出した。さあ、あの人のところへ行きましょう！ 後生ですから、どうぞ！」

「だつて、言つてるじやありませんか、あの人はパヴロフスクにいたつて、エルミノ村にいたつて。」

「じゃ、エルミノ村へ行きましょう、さあ、すぐ！」

「それは、だ、め、です！」エツゲニイは立ち上がりながら言葉尻を引いていつた。

「それじゃ、手紙を書きますから届けて下さい。」

「駄目です、公爵、駄目です！ そんなお頼みは御免をこらむります、できません！」

二人は別れた。エツゲニイ・パーヴロキッチは奇妙な確信を得て立ち去つた。彼の考えによると、公爵は少しばかり、気がちがつているということになつた。「あの男があんなに怖れて、しかも愛しているあの顔というのは、何のことだろう？ それはそうと、あの男はアグライヤさんがいなかったら、本當に死んでしまふかも知れない。そしてアグライヤさんも、あの男があればどまめに自分を愛しているということを知らないでしまふかも知れない！ はは！ ところで、二人を同時に愛するなんて、どうなんだろう？ 別々な二つの愛情でかな？……これは面白いぞ、……可哀そうな白痴だなあ！ あの男はどうなるんだらう、今度は？」

それにしても、公爵はエツゲニイ・パーヴロキッチが豫言したように、結婚式の日までは、『夢のうち』にも、現のうちに死ななかつたのである。恐らく實際にはよく眠れないで、悪い夢を見ていたことであろう。しかし、晝の間、人前になると、氣だてがよくて、満足しているらしくさえ見えたと。どうかすると、ただ怖ろしく沈んでいることもあつたがそれはただ一人でいる時だけであつた。式は取り急がれて、エツゲニイの來訪後、凡そ一週間ということになつた。このように急いでいるので、最も親しい友人さえも（若しもそういう人たちがいたとすれば）、この不仕合せな狂氣じみた男を『救おう』と骨を折つて見たところで、幻滅を感じなければならなかつたであろう。エツゲニイが來訪するに至つた責任の幾分はイワン・フォードロキッチ將軍、およびその夫人のリザヴェータ・プロコフィエヴナが負うてゐるという噂があつた。しかし、たとい彼二人が量り知れないほど善良な氣持から、滅亡せんとしつつある哀れな狂人を救おうと望んだとしても、勿論、この頼りない一つの試み以上に、一步も踏み出しえなかつたに相違ない。二人の地位も、また、恐らくは性癖も、これ以上に眞剣な努力を許さなかつたのである。（それは極めて自然なことである。）前にも述べたように公

棺の中に入つてゐると思はせませんよ。」とレーベジェフは公爵に囁やいた。「あなたは、どなたをお捜しで？」

「いや、なに。ちよつとそんな氣がしたので……」

「ラゴージンじやありませんか？」

「一體あの人がここにゐるんですか？」

「はい、教會の中に。」

「ははあ、道理で、あの人の眼がちらつたと思つた。」と公爵はどきまぎして呟やいた。「しかし、何だつてあれが？

……招かれたんですか？」

「あの人のことなんぞ、誰も考えてやしません。まるで誰も知らんじやありませんか。ここにはどんな人だつていますよ、この人だからですか。ところで、何をそんなにびつくりなさるんです？ わたしはこの頃よくあの男に出會いますよ。はい、もう先週は四度ばかり、このパヴロフスクで出つくわしました。」

「僕は一度も會いません……あのとき以來……。」と公爵は呟やいた。

ナスターシャも『あのとき以來』ラゴージンに會つたなどという話も一度もしなかつたので、公爵は今では、ラゴージンが何か曰くがあつて故らに顔を見せないのだと、一人で決めていた。この日は一日、彼はひどく考え込んでいた。ところが、ナスターシャはその日は晝も夜も、ひどく陽氣であつた。

「さようでございますよ、覚えてらつしやるでしよすが、わたくしたちが、ついこのあいだ議長に選舉した、あの御當人が

父の亡くなる前に、公爵と仲直りをしたコオリアはケルレルとブルドフスキイを結婚式の介添人に頼めと勧めた。（そ

それは目前に迫つた急務であつた。彼はケルレルならば禮儀正しくやつてのけるだろう、事によつたら、適任者かも知れないと請け合つた。ブルドフスキイについては何も言うがものはなかつた、静かな、おとなしい人間だからである。ニイナ夫人とレーベジェフは公爵に注意して、——たとい結婚が決まつたにしても、何の必要があつてパヴロフスクで、しかも人の集まる避暑季節に、大げさなことをするのかといひ、それ位ならペテルブルグで、却つて内輪にやつた方がよくはないかと言つた。

こうした杞憂が何を意味するかは、公爵に取つて餘りにも明瞭なことであつた。しかし、彼はあつさりとなスタージュの望みだからと答えた。

翌くる日、介添人に選ばれたという報知を受けたケルレルが、公爵のところへやつて来た。入る前に彼はちよつと戸口で立ちどまつた。そして、公爵の姿が目に入るや否や、人差し指を立てながら、右手を高くさし上げて誓いでもするよりに叫んだ。

「決して飲みません！」

やがて公爵に近づいて、兩の手をしつかりと握りしめながら一振りして、「最初にあなたの結婚のことを聞いたころは、むろん、わしはあなたの敵でした。これは、玉突き屋で宣言した通りです。しかし、これというのも、専ら、あなたのためを慮つて、一日も早くプリンセス・ド・ローガンか、少くともド・ツャボオクらしいの人を、あなたの御夫人として見たいと、毎日々々、親友としての焦燥をもつて待ち焦れていた

の事實です！」
公爵は自分でも、何か、こんな類いの話を聞いたことがあつたよりの気がした。が、その時は勿論、何の注意も拂わなかつた。彼は今もただ笑つたばかりで、すぐにまた忘れてしまつた。レーベジェフは全く暫らくのあいだ、やきもきしていたのである。この男の目論見はいつも感激といつたようなものから生れるが、あまりに熱中し過ぎるため、こみ入つて来て、あちこちへ枝葉に分かれて、最初の出発点からすつかり離れてしまふのである。つまりこれが、彼の生涯で大した成功を見ない所以であつた。その後殆んど結婚の當日になつて、彼が悔悟の念を表わすために、公爵のところへやつて来たとき（彼はいつも公爵に對して陰謀を企てるたびに、悔悟の念を表すため公爵のところへやつて来る癖があつた、主として陰謀が成功しなかつた時に）、自分はタレイランとして生れたのに、どういふ風の吹き廻しか、ただのレーベジェフでまごまごしているのだ、と前置きして、自分の企らみの一條をすつかり暴露して見せるので、公爵はそのことに非常な興味を寄せるのであつた。彼の言葉によると、彼は先ず小手しらべとして、必要の際、たよりになるような名士の保護を求めてイワン將軍のところへ赴いたという。すると、將軍は合點が行かないらしく、自分は心から公爵のためよかれと祈つていふといひ、「助けてやりたいのは山々であるが、ここでそんなことをするのは、どうも感心しない」と言つたそう

* タレイラン……佛蘭西の名外交家、ウイーン會議に活躍した……
1838 (譯者註)

からです。しかし今は、あなたが少くともわれわれ全部を束にしたより、十層倍も高尚な考えを持つておいでになることを悟りました！ 何となれば、あなたは榮華も、富も、また名譽すらも必要となさらないで、ただ眞實のみを求めていられるからです。高尚な人の同情に篤いことは、分かりきつた話です。ところが、あなたは高尚な人になるまいとしても、教育があまりに高すぎるのです。全體から見ましてです！

しかし、烏合の衆たる野次馬連中は、また別な考え方をしています。町じゆりの者が家の中でも、集會の席でも、別荘でも音楽堂でも、酒場でも、玉突きでも、今度の式の事ばかり話したり、喚いたりしています。何でも窓の下で大騒ぎをしたがつていふという噂です。しかも、それが、いわゆる初夜なんですからね！ 公爵、もし潔白な人間のピストルが必要でしたら、わしはあなたが翌朝「蜜の床」からお起きにならぬ先に正義の彈の半打やそこらは射つ覺悟です。」といつた。なおまた教會を出るとき、新郎新婦を見たがる連中がどつと押し寄せる場合を氣づかつて、表に火消しの水管を用意するよりに勧めた。しかし、これはレーベジェフが反對した。「水管なんか持ち出したなら、家を木つばにして持つて行かれますよ。」あのレーベジェフは、あなたに對して陰謀を企てています、ええ、本當です！ あの連中は、あなたを禁治産あつかいにしようと思つてるんです、しかも、どうでしよう、自由意志も、財産も、何もかもですよ。つまり、お互いを四つ足と區別するこの二つの大事な物を、奪おうといふんですよ！ わしは聞きませんでした。確かに聞きました、正真正銘

である、タレイラン夫人は彼に會つたのも、話を聞くのも、やだといつた。エツゲニイも、S公爵も、ただ困りきつたよりに兩手をひろげただけであつた。

しかし、彼レーベジェフは悄氣ずに、如才のない法律家と相談した。これは立派な老人で、彼にとつては大の親友、といふより殆んど恩人なのであつた。この人の結論によると、それはできない相談ではないが、相當な人が公爵の智能錯亂と、完全な發狂の證明さえすればよい、しかし、そのほかの名士の保證というのが肝腎だとのことであつた。レーベジェフは決して落膽はしなかつた。それどころか、一度は公爵のところへ醫者を連れて来たことさえある。これもやはり立派な老人で、アンナ勳章を頸に掛けている別荘暮らしの人であつた。この人が来たのはただ、いわば、この邊の地勢を見て公爵と近づきになり、序でに公式にでなしに親友として、自分の診斷を告げるためであつた。

公爵はこの醫師の來訪を覺えている。その前の晩レーベジェフは、彼の健康が勝れないと言つて、うるさく付き纏い、公爵が斷乎して醫藥をしりぞけたとき、彼は突然こうして醫師をつれて来たのである。その口實はつい今しがた二人して非常に容態の悪くなつたチェレンチェフ氏(リツボ)を訪問して来たので、醫師の口から、公爵に病人の容態を知らせるために來訪したといふのであつた。公爵はレーベジェフの思ひつきを褒めて、非常に醫師を款待した。すぐにイッポリットの話が始まつた。醫師は、あの自殺當時の光景を、詳しく聞きたいと頼んだ。そして公爵の話や説明ぶりに、すつかり聞き

とれてしまつた。それからペテルブルグの氣候や、公爵自身の病氣や、瑞西や、シュネイデルのことなどに話が移つた。シュネイデルの治療法の説明や、その他いろんな話に、醫師はすつかり興味をひかれて、二時間ばかりも尻を据えたほどであつた。その間に、彼は公爵の上等の葉巻をふかし、レーベジェフはレーベジェフで、ヴェーラの持つて来た芳醇なりキエールをふるまつた。このとき妻もあれば家族もある醫師が、一種特別なお世辭をヴェーラに振り撒いたので、彼女はすつかり憤慨してしまつた。二人は親友として別れた。

公爵のもとを辭した醫師はレーベジェフに向かつて、若しあんな人を禁治産にするなら、一たい誰を後見人にしようというのかと言つた。レーベジェフが目前に迫つてゐる出來事子を、悲愴な面持で述べたのにたいして、醫師はするそうな様子で頭を振つていたが、とうとう終いに、『結婚しないでしまふ男なんて滅多にあるもんじやありませんよ。しかし、それは暫らく措いても、少くともわたしの聞いたところでは、あの魅力に富んだ婦人は一世に絶した美貌のほかには、それ一つだけでも、優に身分ある男を惹き附けるに足りませんが、そのほかにトーツキイや、ラゴージンから貰つた財産をもつてゐます。眞珠とか金剛石とか、襟巻とか、家具類とかいつたものをね。だから今度の結婚は公爵として、いわば、さして目立つほどの愚昧をあらわさないばかりか、却つてずるくて細かい、世馴れた勘定だかい頭を證明してゐますよ。して見ると、全く正反對の、公爵にとつて有利な結論を促す譯になるじやありませんか……』といつた。この意見はレーベ

外へ出すのを怖れてゐた。彼の容態は非常に悪く、もう今度には間もなく死ぬといふことは、すべての様子から充分に窺われた。秘密などは少しもなかつた。ただ昂奮のために、(それも或いは拵え事かも知れない)恐ろしく息を切らしながら、『ラゴージンを警戒なさい』と頼んだくらいのものであつた。『あの男は決して我を折るような奴じやありませんよ。公爵、あれはわれわれの仲間じやないですよ。あの男は一旦こうしようと思つたら、もうびくともしないんですからね……』などと、そんなことを言つた。公爵は何かと詳しく訊ねて見て、何か事實を嗅ぎ出そうとしたが、IPPボリットの個人としての感じと印象のほか、何の事實も伏在してはいなかつた。IPPボリットはとどのつまり公爵をびつくりさせたので、それを無性に悦んで、それきりやめてしまつた。初め公爵は彼の二三の特殊な質問に答えたくなかつたので、『せめて外國へでもお逃げなさい。露西亞の坊さんはどこにでもいますから、向うでだつて結婚することはできますよ。』という忠告に對しても、ただ微笑むばかりであつた。しかし、IPPボリットは次のような考えを述べて、切りをつけた。『僕はアグライヤさんの身の上を心配するんです。あなたがあのお嬢さんを戀してゐるのを、ラゴージンはよく知つていますから、戀に酬ゆるに戀をもつてするということになりますよ。あなたがあの男からナスターシャさんを奪つたから、今度はあの男はアグライヤさんを殺すでしょう。尤も、アグライヤさんは今はあなたのものではないですけど、それでもやはりあ

エフの心を打つたので、彼もそのまま手をひいてしまつた。乃で、いま公爵に向かつて『もう今度こそは、血を流しても厭わない程の信服の念のほか、何もかもわたしにはごさいません。そのためにやつて参りましたので。』と附け足した。

この四五日の間、IPPボリットも公爵の心を紛らしてくれた。彼は頼さいほどしばしば使の者をよこすのであつた。彼の家族は、程遠からぬ小さな家に住んでゐた。小さい子供ら——IPPボリットの弟と妹は、病人を避けて庭へ出られるというだけでも別荘住いが嬉しかつた。が、可哀そうな大尉夫人は、相變らず彼のいうがままになつて、まるで彼の犠牲になつてゐた。公爵は毎日親子の愛を分かつたり、仲直りをさせたりしなければならなかつた。そこで、病人はいつも彼のことを自分の『お守』と呼んでゐたが、しかもその仲裁役を輕蔑せずいられたらなかつた。病人はひどくコオリヤに會いたがつてゐた。それはこの少年が最初は瀕死の父、後には孀となつた母の傍に付き添つて、殆んど顔を見せなかつたからである。遂に彼は、目前に迫つた公爵とナスターシャの結婚を、冷笑の對象に選んだが、結局は、公爵を侮辱して怒らしてしまつた。公爵はばつたり來なくなつた。二日たつたら、大尉夫人がとぼとぼとやつて來て、涙ながら公爵においでを願ひたいと頼んだ。『でないよ、わたしはあれに咬み殺されてしまひます。』それから、息が公爵に大きな秘密を打ち明けたがつてゐると附け足した。そこで、公爵は行つて見た。

IPPボリットは和陸を求めて、泣き出した。泣きやんでかたを達した。公爵は人心地なくも彼のところを立ち去つた。

ラゴージンに關するこの警戒は、もう結婚の前日に當つてゐた。この晩、公爵がナスターシャに會つたのは、結婚前に於ける最後の會見であつた。しかし、ナスターシャは、彼を慰めることができなかった。そればかりか、この頃ではいよいよ彼の不安を増すばかりであつた。以前、といつても四五日まえまで、彼女は公爵と會う度ごとに、全力を盡くして彼の氣を紛らそうとした。公爵の洗んだ様子を見るのが怖ろしかつたので、時には歌をうたつて聞かせることさえあつた。しかし大ていはい思ひ出せる限りの滑稽な話を、公爵に話して聞かせることが多かつた。公爵はいつも笑うような振りをして見せたが、時には本當に笑うこともあつた——それは彼女が夢中になつて話するときの、すばらしい頓智と明るい感情に於つた。公爵の笑顔を見、自分が公爵に與えた感銘を夢中になつた。公爵の笑顔を見、自分が公爵に與えた感銘を見ると、有頂天になつて自慢するのであつた。が、このごろ彼女の憂愁と物思ひは、殆んど一時間ごとに募つて行つた。公爵のナスターシャに關する意見は、ちやんと決まつてゐた。それでなかつたら、勿論、彼女のもつてゐる凡ゆるものが、今は謎めいた、不可解なものに見えたに相違ない。しかしナスターシャはまだ蘇ることができるものと、彼は衷心から信じてゐた。彼がエツゲニイに向かつて、眞ごころから彼女を愛してゐると言つたのは、全く事實であつた。彼の愛の

なかには、たしかに、何かしら哀れな、病身な子供に寄せる愛着に似たようなものが潜んでいた。そんな子供の勝手に任せて置くのは、情において忍び難いような、不可能でさえもあるような気がするのであった。彼は彼女に對する氣持を、決して人に打ち明けなかつた。そういう話を避けられないような場合でさえ、口にするのを好まなかつた。當のナスターシャとは、自分たちの『氣持』を一度も話し合つたことがない。まるで二人とも、そんな誓いでも立ててゐるかのようであつた。二人のいつもの陽氣な、威勢のよい話には、誰でも仲間入りができた。ダーリヤは後になつて、『あの當時の二人を眺めていると、ひとりで嬉しくなつて、ほれほれするくらいでした。』と話していた。

しかし、ナスターシャの精神および理性の状態に關する彼のこゝろした見方は、そのほかの様々な疑惑を避けるのに、いくぶん力があつた。今のナスターシャは、三箇月ばかり前に知つていた頃とは、まるで別人のようになつてゐる。彼は今はもう、『あのとき自分との結婚を厭つて、涙と呪いと非難とともに逃げ出した女が、どうして今度は却つて自分の方から、結婚を主張するようになったのか?』などと考え込まなくなつた。『つまり、もうあの時のように。この結婚が僕の不幸になるということを、心配しなくなつたのだ。』と公爵は考へた。急激に生じたかような自信は、どうしても自然なものである筈がない、と彼の眼には感ぜられた。アグライヤに對する憎しみばかりが、こんな自信を生むべき譯がない。ナスターシャはもう少し深い直感をもつてゐる。ラゴージンとのく

スタースが驚かされたときをいらい立たせるために、引き續いて種を供給したのである。エバンチン一家の人に會うのが難かしかつたので、ナスターシャはあるとき自分の馬車に公爵を乗せて、相乗りで將軍家の窓際を通るようになつてゐた。それは公爵にとつて、思いも寄らぬ驚ろきであつた。彼はいつもの癖で、もう取り返しのつかない時になつて——もう馬車が窓際を通つてゐる時に、初めて氣がついた。彼は何も言わなかつたが、その後二日ばかり引き續いて病氣した。ナスターシャも、もうかような小手調べを繰り返さなかつた。

結婚の二三日まえから、彼女はひどく考へ込むようになつた。いつもついに憂鬱をけし飛ばして、また陽氣になるのが常であつたが、その燥ぎかたが以前よりも静かで、あれほど騒々しくもなければ、あれほど幸福らしい快活さもなかつた。公爵は一層の注意を加へた。ナスターシャが一度もラゴージンのことを口にしないのも、變に思われた。ただ一度結婚の五日ばかりまえに、急にダーリヤから、ナスターシャが非常に悪いからすぐ来るように、との使があつた。行つて見ると、まるで氣ちがいのような有様である。彼女は悲鳴をあげたり、慄えたりしながら、ラゴージンが家の庭に隠れてゐる。たつたいま自分を見た、夜になつたら、あの男がわたしを殺す……双物で斬る! と叫ぶのであつた。まる一日彼女は氣が鎮まらなかつた。しかしその晩、公爵がちよつとイッポリットのところへ立ち寄つた時、きよう用向きでペテルブルグへ行つて、たつたいま歸つたばかりの大尉夫人が、今日あちらの家へラゴージンが寄つて、バゾロフスタのことをい

され縁に對する恐怖のためでもあるまい。要するに、これらの原因が、いろんな他の事情と一緒になつてゐるのだ。けれど何より明瞭なのは、彼が以前から疑つてゐる事實——哀れな病める心に堪えられないような事實が、この間に伏在してゐるといふ事である。

かような考へは、實際いろいろな疑惑から或る意味で彼を救い出してはくれた。が、この數日間、彼に安心も休息も與へることができなかつた。時には、彼は何も考へまいと努めた。事實、彼はこの結婚を、些細な儀禮かなんそのように見ているらしかつた。自分の運命も、あまりに安く評價してゐるのであつた。エツゲニイとの會話に類するような話や、その他いろいろの抗議に對しては、全く返答が出来なかつた筈で、また自らその資格があるとも思えなかつた。だからこゝろいつた類いの話を避けてゐたのである。

それにしても、アグライヤが公爵にとつて、どんな意味をもつてゐるかということ、ナスターシャは餘りによく知りかつ諒解してゐるということに彼は氣がついた。彼女は口に出して言わないが、まだ初めのうち、時として公爵が、エバンチン家へ出かけようとしてゐるのを見つけたとき、彼は彼女の『顔』を見た。將軍一家が出發したとき、彼女はまるで悦びに輝き渡るようであつた。公爵はかたがたに氣のつかない、察しの悪い方ではあつたが、ナスターシャが自分の戀がたきをバゾロフスタから追出すために、何か世間體の悪いことを仕出かしそらだといふ考へは、急に彼の心を騒がしめた。結婚に關する別荘じゆうの騒がしい噂も、勿論ナ

るに對して、大尉夫人の答へた時刻は、ナスターシャがきよう自分の家で、ラゴージンを見たとき、謎んど合つてゐた。が、それはほんの錯覺だということ、謎が解けた。ナスターシャはなお自分で詳しく聞かされた、大尉夫人のところへ行つて、すつかり安心した。

結婚の前夜、公爵と別れたときのナスターシャは、珍らしく元氣づいてゐた。ペテルブルクの衣裳屋から明日の衣裳一式服、髪飾り、その他さまざまものが届いた。公爵は、彼女がそれほどまで衣裳のことで騒ごうとは、思ひがけてい

なかつた。が、彼は自分でも、一切の品物を褒めそやした。その褒め言葉を聞いて、彼女はなお一そう好い機嫌になつた。ところが、彼女はちよつとよけいな口を交らした。彼女は町の人がこの結婚を憤慨してゐることも、五六人の暴れ者がわざわざ作つた諷刺詩に音楽までつけて、家の傍で一騒ぎをしようとする企んでゐることも、またその企みが、町民の應援を受けなければかりの有様だなどということも聞き込んでゐたので、今は尙更この連中の前で意氣揚々と自分の衣裳の贅澤さと、その趣向で皆をあつといわせてやろうといふ氣になつたのである。

『もしできるなら、怒るなど、口笛を吹くなどして見るがよい!』こゝろ思つただけで、彼女の眼は光り出すのであつた。

彼女はもう一つ秘密な空想をもつてゐたが、口に出しては言わなかつた。つまりアグライヤか、さもなれば、その廻し者が、分らないように群集に交つて、教會へ自分を見に来る

に相違ない、という風に空想されたのである。そこで、彼女は心の中でその覺悟をしていた。こういふ考えにすつかり心を奪われて、夜の十一時ごろ彼女は公爵と別れた。しかし、まだ十二時も打たない中に、公爵の所へダリーヤの使が走つて来て、『非常に悪いから来て下さい』と告げた。行つて見ると、花嫁は寢臺に閉じ籠もつて、ヒステリーの發作に絶望の涙を流していた。彼女はみんなが鍵のかかつた扉ごしに言うことを、長いあいだ聞こうともしなかつたが、ついに戸を開けて、公爵一人だけ中へ入れると、すぐその後から戸を閉めてしまつて、公爵の前に跪まづいた。(少くとも、ダリーヤはそう言つていた。彼女はちらと隙見したのである。)

「わたしは何ていうことをしてゐるんでしよう! 何ていうことを! あなたの身をどうしようと思つてゐるんでしよう!」
彼女は癡癡的に公爵の兩足を抱きながら、叫んだ。
公爵はまる一時間、彼女と坐つていた。二人がどんな話をしたかは、知らない。ただダリーヤの話によると、二人は一時間の後すつかり穩かな、幸福らしい様子で別れたとのことである。公爵はこの晩もう一ど使いをやつて様子を訊ねたが、ナスターシャはもう寢入つていた。翌くる朝、まだ彼女の起きない先に、もう二人の使が公爵のところから、ダリーヤの家へやつて来た。三度目の使はこんな言づけを齎らした。『今ナスターシャのまわりには、ペテルブルグから来た衣裳屋や髪結いが一小隊ほど集まつて、昨夜のことはその氣配もない。ただあれほどの美人の結婚前にか見られないような勢いで化粧に夢中になつてゐる。丁度いま、どの金剛石をつけよう

か、またどんな風につけようかというので、非常な評議が行われてゐるところだ。』で公爵はすつかり安心してしまつた。この結婚についての最後の逸話は、事情に通じた人たちによつて、次のように語られてゐるが、それは正確な話らしく思われる。

式は午後八時という事になつてゐた。ナスターシャ・フィリップovichは、もう七時にはすつかり支度が出来てゐた。もう六時ごろから、次第々々に物見高い人々の群れがレーベジエフの別荘、わけてもダリーヤの家の周圍に集まり出した。七時ごろからは教會も人で埋まつて来た。ヴェーラとコロリヤは、公爵の身の上をひどく心配してゐた。とはいへ、二人とも家の用事がかなり澤山あつた。公爵の下宿で受付や、接待の指圖をしてゐたのである。尤も式の後では、招待らしい招待をしないことになつてゐた。式に列するために必要な人人を除けると、ブチーツイン夫妻、ガーニヤ、アンナ勳章を頸に掛けた醫師、それからダリーヤ、こんな人がレーベジエフから招待を受けたくらいなものである。公爵が、なぜ殆んど他人同様の醫師を呼ぶ氣になつたかと訊ねたとき、レーベジエフは得意然として答えた、『頸に勳章をかけた立派な人でございませうから體裁のために……』とかつて公爵を笑わした。燕尾服に手袋をつけたケルレルとブルドフスキも、かなりに體裁よく見えた。ただケルレルは、宿の周圍に集まつて物見高い連中を、恐ろしく凄じい目つきで睨めつけながら、喧嘩ならいつでも來いという様子が、ありありと見えるので公爵はじめその他の頼み手を當惑させた。

「いや、一つあんな別嬪を見つけて見る。わーい!」すぐ傍にいた連中が叫んだ。

「よう、公爵夫人! こういふ美人のためなら、體を賣つても惜しめない!」とどこかの事務員らしいのが叫んだ。『命をすててもわが一夜を……!』

ナスターシャはたしかに手巾のように蒼い顔をして出て來た。しかし、その黒い目は熾つてゐる炭火のように、群集に向かつて輝やいた。この視線に群集は我慢がならなかつた。憤慨は歡呼の聲と變つた。もう馬車の戸が開いて、ケルレルが花嫁に手を差し伸べていた、折しも彼女は一聲高く叫んで、いきなり階段から群集の中へ飛び込んだ。附き添いの人々は誰も彼も驚ろきの餘り、しびれたやうになつた。群集は彼女の前にさつと道を開いた。と、階段から五六歩のところを、突然ラゴージンが姿を現わした。この男の眼を、ナスターシャは群集の中に捉へたのである。彼女は氣ちがいのやうに彼の傍へ駆け寄つて、その兩手をひしと掴んだ。

「助けて頂戴! 連れて逃げて! どこでも好きなところへ、今すぐ!」

ラゴージンは、彼女を殆んど兩手に抱え込んで、擔ぎ込むやうにして馬車の中へ入れた。やがて、一瞬の間に財布の中から百留紙幣を抜き出して、馭者に差し出した。

「停車場へやれ。もし汽車に間に合つたら、もう百留だ!」

*「命をすててもわが一夜を贖わんとする者あらは申しでられよ!」……
ウシキンの小説『埃及の夜』に出づ。(譯者註)

遂に七時半に、公爵は箱馬車に乗つて、教會へ赴いた。序でに言つておくが、公爵自身も從來の仕きたりや風習を、一つも略したくないと特に決めたので、すべての事が公然と明らかさまに、『型の如く』取り行われた。教會では、絶え間ない群集の囁みや、叫び聲の中を縫いながら、左右へじろじろと恐ろしい視線を投げるケルレルに手を引かれて、公爵は暫らく祭壇の中へ隠れた。ケルレルはナスターシャを迎えに行つた。見ると、ダリーヤの支關先に集まつた群集は、公爵の家より二倍も三倍も多いばかりでなく、二倍も三倍も生意氣でさえもあつた。階段を昇つてゐると、とても我慢できないやうな叫び聲が耳に入つたので、ケルレルはもう然るべき言葉を返してやるつもりで、公衆の方を振り向いた。ところが、幸いにブルドフスキと、支關から飛び出したダリーヤがおしとどめて、無理やりに掴まえて中へ引つ張り込んで了つた。ケルレルはいらいらして、あわててゐた。ナスターシャは立ち上がつて、もう一度、鏡を見ながら、『歪んだやうな』微笑を浮かべて(これは後でケルレルがいつたことである)『まるで死人のやうに蒼ざめてゐる』と言つた。それから、恭々しく聖像を拜んで、支關口へ出た。彼女が現われると、わつというどよめきがおこつた。最初の瞬間、笑い聲や、拍手や口笛すらも聞こえたのは事實であるが、すぐにもう別な聲が響き渡つた。

「何て別嬪だらう!」という叫びが群集の中で聞こえた。

「なあに、そりや何もこの女一人つきりぢやないさ!」

「あの女は婚禮で何もかもごまかそうつていふんだ、間抜け

こう言つて、自分もナスターシャの後から馬車に飛び込み、
ぼたりと戸を閉めた。馭者は暫しも躊躇することなく馬に鞭
をあてた。後でケルレルは、責任を事の唐突なのに轉嫁し
た。『もう一秒ひまがあつたら、追いついて、あんな眞似を
させるんじやなかつたんですがなあ！』と彼はその時の出来
事を説明して言つた。彼はブルドフスキイと共に、別の馬車
に飛び乗つて追いかけたが、途中でまた考えを變えた。『も
うとにかく遅い！ 力づくじゃ取り戻せない！』
「だつて、公爵もそれを望まれないだらう！」 慄然として、
ブルドフスキイはこう言つた。

ラゴージンとナスターシャは首尾よく時間内に停車場へ駆
けつけた。馬車を出たラゴージンは、もう汽車に乗ろうとす
る間に、通りかかつた一人の娘を引きとめた。娘は中古で
はあるが、見苦しからぬ、地味なマントを着て、薄絹の頸巾
を頭に被つていた。

「あなたのマントを五十留ではいかがです！」 彼はいきなり
娘に金をつきつけた。

相手がまだ合點が行かないで、あつけに取られているうち
に、彼はもう五十留を押し込んで、外套と頸巾を引つたくつ
た。そして、ナスターシャの肩と頭に、すつぽり着せて了つ
た。餘りに華麗な彼女の衣裳が目立つて、車中の注目を惹き
易いからである。娘はなぜこの人達が、何の値打もない自分
の古着を、あんな法外な値段で買い取つたか、すつと後にな
つてその譯を悟つた。

意外な事變に關する騒ぎは、非常な速度で教會に達した。

口論をしていた人たちのところへ近づいて事情を亂した。そ
して、懇ろにレーベジェフとケルレルを押しつけながら、露
臺の階段に立つた仲間の頭らしい、もう白髪になつた、肉づ
きのいい紳士の方につつましやかに向き直つて、どうか來訪
の榮を得たいと、懇懇に招き入れた。紳士は面くらつたが、
それでもやはり入つて來た。續いて、二人三人と上がつて來
た。結局、群集の中から七八人の訪問志望者が現われて、同
様に中へ入つたが、彼らはできるだけ打ちとけた態度を取ろ
うと努めていた。しかし、もうそれ以上の物ずきは出て來な
かつた。間もなく群集の中から、出しやばり者を非難する聲
が聞こえて來た。

入つて來た連中は、席を與えられて話を始め、茶の饗應
に與つた——しかも、それがひどく禮儀正しく、慣ましく行
われるので、入つて來た連中は、いささか面くらつた。いり
までもなく會話を浮き立たせ、『然るべき』話題に話を向け
ようとする試みも、少しはあつた。また不躰な質問も、『威
勢のいい』注意も少しは出た。しかし、公爵はそれに對して
きわめて淡泊に愛想よく、しかもそれと同時に、客の身分に
對する信用を表わしながら、自分の品格を落とさないように
應對したので、不躰な質問も自然と消えてしまつた。次第次
第に、會話は眞面目な調子を帯びて行つた。一人の客はふと
した言葉を捉えて、いきなり極度に憤慨して、自分はどうな
ことがあるうとも領地を賣らない、それどころか、時の到る
のを待つ事にする、『事業は金錢に優るものです。』『これが
あなた、わたしの經濟方針ですよ、ちよつとお知らせして置

ケルレルが公爵の方をさして進んでいる途中、まるで近づき
のない人が、大ぜい彼のところへ飛んで來て、根柢り葉柢り
訊ねるのであつた。騒々しい話し聲がやまなかつた。意味あ
り氣に首を振る者や、無遠慮に笑う者さえあつた。誰ひとり
教會を出ようとしなくて、花婿がこの報知を受け取る様子
を見ようと待ちかまえていた。彼は眞つ蒼になつたが、聞きと
れないくらいに聲で、『僕も心配してたんですよ。しかしまさ
かこんなことにならうとはおもわなかつた。』と言つただけ
で、靜かに報らせを受けた。やがて暫らく無言の後、こう附
け足した、『それにしても……あれの境遇になつて見たら……
：當然すぎることも知れませんが。』この註釋は、ケルレルが
後に、『無類の哲學』と評したほどのものである。公爵は見
たところ落ち着き拂つて、元氣よく教會を出た。少くとも、
多くの人がそり觀察して、後で話していた。彼は家へ歸つて
少しも早く一人きりになりたかつたのであろう。しかし、側
の者がそりはさせなかつた。

彼の後につづいて、招待客の誰彼が部屋へ入つて來た。そ
の中にはブチーティンと、ガザリイラ・アルドリオノキッチ
がいた。それから例の醫師も一しよであつた。この人も歸え
つて行くつもりはなかつた。それに家全體が、閑人の群れに
よつて文字通り包圍されていた。まだ公爵が露臺へ上がった
ばかりなのに、ケルレルとレーベジェフとが、幾人かのまる
で見知らぬ人たちと、烈しく口論している聲が聞こえた。そ
の相手の人たちは、見受けたところ、役人らしかつたが、ど
うしても露臺へ上がりたいと言つて、肯かなかつた。公爵は

「きまつた」と辯じた。この言葉は公爵に向けて發せられたので
公爵はレーベジェフが耳もとに口を寄せて、あの人は家も邸
も持つてはいませんが、領地なんぞがあつて堪まるもんですか、
と囁やくのを相手にしないで、熱心にその考えを賞讃した。

もう殆んど一時間ばかり経つた。茶も飲みつくした。茶が
済んで見ると、客人たちはもうこのうえ長居するのが、工合
悪くなつて來た。醫師と白髪の紳士は熱意をこめて公爵に別
れを告げた。一同も熱心に騒々しく挨拶し始めた。『落膽な
さることはありません。或いはこれが却つて幸いです。』
「知れませんが、云々。」といつた風の意見や希望も吐かれた。シ
ヤンペンをねだらうとする試みもあるにはあつたが、これは
客の中の目上の者が若い連中を抑えた。一同が散り散りにな
つた時、ケルレルはレーベジェフの方へ屈み込んで、こう言
つた、君や僕だつたら、大きな聲を出したり、蹴り合つたり
いいかげん恥じ曝しな眞似をして、警察の御厄介になるとこ
ろだつたよ。ところが、公爵はあの通り、新しい友だちを拵
えたじやないか、しかも立派な友だちだ。おれはあの人たち
を知つてる！』もうかなりに『御機嫌』になつているレーベ
ジェフは、溜め息をついて言つた、『賢く知慧ある者に隠し
て幼児に示し給う——おれはずつと以前に、あの方のことを
こう言つたが、今度はこうつけ足すよ——神はかの幼児を守
りて、深き淵より救い給いぬ。神とそのすべての使徒よ！』
ついに、十時半ごろになつて、公爵は一人きりになつた。
頭が痛い。最も遅く歸つたのは、式服を不斷着に換える手傳
いをしたコオリヤであつた。二人は懇ろに別れた。コオリヤは

今日の出来事をくどくどしく言わずに、明日は早い目に来ると約束した。後になつて、彼は——最後の別れの時にさえ、公爵が何にも打ち明けてくれなかつたところを見ると、公爵は自分にさえあの決心を隠していたのだといつた。間もなく家じゆうに、殆んど誰一人いなくなつた。ブルドフスキイはIPPORITTの家へ行つてしまひ、ケルレルとレーベジェフもどこかへ出かけて行つた。ただヴェーラー一人が暫らく部屋の中に居残つて、お祭りらしい飾りつけを、普段の體裁に手早く片づけていた。出がけに彼女はちよつと公爵の部屋を覗いた。彼はテーブルに兩肘ついて、頭をかかえながら、じつと腰をかけていた。彼女はそつと近づいて、公爵の肩にさわつた。公爵は訝かしげに彼女を眺めたが、一分間ほどは、氣がつかないらしかつた。やつと氣がついて、一切のことを思い合せて、急にひどく昂奮した。それにしても、結局、あすの朝の一番列車の間に合うように、七時に部屋の戸を叩いてくれと、一方ならず熱心に依頼しただけであつた。ヴェーラーは承知をした。

公爵は、誰にもこのことを言わないでくれと、一生懸命に頼み出した。彼女はそれを承知して、やがて出かけようと戸を開けたとき、公爵は三たび彼女を呼び止めて、兩手をとつて接吻した。それから、いきなり顔を接吻して、何か『並ならぬ』様子をしながら、『では、明日また!』と言つた。これは、少くとも、後になつてヴェーラーがいつたことである。彼女は極度に公爵の身の上を怖れながら立ち去つた。翌くる朝約束どおりに、七時すぎに公爵の部屋の戸を叩いて、ペテ

ルブルグ行の汽車はもう十五分しかないと知らせたとき、公爵がすっかり元氣づいて、微笑みすら浮かべながら、戸を開けたように思われたので、彼女は少し安心した。公爵は殆んど昨夜着換えをしなかつたが、しかし、寢るには寢たのである。彼の考えでは、その日のうちに歸れる筈であつた。して見ると、たしかに、公爵はペテルブルグへ出かけることを、この時ヴェーラーにだけは知らせることができ、またそうするのが當然だと考えたのであろう。

一時間の後には、公爵はもうペテルブルグへ来て、九時すぎには、ラゴージンの家の入り口でベルを鳴らしていた。彼は表の玄関から入つたのであるが、誰も長いことドアを開けてくれなかつた。やがて、ついにラゴージンの老母の住居のドアが開いて、小綺麗な年増の女中があらわれた。

「バルフェン・セミヨノキツチ様はお留守でございます。」と彼女はドアの中から知らせた、「どなたに御用で?」

「バルフェン・セミヨノキツチさんです。」

「お留守でございますよ。」

女中は人馴れぬ物珍らしそりな様子で、公爵を眺めた。「それじゃ、とにかく、教えてくれませんか、昨晩うちでおやすみになつたでしょうか?」そして……昨日はお一人でお

歸りでしたか!

女中は相も變らず相手を見つめながら、返事もしなかつた。

「では、あのひとしよじやなかつたですか、昨日、こちらに……晩方……ナスターシャ・フィリップポヴナさんは?」

「失禮でございますけど、あなたはどなた様でいらつしやいます?」

「レフ・ニコライキツチ・ムイシキン公爵です、僕らはごく懇意なんですよ。」

「お留守でございます。」

女中は目を伏せた。

「じゃ、ナスターシャ・フィリップポヴナさんは?」

「わたくし、そんなこと一寸も存じませんわ。」

「ちよつと待つて下さい、ちよつと、いつごろ歸りますか?」

「そんなこと、存じませんので。」

ドアが閉まつた。

公爵は、もう一時間して來ることに決めた。庭の方を覗いたら、門番の姿が見えた。

「バルフェン・セミヨノキツチさんは家かね?」

「はい。」

「一體、どうしていま留守だなんて言つたんだろう?」

「旦那の方で、そう言いましたか?」

「いや、お母さんの方の女中だ、バルフェン・セミヨノキツチさんの方で呼び鈴をならしたけど、——誰もあけてくれなかつた。」

「ひよつとしたら、お出かけかも知れませんかよ。」と門番は一人で決めた、「だつて、出先をおつしやらないんですからね。どうかすると、鍵まで持つて出ておいでになるので、三日も部屋をしめつ切りなことがありますよ。」

「昨日、家に居られたのを、君はたしかに知つてるんだろうね?」

「え、おいででしたよ。時たま、表からお入りになつても、見かけないこともありますよ。」

「ナスターシャ・フィリップポヴナさんは、昨日あのひとしよじやなかつたろうか?」

「それは存じませんな。あまりしよつちゆうお見えになる譯でもありませんからね。若しお見えになつたんなら分かりますよ。」

公爵は外へ出て、暫らく物思いに沈みながら、舗道を歩いてた。ラゴージンの住んでいる部屋の窓は、すつかり閉めてあつた。老母のいる方の窓は、殆んど全部が開いていた。それはよく晴れた暑い日であつた、公爵は往來を横切つて反對の舗道に出て、ふと立ちどまつて、もう一度、窓を見上げた。窓はすつかり閉まつているばかりか、殆んどどれもこれも白いカーテンを下ろしていた。

彼は一分間ほど立つていたと——不思議にも、不意に一つのカーテンの端が持ちあがつて、ラゴージンの顔がちらついたよりの氣がした。が、ちらついたと思つと、すぐにまた消えてしまつた。彼はほんの少しのあいだ待つた後、また出かけて行つて、ベルを鳴らして見ようかと思つたが、また考え

直して、一時間ほど延ばすことにした。「事によつたら、あれはただ蟲のせいかも知れないから……」

こういふ氣持になつたのは主として、つい先だつてまでナスターシャ・フィリップツボツナが問借りをしていた家のあるイズマイロフ聯隊跡へ、急いで行つて見る氣になつたからである。彼女が公爵の頼みによつて、三週間まえに、バヴロフスクから、もとの氣だてのよい知り合いを迎つて、イズマイロフ聯隊跡へ移つて来たことを、彼は知つていた。知り合いといふのは、歸になつた教師夫人で、家族もあり、尊敬すべき婦人であつたが、立派な道具つきの部屋を貸間にして、殆んどそれによつて暮らしを立てていた。ナスターシャ・フィリップツボツナが再びバヴロフスクへ移るとき、下宿を借りたままにして行つたといふことは、大いに有りうべきことである。少くとも、彼女が(勿論、昨夜ラゴージンがここへ連れ込んで一夜を明かしたといふこともあり)べきことである。公爵は辻馬車を雇つた。彼女が夜まつすぐに、ラゴージンの家へ乗りつける筈はないから、まずここから取りかかるべきである。――と、公爵は行く途すがら、ふと思いついた。「ナスターシャさんはあまりしよつちゆうお見えになる譯でもありません。」という門番の言葉も、胸に浮かんて来た。若し、そんなにしよつちゆうでないとする、今度のような時に、ラゴージンの家へ泊るいわれはないではないか? こういふ氣休めに勵まされて、公爵はついに生きた空もなく、イズマイロフ聯隊跡に着いた。すつかり驚ろいたことには、教師夫人のところでは、昨日

なかつたら、母親と二人でセミョーノフ聯隊跡に暮らしている、ナスターシャ・フィリップツボツナの知り合いの或る獨逸婦人のところへ行つて見ること、事によつたら、ナスターシャは昂奮に驅られて、身をかくそうとして、この婦人のところに泊まつたかも知れないからといふ話であつた。

公爵は、すつかり途方に暮れて、立ち上がった。この女たちは後になつて「すつかり眞つ蒼になりました。」といつた。事實、彼は足もとがたよりなかつた。やつと、彼は、女たちの早口な甲高い聲の間から、彼女たちが行動を共にしようとして申し合せて、彼に市内のアドレスを覚えてくれるようにといふのを聞き分けた。そういわれても、アドレスなどというものがなく分かつた。そこで婦人たちは、どこかの旅館に落ちつくようにすすめた。公爵はちよつと考へてから、以前の宿屋の番地を教えた。そこは五週間ほど前に發作が起こつたところであつた。

やがて彼は、再びラゴージンの家をさして出かけた。ところが、今度はラゴージンの方のドアを開けてくれなかつたばかりでなく、老母の方のドアさえも開けて貰えなかつた。公爵は門番をさがしに行つて、やつと庭を捜してあつた。門番は何か忙しそりにして、返事もろくにしてくれず、振り向いてくれなかつた。しかし、兎にも角にも、バルフェン・セミョーノフキツチは「朝早く家を出て、バヴロフスクへ出かけ、今日は家へは歸るまい」とのはつきりしたことを聞くことができた。

「じゃ、お待ちしよ。多分、夕方になつたら歸るでしよ。」

も今日も、ナスターシャ・フィリップツボツナのことを聞いたこともないといふ、公爵自身の來訪を、まるで奇蹟か何かのよりに迎えた。夫人の家の多人數の家族――いずれも女の子、十五から七つまで、年子ばかり――は、母親の後からぞろぞろと出て来て、口を開けたまま、彼を取り巻いた。その後からは、瘠せた黄色い顔の叔母さんが黒い頭巾をかぶつて出て来て、最後には、年をとつた祖母さんが眼鏡をかけて出て来た。教師夫人が、中へ入つて遊んで行くようにと、しきりにすすめるので、公爵もその通りにした。公爵にはすぐに察しがついた。つまり、この家の人たちに、彼の身分や、きのう結婚式が挙げられた筈だといふことはよく分かつていて、結婚のことや、今ごろ彼と一しよにバヴロフスクにいるべき管のナスターシャのことを、却つてこちらから訊ねるという不思議な話をこの人たちは根掘り葉掘り訊きたくてたまらないのに、そんな不躰なことのできないデリケートな氣持をもつて、そのだと推察したのである。彼は簡単に、大體の筋を物語つて、結婚についての一同の好奇心を満足させた。すると驚愕の聲や、嘆息や、叫び聲がおこつたので、彼はやむを得ず、言い残した殆んど全部のことを、もとより、大まかにではあつたが、話してやらなければならなかつた。

ついに、昂奮している賢明な婦人たちが相談の結果、先ず是非とも第一にラゴージンのところへ行つて、開けてくれるまで手をたたいで、彼から一部四件をはつきりと聞き取る必要だと決まつた。若し彼が不在か(これもはつきり突き止めなければならぬ)、或いは家にいても話してくれる氣が

「ところが、事によつたら、一週間もお歸りにならんかも知れませんが、何しろ、あの方のことですもの。」

「して見ると、やつぱり昨晚はここで寝んだんだね。」

「寝むのは寝んだんですが、……」
こんな譯で、何もかもが怪しく、氣味がわるかつた。門番がああ合間に、もう新しい命令を受けたといふことも大いにありうべきことだ。さつきは、おしやべりな位であつたのに、今はただ背を向けているのだ。それにしても、公爵は二時間ばかりしたら、もう一度、来て見て、必要があれば、張り番をしてほしいとまで決心したが、まだ獨逸婦人のところに一縷の望みが残つていたので、セミョーノフ聯隊跡へ車を飛ばした。

ところが、獨逸婦人はこちらのいふことを分かつてくれなかつた。口をすべらした二三の言葉によつて、この美しい獨逸婦人が二週間ばかり前に、ナスターシャと喧嘩をしたので、この頃では彼女の噂など何一つ聞かなくなり、今は一生懸命になつて、「たとい、あの女が世界中の公爵をみんなお婿さんに持つた」と聞かされても面白くも何ともないといふ氣持を相手に知らせようとしているのだと察しがついた。公爵は大いそぎで出て行つた。そのとき、ふつと、――彼女は、事によつたら、またあの時のように、モスクワへ逃げて行つて、ラゴージンも無論、その後を追つて行つたに相違ない、或いは一しよかも知れないといふ考へが胸にうかんで来た。「せめて、何かの手がかりを見つけたいものだ!」

それにしても、宿に落ちつかなければならぬことを思い出して、彼はリテナヤ通りへと急いだ。宿ではすぐ部屋をとつてくれた。給仕が何か召し上がりませうかと訊いたとき、彼はうっかりして、食べたいと答えたが、すぐに気がついて食事にまだ餘計な三十分を割かなければならぬのだと、ひどく自分で自分に腹を立てた。やつと後になつて、持つて来たものを食べないからといって、何も束縛される譯はないと気がついた。この薄暗く、息苦しい廊下にいると、奇妙な感じに充たされた。何かまとまつた考えを形づくろうとして痛ましい努力をする感じであつた。しかも、望みをかけている新しい考えというものが果して何であるかは、やはり洞察することはできなかつた。ついに彼は生きた心地もなく宿を出た。めまいがするとはいへ、——どこへ行つたらよいのか？ 彼はまたやラゴージンの家をさして、馬車を驅つた。

ラゴージンは歸つてはいなかつた。ベルを鳴らしても、ドアは開かなかつた。老母の方へ行つて、ベルを鳴らす。すると、開けるには開けたが、やはり、パルフェン・セミヨーナキツチは留守で、多分、三日くらいは歸るまいとのことであつた。公爵は相變らず人馴れぬ好奇心を寄せて、じろじろと見られるのでござまぎしてしまつた。門番は、今度は全く姿を見せなかつた。彼はさつきと同じように反對側の舗道へ出て、窓の方を見上げながら、惱ましい苦熱のなかを、半時間ほども行つたり來たりした。或いは、もつと歩いていたかも知れぬ。今度は何一つ動くものもなく、窓も開かなかつた。白いカーテンも、さゆらぎだにもしなかつた。ついに彼の腦

からと斷つたのに、よくも聞かないで、ポケットへ入れてしまつたという。

やがて、開け放した窓のそばに腰を下ろして、白墨でいっぱい書き散らしてある骨牌の卓子に眼をつけて、誰が骨牌をやつたのか？ と訊ねた。家の人たちは、ナスタシーシャは毎晩ラゴージンを相手に、『馬鹿』、『糺り札』、『粉屋』、『點とり』、『君の札』など、あらゆる方法で勝負をしていた、骨牌が始まつたのはごく最近のこと、バヴロフスクからペテルブルグへ移つて後のことであり、いつもナスタシーシャが退屈を訴えて、『あんたは毎晩じつと坐つていられるばかりで、何の話もできやしない』と、不平をいつてしよつちゆう泣いたので、その翌くる晩ラゴージンがいきなりポケットから骨牌をとり出したところ、ナスタシーシャが笑い出して、そこで勝負が初まつたのだ——と話した。公爵は、どこに使つた札がありますか？ と訊いた。が、骨牌は出て來なかつた。骨牌はラゴージン自身がポケットに入れて、いつも持つて來て、しかも毎日、一組ずつ新しいのを持つて來て、勝負がすむと、また持つて歸つてしまふのであつた。

婦人たちは、もう一度ラゴージンのところへ行つて、もう一度、少しはげしく戸を叩いて見るように、それも、直ぐにはなく、夕方にすること、『多分、何か分かるでしようよ』と公爵にすすめた。そのうちに、教師夫人自身は晩までに、何か分つてゐるかも知れないから、バヴロフスクのダリーヤのところへ行つて來ると申し出た。公爵に向かつては、明日は相談をしたいから、とにかく、晩の十時ごろに來てく

裡に、さつきのほただ蟲のせいだつたのだ、窓にしたところで、どう見てもあんなに曇り切つていて、永いこと洗つた様子もないから、たとい本當に誰かが硝子越しに覗いたとしても、見分けることは難かしい筈だ——という考えが浮かんで來た。こう考えてほつとしたので、彼はまたイズマイロフ聯隊跡へ出かけた。

そこではみんなが、彼を待ちうけていた。教師夫人はもう三四カ所もまわつて、ラゴージンの家へまで寄つて來たが、聲もなければ、そのけはいもなかつたといつた。公爵は黙々として聞き終ると、部屋へ入つて、長椅子に腰をおろし、何を相手か言つてゐるのか呑みこめない様子で、一同を見つめ出した。不思議なことに、彼は非常によく気がつくかと思つたと、また急に嘘かと思つほど、ぼんやりしてしまふのであつた。家じゆりの者が後になつて、『あの日一日、あの人は、あきれてしまふほど妙だつたわ。やつぱり、あの頃からもうその氣味があつたのよ。』と斷言したほどであつた。彼はとうとう立ち上がつて、ナスタシーシャ・フィリツボヅナの部屋を見せてくれと頼んだ。それは大きな、明るい、天井の高い二の部屋で、かなり立派な道具も並んでいて、少からず金もかかつてゐるらしかつた。後になつて、婦人たちの物語つたところによると、公爵は部屋の中のものをつつと檢分して、たが、ふとテンプルのうえに、圖書館から借り出した本——佛蘭西の小説『ボヴァリー夫人』が披いてあるのに目をとめて、あけてあつた頁をちよつと折つたと思つと、持つて行きたいから貸してくれるようにと頼んだ。その本は圖書館のだ

れと頼んだ。みんなに慰められたり、希望を與えられたりしたのにも拘わらず、彼は全くの絶望にとらえられた。彼はいい知れぬ悩みを懐きながら、とぼとぼと歩いて宿に辿りついた。夏の埃つぽく息苦しいペテルブルグは、まるで搾み木にかけるように、彼を壓えつけた。彼はむずかしい顔をした人や、酔つ拂いの群れの間を押し分けながら、何のあてもなく人々の顔を覗きこんだ。恐らく、必要以上の道を歩いたことであろう。自分の部屋へ入つたときは、もう殆んど日は暮れはてていた。彼は少し休んでから、すすめられたように、また、ラゴージンのところへ行こうと決心して、長椅子に腰をおろし、テンプルに兩肘ついて、物思ひに耽つた。

果して、どれほどの時間が経つたのか、何を考へていたのか、知る由もない。彼はいろんなことを怖れ、自分がひどい恐怖に襲われているのを、胸が疼くほど痛切に感ずるのであつた。ヴェーラ・レーベヅエワの佛が頭に浮かんだ。やがて多分レーベヅエフはこの問題について、何かしら知つてゐるだらう、たとい知らないにしても、自分より早く樂に探り出せるだらうという氣がした。それから、イッポリツトのところへラゴージンが往來することなどを思い出した。更にまた當のラゴージンのこと、——先だつて葬式のとときのラゴージンそれから公園で會つた時のラゴージン、それから今度は不意にその廊下の片隅にかくれて、双物を手に待ち伏せしたときのラゴージンが胸に浮かんで來た。彼の眼、あのとき、闇の中で自分を見ていた眼が思ひかえされた。公爵は身ぶるいした。ついでさきほど出よう出ようとしていた考えが、今や忽然

として胸裡に浮かんだのである。

それは大體こんなことであつた、——若しもラゴージンがペテルブルグにいるとすれば、たとえ一時身をかくそうともついに必らず公爵のところへやつて来るに相違ない。善い目論見をもつて来るか、悪い目あてがあつて来るか、それは分からぬが、あの時のようにして出て来るに相違ない。少くも、若しも、ラゴージンが何かのほずみで、公爵のところへ来る必要が起れば、この宿屋よりほかに来るところは無いのだ。彼はアドレスを知らない筈だ。従つて公爵は以前の宿屋に泊つてゐるだろうと、考えるにきまつてゐる。少くとも、ここへ訪ねて来るに相違ない。若し、非常な必要があるとするれば、果して、非常な必要があるかも知れない、その邊のところは知る由もないのである。

彼はこういふ風に考えていたのである。そうして、この考えが、どうした譯か、全くあり得べきことのように思われた。彼が少し深くこの考えをつきつめて行つて、『なぜ自分が急にラゴージンにとつて必要になるのか？ またなぜ自分たちがどこのつまり、意氣相投するわけにゆかないのか？』というようなことになる、彼にはどうしても、はつきりした説明がつかなくなつたであらう。しかも、この考えは重苦しいものであつた。『若しも、あの男がいい氣持で居られたらやつて来ないだろう。』と公爵は考えつづけた。『が、もし、工合が悪かつたら、すぐやつて来るだろう。ところで、あの男はきつと工合がよくないに相違ない……』勿論、こう考えた以上は、自分の部屋でラゴージンを待つた。

自分の前の方ばかり見つめて、機械的に用心ぶかく、人々に道を譲りながら、行き合ひ人の顔さえも見ずに歩いて行つた。

「一體、君はどうして宿で僕の部屋を訊いてくれなかつたんだ……あすこにいたのなら？」いきなり公爵は訊ねた。

ラゴージンは立ちどまつて、相手を眺め、ちよつと考えたが、何を訊かれたのか呑み込めなかつたらしく、

「おい、レフ・ニコライキッチ君、君はここを眞つ直ぐ歩いて、家まで行くんだ、いいかえ？ 俺は別の方を通つて行く。だが、氣をつけて、一しよに行くようにするんだ……」

こういつて、彼は往來を横切つて、向う側の舗道へ行つて、公爵が歩いてゐるかどうかと振りかえつたが、彼はほんやり佇んで、眼を皿のようにして自分の方を眺めてゐるのを見ると、ガローホワ通りの方へ手を振つて、歩き出した。絶えず公爵を振り返つて見て、ついて来いと手招きした。公爵がこちらのいうことを悟つて、反対側からついて来るのを見て、彼は明らかに元氣づいてゐるらしかつた。——ラゴージンは誰かを偵察して、途中でおとすまいとしてゐる。だから向う側へ渡つて行つたのだ——という考えが公爵の頭に浮かんだ。『しかし誰に眼をつけてゐるのか、なぜ言わないんだらう？』こうして二人が五十歩ばかり歩いたとき、公爵はどうしたところか急に慄え出した。ラゴージンは前ほどではないが、やはり振りかえつて見るのを止めなかつた。公爵はとうとう辛抱し切れなくなつて、彼を手でさし招いた。相手はすぐに往來を横切つて、彼の方へ寄つて來た。

が當然であつた。しかし、彼はこの新しい考えに堪えられなかつたらしく、いきなり跳びあがつて、帽子をつかんで、表へ駆け出した。廊下はもう殆んどすつかり暗くなつてゐた。

『若しも、あの男が今その隅から急に出て来て、階段のところで呼びとめたらどうだろう？』例の所へ近づいたとき、ちりとこんなことが閃めいた。が、誰ひとり出ては來なかつた。彼は門の方へ下りて行つて、舗道へ出たが、日の入りとともに往來へ吐き出された怖ろしい人の群れに驚ろいた（夏休みの頃のペテルブルグではいつものことである）。やがてガローホワ通りをさして歩き出した。宿から五十歩ばかりの四辻へ來たとき、人込みの中で誰かがいきなり彼の肘にさわつて、耳もとで囁やいた。

「レフ・ニコライキッチ君、あとからついて來たまえ、話があるんだ。」

これはラゴージンであつた。

奇妙なことに、公爵は急にうれしさのあまり、舌もつれしながら、殆んど一つの言葉をさえもしまいまで言い切らないくらいにして、いま、宿屋の廊下でどんなに待つてゐたかという話を話し出した。

「おれはあすこにいたんだ。」思いがけなくラゴージンが答えた。「さあ、行こう。」

公爵はこの答に驚ろいたが、彼の驚いたのは、少くとも二分ばかりして、いろんなことを思い合わせた時のことであつた。この答を、よく考えて見ると、彼は愕然として、ラゴージンを覗き込み出した。相手は殆んど半歩ほど先へ出て、

「ナスターシャ・フィリツボヰナは君の家にいるのかえ」

「いるよ。」

「さつきカーテンのかげから僕を見たのは、君かえ？」

「うむ……」

「一體、どうして君が……」

しかし、公爵は、この先どう訊いていいのか、どんな風に質問の覺をつけたらいいのか分からなかつた。そのうえ動悸がはげしくて、物をいうのも難かしかつた。ラゴージンもやはり黙り込んで、以前と同じように、つまり、物思わしげな風で、彼を見つめていた。

「じゃ、俺は行くよ。」急にまた渡つて行くような氣はいを見せ、彼はこういつた。「君は勝手に歩いてゆけよ。俺たちは往來を別々に行くことにしよう、……その方がいいからな……別々の側を通つてだ……いいだろう。」

ついに二人が、別々の舗道からガローホワ通りに折れてラゴージンの家に近づきかかつたとき、又しても公爵の足はふらふらし出して、殆んど歩くことさえ難かしくなつた。もう晩の十時ごろであつた。老母の方の窓は、さつきと同じように開いてゐたが、ラゴージンの方のは閉めたままで、薄ら明りに、白いカーテンが一そうつきりと浮き立つかのように見えた。公爵は反対側の舗道から家に近づいた。ラゴージンは向う側の歩道から、表の段々へあがつて、彼を手招きしていた。公爵は通りを越えて彼のいる段々の方へやつて來た。

「俺のことはいま門番さえ知らないんだよ。歸つて來たつて

ことをな。俺はさつきバツロフスクへ行くつて言つたのさ。おつ母さんにもそう言つといた。」と彼はするそらな、殆んど満足らしい微笑みを浮かべて囁やいた。「俺たちが入つても、誰も聞きつけやしないよ。」

彼の手の中にはもう鍵があつた。階段を上がりながら、彼は後ろを振りかえつて、そつと歩くようにと公爵を脅やかす眞似をして、静かに自分の部屋へ通ずるドアを開けて、公爵を中に入れて、その後から用心ぶかく入つて、戸締りをし、鍵をポケットの中へしまひ込んだ。

「さあ、行こう。」と彼は小さな聲で囁やいた。

彼はまだリテイナヤ通りを歩いてゐる頃から、小さな聲で話をしていた。表面はいかにも落ちつき拂つてゐるが、何か心の中には深い不安を懷いてゐるらしかつた。書齋のすぐ手前の廣間へ入つたとき、彼は窓に近づいて、祕密らしく公爵をさし招いた。

「さつき君がベルを鳴らしたとき、俺はすぐにてつきり君だろつと思つたよ。それで、爪立ちしてドアの傍へ寄つて聞いてみたら、君がバフヌーチェヅナと、しきりに話してゐるじやないか。ところが、俺はもう夜の明けないうちに、言いつけておいたんだよ、若し君か、又は君の使いが、誰にもしろここへ訪ねて来たら、どんなことがあつてもいけなないと。若し君が自分で来たら、なおさら氣をつけろつて、名前まで教えといたんだ。それから、君が出て行つたあとでふと考えたんだ、若しまだ表に立つて、こちらを見たり、往來から見張りでもしていたらと、俺はこの窓の傍へ寄つて、そつとカー

びてゐるが、何となく、じつと握つてゐた。

「蠟燭をつけたら？」公爵はいつた。

「いや、いらん。」とラゴージンは答えて、公爵の手をとつて、テーブルの方へ引き寄せ、自分も公爵とさしむかいに坐つて、殆んど膝が觸れ合うほどに、椅子を引き寄せた。二人の間には小さな圓テーブルが、少しわきへ寄つて、置かれていた。

「坐りたまえ、一寸ここにいよう！」無理に坐らせようとすゐるかのうちに、彼はいつた。一分間ほど、二人とも黙つていた。「俺は、君があゝの宿屋に落ちつくだろうとは分かつていた。」どうかすると大事な話に入る前に、直接の問題の關係のない、わき道へ外れた細かな話から切り出す人がよくあるが、彼の切り出し方も、その通りであつた。「俺は廊下へ入つたとき、ひよつとすると、君も俺と同じように、今俺をじつと待つてるかも知れないと、ふつと思つたよ。教師夫人のところへ行つたかえ？」

「うむ。」公爵は胸の動悸がはげしく、やつとの思いでこれだけのことを言つた。

「俺はそのことも考えたよ。まだいろいろ話があるだろうとそう思つたよ。それから、こんなことも考えた。公爵をここへ引つ張つて来て泊めてやるよ、今夜いつしよに居るよりに……」

「ラゴージン！ ナスターシャ・フィリップボヅナさんはどこにいるんだえ？」不意に公爵は囁やいて、手足をふるわせながら立ち上がった。

テンをめくつて見ると、君がそこに立つていて、まともに俺の方を見てるじやないか……まあ、こつう譯だつたんだ。」

「一體、どこに……ナスターシャ・フィリップボヅナさん？」と公爵は息を切らしながら言つた。

「あれは……ここにゐるよ。」いささか答えをためらうかのうちに、ラゴージンはゆつくりと答えた。

「一體、どこに？」

ラゴージンは眼を上げて、じつと公爵を見つめた。

「さあ、行こう……」

彼は相變らず囁やくよつな聲で、依然として妙に物思わしげに、急がずに、ゆつくり口をきいた。カーテンのことを話した時でさえも、話は全くむき出しであつたが、その話によつて、別なことを言おうとしてゐるらしかつた。

二人は書齋へ入つた。この部屋には、さきに公爵が訪ずれたとき以來、幾分の變化が生じていた。部屋全體を横切つて緑いろの絹のカーテンが引かれて、その兩端が出入り口になり、これがラゴージンの寢臺が置いてある部屋と、書齋との仕切りになつてゐた。重々しいカーテンはずつかり下ろされて、出入り口もふさがつてゐた。部屋の中はひどく暗かつた。ペテルブルグの夏の『白夜』は、暗くなりかかつてゐた。若しも、満月の夜でなかつたら、窓かけをおろしたラゴージンの暗い部屋では、物の見わけも容易につかなかつたであらう。しかし、充分に、はつきりと行かないまでも、どうやら顔ぐらゐは見分けられた。ラゴージンの顔は、いつものように蒼白かつた。じつと公爵を見ている眼は強い光りを帯

ラゴージンも席も立つた。

「あすこだ。」とカーテンの方を顧でしやくつて、囁やいた。

「眠つてるの？」と公爵が囁やいた。

又もやラゴージンは、さつきと同じように、しげしげと公爵を見つめた。

「じゃ、もう行つて見よう！……但し、君は……いや、まあ行こう。」

彼はカーテンをもちあげて、立ちどまり、又しても公爵の方を振り向いた。

「入つて！」彼は、さきに行くよつと、カーテンの向うを顧でしやくつて見せた。

公爵は入つて行つた。

「ここは暗い。」と彼はいつた。

「見えるよ！」ラゴージンが咳やいた。

「僕はろくに見えないが、……あれは寢臺だな。」

「もつと近くへ行つて見な。」とラゴージンは低い聲ですすめた。

公爵は前へ一步、また一步、そして立ちどまつた。彼はじつと佇つたまま、二分のあいだ、中を窺つた。二人はそのあいだ、寢臺のそばに佇んで、何一つ言わなかつた。公爵の胸ははげしく動悸をうつて、死んだやうな室内の静寂のうち、聞こえるかとさえも思われた。しかしよりよる闇に馴れて寢臺がすつかり見分けられるよつになつた。寢臺の上には誰かが眠つてゐる。静かな眠りについてゐる。かすかな衣ずれの音も、かすかな呼吸づかいも聞こえぬ。眠つてゐる人は、頭

から白い敷布をかぶっているが、手足はどうにもぼんやりして見分けがつかない。ただ寢臺の上が高くなっているので、人が身をのびして寝ているというだけでしか分からない。

あたり一面、寢臺の上にも、足もとにも、寢臺のすぐわきの安樂椅子にも、床の上にさえも、ぬぎすてた衣裳、贅澤な白絹の服や、造花やリボンなどが、亂雑に散らばっている。枕もとの小机には、はずしたまま、投げ散らしたダイヤモンドが、きらきら光っている。足もとには何かレースらしいものがかたまりにしてかきまぜられているが、その白く浮いているレースの上には、敷布の下から覗いているあらわな足の先が見分けられた。公爵はじつと見つめていたが、見つめれば見つめるほど、部屋の中がいよいよ死んだように、いよいよ静かになるのを感じた。ふつと、眼をさました一匹の蠅がうなりを立てて、寢臺の上を飛びすぎると、そのまま枕もとのところで、ひっそりしてしまった。公爵は身ぶるいした。「出よう。」彼の手にラゴージンがさわった。

二人はそこを出て、またもとの椅子に差し向いで腰を下ろした。公爵は次第に激しく身をふるわせながら、物問いたげな眼を、ラゴージンの顔から放さなかつた。

「君は何だ、そんなに慄えてるんだ。」ついにラゴージンが言い出した。「まるで、ひどく體の加減を悪くしたときのようにだ、覚えてるだろう、あのモスクワでさ？ でなけりやあの發作の前かな。本當にそうなつたら、君をどうしたらいいのか、分からない……」公爵はその言葉の意味を悟るうとして、一生懸命になつて

やはり物問いたげな眼で、耳を傾けた。「あれは君かえ？」頰でカーテンの方をしゃくりながら、やつと彼はいつた。

「うん……そうだ……」とラゴージンは囁やいて、眼を伏せた。

二人は五分間ほど口を噤んでいた。

「だから」ラゴージンは言葉の切れていたことに、気がつかないらしく、出しぬけに話をつづけた。

「だから、もし病氣がな、發作が起こつて、どなり立てたら、往來の方からか、家の方から、誰かが聞きつけて、ここに人が泊まつてゐるつてことを察するだろう。そして、戸を叩いて入つて来る……だつて、みんなが俺は留守だと思つてゐるんだから。だから、俺は往來からも、家からも気がつかないように蠟燭もつけなかつたんだ。それに俺が留守のときは、自分で鍵を持つて出るもんだから、三日も四日も部屋を片づけに入る者もないんだ。これが俺のところのきまりなんだ、だから、今も、俺たちが泊まつてことを知られないように……」

「ちよつと待つてくれ」と公爵はいつた、「さつき僕は門番にも女中にも、ナスターシャさんが泊まらなかつたかと思つて見たんだよ。して見ると、みんな知つてるんだね。」

「君が訊いてたのは知つてるよ。俺はバフヌーチェヅナにそいつたんだ。昨日ナスターシャ・フィリップツナさんがちよつと寄つたけれど、すぐその日のうちにバヴロフスクへ立つてしまつて、俺のところには十分間しか居なかつたつて、

泊まつたつてことは知らないんだ。——誰も知らない。昨日俺たちは、いま君と一しよに入つたと同じように、そうつと入つたんだ。あれはそうつと入るのを厭がるだろう、と来る

途中で肚ん中では思つたんだよ、——とても、とても！ 小さな聲で話しをする、爪立ちをして歩く、音がしないように着物の裾をつまんで持ち上げる。階子段では、あれの方が却つて指を立てて、俺を脅やかす眞似をするじやないか——それは君を怖れていたからだ。汽車の中では、まるで氣ちがいのようだつた。やつぱり怖ろしいからだ。ここへは、自分で望んで泊りに来たんだ。初め、俺は教師夫人のところへ連れて行こうと思つたんだが、——とてもとても！ 『あそこへ行けば、公爵が夜の明けないうちに探し出すから、お前さんに匿まつて貰おう。明日は夜の明けないうちにモスクワへ出かけて、それからオリョール市の方へ行くから……』つて言うんだ。床に入つてからも、しきりにオリョールへ行きたいといつてたよ……」

「ちよつと待つてくれ、パルフェン君はいまどうするつもりなんだえ？」

「そんなに、慄えてばかりいては面くらつてしまふよ、今夜は二人で一しよにここへ寢よう。寢臺はあれよりほかになくから、俺はこう考えたんだ、兩方の長椅子からクッションをとつて、そのな、カーテンのそばに、一しよに寝るように君の分とを並べて敷こうつて。だつて、若し人が入つて来てさがし出したら、あれはすぐに見つかつて、運び出される。俺は調べられて、おれだという。そうしたら、すぐに引つ張

「だつて、君、臭いがするんだもの。ところで、あれはじつと横になつてゐる……明け方になつて、明るくなつて来たか

「あれは君かえ？」頰でカーテンの方をしゃくりながら、やつと彼はいつた。

二人は五分間ほど口を噤んでいた。

「だから」ラゴージンは言葉の切れていたことに、気がつかないらしく、出しぬけに話をつづけた。

「だから、もし病氣がな、發作が起こつて、どなり立てたら、往來の方からか、家の方から、誰かが聞きつけて、ここに人が泊まつてゐるつてことを察するだろう。そして、戸を叩いて入つて来る……だつて、みんなが俺は留守だと思つてゐるんだから。だから、俺は往來からも、家からも気がつかないように蠟燭もつけなかつたんだ。それに俺が留守のときは、自分で鍵を持つて出るもんだから、三日も四日も部屋を片づけに入る者もないんだ。これが俺のところのきまりなんだ、だから、今も、俺たちが泊まつてことを知られないように……」

「ちよつと待つてくれ」と公爵はいつた、「さつき僕は門番にも女中にも、ナスターシャさんが泊まらなかつたかと思つて見たんだよ。して見ると、みんな知つてるんだね。」

「君が訊いてたのは知つてるよ。俺はバフヌーチェヅナにそいつたんだ。昨日ナスターシャ・フィリップツナさんがちよつと寄つたけれど、すぐその日のうちにバヴロフスクへ立つてしまつて、俺のところには十分間しか居なかつたつて、

泊まつたつてことは知らないんだ。——誰も知らない。昨日俺たちは、いま君と一しよに入つたと同じように、そうつと入つたんだ。あれはそうつと入るのを厭がるだろう、と来る

途中で肚ん中では思つたんだよ、——とても、とても！ 小さな聲で話しをする、爪立ちをして歩く、音がしないように着物の裾をつまんで持ち上げる。階子段では、あれの方が却つて指を立てて、俺を脅やかす眞似をするじやないか——それは君を怖れていたからだ。汽車の中では、まるで氣ちがいのようだつた。やつぱり怖ろしいからだ。ここへは、自分で望んで泊りに来たんだ。初め、俺は教師夫人のところへ連れて行こうと思つたんだが、——とてもとても！ 『あそこへ行けば、公爵が夜の明けないうちに探し出すから、お前さんに匿まつて貰おう。明日は夜の明けないうちにモスクワへ出かけて、それからオリョール市の方へ行くから……』つて言うんだ。床に入つてからも、しきりにオリョールへ行きたいといつてたよ……」

「ちよつと待つてくれ、パルフェン君はいまどうするつもりなんだえ？」

「そんなに、慄えてばかりいては面くらつてしまふよ、今夜は二人で一しよにここへ寢よう。寢臺はあれよりほかになくから、俺はこう考えたんだ、兩方の長椅子からクッションをとつて、そのな、カーテンのそばに、一しよに寝るように君の分とを並べて敷こうつて。だつて、若し人が入つて来てさがし出したら、あれはすぐに見つかつて、運び出される。俺は調べられて、おれだという。そうしたら、すぐに引つ張

「だつて、君、臭いがするんだもの。ところで、あれはじつと横になつてゐる……明け方になつて、明るくなつて来たか

「あれは君かえ？」頰でカーテンの方をしゃくりながら、やつと彼はいつた。

「うん……そうだ……」とラゴージンは囁やいて、眼を伏せた。

二人は五分間ほど口を噤んでいた。

「だから」ラゴージンは言葉の切れていたことに、気がつかないらしく、出しぬけに話をつづけた。

「だから、もし病氣がな、發作が起こつて、どなり立てたら、往來の方からか、家の方から、誰かが聞きつけて、ここに人が泊まつてゐるつてことを察するだろう。そして、戸を叩いて入つて来る……だつて、みんなが俺は留守だと思つてゐるんだから。だから、俺は往來からも、家からも気がつかないように蠟燭もつけなかつたんだ。それに俺が留守のときは、自分で鍵を持つて出るもんだから、三日も四日も部屋を片づけに入る者もないんだ。これが俺のところのきまりなんだ、だから、今も、俺たちが泊まつてことを知られないように……」

「ちよつと待つてくれ」と公爵はいつた、「さつき僕は門番にも女中にも、ナスターシャさんが泊まらなかつたかと思つて見たんだよ。して見ると、みんな知つてるんだね。」

「君が訊いてたのは知つてるよ。俺はバフヌーチェヅナにそいつたんだ。昨日ナスターシャ・フィリップツナさんがちよつと寄つたけれど、すぐその日のうちにバヴロフスクへ立つてしまつて、俺のところには十分間しか居なかつたつて、

「つまり、怖ろしいからだ、それは僕も知っている、……怖いのがやんだら立つよ……」

「じゃ、俺が二人の床をとるから、ちよつと待つて。そして、君も寝るといい……俺も君と一しよに寝るから、……そして聞きたいもんだ……何しろ、君、俺はまだ知らないんだからな、……俺はな、まだすつかりは知らないんだから。一つお前に豫めいつておくよ。お前がこのことを前もつて、すつかり心得ておくよにな！」

こんな曖昧なことを呟きながら、ラゴージンは床を伸べにかかった。明らかに、この床はもう朝の中から肚の中で考えていたらしかった。前の晩は長椅子の上で寝たのであるが、長椅子の上には二人で並んで寝る譯には行かない。しかも、彼は今どうしても並んで寝たいと思つていたのである。そこで、彼はいま一生懸命に、二つの長椅子から大きさとどりのクッションをとつて、部屋の端から端へと横切つて、カーテンの入り口のすぐ傍まで引きずつて来た。どうかこうかして、寢床が出来た。彼は公爵に近づいて、歡喜にあふれた様子で、優しくその手を取り、立ち上がらせて、寢床の方へ連れて行つた。しかし、公爵は、自分で歩けるということが分かつて来た。つまり、『怖ろしいのがやんだ』のであつた。それにしても、彼は相も變らず僕えていた。

「何だな、お前」公爵を左側のいいクッションの方へ寝かして、自分は右側の方へ着換えもしないで長くなつて、頭を両手で支えながら、不意にラゴージンはいい出した。「今夜はずいぶん暑いから、匂いがするに決まつてる……。窓を明け

「一度もない。このナイフのことで君に話せるのは、これくらいのものだよ、レフ・ニコライキッチ君」しばらく口を噤んだから、彼はこう附け足した。「俺は今朝こいつを、鍵のかかつた抽斗の中から出したんだ。何しろ事の起こりは、朝の三時すぎだつたからな。こいつはやつぱり、俺の本の中にはさんであつたんだ、……で……で……で、俺の不思議でたまらないのはな、ナイフがまるで……七センチ……九センチぐらい……左の乳の下に突き通つたのに……血はみんな、そりだ……小匙に半分ぐらい肌着にこぼれたきりで、それつきり出ないんだ……」

「それは、それは、それは」公爵は急に怖ろしく昂奮しながら、立ち上がった。「それは、それは僕知つてる、それは僕は讀んだことがある……それはね、内部出血つていうんだよ……時によると、一滴も出ないことがあるそりだ。それが若し眞すぐに心臓に當つたら……」

「ちよつと、聞こえるかい？」と急にラゴージンはさえぎつて、怯えたかのように床の上に中腰になつた、「聞こえるかい？」

「いや！」と公爵は相手の顔を見ながら、やはり早口に、怯えたように言い出した。

「歩いてる！ 聞こえるかい？ 廣間を……」

二人は耳をすまし始めた。

「聞こえる。」と公爵はしつかりと囁やいた。

「歩いてるだらう？」

るのは怖いし……ところが、おつ母さんの方に花をさしてある花瓶があるんだ。たくさん花が挿してあつて、とてもいい香いがするんだ。だから俺はそいつを持つて来ようかと思つたんだが、パフメーチェヴナに氣づかれそうなんだよ……あの女はずいぶん物好きなやつだからな。」

「そり、物好きな女だね。」と公爵は賛成した。「買つて来るかな、花東や花であれの體をすつかり埋めてやろうかな？ でも、可哀そりになるような氣がするんだ、花の中なんかで！」

「ね……」と公爵は訊いたが、何を訊く筈だつたか、どう考えて見ても、すぐに度忘れしてしまふやうに、「ね、一つ訊きたいことがあるんだ、君は何であれを？……ナイフでか？ あの例の？」

「うん、そりだ……」
「ちよつと待つてくれ！ 僕は一つ君に訊きたいことがあるんだ、……僕はいろんなことを聞かして貰いたいんだ、一部四什、だがねえ、君、いつそのこと、最初から、ずつと最初から話してくれないかな。君は僕の結婚まぎわに、式のまぎわに、教會の入口で小刀でもつて、殺すつもりだつたのかえ？……そんなつもりだつたのかえ、どうだえ？」

「そんなつもりだつたか、どうだか知らない……」とラゴージンはいささかこの問いに驚ろいて、その意味が合點のゆかないような顔をして、そつて答へた。
「パヴロフスクヘナイフを持つて来たことは、一度もないのかね、？」

「戸を開めようか。どうしようか？」

「閉めな……」

戸は閉められた。二人は又もや横になつた、永いこと口を噤んでいた。

「ああ、そりだ！」又もやある一つの考えを捉えたらしく、またそれを失くしては大變だというやうに、床の上に起き上がりさえもして、公爵は以前のやうに昂奮して、急にせかせかした聲で囁やいた。「そりだ……僕は訊きたいと思つてたんだが……あの骨牌は！ 骨牌は……君はあれと骨牌をして遊んだじやないか？」

「うん」暫らくの沈黙ののち、ラゴージンはこりいつた。

「どこにあるの……骨牌は？」

「ここにあるよ、……」前よりもつと長く黙つていたが、やがてラゴージンは口を切つた、「これだよ……」

彼は前に使つた骨牌を紙につつんだのを、ポケットから取り出して、公爵の方へ差し出した。公爵はそれを受け取つたが、いかにも腑に落ちないらしかった。新しい、物悲しく佗びしい感情が、彼の胸を壓しつけた。彼は急に自分がこの瞬間、いや、それよりもずつと前に、いわなくてはならないことをいわず、しなくてはならないことをしなないでいるのを感じた。それにまた、自分が手にもつて、非常に悦んでいゝる。この骨牌、これも今は全く何の役にも立たないのだと悟つた。彼は立ち上がつて両手を拍つた。ラゴージンは身動きもせず横になつたまま、相手の言葉も聞かず、動作も見えていないらしかった。しかも、その眼は闇のうちに輝やいて

大きく見開いたまま、ぼんやりとすわつてゐる。三十分ほど経つた。すると、いきなり、ラゴージンは、大きな聲でぶつきら棒に叫んで、聲を立てて笑い出したが、さつき小聲で話さねばならぬといつたことを、すっかり忘れてはててゐるらしかつた。

「あの士官を、あの士官を……覚えてるかい、いつかあれが音楽堂で士官をなぐつたらう、覚えてるかい、ははは！ それから候補生が……候補生が……飛び出したつげな……」
公爵は今更のように愕ろいて、椅子から跳び上がった。ラゴージンが静かになつたとき（彼は急に静かになつたのである）、公爵はそつと屈みこんで、そのわきに並んで腰をおろし、ひどく胸をわななかせて、重苦しげに、息をつきながらしげしげと彼を見まわし始めた。ラゴージンはその方へ首も向けずに、まるで彼のことなどすっかり忘れてしまつたかのようにも見えた。公爵はじつと見つめながら、待つていた。時は過ぎて、夜が白みかかつた。ラゴージンは時おり出しぬけに、聲高らかに、鋭い調子で、とりとめもないことを口走り出して、叫び聲を立てたり、笑つたりし始めた。そんなとき公爵はふるふる手をさしのべて、そつと彼の髪に觸つたり、頭や頬を撫でたりした。……それよりほか、彼はどうする事もできなかつたのである！ 彼自身もまた慄え出してまるで急に足を取られたかのようなであつた。何かしら全く新しい感じが、限りも知れぬ哀愁をもつて、彼の心を締めつけるのであつた。やがて、夜はすつかり明け放れた。ついに彼は、恰も全く力がつきて、絶望の極に達したかのように、クッショ

ンの上に横になつて、蒼白く、じつと動かぬラゴージンの顔に、自分の顔を押しつけた。彼の眼からはラゴージンの頬へ涙が落ちるのであつた。しかも、公爵は恐らく、もうそのときには自分の涙を感じるほどの力もなく、そんなことには全く気がつきもしなかつたであらう……
少くともそれからかなり時間が経つてのち、戸を開いて大ぜいの人が入つて来たとき、人殺しは全く人事不省に陥り、熱病の状態になつていたのである。公爵は床の上じつと坐つて、傍近く寄り添いながら、病人が叫び聲や讒言を發する度ごとに、大急ぎでふるふる手を差しのばして、恰も彼を愛撫し宥めるかのように静かに頭や頬を撫でていた。しかも、彼はすでに何を訊かれても分からずに、自分の周圍にいる人たちさえも見分けがつかなくなつた。若しもシュネイデル自身がいま瑞西から出て来て、もと自分の生徒であり、患者であつたこの人を見たならば、瑞西における治療の最初の年に、どうかすると公爵が陥ることあつた状態を思いおこして、あの時と同様に手を振つて、こういつたに相違ない「白痴だ！」

12

終局

教師夫人はバヴロフスクへ駈けつけると、直ちに昨日からすつかり體の調子をこわしているダーリヤ・アレクセイヴナのところへ現われて、自分の知つてゐることを何もかも物語

つて、彼女を徹底的に愕然たらしめた。二人の女は取りあえず、レーベジェフに渡りをつけることにした。彼もまた下宿人の友だちとして、また家主として、やきもきしてゐたのであつた。ヴェーラ・レーベジェフは知れる限りのことを報告した。三人はレーベジェフの勧めに従つて「起こるべき可能性の充分にある」ことを一刻も早く未然に防ぐために一しよにペテルブルグへ出向くことに決めた。かくの如くにして、翌くる朝の十一時ごろ、ラゴージンの寓居は、警察官とレーベジェフと、二人の女、離れに暮らしてゐるラゴージンの弟のセミヨン・ラゴージンなど立ち會いのうえで開かれることになつたのである。この一件の成功に最も與つて力があつたのは、昨日の夕方、バルフェン・セミヨヌキツチ(ラゴージン)がいかにもこつそりらしく入るところを見たという門番の注進であつた。この注進があつたので、ベルを鳴らしても開かなかつたドアを、人々はもう疑念に惑わされることなく、叩きこわしたのであつた。

ラゴージンは二カ月というものの、脳膜炎にかかつて弱り切つてゐたが、それが癒るや否や、直ちに豫審にかけられた。彼は一切のことを、直截に、的確に、全く満足に申し立てた。その結果として、公爵は最初から免訴となつた。ラゴージンは裁判の間じゆう、黙りがちであつた。このたびの犯罪はすでに犯罪のかなり前から、敷え切れぬほどの悲しみのために起こつた脳膜炎のもたらしたものであると、明瞭に、論理的に論證した敏腕で雄辯な辯護士に對しても、彼は決して異議を申し立てなかつた。しかも、かような意見を裏書きするよ

うなことを自分から附け足すよりなこと全然なく、以前のやうに、はつきりと、正確に、犯罪に關係のある極めて細かな事情までも思い起こして、これを確認するばかりであつた。彼は情狀を酌量されて、十五年のシベリヤ流刑を申し渡されたが、彼は物すごい顔をして、言葉もなく、「物思わしげに」判決をしまいまで聴いてゐた。彼の莫大な財産は、初めの道樂に使つた比較的わずかな額を除いて、そのまま弟のセミヨン・セミヨヌキツチのものとなり、弟は大満足の状態であつた。ラゴージンの老いたる母親は相變らずこの世に生きていて、時おりは愛し子のバルフェンを思い起してゐるらしいが、その邊のところは、はつきりしてゐない。幸いにも、彼女は悲愴なわが家を訪れた恐怖を身に覺えずに濟んだのであつた。

レーベジェフ、ケルレル、ガニーヤ、ブチーツイン、そのほかこの小説に出て来た多くの人物は、やはり元どおりの暮らしをして、あまり變つたこともなかつたので、ここに傳わるべきほどのことは殆んどないのである。イッポリットは自分で豫期してゐたよりも少し早く、ナスターシャ・フィリツボヅナの死後二週間して、怖るべき昂奮のうちにあの世の人となつた。コオリヤはあの事件によつて非常な感動をうけ、ついに母親に一そう接近することとなつた。ニイナ・アレクサンドロヴナは、この子が年に似合わず、瞑想にふけりがちなのを氣づかつてゐる。彼は恐らく、實務的な手腕のある人間となるであらう。それにしても、公爵の後々の生活が保證されたのは、いくぶんは彼の努力に負つてゐる。コオリヤは

最近になつて知り合つた人たちの中で、エツゲニー・パーヴロキツチ・ラドムスキイをかなり前から、ちよつと毛色の變つた人と見做していたので、先ず最初に、彼のところへ行つて、今度の事件について、知つていただけの詳しい話を打ち明けて、公爵の現状を訴えた。彼の狙いに狂いはなかつた。エツゲニー・パーヴロキツチは不幸なる『白痴』の運命に極めて深い同情を寄せた。そうして、彼の骨折りと心づくしによつて、公爵は再び瑞西のシュネイデル療養所に收容される身となつた。エツゲニー自身も外國へ旅に出て、ずつと歐羅巴で暮すつもりで、自らを公然と『露西亞においては全く餘計な人間』であると稱していたが、——實に屢々、少くとも數カ月に一度くらいは、シュネイデルの許にいる病友を見舞つている。しかし、シュネイデルは行く度ごとに、いよいよ憂をひそめて、首を振つては、知能の組織が全く傷んでゐることを仄かすのであつた。まだ、はつきりと、回廊の見込がないと言つてゐる譯ではないが、極めて悲觀すべき暗示を口外するのを憚つてもいない。

エツゲニー・パーヴロキツチは、これを聞いてひどく心を痛めた。彼には、すでにコオリヤから時おり手紙を貰つて、時おり返事をやつてゐることも充分に窺ひ知られるような情に脆い本當の心があつたからである。しかも、そのほかに彼の性質の奇妙な一面までも分かつて來た。この一面というのは、善い方面のものであるから、ここに取り敢えず紹介しておこう。シュネイデル療養所を訪れて歸つて來ると、その度ごとにエツゲニー・パーヴロキツチは、コオリヤにばかりで

いたが、やがて聞かなく、不意にこの見の許に片づいたとのことである。それも両親の意志に背いてのことであつて、ついに後に両親が承諾を與えたのは、若し承諾を與えない場合には何か非常な醜態を演ずる恐れがあつたからだといふ。それから殆んど半年ばかり音信が途絶えてから、エツゲニー・パーヴロキツチはやはり長い詳しい手紙をよこして、彼が最近、瑞西のシュネイデル教授のところへ行つたとき、そこでエバンチン家の人たち（勿論、仕事のためにペテルブルグに残つてゐるイワン・フォードロキツチを除いて）およびS公爵にめぐり合つたことを知らせて來た。

——その邂逅は妙なものであつた。エツゲニー・パーヴロキツチは一同の者に、一種の歡びをもつて迎えられた。アデライードとアレクサンドラはどうした譯か、『不仕合せな公爵の身の上に注ぐ天使のような心づくし』に對して、感謝にたえないとまで言つた。リザヴェータ・プロコフィエーナは病みほおけて、見るかげもない公爵の姿を見て、心の底からよよとばかりに泣きぐずれた。見たところ、公爵はすでに何もかも許されてゐるらしくあつた。S公爵はこのとき、適切で、聰明な正しい意見を述べるところがあつた。エツゲニー・パーヴロキツチの見たところでは、まだS公爵とアデライードとは互いに、全然しつくりしてはいないらしくあつた。が、將來は必らず、熱し易い性質のアデライードは、物分かりがよく、世の中にも馴れているS公爵に、心から潔よく導かれるやうになるだろうと思われた。更にまた、一家の者のうけた教訓、殊に最近のアグラレーヤと亡命伯爵との一件は、彼女に

はなく、なお一通の手紙を、もう一人のペテルブルグの人に宛てて書き送るのであつた。その手紙には、いつも、その時の公爵の容態が、極めて詳細に、側隱の情をこめて記されてゐた。また、獻心的な態度をかなりにつつましやかな言葉で述べてゐるほかに、これらの手紙に、時とすると（いよいよ頻繁に）、自分の所見や、理解乃至は感情を、忌憚なく述べてゐるところが見えるやうになつて來た。——一言にしていへば、親しい友情に似た何ものかが現われ始めたのである。エツゲニー・パーヴロキツチと手紙をやりとりして（とはいつても、やはり極めて稀れに）、かくまでも彼の注意と尊敬を勝ち得た人は、ほかならぬヴェーラ・レーベジェワであつた。

いかにして、このような交渉が結ばれるに至つたかといふことは、的確にはどうして分からなかつた。勿論、ヴェーラ・レーベジェワが公爵の一件によつて、悲しみにうたれて病氣までした時に結ばれたのであろう。しかも、どういふ詳しい仔細があつて、近づきになり、更に友情にまで進んだのかやはり分らない。

ここに、かような手紙のことに言い及んだのは、主としてこの手紙のいくつかに、エバンチン家について、特にアグラレーヤ・イワノヴナ・エバンチナについての消息が含まれてゐるからである。エツゲニー・パーヴロキツチはアグラレーヤのことを、巴里から出した極めて取りとめのない一通の手紙の中に報じてゐるが、それによると、アグラレーヤは或る亡命のポーランドの伯爵に優しい、並々ならぬ戀慕の情を寄せて飾るべき印象を與えたのである。家族の者がアグラレーヤをこの伯爵に讓るときに懸念した一切のことは、すでに半年のうちに事實となつて現われていた。しかも、誰ひとり、考えもしなかつたやうな驚くべき事實までも加えて。やがて、この伯爵は伯爵どころの騒ぎではなく、たとい事實において亡命客であつたにしても、そこには何か後ろめたい、曖昧な経歴のあることが分かつて來た。彼は憂國の情に悶々たる稀れに見る高潔な精神をだしにして、アグラレーヤを誘惑したのである。誘惑されたあげく、アグラレーヤは結婚しない先から、ポーランド復古海外委員會とやらの會員になり、おまけに、夢中になるほど彼女の心を左右してゐたカトリックの有名な僧正の懺悔室にまで出入りするやうになつた。この良人がリザヴェータ・プロコフィエーナとS公爵に、殆んど論争の餘地もないほど明々白々な證據を見せた莫大な財産は全く根も葉もない作り事だといふことも分かつて來た。のみならず、結婚してから半年もたたないうちに、亡命伯爵とその友人たる有名な僧正は、巧みにアグラレーヤをして家族の者と喧嘩をさせたためにこちらではもう何カ月も彼女の姿を見ないのである……。

要するに語るべきことは多々あるが、リザヴェータ・プロコフィエーナも、令嬢たちも、あまつさえS公爵までが、すでに、かような *controversy* (戦争) にすつかり困憊して、今ではエツゲニー・パーヴロキツチとの話においても、或る事になると口に出すのさえも怖れるやうになつてゐた。尤も誰しも、——エツゲニーは、自分たちが黙つていても、す

にアグララーヤ・イワーノヴナの懸想の一件については、よくよく承知をしているのだ——ということには、呑み込んでいた。不仕合せなりザヴェータ・プロコフィーヴナは、露西亞へ歸りたがつていた。エツゲニー・パーヴロキッチの證明によると夫人は氣むずかしく、執念ぶかく、外國のあらゆるものを、非難していたという。『上等の麵麩をつくる人がどこにもいない。冬はまるで穴藏の中の二十日鼠のように凍えている。』と彼女はいうのであつた。『まあ、少くとも、ここで、この不仕合せな人の身の上を、露西亞語で嘆いたのが、せめてもの心やりだつたわ。』やがて、全く夫人の見分けさえもつかなくなつた公爵は、昂奮にふるえる手で指しながら、附け加えて、『もう、浮氣をするのも澤山だわ。分別がついてもいい頃です。こんなものはみんな、こんな外國の暮らしや、あなた方の歐羅巴は、みんな一つの幻影です。外國にいるわたしたちも、みんな一つの幻影です……わたしの言葉を覚えてらして下さい。御自分で今にお分かりになりました！』夫人はエツゲニー・パーヴロキッチと別れるとき、殆んど憤激の態でこう結んだという。

白痴 第四卷 終

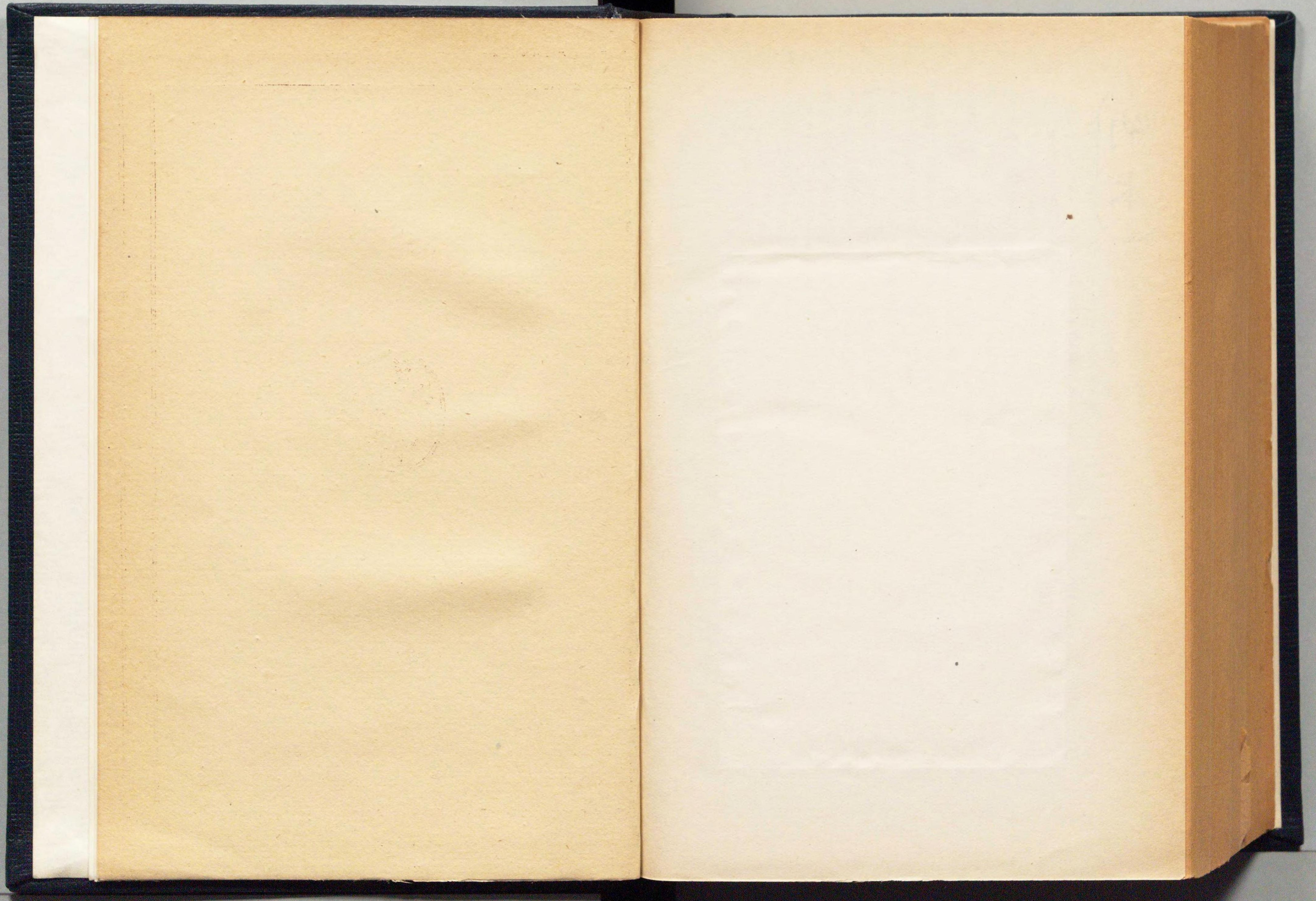
納本

世界文學選書 89
白痴 全四卷
第四卷
¥ 90



昭和二十六年六月三十日 發行

譯者 中 山 省 三 郎
なかやましやうざぶろう
發行所 株式會社 三 笠 書 房
發行所 東京都千代田區神田神保町二ノ二〇
電話九段 七四八三番
振替東京二二〇九六番
印刷者 井 上 謹 二
發行所 竹 内 君 代
若草 印刷・徳住 製本



エト7V29



